

さらば I S 学園

さと～きはち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何の因果かISを起動させたオリ主が、IS学園に入学してからISが反応しなくなり退学するまでの数ヶ月を追った物語です。シリアスとコメデイが混在する予定。ISそのものはほとんど活躍しないと思われますのでご注意を。初投稿ですので、至らない点がありましたらご指摘いただけると幸いです。

目次

長いお別れ	1
冷静と情熱のあいだ	7
だいじょうぶだあ	15
物凄くうるさくて、有り得ないほど近い	23
謀略のチェスゲーム	32
怒りもて報いよ	41
開戦前夜	51
大いなる助走	61
真昼の決闘	74
戦士の休息	87
怒りのブレイクスルー	98
わが手に拳銃を	112
ハートに火をつけて	125
ヒート・アフター・ダーク	144
過去を逃れて	165
長く熱い週末 前編	184
長く熱い週末 後編	205
異邦人	230
白昼の狂騒	250
ポニーテールは振り向かない	277
スタンド・バイ・ミー	303
なぞの転校生	327
我が良き友よ	366
そして、僕は途方に暮れる	383

長いお別れ

とうとう、ISが起動しなくなった。

前々から兆候はあった。来るべき時が来たのだ。

「ついにお別れ、か……」

短い付き合いだったなと呟きながら訓練機の打鉄から降りると、目の前で暗い顔をした数人の女子たち、鷹月さん、谷本さん、のほほんさんの三人が気の毒そうな表情を向けてきた。

「なんだみんなして。今さらそんな顔しなさんな、こうなるのはどうに分かっていた事なんだし」

わざと軽い調子で言って笑って見せたりするが、彼女らは何も言わず曇り顔はまるで晴れない。

どうにも調子が狂う。心配してくれるのは有り難いけれど、彼女らがISを動かせなくなる訳じゃあるまいに。

「そろそろ誰か代わらないか？ せっかく訓練機借り出した訳だしさ——」

周囲でISの訓練をする女子たちの喧騒の中、無言のままでは居心地が悪くてそう急かすと、言いくそうに三人が口を開いた。

「おと——」

「あの——」

「えっと——」

三人はいっせいに喋ろうとして声が被り、またも気まずい沈黙が訪れる。

「あーもう！ とりあえず鷹月さん、次——」

乗って、と言おうとした時、アリーナの反対側から大声をかけられた。

「三治！ IS起動したか!? どうしたんだ降りちまって……まさか、ダメなのか!? もう!？」

叫びながらこちらに駆け寄ってくる。ここIS学園に……いや、世界に二人しか居ない男性IS適正者の一人、織斑一夏。もう一人は無論この俺だ。いや、"だった"と言うべきか。

「一夏！ 心配なのは分かるが急に駆け出すな！ 三治、ISの方は大丈夫か？」

「一夏っ！ アンタあたしほっぽってどっか行かないでよね!? あ、三治どうなのよISは？」

「一夏さんっ！ 私達を放って行かないで下さいまし！ あっ三治さんIS起動に異常はなくて？」

「一夏！ もうっ、いくら三治の事が心配でもいきなり大声上げて走り出したら周りの迷惑だよ!? 三治ISはどう？」

「嫁よ、普段からもう少し沈着冷静な判断と行動をだな……そうだよ、IS起動は問題ないか!？」

おそらく誰が最初に一夏の模擬戦相手になるかで揉めていたであろう一夏一筋の少女五人、箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラもすぐに一夏に追いつき、一夏への苦言のあと俺の以前からの懸念について心配してくれた。もっともつい今しがた手遅れになってしまったが。

「みんなありがとな。でも残念ながら——」

寿命が尽きたみたいだ、という言葉はスピーカーの大音声にかき消された。

『1年1組、音羽 おとわ 三治 さんじ、至急生徒指導室へ向かうこと。繰り返し返す。』

一年一組、音羽 三治は、直ちに生徒指導室へ向かいなさい』

拡大された無機質な教員の声が俺への呼び出しを告げると、再び戻ってきた喧騒の中で何かを悟った一夏たちは、先の三人共々何とも言えない表情を俺に向けて言葉に困っているようだった。

この場に居る互いをよく知る面子の中で、自分一人だけが切り離されているように感じた。そうだ、今このIS学園のなかで、ISを起動すら出来ないのは俺一人だけだ。ここでこれ以上の疎外感はない。そう考えると当事者であるにも関わらず、なんだか自分が部外者で全てが他人事のように思えてきた。

生徒指導室へ向かう事を頭の隅で意識しつつ、そういえば初めてISを起動させた時もこんな感じだったかなと、俺は数ヶ月前のことを思い出していた。

日本が開発した女性にしか起動できない世界最強の兵器にして、核に代わり抑止力の要となった飛行パワードスーツ「インフィニット・ストラトス」、通称「IS」。その影響で急激に広がる女尊男卑思想に世間が揺れる中、世界で初めてISを動かした男——織斑一夏が突然現れて世界を驚かせた。

当然他にも男性適正者がいる可能性に期待して、一夏の出身国である日本の政府は全ての男子にIS適性検査を実施することになった。その実施スタッフは俺の地元にも訪れ、一夏と同じ年で当時中学三年の春休みを迎えていた俺は花粉症に悩まされて自室に引きこもり、母に今日が検査最終日だから早く行けと怒鳴られてようやく重い腰を上げたのだった。

人でごった返す検査会場の市民体育館には、他にも面倒くさがってギリギリまで適性検査をほったらかしていた男子たちが既に大勢来ており、ずいぶん待たされた。やがて順番が回り、疲労の色が濃い女性検査員に顎でISに触れるよう指示された時には既に陽が落ち、肌寒さを感じる俺は何度もくしゃみを繰り返した。

「びえつきしゅん!!」

その瞬間だった。手で触れる前に鼻水飛んだわ、などという雑念はいきなり頭に飛び込み急激に増殖した「情報の奔流」とでも言うような何かにかき消され、脳内が知りもしない膨大な知識や理論に内側から圧迫されていくような感覚に視界が暗くなった。

「なんじゃあ、こりゃあ!?!」

気持ち悪くて吐きそうだ! 頭がぐらつき、さっきまでのひどい鼻炎も忘れて倒れそうになった時、ようやく意識がハッキリと回復し、伸ばした手が触れたISごと白く白光しているのに気づいた。

頭を上げ周囲を見回すと、さっきまでざわめいていた館内が静まりかえり、まわりの瞳すべてが自分を向いて大きく見開かれているのが見て取れる。

ものも言わず、異様な何かを見る目つきの人、人、人……。とても気分のいいものではなかった。

「きつ君!?! そこを動かないで! いいわね!?!」

検査員に大声で指示され、突っ立ったまま責任者を呼び出す館内放送や関係各所への電話連絡等を聞きながら、俺はざわめきを取り戻した館内でまさかの結果に何も考えられずぼんやりとしていた。ただ、今後きつとろくでもない事になるだろうという予感だけは強く頭の中で警告を発していた。

無論その後はひどい騒ぎになった。さんざんスマホのカメラにパシャパシャされながら待機していた護送車に乗せられパトカーの護衛付きで急ぎ自宅へ送られると、そこには早くも情報を聞きつけた報道各社の人と車でごった返し、その囲みを警官が強引に排除して家に近づくと、県警機動隊が周囲にバリケードと土嚢で陣地を築き、家の前には放水銃を周囲に向けた機動隊車両がでんと居座っていた。唾然とした俺が護送車を降りて玄関に着くまではサブマシンガンを構えた重装備の警官隊に囲まれて移動する徹底ぶりだった。

修羅場は帰宅してからが本番だった。母と妹、自分と同じく警官の護衛付きで強制的に帰宅させられた父の三人が、これまで見たこともない表情をして詰め寄ってきた。一体これはどういうことか? 本当にISを動かしたのか? どうしてこんな事になったのか? 答えようもない詰問の嵐に、心身共に疲れ果てた俺はリビングのソファにへたり込み、もう考える気力も答える元気もなくなっていた。

翌日はさらに状況が悪化した。昨日は警察の規制もあり様子見だったマスコミの攻勢が一斉に始まったのだ。外出などとても出来る状態ではなく、買物物は待機中の警官が代行した。電話線は抜いて、スマホのSNSやメールは見る気にもならず、着信は全て拒否した。きつと警察の包囲と報道連中の外側には大勢の野次馬がいるのだろう。家族揃って引きこもる中、無遠慮な質問の嵐や取材の強要に母はノイローゼ気味になって寝込み、妹はキレて元凶の俺に怒りをぶちまけ、父は職場の評判と自身の評価の悪化、家のローンを恐れて家族に温和な対応をしると怒鳴りちらした。

その後の連中には俺が対応した。強引に玄関から入ろうとしたレポーターに電気ポットの中身を見舞ってやると、それ以降誰も近づこ

うとはしなくなり、俺には監視と護衛の目的で私服のSPがついた。

さらに次の日には政府関係者と、防衛産業も手がける某大手企業の幹部が訪れた。両親と妹は要人保護プログラムが適用され、別の戸籍を用意されて他所へ引越し、俺は特例によりIS学園入学が決定したという。

拒否した所でどうにもならないのは誰の目にも明らかだった。疲弊しきった家族は言われるがまま続いて現れた業者と共に荷造りを始め、俺は全部他人の都合で書き換えられていく今後にイライラしている所へIS学園の参考書と制服を見せられた。

「こんな派手なもんみつともなくて着れるか！」

ストレスのせいかわず本音が出た。白を基調にしたデザインの新制服は、地味なツラの代表格といえる俺の目には苦痛でしかない鮮やかで派手なものに写った。こんな服が似合うのは相応のルックスの持ち主だけだろう。幸い、制服の改変がある程度認められているらしく、もつと地味で目立たない様にしてくれと頼んだ。

その後は聞く気にもならない政治的なお話が続いた。今後の家族の面倒は見てやるが、それには自分の協力的な態度が不可欠であること。入学後IS関連の成果と成績は定期的に報告すること。卒業後の進路は日本所属を強く希望すること。使用するISはレンタルでできる訓練機を含め出来るだけ国産機を使用すること。国外の企業その他の団体からの勧誘は一切拒絶すること。汗や唾液など遺伝子が洩れるのはやむを得ないとしても、精子を他者に回収される事は厳に慎むこと、等々。

俺がろくに反応せず聞き流しているのを見て、ご家族の身の安全にかかわるぞ、などと言う者もいたが、「そうかい」と気のない言葉を返すと大仰にため息をついてみせ、0が8個並んだ小切手を見せてきた。興味無さげにふんと鼻を鳴らすと0が一つ書き足された。

「銀行振り込みにしろよ」

何もかもどうにもならない無力感と無気力にさいなまれ、せめて10億の振込みがタウンページ並みに分厚い参考書を読むモチベーションくらいにはなるだろうかと思った。多分なるだろう。なるん

じゃないかな。もうなるようになれ。

暗澹たる表情で荷物を纏めてゆく家族を見ていると死にたくなり、今は法外な臨時収入の使い道だけ考えていようと思った。

こうしてめでたく、俺のくそつたれな門出が決定した。

いつの間にか花粉症が治っていることに気づいたのは、それから何日もたってからだだった。

冷静と情熱のあいだ

「ちがう、そうじゃない」

IS学園入学前の生活のため政府に用意された都内の高級ホテルのスイートで、俺は仕立て直されたIS学園の制服を見るなり呆然とした。

確かにあまりの目立つデザインに苦言を呈したのは俺だ。地味にしろとも言った。しかし……。

「白地と黒地が逆転したただけだろこれ!？」

他にやりようがねえのかと思うぐらいデザインはそのまんまだった。色入れ替えたただけだ。むしろどこのSFアニメの軍服だと言いたくなる。

ひよつとして馬鹿にされてるのかとも思ったが、仕立て業者の話によると、IS学園の校則では制服は形状を変更しても最低限オリジナルのデザインを残さなくてはならないという。でないとんでばらばらの服装になり、制服の意味が無くなるかららしい。それで仕方なく色のみ変更したらしいのだが。

「余計目立つわこんなんもんー」

とはいえ今さら元に戻す時間もなく、泣く泣くこの制服で入学を迎える事となった。

その上難解すぎてIS参考書は三分の一も分からず、IS適性テストでは最低ランクのCぎりぎり。お蔭で教官との模擬戦試験は無く助かったが、君には専用機は用意できないと苦い顔でお役人に告げられた。せつかくのスイートルームもまったく落ち着かず、今の俺にとってIS学園は鬼門としか思えなかった。

あまりに不安だらけで追い詰められた気分になった俺は、投げやりと開き直りが混じった気持ちで入学当日を迎えた。

俺が到着したとき、1年1組の教室にはもう大分生徒が集まっていりらしく騒がしい話し声が廊下に漏れていた。

入りたくねえよ。

ただでさえ女子は苦手なのに、女尊男卑の原点にして頂点みたいな

イメージがあるISの学校とか、俺にはハードルが高すぎる。このドアの向こうは、ISを動かした男である俺を敵視する女尊男卑の巣窟ではなからうか？ 入ったらどうなるのか？ しかしいつまでも入口に突っ立ってるわけにも……くそ、思い出すんだ！ 情熱的だったあの日の夕焼けを！

よく考えたらそんなもんはなかった。俺は腹をくくってドアを開けた。

中では数十人の女子たちが三々五々グループを作ってお喋りに興じていたが、俺が入室した途端静まり返った。さあ、どうなる!?

「あつ、ゲンドウだ！」

俺は思わず気が抜けて足が絡まりそうになった。なんだそりゃ？ 完全に拍子抜けだ。

しかもその一言で周囲から一斉に視線を浴びる事になった。

そりゃあ今はオタク以外もアニメを見るのは普通だし、俺はメガネかけてるし、入学まで外出禁止のままホテルに缶詰で散髪にもいけなかったから髪はボサボサ、おまけにこの制服だ。確かにイメージしやすいかもしれないが。

「だからって俺を見て一言目がそれかよ」

思わずボソツと呟いた。想定外にもほどがあるわ。まあもともと陰キヤで髪型なんかさして気に留めてこなかったけど。

でもその一方でかなりホツとしている自分もいた。正直、物を投げつけられたり、最悪ISを起動させて脅されるといった状況を危惧していたので、アホみたいな反応で胸をなでおろしたい気分だった。とはいえ。

「ほんとにゲンドウだ！ あれが噂の二人目？」

「ほんとだ！ ニュースの二人目！ でも何で一人だけ黒い制服？」

制服のことはグサツとくるからやめて。

「リアル碇ゲンドウじゃん！ なんで制服黒なの？ 写真SNSに載せていい!？」

頼むから制服はほつといってくれ。おまけに誰も名前を呼ばずにゲンドウか、嫌でもTVとかで目にするだろ……ってSNS?？」

「やつヤメローツ！ んなもん載せるな！ 頼むから！」

あんなのに写真載せられたら何年間に渡ってネタにされるか分かったもんじゃない。俺を敵視する女権団体だつて見てるんだぞ、やめてくれ。

「冗談じゃねえ、これ以上目立ってどうすんだ」

ギクシヤクと自分の席へ歩く。よりによって中央列の先頭、教卓は目と鼻の先だ。

どうにでもなれつて気持ちで来たはずなのに、女子だらけの空気がなんか恐い。どう接していいのかも分からん。もうどつか遠くの誰も俺を知らない国へ旅立ちたい。

ようやく席につき、大きいため息をついて机にぐったりすると、そばに立った誰かの影で眼前が薄暗くなった。

「お前が音羽三治か？ おれは織斑一夏だ。いやあここ女子だらけだけろ？ 一人じゃ心細いから同じ男子が来てくれて助かったよ！」

不意に声を掛けられギョツとして見上げると、モデルかアイドルが似合いそうな爽やかな笑顔の美男子がいた。

織斑一夏。第1回モンドグロツソ総合優勝の織斑千冬代表の弟にして、世界で始めてISを動かした男子その人だった。

「おつおう、はじめまして？」

慌てて返事したが、思わずキョドつてどもってしまった。

「あはは、そんなカタくなるなよ、同じ男同士なんだしさ。おれのことは一夏でいいよ」

「俺も三治でいいよ……しかしリア充は違うな、こんな女子ばかりの教室で堂々としてるなんて。俺には到底無理だよ」

男同士と言われて一旦落ち着いたものの、かの有名な初代ブリュンヒルデの弟だと思うとまた少し緊張してきた。

どうにも俺は、自分で思っていたよりずっと小心者らしい。

「りあじゆう？ なんかよくわかんねえけど、おれだつてすごく不安だったんだぜ？ 三治が来るまでずっと女子ばかりの教室で一人でいたんだ、来てくれてすげーホツとしたよ！ これから三年間よろしくな！」

話してみると一夏は想像以上に人懐っこくて良い奴だった。俺の
どうしようもなく低いIS適正レベルからして自分なんぞライバル
になりようも無いのは分かっていたが、それどころか気さくで優しく
ひょうきんな所もあり、気楽に楽しい会話ができる相手でもあった。
俺は久しぶりに誰かに対してリラックサし、気兼ねない雑談相手が出
来たことに感謝した。

気遣いも出来るし、何か只のイケメンには無いオーラみたいなもの
があるように思えた。こりゃ女子が放つとかないなと思っただけらっ
と周囲に視線を巡らすと、視界に入ったほとんどの女子が会話に入り
たそうにこちらを見ていてまたもギョツとした。

「どうしたんだ変な顔して？ あ、そういえばお前制服真っ黒で襟元
白いよな、おれと真逆の色合いだけど、なんでなんだ？」

俺が自分の制服が出来上がったあらしを聞かせると、一夏は腹を
抱えて大笑いした。

「そいつは大変だったな。確かにこの制服ちよつとハデで恥ずかしい
かもな。でもそれもかなり目立つぜ？」

「どつちにせよ地味メンには酷な服さ。美形のお前が羨ましいよ」
「ははは、おだてても何にもでないぞ？」

その一夏の屈託の無い笑顔を見ると、入学前の資料にあった担
任教師のことを思い出しハツとなった。

「そうだ！ このクラスの担任、一夏の姉だろ？ モンドグロッソ総
合優勝の織斑千冬代表だ」

「ええっ！ 千冬姉が!？」

「知らんのか!？ 入学資料どうした？」
「読むの忘れてた!？」

不意に教室のドアが開き、俺の背中に冷たいものが走った。慌てて
教卓の方に向き直る。なんてこった、とんでもない大物が担任なのを
すっかり忘れてた。世界最強の――

「みなさん、揃ってますね〜?」

ところが入ってきたのは、子供のよう小柄で柔和な顔の女性だっ
た。男なら嫌でも目が行く巨乳に鮮やかな緑の髪が人目を引く。美

人だがモンド・グロツソの中継やネットニュースで見た織斑代表とは似ても似つかない。

誰？

「あつ千冬ね……誰だっ!？」

いきなり真後ろの席から一夏が大声を出した。

「ひやつ!?! わ、私はこのクラスの副担任の山田真耶と言います。あ、あの、お邪魔でした……か?！」

副担任がいたのか。かの織斑代表が担任と知って驚いて、それ以外の教員については頭に入ってなかった。

「えっ副担任?！」

「すまん一夏、俺もよく確認してなかった。あの、先生もすみませんでした、ちよつと俺たち身構えてしまいました」

「と、とりあえず教室に入ってもいいですか?！」

ちよつと泣きそうな表情になっていた山田先生は教卓まで来ると、気を取り直してクラス全員揃っているのを確認し仕切りなおした。

「皆さん入学おめでとうございます。それでは朝のSHRを始めますね。先ほども言いましたが、私は副担任の山田真耶です。1年間よろしく願いますね」

「よろしくお願い……します?！」

返事したのは俺だけだ。山田先生の表情はまたも引きつっている。思わず一夏の方を振り返ると、ぼつの悪そうな顔で「わりい」と口を動かした。

「と、とにかくこの学園は全寮制です。皆さん助け合って楽しい学園生活にしましょうね」

今回は俺に続いて一夏も返事すると、それにつられて女子たちも声を出した。

ようやく山田先生の顔が笑顔になった。しかし変な所で一夏との格差を感じるなあ。俺一人の時は誰も女子は応えなかったもんな。

挨拶あいさつの次は出席番号順に自己紹介だった。俺は「おとわ」だから多分早いうちに回ってくるだろうし、「おりむら」よりも先だ。ついてない。

「じゃあ次、音羽くん」

小学一年以来何度やってもドキリとする瞬間だ。一夏に代わって欲しい。

「あ、音羽三治です。ニュースでご存知の方も多いと思いますが、適正検査でISが反応した為入学が決まりました。ISについてはほとんど素人ですが、どうかよろしく願います」

終わるとため息が出た。変に早口にも小声にもならず終えられただけで御の字だ。

次は織斑の番だな。

「織斑一夏です。よろしく願います」

それだけで後が続かない。ちらと見ただけで女子たちの視線が一夏に集中しているのが分かる。若干引くレベルの注目度だ。俺はスルーされてよかった。

「三治、たすけてくれ！」

背後からかすかな声が聞き取れた。

「趣味とか得意な事とか今後の抱負とか」

俺も振り向き辛うじて聞こえる声で囁いた。

「え、えっと、趣味って言うか、家事全般は得意です！ あっあとマツサージも！ えっと今後の抱負は……だっ誰かを守れりゅ人になることです！ 以上です！」

少し囁んだけど、どうにかなったか。

一夏の顔を見上げると、いつの間にか一夏の横には黒いスーツに身を包んだ女性が立っており、次の瞬間その右手に握られた何かが一夏の頭頂部に叩き込まれた。

何故殴る!?

「お前は一人で満足に自己紹介も出来んのか」

「いてて、げえっ 関羽!?!」

「誰が三国志の英雄だ、ばか者」

またも一夏が頭を殴られて、手に握られているのが出席簿だと分かった。

「千冬姉がなんでここに!?!」

「ここでは織斑先生だ」

三たび痛撃を喰らう一夏と女性のやりとりに、出席簿の持ち主が誰か嫌でも分かった。いま世界でただ一人ブリュンヒルデの称号に輝く元日本代表、織斑千冬その人だ。よく見れば確かにニユースで見た顔だし、一夏にもよく似ている。

しかし幾らなんでもやりすぎだ。一夏がそんなに殴られるほどの事をしでかしたとは思えない。

「なんだ音羽、何か言いたいことでも有るような目つきだな」

織斑先生に言われて初めて、自分が咎めるような目で彼女を見ているのが分かった。

「どう考えてもやり過ぎじゃないですか。さつきから見ても一夏は殴られる程の事は何もしていません。あなたが逆の立場なら、つまらない事で生徒を殴りつける教師を貴びはしないでしょう」

自分でも驚いた。自己紹介であんなに緊張して一通り話すだけで精一杯だったのに、ひと睨みされただけで体が動かなくなるような相手にこんな台詞がすらすら出るとは。

「ほう、入学早々私に意見できるとはな。今年の新入生はたいした自信家だ」

「皮肉は結構です。織斑先生、そんな言い方では体罰とも言えない無意味なあなたの暴力が正当であるかのように聞こえます。失敗のたび殴るのが正しい指導なら一夏は一度殴った時点で間違いは起こさないはずです。何度も殴る羽目になったのは間違ったやり方だからでしょう?」

織斑先生の余裕ある表情がだんだん険しくなり、俺は思わず身を硬くした。と、相手は身を翻して教卓へ向かって歩き出した。

「ふん、口だけは達者だな。実力もそれに見合うことを期待するぞ」

それはやめてくれ。蛇へびに睨かえまれた蛙の俺は胸の内ですぶやいた。俺が力の抜けたように席に座り込むと、教壇に立った織斑先生は山田先生と二、三やりとりをした後、クラス全体に響く大きな声で話し始めた。

「諸君、私がこのクラスの担任、織斑千冬だ。向こう1年間で君達新人

「を使い物にするのが仕事だ」

直後に周りから一斉に黄色い歓声が上がった。余りのやかましさに慌てて耳を覆うと、女子たちが口々になんのかんのと織斑先生に叫びまくっている。みんな織斑先生のファンなのだろうが、いくら国内外で人気の高い織斑千冬に会えたとはいえ、これではまるで人気アイドルのイベント会場だ。

織斑先生は呆れ顔で何か言っている。本人にとっては頭痛の種と行ったところだろうか。

「静かに！ 諸君にはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習となるが、できれば基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ！ よくなくても返事はしろ!!」

「はい!!」

えっ半月？ あの参考書三分の一どうにか読むだけで限界なのに。とりあえず返事はしたものの、今後の担任の授業を想像すると逃げたくなった。

その後、つつがなく自己紹介も終わりSHRは終了した。ぐったりしている俺に一夏がさっそく声を掛けてきた。

「すごいな三治！ 千冬姉とまともに口論できる奴なんて初めて見たよ！」

「よせよ、今頃になって震えがきた。小心者なんだ、俺は」

「でもカツコよかったぜ！ おれのためにあんなに千冬姉に食い下がってくれる奴なんて今までいなかったよ。できればまたヤバイ時助けてくれないか」

「あんなもん今度やったら死んじゃうよ」

教室に入るとき腹をくくったつもりだったが、想像と違いすぎる現状と今後にも早くも現実を窓から投げ捨てたくなっていた。

俺はもう何度目か分からないため息をついた。

「あれ？ そういやゲンドウってなんだ？」

「もういいんだよそれは！」

だいいじょうぶだあ

「ちよつといいか」

そう声を掛けられたのは、一夏と机のコンソールやタッチパネルをいじって遊んでいるときだった。

声の主である侍のような印象を持つポニーテールの女子に連れられ一夏が姿を消すと、クラス中の視線が俺一人に集中したように感じた。実際白い制服の女子しかいない場所に学ランのように黒い制服の俺が一人。ハトの群れに放り込まれたカラスよりも周りから浮いてしようがない。

きつと気のせいだ、自意識過剰だ、みんな一夏と織斑先生に夢中だから俺など眼中に無いはずだ。むりやり自分にそう言い聞かせて、苦し紛れにIS参考書など開いてみるが、まったく内容が入ってこない。

……くそ、トイレでも行って時間潰すか。

立ち上がろうとすると、トコトコと小さいのが目の前にやってきた。

「ねーねー、きつきは大変だったねゲ——」

「ゲンドウ言うなよ」

思わず言葉を先回りしてしまった。もうグダグダは繰り返したくないんだ。それに色々疲れた。

「むー。せつかくわかりやすい呼び名なのにー」

相手は山田先生よりさらに小柄で、幼児が大人の服を着たように長く余った袖を垂らした女の子だった。たれ目で眠たげな顔が不思議と警戒心を無くさせる。頭の両側についている動物の髪留めが可愛らしい。

「言つとくけどすぐに髪メチャ短くするから。もうゲンドウとは呼ばせん」

けさ教室に入ってSHRまでのことはしばらく忘れたい。イメチェン以前の問題だ。

「いいもーん、じゃあく新しい呼び方考えるから」

「えっ」

「おとわ、さんじだからくおとわん、んーおとさ……そうだ！」
なんかくでもない予感がする。

「おとーさん!!」

「おいっ！」

とたんに周囲がざわつきだした。おかしな奴を見る目で見られて
いる気がする。俺はまだこんなでかい娘いらねえよ！

「これからはおとーさんって呼ぶね」

「やめろ！」

「だめくおとーさんゲンドウ禁止したからおとーさんって呼ぶ」

むきになって反発したものの、えへへーと笑う彼女の顔を見ている
と、なんだかこれ以上必死になるのも馬鹿らしくなり、もういいやと
思った。

「私は布仏本音だよ。本音でいいからね」

「はあ、わかったよ本音」

言ってから、自分が自然に彼女を呼び捨てにしたことに驚いた。

女子を名前で呼び捨てにするなんて初めてだった。なんだか今日
はここへ来て驚くような事ばかりだ。

「でも今まで大変だったねー。ツイッター見たよくお母さん元気に
なっってよかったねー」

「えっ?」

俺はこの教室にいる誰にも自分の家庭事情について喋っちゃいな
い。一夏にさえもだ。ということとは?

「ツイッターってまさか、誰かが俺んちの事情つぶやいた訳?」

本音は不思議そうな顔で驚く俺を見つめた。

「あれく知らないの? 妹さんだよー? 結構大勢の人が反応してた
みたいだけど」

「はあ!」

あのバカ! とんでもない事しやがって!!

背中が冷たくなるのを感じた。うかつだった。自分に関する報道
を見たくなくて、IS起動以来ネットもTVも全然見てなかった!

「大変だったよね。でも大勢の人が応援してくれたみたいでよかったね」

もう本音の声など聞こえちゃいなかった。あたふたとスマホを取り出し確認すると、妹のアカウントは既に削除されていたものの、少しググっただけで膨大な数のネット掲示板のスレッドや情報まとめサイト、ニュースサイトで騒ぎになっているのが分かった。

「どうわっ!？」

えらいこつちや……しかし不幸中の幸いか、妹や家族に対する批判はたいして見られず、多くが行過ぎたマスコミの取材や報道を批判する内容だった。

「私が着いたときクラスでも話題にしてたんだよ。マスコミの暴走で家族が大変なことになった、って怒りのつぶやきの反響がすごくて、最初は報道機関も無視してたんだけど、新聞社のツイッターやサイトの掲示板が批判であふれたり、おとーさんの家族が取材させないって文句つぶやいたTV局の人が住所まで晒されて騒ぎになったりとか」

マスコミ連中には恨み骨髄だったから、手の平返してざまあみろ妹グツジョブ、と言いたい所だったが、よく見るとネット界限での展開は日頃のマスコミへの不満をぶちまけ攻撃する方へ向かっているように見えた。

「まあいろいろやりすぎとは思うけど、妹さんが最後のつぶやきでお母さんが体調が戻ったって書いてあってよかったーって思ったよ」

「何にも知らなかった」

政府の方針で家族の安全が確認できるまで連絡手段は持たないようにと、電話番号もメールアドレスも住所も知らされていない。もちろん以前のは既に停止されている。今使っているスマホも所属不明で名刺もよこさない官僚が寄越したものだ。基本的に電話とメールとネットブラウザしか出来ない。SNSなどもってのほかで、新たなアプリのインストールも入ってるアプリのアンインストールも出来ない。いっそガラケーを渡したらどうだ。

「ほんとに知らなかったんだね……大丈夫？」

本音が少し心配そうな表情で見つめてきた。俺の方は少し難しい顔をしていたようだ。

「なんか、知ったときには終わってたって感じか」
「ハアと息をつく。」

「SHRの時もそうだったけど、ため息ばかりついてると、幸せ逃げちやうよく?」

ほら笑顔笑顔と言って本音がにっこりして見せた。

「幸せ、か」

逃げるほど幸せなんて残ってるのか、と頭の片隅で誰かが言った。

「むく、えいつ」

いきなり本音は余った袖をブラブラさせた腕を俺の両脇につっこんだ。

「(こしょこしょこしょ)」

「ひいははは! やめろ! 分かったからくすぐったははは!」

急に脇をくすぐられて思わず笑ってしまった。そうすると何だか胸のつかえが取れて、少しほっとした。

「やつと笑ったね」

本音が穏やかな表情を見せるのと同時に予鈴が鳴り、周りの女子たちが席につき始めた。

「じゃあまたね」

くるりと背中を向ける本音に、俺はうわずった声で話しかけた。

「本音! あ……ありがとな」

立ち止まると、本音は振り向いて笑顔を見せた。

「えへへ、どういたしまして!」

そのままトテト歩いて自分の席へ戻っていったが途中で数人の女子に捕まり、顔を寄せ合いボソボソ何か言い合っていた。

「なんだありや?」

「よう三治、どうしたんだ?」

一夏が教室に戻ってきていた。後から来たポニーテールの女子もどこか不満げな顔で席に戻っていった。

「あ、いや、ちよつとな」

すぐに先生が来るし話すのも照れくさいので適当にごまかすと、すぐにS H Rと同じように山田先生と織斑先生がやってきた。

「はい、ここまでで何か分からない所はありますか？」

初めての授業はI Sの基礎座学だった。基礎内容が一区切りついた所で、山田先生が生徒たちを見回して聞いた。さすがにみんなI Sの専門家を目指す者たちだけあって、誰も手を上げない。

「織斑さんと音羽くん、何かありますか？」

ありがたくも質問しやすいよう気にかけてくれる。俺と一夏がそもそもI Sに縁の無い生活を送っていた故の配慮だろう。何を教えるでもなく突っ立って囚人を見張る看守のように構えている黒いのは大間違いだ。

よく考えたら俺も『黒いの』だった。

「あつ、基礎なんで今のところは何とか」

「そうですかー、織斑くんはどうですかー？」

「えつ三治わかんのか!? あつあの山田先生！」

「はあい何でも聞いて下さいねー♪ 何せ私は先生ですから♪」

「ほとんど全部分かりませえん！」

驚いた。いやお前姉がI Sのトップ極めて今はその教師だろ!? 何も教えてくれなかつたのか？

「ええつ全部ですかあ!？」

そりや驚くだろう。姉がI Sのプロなのに、分からない所があるんじゃない、分かる所が無いんだから。

「今のところ分からない人はどれぐらいいますか？」

山田先生は手を上げる生徒を探してきよろきよろしている。肩越しに後ろを見ると、一夏が立ち上がって周囲を見回していた。

「ウソだろ? 三治も分かるのかよ!？」

「そりやまあ、まだ参考書の最初の方だし」

「参考書お?」

この先は俺も自信ない。そういえば一夏は参考書をもらわなかつたのか? 考える俺の横で織斑先生は一夏に早足で歩み寄った。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？ 必読と書いてあっただろう」「えーっと、あの分厚い奴ですか？ 古い電話帳と間違えて捨てました」

……あつ

一瞬織斑先生の表情がひきつったように見えた瞬間、文字通り目にも留まらぬ速さで出席簿を一夏の脳天に見舞った。

またやった！ この人の暴力癖は治らない病気なのか？

「音羽、今なにか失礼なことを考えなかったか？」

気がついたときには織斑先生は顔だけこちらを向いていた。

「むしろ軽蔑されるのが普通でしょ。さっきの問答から1時間も経ってませんよ？」

俺は今きつと呆れ顔になっているのだろう。織斑先生は舌打ちせんばかりの表情だ。

「私の指導をいちいち掣肘して楽しいか？」

相変わらず低く冷たい声だ。

「指導じゃなく暴行でしょうが。せめて罰を与えるなら本人の為になるものにしたらいいじゃないですか」

ふんと鼻を鳴らすと、織斑先生は一夏に向き直った。

「いいか、後で再発行してやるから一週間で覚えろ！ いいな？」

「いやつ、一週間であの厚さを!?!」

「やれと言っている」

一夏を睨みつけるとすぐに俺の方を向き、これで満足かと視線で問うた。

まず殴るなよ。

「……一夏、俺も協力するから出来るだけやってみろよ」

余計なこと言っただけで面倒を増やした気もするけど、まあ仕方ねえか。

俺と一夏は同時にため息をついたが、一夏のほうがはるかに深いようだった。

さっきまで心配そうな表情だった山田先生が授業を再開し、俺は自分まで殴られないよう授業に集中した。

よく考えると一夏は今日の午前中だけで4回も殴られている。それも頭をだ。平気な顔をしているようだが、ほんとに大丈夫なのか？ 休み時間に入ると俺は一夏に聞いてみた。

「なあ、あんだだけ出席簿ブチかまされて平気なのか？ 今日一日で4回も一夏の頭で凄い音がしたぞ」

俺なら病院送りどころか脳挫傷で死んで……いやむしろ叩かれた部分がペしゃんこだな。

「あはは、怒ったときの千冬姉はいつもあんな感じだよ。それよりこれから大変なんだよなあ」

「あんだって!？」

いつもあれかよ!? 普通なら毎日救急車だぞ!

「はははは、三治もけっこう大声出すんだな」

「はははは」で済ますのかよ……」

保健室にも行こうとしない一夏の殴られたであろう頭の辺りをまじまじと見つめ、ついでに触ってみたが、たんこぶがあるかないか程度しか分からなかった。

「三治は大ききだな! まあ心配してくれるのはありがたいけどさ」

織斑家はあれか、修羅の一族か何かか? それともこいつサイボーグとか……」

「……もういいや、それよりこれ」

考えるのもバカバカしくなった俺は持つのも嫌になるゴツイ参考書を一夏の机に乗せて開いた。

「とりあえず今日の授業で進んだのここまでのな、付箋貼つといた」

ページを見て一夏の目が見開かれた。

「今日だけでこんなに進んだのかよ!? 1ページこんなデカいのに?」

一夏の笑顔が絶望の表情に変わるのは一瞬だった。

「コピーしてよく目にするところに貼るとか、レジユメにして暇なとき見たら?」

「そんなんですぐ覚えられるのか!? もっと簡単に覚える方法ないか?」

まあ無理か。でも急にそんな事いわれてもなあ。

「まああれだ、放課後図書館とか資料室みたいなどこ行ってみよう。基礎学習のDVDとか借りられるかも。映像とかだったら分かりやすいんじゃないか」

俺も前から調べたかったことがあるし、ついでだからなと言うと一夏は一も二もなく賛成した。

「いやあさすが三治だな！マジ助かるよ！」

どうにかなりそうと思った途端緩んだ一夏の顔はほとんど険が取れた織斑先生だ。顔はこんなに似てるのに、中身はこんなに正反対になるもんかなと考えると、それこそ自分とは正反対の、要領が良く勉強も出来て友達も多かった自分の妹を思い出した。が、わずか数週間会っていないだけなのに、妹が自分に向けていた冷淡な表情も突き放すような憎まれ口もあまり思い出せなくなっていた。

「そういや、さつき一緒に教室を出てた女子って知り合いか？」

「箒か？ あいつとは剣道の道場で知り合った幼馴染でさ、6年振りに会ったんだ。全然変わってなかったぜ」

「それって何かこう、恋愛的要素とかあるアレか？ それか何か大事な話があったとか？」

「ははは、そんなんじゃないやねえって！ 箒は単なる幼馴染だよ。思い出話をしただけさ」

「ふーん、何か言いたい事があるように見えたけどなあ」

考えすぎだつて、と一夏が笑うと、窓際でシャーペンがへし折られるような嫌な音がした。

物凄くうるさくて、有り得ないほど近い

「ちよつとよろしくて?」

SHR後と同じように声を掛けられ、俺と一夏は机のディスプレイに表示した格子と円で遊んでいたオセロから顔を上げた。

「んあ? 誰だ?」

腰まで見事な金髪を垂らした、碧眼の白人美少女がそこにいた。

「まあ! この私に話しかけられているというのになんというお返事!?! これだから——」

「あああれだ、イギリスの代表候補生。オルコットとかつて人」

キンキン声も癪に障ったが、それより口調からしてウザそうなので当人の声をさえぎり相手が何者かを一夏に説明してやった。

「そうですわ! 私は大英帝国の国家代表候補生——」

「ああ三治が一人留学生がいるっていつてた奴か。代表候補生ってなんだ?」

オルコットをはじめ視界にいる女子全員がずっこけたようだった。まさかIS学園に入学してそんな基本的な事すら知らないなんて考えられないだろう、普通は。

俺は俺で驚きはしたものの大して動じなかった。何せ最初の授業でアレだし予想はついた。

「信じられませんわ! 日本の男性はこの程度の——」

「要するに専用ISが与えられる優秀な奴だよ。実戦データ集めたりISの操縦上手くなったりして、まあ戦争になったらISに乗って鉄砲玉にされかねない奴だな。あとモンド・グロツソの選手とか」

「そうですわ! 鉄砲玉——って違いますわっ!!」

「そっかーカッコいいようで意外と不憫だな。」

多少いい加減な説明でオルコットは怒ったが、個人的には大して間違ったことは言っていないつもりだ。そもそもISがアラスカ条約で競技用しか認められないなんて建前もいとこだ。だったら兵器を搭載し実戦を意識した模擬戦や競技なんか必要ないだろ。ISそのもののポテンシャルを最大限生かした競技をやればいい。

「とつとにかく！ 私はエリートで——」

残念ながら予鈴が鳴りタイムリミットとなった。

「話の続きはまた改めて！ そっちの貴方も！ よろしいですわね！？」

キンキン声で叫ぶように言うときつきと席へと戻っていった。

「なんだったんだ、あいつ？」

「さあなあ、エリート様の考えることは庶民にや分からんよ」

ポカンとする一夏に俺はまたいい加減な返事をしておいた。

その後の休み時間はさらに姦しくなった。篠ノ之さんとオルコットの奴が休み時間に声を掛けてきたことで、その後一夏相手に抜け駆けしないよう互いにけん制しあっていた女子たちの均衡が崩れた。授業が終わるたびに別の女子グループがひっきりなしに訪れ、一夏の歡心を買おうと必死で話題を振っていたものの、反応が期待外れらしくがっかりしていた。

本音も同じクラスの鷹月さんと谷本さんと一緒に俺の元に何度かやってきた。最初はぎこちない話し方しか出来なかったが、本音がお菓子好きということで好きな駄菓子の話題で盛り上がった。他愛も無い話題で女子たちと盛り上がるのは初めてかもしれない。俺たちが小1の頃からISが世に出て女尊男卑が幅を利かせ始め、俺の地元では男女が一緒に遊ぶ光景はほとんど見られなかった。自分が女子と普通に話すことも想像すらできなかった。

それがよりによって今まで最も恐れていた場所で出来ているのだから、まったく皮肉そのものだ。

篠ノ之さんとオルコ何かも時々こちらに視線を向けているようだったが、こちらが見るとさっと視線をそらしてしまった。一夏が気になるものの、他の女子が大勢いる手前声を掛け辛いのだろう。そういえばいつ見ても彼女らは一人で過ごしていた。

それより参ったのは一夏だった。昼休みになり本音たちと食堂に行けたらいいなと考えていた所へ、いきなり肩を掴んできたのだ。

「三治、一緒に食堂行くよな!？」

いきなりすることに俺は目をむいた。なんでそんな必死なんだお前は？ 話しかけてきた女子たちとか、篠ノ之さんとかと一緒に行けばいいのに。

「2時間目からこっち女子たちがずっと話しかけてきて疲れるんだよ！ お前という時間が欲しいんだ」

周囲が変にぎわついていた。一部の生徒がこちらを見て目を輝かせ、机で必死に何かを描き始めた。おいお前ら何を描いてんだ。

「ホモくせえ言い方すんな！ 誤解されるわ！」

思わず怒鳴りつけ、一夏が驚いてのけぞりクラスの空気が固まった。と、タイミングよく本音が緊張感のない間延びした声で食堂に誘ってくれた。

「おとーきーん、食堂いこ〜」

本音の言葉にあちこちでクスクス笑い声がしてクラスの空気が緩み元の喧騒が戻ると、俺は本音に小声で礼を言った。

「すまん、助かったよ」

「にしし、お礼は食堂のデザートでいいよ〜」

ひとまずポカンとして一夏に向き直ると声をかけて欲しそうな篠ノ之さんを誘わせ、鷹月さんたちも一緒に食堂に向かった。オル……はほつといた。

しつかり者の鷹月さんやお調子者の谷本さんに比べどこか抜けた調子の本音は、中学時代から女子グループへの警戒心が抜けない俺とは対照的で妙に落ち着く相手だった。見たまんま小学生のように思える時があれば、大人のような態度をとるときもある不思議な女子で、なんとなく一緒にいる時間を増やしたいという気持ちになっただけだった。

それに対してすぐ隣で定食を食う一夏たちを見ると、気の置けない態度でいる一夏の横で篠ノ之さんは何故か他人行儀で、一夏の幼馴染と聞いた割には態度を硬くしたまま不満げな表情だった。

そんな篠ノ之さんの様子が一夏とのトラブルに発展しなきやいいがと思い一夏に視線を向けた。

「ん？ おれの顔ごはん粒でもついているのか？」

「篠ノ之さんとあんまり喋らないなって」

「そうなんだよ話を振ってもつれなくてさ、箸、腹でも痛いのか？」

「……なんでもない」

にぎやかな食事風景で一人だけ不機嫌極まりない。そしてそれに一夏が全然気付いてない。おそらくその原因も一夏は分かっているのだろう。まあ俺も知らないのだが。

近い内にひと波乱ある。たいした根拠はないが勘がそう告げていた。

今日最後の授業が終わると俺は大きく伸びをして背もたれにもたれかかった。

いろいろと忙しい一日だった。授業はI S以外も偏差値の低い俺には難易度高めで苦勞したし、なにより生徒や教師を問わずこんなに多くの女性と話をしたのは生まれて初めてだった。

教室で過ごすのに慣れてきて驚いたのは、自分のクラスを始め生徒も教師も美人揃いだということだった。一応入学前には公安関係者からハニトラに対する注意も受けてはいたが、これじゃそんなもん見分けも出来やしない。だいたいがほとんどの女子は一夏に必死で、俺の方には本音と数人ぐらいしか寄ってこないからほとんど気にも留めなかった。

「美人か……」

考えてみると本音は美人というよりマスコットの可愛さのタイプだな。鷹月さんや谷本さん、相川さんはもうちよつと年相応な感じか。でも鷹月さんは委員長タイプっぽいけど、谷本さんたちは恋バナとかにしつこそうな……

「誰が美人なんだ？」

伏兵の奇襲に俺はあわてて振り返った。

「なっなんでもねえって！」

「？ とりあえず帰ろうぜ。今出ればモノレールの時間にちょうどくらいだ」

俺はうなずき鞆にテキストやノートを詰め始めた。一夏は放課後

図書館に行く予定をすっかり忘れてるようだが、入学初日で俺も疲れただけで疲れたなんて思ったが、そんなのは序の口でしかなかった。

これ以上初日を騒がしくする前にさっさと帰ろう、そう思った矢先だった。

「あつ織斑くんと音羽くん！ よかったまだ残ってたんですね、お二人の部屋が決まりましたんで鍵を渡しに来たんです」

そう言いながら山田先生が小走りにやってきた。今さら気づいたがこの人走ると凄く胸が揺れて目の毒だ。

二人の部屋？ 俺たち二人は急な入学で寮の割り当てがまだ決まらず、当分一夏は実家、俺は国が用意したマンションから通うはずだったが。

「本来ならお二人は一週間後から寮生活に入ってもらおう筈でしたが、事情が事情なので無理をしても部屋を割り当てることになりました。寮監室の隣ですよ」

「寮監室？」

「私の部屋だ。お前たちは数少ない男性IS操縦者としてハニートラップ等に狙われる可能性がある。なにしろ他の生徒はすべて女子だ、可能性がないとは言えん」

後から現れた織斑先生が説明した。

「その点私の隣であれば防ぎやすいからな。お前たちの荷物は私が手配してやった。ありがたく思え」

そう言う織斑先生は若干ドヤ顔になっていた。生徒である俺に小言を言われた後だからだろうか。出来る教師ぶりをアピールしたがつてるように見えた。

まあ言ってる事は正しいし、これからモノレールに揺られてマンションまで帰るよりは近いだろう。でも俺の荷物はダンボール詰めのままホテルに置いてきたからそのまま送れるとして、一夏は？

「織斑の荷物も部屋に送ってある。まあ着替えと携帯の充電器があれば十分だろう」

一方的な宣告に青くなった一夏を促してカギを受け取ると、山田先

生から簡単な説明を受けた。俺たちは途中まで黙って説明を聞いていたが、大浴場が本来女子専用なので俺たちは自室のシャワーで当分我慢しろという説明の段になるとややこしくなった。

「何で俺たちは大浴場が使えないんですか？」

「要するに大浴場は女湯のみって事だよ。女子に混じって入ってみるか？」

一夏の馬鹿な質問に答えてやると、今度は山田先生が慌てだした。

「ええっ？ 織斑くん女子とお風呂に入りたいんですか!? だつダメですよ！」

「えっいや入りたくないです！」

「ええっ入りたくないんですか？ それはそれで問題が——」

山田先生は話の受け止め方が極端すぎるぞ。俺が呆れるが早いか織斑先生が大きく咳払いした。

「それじゃ私たちは会議があるのでな」

織斑先生は妙な妄想で頬を染めた山田先生を引きずって教室から出て行った。残っている女子たちは俺と一夏を見て何やら話し込んでいる。

クラスメートの会話に不穏な空気を感じた俺たちは一部の熱視線を尻目にそそくさと教室を出た。

教室を出ると後ろには一定の距離を空けて女子の集団がついてきた。同じ寮に帰るのだから方向は同じだが……。

「後ろ見たか？ 今からこんなじゃ先が思いやられるぜ」

「ぶつちやけあいつらお前目当てだけどな」

連中は俺と一夏の会話にも聞き耳を立てている様子だが、それは言わないでおいた。

「ええっ？ 冗談だろ？」

困り顔の一夏に俺が返した正論はまるで受け止められなかったらしい。

さすがに少タイラツと来た。

「中学の時だってモテてたんだらうに、そこまですごく嫌味だぞ」

驚いたことに一夏はむきになって否定した。

「モテたことなんかねえよ！ 中学の頃はやたら女子たちに付きまわられたり、買い物に誘われた事はけっこうあるけどさ」

一夏のデカイ声に背後が静まり返った。

普通なら自虐風自慢に取られそうな言い草だが、どうにも俺にはそれが遠まわしのモテ自慢には聞こえなかった。まだ一夏と出会って半日しか経ってないが、いろいろ話してみても一番感じたのは、一夏は賢くはないが正直で単純だが悪人ではないということだった。

そう考えると気になり疑問点を尋ねてみた。

「なあ、女子がつきまとうって、何か心当たりあったのか？」

「ないな。ただやたら女子に噂されたり話しかけられたりして、学校内では男子の友達と遊んだりしにくかったな」

それはまあ、分からなくもない。一夏はここで滅茶苦茶モテるし、やたら異性にモテるやつは同性から疎まれることもあるだろうから。

「じゃあ買い物に誘われるってのは、どんな店に？」

「わかんねーよ、買い物に付き合ってくれて言うから、どこに行くのか聞いたら」

「聞いたら？」

「なんか急に泣き出してさ、どっか行っちゃうんだよ。誘ってきた女子みんなそうなんだ」

……どうにも話が分からない。買い物に付き合えというのはデー卜の口実としても、どこに行くのか聞いただけで泣き出すというのは普通じゃない。何か知るべき部分が欠けているのか？

「どんな風に誘われたんだ？」

「それがさ、いつもわざわざ校舎裏とか屋上とかに呼び出されて、なぜかみんな判で押したように『付き合ってください』って言うんだ」

一夏の話す内容に違和感を感じた。それは後ろの女子たちも同じようで、急に後ろのお喋りが下火になった。

「こっちが『いいいぜ、どこの店に行けばいい？』って言ったたら、急に泣いてどっか行っちゃうんだよ」

後ろの話し声が小声になり、雰囲気が悪い噂をする時のそれに変

わった。

「……なんとなく分かった」

「えっ？ 何をだ？」

「なんで女子たちがわざわざ一夏を呼び出して、なぜ急に泣いたかのだよ」

一夏はよほど驚いたようで、目を丸くして立ち止まった。後ろの女子たちも慌てて立ち止まる。

「マジか!? なんでだ？」

俺は一夏の顔をまじまじと見た。人をからかっているようには見えない。これで演技ならアカデミー賞どころか詐欺師になれるな。

つまり一夏は無自覚に女子からの告白を片っ端から断っていた事になる。それも完全な勘違いで。告白した女子にしてみればたまつたもんじやないだろう。そりゃ泣くわ。

「なあ何でなんだよ？」

「その前に質問だ。一夏、今まで何回ぐらいそうやって誘われた？」

「正確には覚えてないけど、2〜300回くらいかな」

俺は息を呑んだ。尋常な数じゃない。言葉を失ったのは背後の連中も同じようだった。

「それじゃ、今まで女子に告られた事は？」

「何だよ急に？ そんなこと一回もねえよ」

「……なるほど、良く分かった」

後ろの女子たちのお喋りが完全に不穏な噂に変わっていた。明日には全校生徒に広まるかもしれない。俺はまずい事をしてしまったのに気づいた。いずれ分かることだとしても、知らなくてもいい事を多くの女子に知らせてしまったのだ。

俺はどうすればいいか迷った。一夏にどこまで伝えるべきか。後ろで交わされる言葉は明らかに一夏の人格や正気を疑う内容だが、本人はまだ気づいていない。さらにその原因であるさっきの話、大勢の女子の告白をみんな面白い物の誘いと勘違いして断り続けたという正気を疑う過去。

全部伝えたらどうなるか？ 少なくとも俺の知る一夏の性格から

して、自分の大変な過ちを知って後悔と罪悪感に苛まれるだろう。落ち込んで引きこもってしまうかもしれない。あまりにショックが大きいと、どんな反応になるか想像もつかない。そもそもどこまで本人に話すか俺が決めていいのだろうか？

俺は知っている唯一の一夏の身内に相談することにした。

「一夏、先に謝っておく。まずい話をしちまった。すまない」

「え？ そうなのか？」

「それともう一つ。……今の話は忘れてくれ。俺から織斑先生に説明する」

「？ おう？」

当たり前だが、一夏は何が何だか分からないという顔をした。けれど次の瞬間には他に興味を移していた。

別の話題を始めたとき、何かに気づいて一夏は後ろを振り返った。

「三治、いつのまにかあいつらいなくなったぞ。やれやれ、これで落ち着いて部屋を探せるな」

一夏の顔は爽やかな笑顔を取り戻していた。

生返事を返しながら、俺はその笑顔をどう受け止めればいいのか分からなくなっていた。

「そういえば三治、のほほんさんとちと休み時間よくしゃべってたけど」

「のほほんさん？」

「ほら、あのちっこい袖余りの女子。あの三人の内だれかが好きなのか？」

「んなっ！ 何でそう思うんだよ!？」

「いや、なんとなくだけだよ」

……一夏の奴は、女心には鈍感だが、男の恋愛感情には鋭いのかも知れない。

謀略のチェスゲーム

「お、ここか」

A4用紙に印刷された部屋の場所はわりあいすぐに見つかった。なにせ俺の荷物入りダンボールが詰まれ、さらにその上に一夏の荷物がちよこんと乗っていたのだから、簡単に分かった。

一夏がカギを開けると、そこは今朝まで過ぎた某高級ホテルのスイート程ではないにせよ、高校生の身分ではちよつと考えられない豪華な部屋だった。驚嘆もそこそこに一夏に手伝ってもらって荷物を運び込むと、俺は息が上がってしまった。日頃の運動不足がかなり響いたようだ。

「そんなんで大丈夫か？ IS動かすのもけつこう体力使うだろ」

「IS学園は帰宅部出身に甘くないよなあ」

俺が息を整えダンボールを開封しようとする、一夏がポンと肩を叩いた。

「心配すんなって！ おれが鍛えてやるよ。とりあえず明日から筋トレとランニングだな」

意気軒昂な一夏に俺はひきつった笑顔を向けるしかなかった。これでも体力の無さには定評があるのだ。

「とりあえず片付けは後にして、箒の部屋は知ってるからあいさつにしようぜ」

俺は一夏の臆しない態度に驚いた。彼女がいた事も無いというこいつの女子への遠慮の無さはどこから来るんだ？ やっぱ姉がいると違うのか？ 俺も妹いるけどめっちゃくちゃ苦手だぞ。

「い、いや俺は織斑先生に話があるから」

「千冬姉はまだ仕事中心だろ？ さっへ行こうぜ」

結局強引に一夏に連れ出されてしまった。ほどなく部屋の前に着くと、一夏はノックもせず平然とドアを開けた。

「箒、入るぞー」

俺は慌てて一夏の腕を引っ張った。

「おっおい！ 篠ノ之さんやルームメイトが着替え中だったらどうすんだ!？」

えっ？ という一夏の表情に俺はハツとした。こいつは本当に無自覚にこういう事をしている！

その時奥から誰かが出てくる気配がして、俺はドアから廊下に飛びのいた。一夏は奥にずんずん入り、俺をおかしな奴だと笑っている。すぐに部屋の主の声が聞こえてきた。

「同室の人か？ こんな格好で済まないな。さっきまでシャワーを浴びていたもので」

それが聞こえた途端俺はその場を立ち去ろうとした。次の瞬間女子の悲鳴や怒号が聞こえ、振り返ると一夏が凄い勢いで部屋から飛び出してドアを閉めた所だった。すぐに櫛の木で出来た頑丈なドアをぶち抜いて木刀が何度も突き出され、俺たちは全速力で自分たちの部屋まで駆け戻った。

ゼイゼイ言いながらへたり込むと、俺は一夏に詰め寄った。

「何したんだよお前は！ あのゴツいドアから木刀が突き出すとか軽くホラーだぞ!？」

「おれは何にもしてねえよ！ ただ——」

「ただ何だよ!？」

俺はダンボールから紙コップを取り出すと水道水を注いで一気に飲み干し、もう一つ出して水を注ぎ一夏に手渡した。

「出てきた箒がシャワー上がりでバスタオル巻いた格好だったんだよ。それで見ると怒って木刀で殴りかかってきたから、俺も箒のカバンにあった竹刀で受けようとしたらブラジャーが引っ掛かってさ。〃箒もブラジャーするようになったんだな〃 って言ったら、竹刀はね飛ばして凄い勢いで向かってきたんだ」

返す言葉もなかった。これじゃ女子と問題が起きない方がおかしい。はからずも俺の予想通り篠ノ之さんと一夏の間には諍いは起きたわけだ。

「なあ、なんで箒はあんなに怒ったんだらうな？」

「その前にドアぐらい閉めようぜ」

俺は荒い息をつきながら立ち上が——ろうとして足元のダンボールにつまずいた。

「おいおい大丈夫か？」

一夏が笑いながら手を貸そうと立ち上がり、そのまま固まった。

「どうした？」

俺が身を起こすと、開けっ放しのドアの向こうに剣道着を着て木刀を構えた篠ノ之さんの、眼に見えて怒気をはらんだ姿があった。

俺はこの時ようやく、一夏が女子がらみのトラブルメーカーなのだと思います。

「それで、何か申し開きはあるか」

注文のコーヒーに口もつけず、篠ノ之さんはしかめっ面のままだった。

「だから悪かったって。まさかあんなに怒るとは思わなかったんだよ」

一夏は篠ノ之さんに許してもらおうと必死に詫びている……つもりらしい。

俺はオレンジジュースをちびちびやりながら、扇形の座席で向かい合う二人の横で黙って二人を見守っていた。

ここ食堂のカフェに二人を来させたのは俺だ。とにかくいったん矛を収めて、一夏が篠ノ之さんへきちんと謝罪する場を作ってはどうかと言い、俺の提案に飛びついた一夏と不満げな篠ノ之さんを説得してここで話し合うよう決めさせたのだ。

が、一人では不安だからついて来てくれと一夏に引っ張られ、結局二人の話し合いに俺まで同席する事になった。結局しぶしぶやってきた篠ノ之さんは一夏を許す気配は見られず木刀も手放さないし、一夏は拝み倒して許してもらおう事しか考えてないようだ。このまま見ていたら結局夕食の時間までダラダラしている事になりかねない。それでは俺が困る。

荷物の片付けも終わってないし、織斑先生に一夏の事で話がある。それに、できればこの事は一夏の幼馴染である篠ノ之さんにも知って

おいて欲しい。

このままではらちが明かないので、取り敢えず少し口を挟むことにした。

「ごめん、ちよつといいかな？ 結局、篠ノ之さんが納得するには一夏はどうすればいいのか？ こんなことを何日も引きずると篠ノ之さんも疲れるだろうし」

「それに、その隙に他の女子が一夏と距離を縮めるかも」

篠ノ之さんに辛うじて聞こえる程度の声でささやくと、篠ノ之さんはビクツとしてすぐにこちらを向いた。

「な、な、なぜ貴様がそんなことを!」

「ほ、箒、どうしたんだ急に大声で?」

「なな、何でもない!」

やはりか。一夏の奴、何がただの幼馴染だ。……ああ、一夏にとつては、か。篠ノ之さんも気の毒に。

俺の勘では、篠ノ之さんは一夏を好きか、男として意識している。だから一夏が女友達として扱うのが不満なのだという考えだったが、今の本人の反応ではつきりした。

気になってはいた。篠ノ之さんが一夏と一緒に教室を出て、戻ってきたときに不満げだったのも、昼休みに不機嫌だったのも、やはり一夏が原因だったんだ。それまでさんざん篠ノ之さんが視線を送っているのに全く気づかず俺や他の女子とばかり話して、俺が促すまで食堂に誘おうともしない。それ以前に篠ノ之さんの事をただの幼馴染だと言い、俺が尋ねても特別な関係はないと言い切った。あれもきつと篠ノ之さんには聞こえていたんだ。

もつとも当の一夏にはまるで分かっていないようだが。

篠ノ之さんは怒っているが、一夏が何かしらの誠意を示し、その後篠ノ之さんがある程度特別な女子として扱えば、機嫌が直つてこの場が収まる可能性はある。しかしどう言ったものか。

篠ノ之さんが耳を貸せとぐいぐい袖を引っ張るので言われた通りにすると、小声で話しかけてきた。

「なぜ知ってるんだ、だつ誰にも言っていないのに!」

「今日一日の態度を見てればだいたい分かるよ。鈍感な一夏が分かってないだけなんじゃない?」

「なっ!!」

「どうだろ? この場を丸く収めてくれりゃ、一夏とデート出来るよう話を通してもいい。もちろん本人に気取られないようにな。どうせあいつ篠ノ之さんが誘ってもろくな反応しないだろ?」

「むう……」

ちよつとした賭けだが、篠ノ之さんが乗ってくる確率は高いと踏んでいた。教室や食堂での様子を見る限り、器用なタイプではないからだ。何より一夏に素直になれないから、いまいち踏み込めないのだから。

「なあ、さつきからなにをボソボソ話してるんだ?」

「一夏、ちよつと黙っててくれ。篠ノ之さんが機嫌を直すかどうかの瀬戸際だ」

「またも篠ノ之さんにぐいと引つ張られた。」

「おい、確かなのだろうな!? 昼食のときも、一夏に誘われたと思って来てみれば、三治に言われたから誘ったと抜かす始末だし、あの唐変木は——」

「じゃあ報酬を先にしよう」

急にそわそわしだした篠ノ之さんをおいて、俺は一夏に向き直った。出来るだけ神妙な顔をつくる。

「……あのな、一夏。口で謝って済む事なら、篠ノ之さんもここまで怒らないぞ? ちゃんと行動で誠意を示すべきじゃないか?」

「うっ、わ、わかったよ、やりやいいんだろ?」

いきなり一夏は席から離れると、篠ノ之さんに向かって土下座の格好になった。

「すまん! 箒、このとーりだつ!」

とたんに周囲がこちらを見てざわつきだした。またこれだ。

「落ち着け一夏。取り敢えず席に戻れ、な?」

俺は焦りを感じながらも落ち着いた風を装い、ゆっくりと喋った。「つまりだな一夏、仮にも乙女に恥をかかせて何もしないでは済まさ

れない。かと言つて金品を渡すのもおかしな話だよな?」

ちらりと篠ノ之さんを見る。うつむき加減の顔がほんのり赤くなり、両手をぎゅつと握り締めている。

「だからさ、篠ノ之さんも害した気分をリフレッシュしたいだろうし、お詫びも兼ねて今度の週末どこか遊びに連れてつてあげたらどうだ。勿論一夏のおごりだぞ?」

「そ、それはまあ」

「嫌ならここで存分に篠ノ之さんにどつかれていけ。俺は先に帰るからな」

「ま、まってくれ三治!　いくよ、遊びに連れてくから箒!　もう木刀だけは勘弁してくれ!」

「ようし、よく言つた一夏。これでいいかな?」

俺はちらりと篠ノ之さんの方を見やると、すごい勢いで何度も必死にうなずいている。

「ああそうだ一夏!　篠ノ之さんへのお詫びなんだから、他に誰も連れて行くなよ?　ひどく失礼だからな」

「わっわかった!」

大慌てで承諾した一夏と真つ赤な顔でうつむいた篠ノ之さんの間で、どうにか事は収まった。

話が済むと、一夏に先に帰るよう言つて篠ノ之さん呼びとめ、一夏のことと大事な話があると伝えた。

「こんな所へ呼び出して、妙な考えを抱いているなら容赦はせんぞ」

人に聞かれては困ると、俺は寮の建物の裏まで篠ノ之さんを連れ出していた。当然警戒している篠ノ之さんに、俺は寮へ向かう途中の出来事をかいつまんで話した。篠ノ之さんが驚き大声を出しそうになるのを、俺は何度も制止しなければならなかった。

「し、しかしそんな事がありえ……なくもない……か、一夏なら」

「やっぱり付き合ひの古い篠ノ之さんでもそう思うか?」

「ま、まあ私ほど一夏の事を知る人間はいないからな!」

急に得意げになる篠ノ之さん。

「それで、この話を織斑先生にも伝えるつもりなんだ。出来れば一緒

に来てくれないか？」

「えっ千冬さんにか……」

いきなり篠ノ之さんは気落ちしてしまった。正直怖いが伝えるべき事だし、噂が広まって一夏が知ったときどうするべきかも話したい。

俺はスマホで職員室に連絡を取ると、急にしぼんでしまった篠ノ之さん連れ、織斑先生が指定した生徒指導室へ向かった。

狭い部屋で向かい合う織斑先生の迫力はひとしおだった。篠ノ之さんが萎縮している横で、俺は事の次第を一人で巖のような鉄面皮に話さなくてはならなかった。話が進むごとに織斑先生の表情が厳しくなり、先程見た篠ノ之さんのしかめ面などお祭りのお面くらいに見える形相になった。

「……話はわかった。お前たちが言いたいのはそれだけか？」

もうダツシュで逃げ帰りたいが、まだ言うべきことがあった。

「その……今度のことは俺の責任です。俺が余計な事を一夏に尋ねなければ——」

「何を言ってる。貴様が責任を感じるべき事が今の話のどこにあった？」

意外な言葉に俺は返答に困った。いずれは分かった事でも俺が余計な詮索をしなければこんな事にはならなかったはずだ。なのに……。

「しかし、今度のことは——」

織斑先生は俺の言葉をさえぎった。

「それともなにか？ 貴様は織斑の人生の落ち度は全て自分の落ち度だとしても言うのか？ ずいぶんだな？」

「そういうわけでは——」

片手で俺を制し、

「確かに音羽と織斑の会話、織斑の過去を知られる切っ掛けにはなっただろう。しかしそれはあくまで知られる原因であって、過去に誤解で多くの女子を傷つけたのは織斑自身だ」

俺は黙ってうつむくしかなかった。

「いずれ周囲に知られる事になったとしても、それは織斑自身が責めを負うべき問題だ。たとえ悪評として広まり、それで苦しむ事になったとしても、織斑が自分で決着をつけなければならぬ。自分がしでかした事の結果なのだから。しかし」

そこでいったん言葉を切り、織斑先生は俺と篠ノ之さんを交互に見つめた。

「それでもお前たちがあいつの支えになってくれれば、私は嬉しい。これは担任教師としてでなく、愚弟の姉としての言葉だ」

「はい！」

俺と篠ノ之さんは迷いなく答えた。慣れない場所で不安と息苦しさにさいなまれていた俺に、誰はばかることなく最初に友達になってくれた奴だ。今の俺には気の置けない付き合いの出来る唯一の男友達でもある。

それに、そんなこまかい事を差し引いても一夏はいいやつだ。過去に何かあったからなんて理由でむげになど出来やしない。

むろん、篠ノ之さんにとってはそれ以上の存在だろう。

そんな俺の考えを知ってか知らずか、珍しく柔らかな表情を見せた織斑先生はすつと立ち上がった。

「さて、もうかなりいい時間だ。お前達夕食はまだだろう？ 今日私は私が奢ってやる」

「あ、一夏も誘っていいですか？」

「無論だ。本日のメインゲストだからな」

「わつ、私が連絡す……します！」

わたわたとスマホを取り出してかける篠ノ之さんとそれを見てニヤニヤする織斑先生と俺。これだけ支える人がいれば、きつと一夏は大丈夫だと確信した。

「あつちふ……じゃなかった織斑先生！」

食堂前で俺たちを見つけた一夏はすぐに駆け寄ってきた。

「廊下を走るな馬鹿者」

織斑先生と一夏の来訪で、周りにはわかには騒がしくなった。俺もも

うごうという展開には慣れてきた。始終こんな調子じゃ、織斑先生もさすがに疲れるだろう。

「ごめん、実は相談があつてさ」

俺はなぜか背筋が冷たくなるのを感じた。

「じつは迷惑かけたおわびに箒を遊びに連れて行って三治に言われてさ、どこかいとこないかな？ ほら、おれIS学園きたばかりでよく分からなくてさ」

ゆつくりと織斑先生が振り向き、篠ノ之さんをじつと見つめると、今度は俺に視線を移した。

「ほう……話は食事をしながらゆつくり聞こう。篠ノ之と音羽にも聞くべき事ができたようだしな」

俺は本日最大の苦難はこれから始まるのだと知った。

その日の晩は何を食ったか覚えていない。ただ味がしなかった事だけは思い出せる。

怒りもて報いよ

早朝から一夏に叩き起こされると驚く間もなくランニングに引っぱり出されてIS学園の島を一周し、発破をかけられながらヒーコラと学園のジムでさらに汗を流すとシャワーを浴びて制服に着替え、食堂に向かう頃には俺はくたくたでまた眠くなっていた。

「あ、おとーさんとおりむーだー!」

ゆるい声の方を見ると、本音と谷本さんたちが食券の列に並んでいるのが見えた。みんな制服姿だが、なんか一人着ぐるみみたいなのがあった。

「おりむーって一夏の事か」

「そ、それは言わないでくれよ」

「おはよー」

ゆるい声と着ぐるみは本音だった。顔以外全部隠れたキツネみたいな格好だ。似合っちゃいるがなぜ着ぐるみ？

「おはよーって、なんだその服？もしかしてIS学園のゆるキャラか?」

「にしし、違うよーこれは私服なのだ!」

「ええ……」

他の女子たちはここぞとばかり一夏に話しかけている。朝からテンション全開の女子の勢いに、さっきまで俺を急かして元気の良かった一夏はすっかりタジタジだ。

「おっおい、三治助けてくれよ」

もう少し本音と話をしたかったのに……まあ食事のときに話せばいいか。

「わかったよ、みんな一夏の何が聞きたいんだ?」

その後に飛び出した言葉は俺の眠気をたちどころに吹っ飛ばした。

「ねえねえ音羽くん! 織斑くんって音羽くんが本命だったから中学時代女子の告白をみんな断ったってホント!」

「はあ?」

「私が聞いた話だと、織斑くんが音羽くんと付き合いたくて篠ノ之さ

んに音羽くんと別れてくれって土下座したって！」

「おい」

「違うってば！ 織斑くんと出会いたい音羽くんの愛の力がISを動かしたのよー！」

「ちよつと」

「ねえどれが本当なの!? 私は織斑先生が二人の仲を引き裂く為に織斑くんをIS学園に入れたって聞いたんだけど!？」

一夏に関して悪い噂が広まることは覚悟していたし、事実そうだった。しかし……。

想定外すぎるわい!!

いつの間にか集まった数十人も女子たちの皆が皆ホモホモしい内容を期待して大騒ぎし、俺の答えを待ってわくわくしている。

いい加減にしろよお前ら！

人がどれだけ真面目に悩んだと思ってやがる!?

ブチ切れた俺は自制なぞ忘却の彼方へと消し去った。

「全員聞けえー！ 俺と一夏はどノーマルで男にや興味ねーんだ！ そもそもここに来るまでお互い会った事ねえよ！ この腐女子どもがあ!!」

大声で怒鳴りつけると集まっていた女子たちがサーツと散らばってゆき、暴れ出しそうな俺を後ろから一夏が羽交い絞めにした。

「さ、三治！ もうその辺で」

心配した俺が馬鹿みたいじゃねーか！ もう知るか畜生！

静かになった食堂で肩で息をしていた俺はようやく腕を放した一夏を離れ、うんざりしながらもすっかり空いた券売機に向かった。

ポケットからコインケースを出した所で、余り袖をぶらぶらさせた黄色い腕が横からひよいと伸び、あつけにとられている内に小銭を入れトーストセットのボタンを押して、食券を拾うとまた視界からひよいと消えた。

小銭を入れつつ腕が消えた方を見ると、テーブルやイスの陰に隠れるようにちまちま進むキツネがいた。

「……」

「お、おい三治」

後ろから一夏がおっかなびつくり近づいてきた。

「さつきは凄かったな。でもそんな怒るようなことだったのか？」

一夏は自分が周りに何を言われているかの自覚もないらしい。もう俺は驚くことも呆れることもなかった。

「ようするにあいつら俺たちがゲイなんじゃないかって噂で大騒ぎしてんだよ」

「ええっ？ マジかよ!？」

「しかもそういうの期待して大喜びしてんだ、やってられるかよ」

「うわあ……女子ってコワイなあ」

俺はさつきと食べるサンドイッチにして列に並んだ。一夏も慌ててついてくる。

「でもさ、なんでそんなウワサになったんだ？」

「さあな、一夏が彼女を作らないからじゃないか？」

もうこの話題は嫌だった。前に並んだ連中からはチラチラ見られ、何かひそひそ囁きあっている。これももう慣れてしまった。列の何人か向こうにはさつきのキツネがいる。

「フジョシってなんだ？」

「ホモの漫画とかラノベが好きな女だよ」

「えっ？ 女がなんでそんなもん読むんだ!？」

一夏がびつくりした顔になり、同時に前に並んだ女子たちがビクツクとなつて硬直した。

「知らん。俺は女子じゃないからな」

「でもくわしいんだな。三治も読むのか？」

「読むか馬鹿！ 妹が持つてるのたまたま見たんだよ。俺が友達からラノベ借りて読んでたら馬鹿にしたくせに、自分はそんなもんこそ読んでるのかって喧嘩になったんだよ」

「ふーん」

俺はさつきと注文の品を食ってここから立ち去りたかった。しかし教室に行ったら行ったでさつきの連中がいて考えるとだんだん気が重くなった。

トレイを持って人気の無さそうなテーブルを探していると、一夏があつちに行こうぜと顎でしゃくつた。その先ではガラガラのテーブルにちよこんと座った着ぐるみが、一人でちまちまとトーストを食べている。

今は遠慮しなかったが、一夏がどんどん歩いていってしまうので仕方なくついていった。

「あつ……」

本音が着ぐるみの顔を上げた。顔を合わせ辛くて少し離れた席につくと、トレイを置いた一夏が横に座った。

「あのね……そっちに行ってもいい？」

不意の本音の声にどきりとしたが、何も答えられないうちに一夏がおういぜと答えてしまった。

本音はよいしょとトレイを持つと、とととと歩いて、驚いたことに俺の目の前に座った。

俺は出来るだけ何も考えないようにして食べ始めた。チラツと前を見ると、本音はじーつとこちらを見ていた。

「な、なんだ？」

声が少し裏返ってしまった。

「まだ頭そのままなんだね」

一瞬何のことだか分からなかった。

「！ ああ、*グ*gendou*ウ*か」

昨日は髪を切りに行く余裕もなかった。そもそもそれ所じやなかったのだ。

本音が不安そうな顔をした。

「やっぱり、言われたら腹が立つ？」

いや、と俺は首を振った。

「見た目をネタにされてるうちが華なんだな。思い知つたよ」

IS学園に来て以来、つくづく想像の斜め上のことばかりだと言って俺は苦笑した。

織斑先生に根掘り葉掘り追及された昨晚もそうだが、今朝の朝食もあんまり味わうゆとりがなかった。なんだか食堂に来るたびにエラ

い事になつてゐる気がする。

「あんまり気にしないほうがいいよー」

本音は昨日のペースに戻っていた。

「みんな噂好きだもん。少ししたらまた別の噂で盛り上がるんだから、その内忘れちゃうよー」

本音は袖に隠れた両手でコップを持ってごくごくジュースを飲んだ。

「そんなもんかね」

「そんなもんです。にしし」

ふうと息を吐いた。もうため息がクセになつてゐるらしい。

「またため息ついてる。よけい疲れちゃうよ？」

「ここに慣れるまでの通過儀礼は姦かしましすぎるんだよ」

「下らない事なんだし、笑いとばした方が楽だよーこういう時こそ笑顔」

本音が笑つて見せた。

「そうだぞ三治、よく分からないけど元気出せよ」

一夏が急に口を挟んできた。良く分からないけどって、さつき説明したばかりなのにきれいなサツパリ忘れたのか。それとも全く気にならないのか。

なんか一夏の場合どつちも大して変わらないような……。

「……もういいや」

悩んでゐるのが馬鹿馬鹿しくなつて俺は苦笑いを浮かべた。確かに噂にいちいち必死になつて怒つても、三度の飯より噂が好きで女子たちがわんさかいるのだ。いくらでもわいてくるだろう。何しろ今まで女しかいなかったIS学園に二人だけ男子がいるんだから、妙な噂が広がらない方がおかしいのかもしれない。

「ほら表情かたーい。もつと自然に」

「そうだよ、三治は時々笑顔が固すぎるぞ」

半分はお前のせいだよ。あと一夏の後ろに誰か来てるぞ。

「……座つていいか？」

「どうしたんだよ三治？ ほら笑顔だろ？」

「ここは空いてるかと聞いているんだが」

「一夏、後ろに——」

一夏は背後から声がかかっているのを見向きもしない。これはまたアレだな。

「なんだよ二人とも？ おれの顔に何かついてるのか？」

どん、と勢いよく食事のトレイが置かれた。

「ここは！ 空いているのかと！ 聞いているんだ!!」

「えっ、なんだって？」

振り向いた一夏の目と鼻の先に、昨日のドタバタを思い出させる怒りのオーラを放つ篠ノ之さんが仁王立ちしていた。

俺と本音はさっさと残りを食べ終わると、お先にと行ってトレイを持ちテーブルを後にした。

「ちよっ！ 三治待てよ！」

「振り返らず進め」

「うむ〜！」

変な所で息が合うなあと思いつつ、俺と本音はさっさとトレイを片付けて教室に向かった。

背後では二人の一夏が無視した、してないの水掛け論がギャアギャア聞こえていたが、やがて2発の重い打撃音が響き静かになった。

「本日はクラス代表を決定する！」

目の前にいる織斑先生の気合の入った声も、頭を押さえた篠ノ之さんと一夏を見た後ではしまらないものだった。早くも昨日相談した時の信頼が揺らぐ。呆れていたのは本音も同じだ。ちなみに本音がセーターのようにスポンと着ぐるみを脱いで制服姿になったのは驚いた。

「クラス代表は再来週行われるクラス対抗戦出場の他に、生徒会や委員会への出席など、まあクラス長と考えてもらって構わん」

まさかクラスでなんかあるたびに殴られる立場じゃないだろうな？

「自推他推は問わん。誰か立候補はいないか……何かあるのか音羽」

もはや何も言うまい。

「……いえ」

「あー、誰か推薦する者はいないか!」

急に居心地悪そうになった織斑先生は大声で呼びかけた。

「はい! 織斑くんがいいと思います!」

「お、おれえ!」

急に指名されて一夏は素っ頓狂な声を上げた。ありうる流れだと思っただが、一夏は想像もしなかったらしくうろたえる様子が背中越しに分かった。まあ他に立候補者がいなけりゃ本決まりだな。

さらに追い討ちをかけるように賛成意見が続出し、反対意見もみられないなと思っただ途端。

「ま、待てよ! じゃあ俺は三治を推薦する!」

ああやつぱりきたか、一夏ならやりかねないなと思っただ。

俺は振り返って言った。

「聞いてなかったのか一夏。クラス対抗戦出なくちゃいけないんだぞ? 専用機なしの俺がどうやったら勝てるんだ? 気合とか根性とか言うなよ? 馬鹿の言い訳だからな」

とりあえず言いたい事は言った。どうせ担任が担任だし、後はなるようになるだろう。

何だか2日目でいろいろ投げやりになりかけているのを自覚した。

一夏はコイの様に口をぱくぱくさせている。

「納得がいきませんわ! だいたい男がクラス代表など恥さらしもない所です!」

キンキン声の主はいつぞやのオ…金髪エリートだった。昨日の今日なのに名前ではなくウザさが思い出される。

「そもそもこのセシリア・オルコットは文化的に後進国であるこんな極東の地で、猿どもとサーカスをやりに来たのではありません!」

言いたい放題言ってくれるじゃねえか。吐いたツバのむなよ?

「イギリスだっただいしてお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ?」

一夏も言っただが、この調子じゃ感情に駆られて口喧嘩になる

ただだな。どうせ織斑先生が止めるだろうが、それじゃ面白くない。

「あなた！ 私の祖国を侮辱しますの!?!」

「最初に言ったのはそっちだろ！ 三治も何か言っつてやれよ！」

こっちに振るか。まあ丁度いいや。

俺はゆつくりと立ち上がった。落ち着いて静かに言葉をつむぐ。

「俺はなにと言わん。俺自身はな」

拍子抜けした空気が広がった。昨日初代ブリュンヒルデと口論した奴が、いきなり不戦敗を宣言したように聞こえたからだろう。

「おい三治！ 正気かよ?!」

それ、お前にだけは言われたくねえよ！

俺は一夏の言葉を聞き流し、ポケットからスマホを取り出した。

「ただあんたの言動は全て録音させてもらった。今日中に駐日英国大使に確認を取るつもりだ。あんたの、つまりオルコット代表候補生の言動は英国IS関係者の公式見解か、それともオルコット個人の意見かとな。すぐに大使館から連絡が行くだろうから、ちゃんと電話には出るこつた。せいぜいさつきのご高説を伝えてやるんだな」

とたんに高慢ちきを地で行くエリート様の顔色が面白いほど変わった。ISの腕はいいのか知らんが、織斑先生以上に言動に隙があるぜ。

「そ、そんな脅しはわたくしには無意味ですわ！」

精一杯の強がりのようだが、手が震えているのがまる分かりだ。

「ほう、流石は代表候補生だ。もう腹をくくったか。期待に背かんですよにしよう」

俺は笑った。

「ま、待って下さいまし!?!」

それ以上は何も言わず、俺はさつきと席に着いた。またもクラスがざわめき、意趣返しを期待していたはずの一夏はあつけにとられていく。

急にオルコットの方で悲鳴が上がった。誰かが叫んだ。

「先生！ オルコットさんが！」

見ると、イスの背もたれにしなだれかかるように倒れたオルコット

を周りの女子があわてて支えているのが分かった。

「保健室に連れて行け」

指示した織斑先生は大きなため息をつき俺の顔をにらんだ。

「なぜああまで言った？」

俺もまっすぐその顔を見返した。

「なぜ彼女の暴言を聞き流したんです？」

俺が一切ゆずる気がないのを読み取ったのか、織斑先生はそれ以上は聞かなかった。

結局クラス代表はオルコットの回復を待つて話し合うことになり、それ以上は議題もないということで、早々にSHRは終わった。その後の休み時間の空気は、俺には微妙な重みを含んでいるように思えた。

休み時間に入ってしばらく驚きでフリーズしていたらしい一夏は、席から飛び出し俺の正面に回った。

「さっきのなんだ？ 千冬姉は三治を怒らなかつたのか？」

「普段はくだらん理由で一夏を殴ってばかりなのに、平然と暴言を吐いたオルコットの奴を叱らず咎めずとが見て見ぬ振り。その後俺がどうするか予想できたはずなのにだぜ？ それで俺を叱る資格があるのか？」

一夏は何も答えられなかつた。

そのまま一夏が珍しく悩んでいると、鏡さんや岸原さん達が俺の席にやってきた。

「さっきの凄かつたね！ オルコットさんには悪いけど正直胸がスツとした！」

「私も！ 実際オルコットさんてエリート風吹かせて苦手だったし、あんなの言いすぎよ！」

「まああれでオルコットさんも反省してくれたらね。でも織斑先生もなんで注意しなかつたのかな？ 代表候補生だから？ ちよつとひどくない？」

彼女たちもオルコットの言い草や織斑先生の矛盾した態度には腹が立っていたらしい。当然か。

「でもさっきのはマジでゲンドウレベルの論破だったね！」
「えっ」

「そうそう！ まさにリアルゲンドウって感じ！ ちょっとここでやってくれない？ 〴〵そのためのネルフです〴〵って！ こうメガネを右手でクイツてして！」

「あの」

「ずるい私も！ 〴〵ああ、間違いない。使徒だ〴〵って、机の上で手を組んで！ こう！ ほらこう！」

「ちよつと」

「えー見たい！ ちょっとだけやって！ お願い!!」

ふと本音の方を見やると、一瞬どきつとした表情を見せ、そのままとことこ歩いて廊下に出て行ってしまった。笑顔で。

「あんにやろー」

結局收拾がつかないので、二〜三モノマネをやってその場をしのぐ羽目になった。絶対ネットに流すなど厳しく注文をつけた上でだが、女子たちは大喜びしてスマホで写真や動画を撮りまくっていた。

一夏は訳が分からずポカンとした表情でそれを見ていた。

俺は今度こそ今日中に髪を切るぞと固く決意した。

「そーいやさっきオルコットに言ってたのってなんだ？ 大使に言うとかって、イギリスのIS関係の人か？」

「ああ、うん……一夏には難しかったよな」

「さっきはカツコよかったけど、ちよつと言い過ぎだと思っただよな。よくわかんねえけど、なんかショックで倒れてたし。結局何を言っただよな？」

「気にしなくていいから」

俺は何も考えないことにした。

開戦前夜

オルコットが担ぎ出されてからの教室は一時騒然としたものの、その後は昨日と変わらぬ一日が戻ってきた。

変わった事といえば、家庭科の味噌汁作りで一夏が異様に張り切った事ぐらいだ。家庭科の先生が料理初心者のために用意していたダシ入り味噌を真っ向から否定し、麴入り味噌とデカイ鰹節の固まりをわざわざ用意させて、俺や篠ノ之さんに手伝わせて入魂の一杯を全員に振舞った。

確かに美味しいし皆も喜んだが、先生の立場が無いし俺も篠ノ之さんもカツブシ削りでへとへとだった。次からは冷奴に乘せるようなあらかじめ削ったやつにしてくれ。

「なっ？ 削りたてのカツオブシは風味が違うだろ！ やっぱ時間あるならみそ汁はこうでなくちゃ」

「……おう」

もう俺は何も言わん。何も言わんぞ。

俺はともかく篠ノ之さんは怒ってるんじゃないやなろうか。きよろきよろとその姿を探すと、

「い、一夏の手作りの味噌汁」

なんか恍惚としてらっしゃる。俺らも手伝ったんですが。他の連中はこれといってする事もなく一夏特製の味噌汁に舌鼓を打っていた。先生までも。

結局英大使館に電話はしていない。オルコットは相当こたえたようだし、これで反省してみんなに謝罪するならそれで良しと思った。これ以上蒸し返しても誰も得をしないし。

異変が起きたのは時間割で最後のIS授業のときだった。

教室にやってきたのは山田先生一人だった。そこかしこで生徒たちが小声で織斑先生がいないことを不審がっている前で、山田先生はおどおどしてうまく教室をまとめられなさそうだった。

「なあ三治、千冬姉どうしたんだ？」

何かあるな。また嫌な予感がした。

「山田先生、織斑先生は遅れるんですか？」

わざと大声で聞くと教室は静かになり、山田先生はハツとして答えた。

「えー、織斑先生は臨時の職員会議で少し遅れます」

クラスがざわめいた。当然だろう。いま職員会議の議題とえば、皆がオルコットの暴言とその顛末を思い浮かべるからだ。

「臨時って何の会議だろうな？」

一人を除いて。

「それでは授業を始め……みなさん静かにしてください！」

当然女子たちの質問が相次いだ。胸以外は同級生くらいに見える山田先生は織斑先生と違って話しかけやすいのだろう。

「職員会議って、オルコットさんの事ですか？」

「オルコットさん退学になるって本当ですか？」

不穏な質問が飛び交い、俺も先の騒動の決着がどうなるか気になった。そもそもその職員会議とやらでどんな結論が出るのかはなはだ疑問だ。織斑先生がオルコットの好きにさせたのはイギリスとの国際問題を恐れたか、この学園を配下におさめるIS委員会からの要求もあったのかも知れない。しかし元をたどれば問題児を送り込んだイギリス側や、それを認めたIS学園およびIS委員会の責任が先だろう。どう考えたって俺が責められるいわれは無い。しかし俺に全てをひっかぶせてIS学園は知らん顔をすることもありうる。何しろ俺が消えても男性操縦者は一夏がいるからだ。

いよいよとなったらネットに全てぶちまけるか。教室のディスプレイを見ながら考えている時だった。

教室のドアが勢いよく開けられ、話題の人物が現れると、

「決闘ですわー！」

いきなり俺と一夏を指差した。

「今日から一週間後！ IS模擬戦で私が勝ったら、例のその……アレを消して頂きますわ！ よろしくて!？」

なに言ってるんだこいつ？ クラスがそんな気持ちで満たされたようだった。

それよりお前はクラス全員に対して言うことあるだろ!?

「おういいぜ。四の五の言うより性に合う。三治もそれでいいよな?」

「嫌です」

すかさず言った。いい訳あるか馬鹿。俺もそろそろ一夏の超展開に耐性がついてきたらしい。

「よし! ……えっなんだって!？」

「いいですわね! ——ってええっ!？」

勢いだけで生きてそうな二人は仰天して俺を見た。ノリのいい奴らだ。そもそもどうしてそんな話を通ると思っ……たんだろうなあ。

きつと一夏たちのようなタイプの人間はIS学園に複数いて、自分の考えと価値観と感覚で世界が動くと信じて疑わないのだ。だから自分と違う考えの人間と会うと衝突する。おそらくだが篠ノ之さんや織斑先生もそうではないだろうか? だから大勢の中で孤立したり、思い通りにいかないと力づくで押し通そうとしたりするのだろう。

ただの勘ではなく、約二日間この学園で異様に濃密な時間を過ごした上での俺なりの答えだった。

「そもそも俺が納得する要素が何にも無いぞ。なんでいきなりお前と勝負して負けたら言うこと聞かなきゃならんのだ? 一夏も一夏だ。勝ったらどうすんだよ?」

「えっ? ……そ、それは勝ってから考えれば……」

「そっそうですわ! その時に決めればいい話で——」

「お前ら二人とも自分がやりたいことしか考えてないだろ? ふざけてるのか? そもそも俺が納得しなかったらどうすんだよ?」

俺の言葉に二人とも突っ立ったまま言葉を失った。どちらもあまりに脳筋過ぎないか? もう一夏は諦めるとして、オルコットは日本語を流暢にあやつるほどの頭脳の持ち主なのに考えが無さ過ぎる。

「受けてやれ音羽。結果はどうあれ筋は通させる」

オルコットの後ろから織斑先生が現れて告げた。どうやら職員会議の結論は出たらしい。

「筋を通すとは？」

俺が言い終わる前に織斑先生は素早く近づき耳元にささやいた。

「駐日イギリス大使も本国の了解をとった。模擬戦の結果がどうあれオルコットはクラス全員に謝罪させる。職員会議で決定した」

「なぜ模擬戦が必要なんです？」

「今回の問題はあくまでも生徒間のいざこざで、模擬戦で決着をつけるといふ形で終わらせるからだ。学園もイギリスも国際問題に発展させたくない。ＩＳ委員会にも内密にだ」

「それで俺たちに納得しろと？　オルコットだけを優遇しているのもその辺が理由ですか？」

そこで初めて織斑先生は顔をしかめた。

「土下座でもさせたいのか？　イギリス側も折れた。もうあいつの身勝手を許すことは無い！　今度生徒や教師を侮辱すれば退学だ！」

「……」

「……事が終わるまで、外部には漏らすな。いいな？」

織斑先生は俺の顔をじつと見ていたが、やがてため息をつくと言山田先生に代わって教壇に立った。

「織斑、貴様には一週間後に専用機が用意される。それでも代表候補生との模擬戦は厳しいため、織斑と音羽の二人には今日から一週間特別に時間外のアリーナ及び訓練機使用を認める。音羽は専用機がないため、実際に対戦するのは織斑とオルコットのみだが、音羽は織斑が最善の形で模擬戦に臨めるよう最大限協力しろ」

専用機と聞いて女子たちが沸き返った。専用のＩＳを与えられるのはごく一部のエリートであり羨望せんぼうの的だから当然だ。

「静かに！　いいな三人とも、この模擬戦の結果をもってクラス代表の決定とする。以上だ。授業を再開する」

そう言つて教壇を山田先生にゆずったが、俺にだけ聞こえる声で「分かってるな？」と告げた。全て終わればオルコットの「吐いたツバ」をスマホから消せという事だろう。

要はＩＳ模擬戦で一夏（と俺）が負け、オルコットもその後で謝罪させれば、喧嘩両成敗ではないが日英双方の顔も立つという事だろう

な。大人の事情というやつだ。

俺は正直うんざりした。オルコットが謝罪すれば俺だって水に流す、それで済む話だ。一夏もサツパリした性格だしそれで納得するはずだ。それをわざわざ誰のツラを立ててやる為の模擬戦だ？　しかし一夏もあつさり受けてしまうあたり、ブリュンヒルデに負けず劣らずの武闘派なのかも知れない。

その一夏がまたやらかした。

「あの、結局専用機つてどのへんがすごいですか？」

また教室全体がズッコケる騒ぎになった。もう俺は冷めた目で見ているだけだ。

「昨日授業でやったぞ」

「あつあなたはここへ何を学びに来ましたのっ!？」

「おつ織斑くん？　昨日の先生の授業聞いてましたか!？」

俺、オルコット、山田先生の三人のツッコミに続き、教壇の横に立つ織斑先生の顔が鬼のそれに変わった。バキツと音がした方を見ると、手に握られた出席簿がとうとう寿命を迎え、パラパラと破片が散らばっていた。

「織斑……再発行した参考書はちゃんと読んだらうな？」

静かな声が逆に怖い。クラス全員の前で俺にさんざん注意されたからか、ゲンコツを必死で我慢している様子がいやというほど伝わってきて苦しかった。

「あつ、その、昨日は三治の荷物片付ける手伝いとかいろいろ忙しくて」

「今朝は何をしていた？」

だんだん織斑先生の声が硬くなってきている。危険信号に一夏は気づくか？

「その、三治を鍛えるのにランニングとかジムで——」

何かプツツと切れたような気がした。

「……織斑、あとで生徒指導室に来い」

さすがに一夏も何をされるか分かったらしい。

「おつ織斑先生！　そっそれは……三治、頼む！　なんとかしてくれ

！」

俺は肩越しに後ろの席を見た。席のすぐ近くでは織斑先生が「邪魔するな」というオーラを放っている。

「あのな一夏、俺に気を使って色々してくれるのは嬉しいが、参考書の件は昨日怒られたばかりだぞ？ 暴力で解決はせんが、さすがに弁護できんわ」

「そんな!? 三治はおれを見捨てるのか!？」

「どうせシバかれるならアリーナでIS同士でシバいてもらえ。その方がまだ訓練になるだろ」

俺はそう言つて正面に向き直つた。すぐ近くで『鬼』がゆっくり呼吸をするのが聞こえた。周囲の女子たちが震えているのが分かる。

「……織斑」

「はっはい!!」

一夏が席から飛び上がった。

「生徒指導室は来なくていい。代わりに今夜9時に第1アリーナへ来い。鍛えてやる」

それだけ言つて『鬼』は元の位置へ歩いて戻つた。背後で一夏が震え上がるのが想像できた。

「そ、それでは授業を再開しますね。あつ、その前にその、織斑くんにちよつと簡単にその、専用機について復習しましょうね?」

山田先生まで怖がらせてどうすんだよ。不憫な副担任は『鬼』のオーラに怯えながらも一夏に、ISの要であるコアは篠ノ之 束博士しか作れず、現在世界には467機しかISがない事、専用のISが与えられるのは国家や企業に所属する限られたエリートだけである事、一夏は特例で情報収集の目的から専用機が与えられる事などを丁寧に教えた。

「なるほど、だいたいわかりました」

一夏の答えに山田先生もほつとした表情を浮かべた。

「あの、ちよつといいですか? 篠ノ之さんつてもしかして篠ノ之束博士の関係者なんですか?」

誰かが一つの疑問を口にした。実は俺も気になってはいたのだが、

もし聞かれたくない事だったら悪いし、全く無関係だったら恥ずかしいので聞かずにいたら、様々なトラブルに振り回されている内に忘れてしまった。

「あの、それは……」

山田先生は言いにくそうに織斑先生を振り返った。いつのまにか『鬼』の気配は消えている。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

こともなげな織斑先生の回答に教室はまた騒がしくなり、俺も内心驚いた。まさかあの東博士の妹だとは。せいぜい従姉妹か何かだろうと思っていた。でもそんな個人情報も教師が喋っていいのか？ いつかは分かることも知れないが。

「あの人は関係ない！ ……私は私だ、あの人じゃない」

騒がしくなりかけた教室が篠ノ之さんの声で静まりかえり、すぐに授業が再開された。

「ISには意識に似たものがあり、操縦時間に比例してISも操縦者の特性を理解しようとする——」

結局こうなるか。あの二人がケンカの決着をつけようとすれば、最後は互角の条件で何かの勝負になるのは目に見えていたが、俺までつき合わされるのかよ。

「——またISは宇宙での作業を想定しており、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また生体機能も補助する役目があり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ち——」

そもそもオルコットに謝罪させるなら、あいつの差別と偏見を大目に見ると指図した奴も一緒に連れて来い！ ISのグーパンで許してやるから。IS適正最低以下の俺なら顔がへこむぐらいで済むだろう。

「例えばみなさんはブラジャーをしていますよね？ あれはサポートこそすれ人体に悪影響が出るといふことにはならないです。それと同じで——あつ！」

俺の目前で説明していた山田先生の顔が赤くなっていた。そういやブラジャーしてない奴がこのクラスには二名いるのだ。山田先生

は顔を覆って教卓に隠れてしまった。

「あー、山田先生？ その〴〵質問があるんですが」

誰も何も言わないので、俺は前から疑問だった事を聞いてその場を取り繕おうとした。

「はっはい！ なななんでしょう!？」

教卓から山田先生の緑の頭がピヨコンと飛び出した。

「えつとですね、さつき聞いたISの操縦者の生体機能補助なんです、なんというか、免疫機能を改善する能力もあるんですか？」

俺はもともと花粉症で悩んでいたのだが、IS適性検査で初めてISに触れて以来その症状がでなくなったのだ。IS学園入学前に色々メデイカルチェックも受けたが、その症状は完全に医師に否定された。

何かで読んだが、花粉症はアレルギーの一種で、アレルギーは免疫の異常らしい。つまり無害な花粉を危険と勘違いした免疫が、体外に排出しようとしてやたらクシャミや鼻水が出る訳だ。

もしISの生体機能補助が免疫機能も治療できるなら、ISに触れたことで治ったという可能性が高い。というか他に突然治った理由が思いあたらない。

「えー……えつ？ ちょよ、ちょつと待ってください」

俺の質問に驚いた山田先生は急に織斑先生を見た。

……やっぱり余りに飛躍しすぎてたかな？ 頭がおかしいと思われたんだろうか？

「音羽、その話をどこで聞いた？」

予想に反して織斑先生の声は静かなものだった。

「え？ いや、何となくそう思ってただけで——」

「お前が今聞いたのは、IS委員会でも最近議題に上がり始めたばかりの事だ。IS関係者でも操縦経験がかなり長い者しか知らん」

山田先生は勉強熱心だから私から聞いているが、と結んだ。

「それはつまり、長い間ISに乗ってた人が最近になって気づいたって事ですか？」

織斑先生はうなずくと、どうしてそれに気がついたのかと、俺の目

を真正面から見ても尋ねた。どうにもこれは苦手だ。大概の犯罪者はこれだけで自白してしまうだろう。

俺はIS適性検査でISに触れてから花粉症が治ったことをかいつまんで話した。それを聞いた織斑先生と山田先生は教卓から離れて小声で話し合っていたが、やがて俺に向き直ると、もしかするとIS委員会の会議に何らかの形で出席してもらうかもしれないと告げた。

何か自分の知らない所で、またぞろ口くでもない話がまとまるのではないか。そんな気がしてならなかった。

授業が終わると、一夏が俺の席に来る前にさらに離れた席から女子たちが集まってきた。

「さっきのなに？ ひよつとしてISが治療機器になるってこと？

私のクワイアレルギーも治るの？」

しらんよ。

「あたし聞いたことある！ ISの生体機能補助を応用すれば、老化防止や若返りも可能になるかもって！」

マジか？

「えー？ じゃIS委員会で話し合ってるって、もしかして自分らが若返るため!?!」

ありえる話に思えてきた。

「IS委員会ってババアばかりなんでしょ？ 自分たちの若返りのためにIS利用するとかずるくない!?!」

どうせ利権の奪い合いの老害グループだろうしな。

「まあ、俺以外のみんなもIS委員会の動向は要チェックだな」

俺が強引にまとめてこの話を終わらせようとすると、思わぬ反応が返ってきた。

「ていうか、音羽くんどうやったわけ？ ちよつとしかIS触つてないってホント!?!」

「適性検査と入学試験の時だけだぞ」

「ゼツタイ変！ なにかあるんでしょ？ 私たちにも教えてよ！」

「ええ……んな事言われてもわかんねえよ」

「お願い！ どうやったたらそんな機能使えるの？ 私たちにも教えて
！」

「もう織斑先生に聞けよ」

普通に男子同士でダベるのがこんなに恋しいなんて。一夏の気持
ちが俺にもようやく分かった。

大いなる助走

「何かという和三治、三治と！ 貴様私とそいつとどっちを頼りにするんだ!？」

これから大変だという時にも一夏は痴話喧嘩を欠かさない。

最後の授業が終わると、オルコットは俺たちにせいぜい悪あがきなさいなど自信たっぷり教室を出て行った。俺はひとまず今後のことを帰りがてら話し合おうという事で一夏と意見の一致をみたのだが、そこへ篠ノ之さんが一夏の剣の腕を見ると言い剣道場に連れて行くこうとして断られたのだ。

それで先の発言になる。

「じゃあ一緒に来ないか？ つきあいの古い篠ノ之さんなら、一夏の事を客観的によく知ってそうだし」

面倒くさいので、もう一夏の腕試し（というより一夏と過ごす時間か）も一緒に済ましてもらおう事にした。

「うむう、ま、まあ仕方ないな音羽の頼みだしな！」

急に態度を豹変させた篠ノ之さんだが、もはやクラスの誰も驚かない。たった二日で篠ノ之さんが一夏を好きだが素直になれないのは当事者以外全員に広まっているようだ。

そこに本音、鷹月さん、谷本さんの三人が寄ってきた。

「ねーねー、これからどうするの?」

「オルコットさんってあれでもIS無しでライフルで2キロ先の標的の真ん中を撃ち抜くらしいよ？ ほんとに大丈夫?」

「そうだよ、それに二人ともISに関して付け焼刃でしょ?」

正直どうしようもねえな。

「まあ、夜は織斑先生が一夏をISで鍛えてくれるし。それまではオルコットのISと戦術の研究、それに篠ノ之さんに頼んで一夏の鍛錬かな」

思いつく限りできそうな事を並べてみた。谷本さんの言う通り俺たちは付け焼刃で基礎もかなり危うい。それどころかIS操縦経験が極端に少ない。比べてオルコットは経験、知識、技術、どれをとつ

ても圧倒的に上だ。どうやったら勝てるんだ？ 某プロボクサーみたいに判定勝ちとかか？

出来レース臭いんじゃないかって、出来レースそのものなんだな。その上考え無しの一夏が勝負すると言うんだから、もうこれは馬鹿が意地になっただけの子供のケンカかな？

考えすぎると悪い方にしか向かわないな。俺は早く外の空気を吸いたくて廊下に出ようとした。

「情報だけなら手伝えるかもよ〜」

本音の声に思わず足を止めた。

「どういう事だ？」

「にしし、布仏さんはなんとIS学園生徒会の書記なのだ！」

「そっか、そのうち邪魔するよ」

「ま、まっつてー！ IS学園生徒会には強い権限があつて、代表候補生の情報もある程度集められるんだよー！」

俺は思わず振り向いた。本音の言うことが本当なら、公開されている限定的な情報をネットや図書館で苦労して集める手間が省ける。

「そいつは本当か？」

本音はもちろん！ と元気よく答えた。

「えっへん！ 今なら経験豊富なロシア国家代表のアドバイスもついてくる！」

「……？ 誰だそんな物好きは？」

「それは、行ってからのお楽しみ〜」

どこかうさん臭い話だが、本音が嘘をついてるようには見えないし、何よりずいぶん助かる話だった。特に俺が。

ただ代価に何を要求されるかだ。おかしな事を言い出したら断るか。どうせ頑張っても互角に持ち込むのさえ難しい勝負だ。無理して変な要求を呑むことはない。

「面白そうだな！ 行ってみようぜ三治」

「お、おい一夏！ 道場の方はどうするのだ？」

一夏も乗り気だな。篠ノ之さんは不満そうだがなだめればどうにかなるか。

「分かった。本音の話に乗ってみよう。篠ノ之さんもいずれISに乗るんだし、一夏も行くからせつかくだし一緒に話だけでも聞いたらどうかな？」

「むう……」

篠ノ之さんはやはり不服そうだが一夏が行くと聞いてついて行きたいようだ。

「決まりくじやあついで来て」

案内する本音を先頭に、俺たちは予定を変更して生徒会室へ向かう事になった。

「ここだよー」

本音は『生徒会室』と表示された掛札のある部屋のドアを開けた。

「連れてきましたー」

本音に続いて中に入ると、髪をまとめ眼鏡をした真面目そうな女子と、ベスト風に改造した制服に黄色いネクタイを締め青い髪をした、くだけた感じの女子の二人がいた。

「来たわねえ。今話題の男子二人！ 私が生徒会長の更識楯無よ、よろしくね」

青い髪の方が自己紹介した。朗らかだがどこか隙の無い態度で、笑顔のままこちらを探るような視線を向けてくる。

「布仏うっほ虚うっほです。会計を担当しています。あなたが音羽くんですか？

妹がお世話になってます」

もう一人は大人しく物静かな印象で、本音の姉だと名乗ったのには驚いた。何とも対照的な姉妹だ。……いや、一夏と織斑先生だってそうだし、よく考えたら俺もか。世の中の兄弟姉妹はそんなものかも知れない。

「どうも始めまして、音羽三治です。こっちが織斑、それに篠ノ之さんです」

二人もそれぞれ自己紹介し、虚さんにすすめられイスに座って向かい合うと、会長が興味深そうに俺たちを眺め回した。じっくり観察されて一夏はどうにも居心地が悪そうだ。

最後に会長の視線は俺に固定された。

「ふうーん」

「何か？」

会長は意味ありげに笑った。

「いえ、あの織斑先生と一対一で何度もやり合って、ほとんど折れさせたんでしょ？　どんな子かと思っただけだ」

「そいつはがっかりさせてすいませんね」

ISで模擬戦したわけじゃなし、期待し過ぎというもんだ。

「それでもないわよ？　それで質問なんだけど」

「答えられる事なら」

「本音ちゃんとはどこまでいったの？　お姉さんに教えなさい！　ね？　どうなの!?　本音ちゃんに聞いてもナシのつぶてなのよ！」

俺はガクツと来た。恋バナしたいだけかあんだ!?

「もーお嬢さま！　そんなんじゃないっていつてるのにく！」

本音の抗議もどこ吹く風、会長の勢いは止まらない。

「いいじゃないのちよつとくらい！　あ、さつき虚ちゃんの方見てたわよね？　そっちの方がタイプなの!?!」

女子ってやつはどうしてこう、何でも恋愛に結び付けたがるのか？

そりゃ、まあ……本音の事は、まあ……。

でも本音にはつきり否定されるとそれはそれでダメージでかいなあ。

「さつき虚先輩を見たのは、本音と全く対照的な姉だなど思ったからですよ。俺も妹がいますが、俺と違って社交的で勉強も出来て、親をガツカリさせた俺とはえらい違いですよ」

急に会長の表情が曇ったように見えた。

「そう……そうね。兄弟や姉妹が対照的って、あるかもね」

さつきまでの会長の油断の無さそうな雰囲気、急に寂しそうなものに変わった。

「さあ、それじゃそろそろ本題に入りましょうか！　同じクラスのオロコットさんとISで模擬戦するんでしょ？　彼女の模擬戦記録とISの基礎情報は揃ってるわよ？」

一瞬で寂しさを振り払った会長は急に話題を変えた。

「ほんとですか!? やったな三治! これでだいぶ有利だぞ!」

一夏は大喜びだ。しかし俺は少々不安だった。さっきの会長の変化も少し気になるが、それ以上に情報と交換で何を要求されるかわからなかったからだ。

「でもね、タダって訳にもいかないのよね」

会長は値踏みするように俺たちを見回しつつ言った。

「とりあえず持ち合わせが無いんでタダでお願いします」

俺は即座に言葉を被せるように答えた。

「そうね、ってそんな訳無いでしょ!」

「気にしないでいいですよ、一夏なんてここでの会話も明日には忘れてますから」

「そうなの!? だからそうじゃなくて何言ってるの気にするわよ!」

ノリもテンポもいい人だ。さすがに只者じゃない。そういう問題でもないが。

「会長がくたびれる前に真面目に聞きましようか。何が欲しいんです?」

「最初からそうしなさいよ! もう」

「すみません。最近人間関係に疲れて言葉がぞんざいになってるんです」

会長はやれやれとため息をつき、俺たちに向き直った。虚先輩は訳が分からず目を白黒させ、本音は口元を押さえて声を殺しながら笑っている。俺の横にいる一夏は訳が分からずボケたような顔で、篠ノ之さんは呆れて眉をしかめた。

「まず持ち合わせが無いなんて嘘よね? 政府から特別会計で結構な

金額もらってるでしょう?」

「要求は金か」

「人を誘拐犯みたい言わないでよ! それでもいいけど、今は違うの!」
「では?」

会長は俺のポケット辺りを目線で示した。

「オルコットさんとのやりとりの録音、まだよそこに漏らしてないみたいね?」

「今のところはね」

俺はスマホを取り出し、生徒会役員と俺、一夏、篠ノ之さんで向かい合ったテーブルの上に置いた。実際他にたいしたデータなんて入ってない。

「確認していいかしら？」

会長は不敵な笑みで片手を差し出した。

「会長!？」

「音羽っ、こいつは信用できるのか!? 布仏! 私たちははめられたのではないだろうな!？」

一夏は驚き篠ノ之さんは激昂した。録音データが消えればオルコットの差別的で傲慢な態度ごうまんが続くと思っっているのだろう。俺も模擬戦結果がどうなろうとオルコットは謝罪させられることを言っていない。態度からしてオルコット自身も知らされていないらしい。

「今のやりとりも録音中ですよ」

俺はスマホを人差し指で叩いた。

「あははっ。面白いねキミー!」

会長はどこか楽しそうだった。

「こいつのカメラわりと高性能なんですよ。会長の鼻のアップも撮っておきますね」

「ちよ、やめてよ!？」

「面白いでしょ?」

まったくもう、と会長は少し怒った顔で再び俺を見つめた。

「それで、見せてくれる？」

……この人がオルコットやイギリスの息がかかった人物でないという保証はない。とはいえここで見せなければ話は進まない。さて、どうすべきか。

わかんねーよ。

凡人のガキである俺に相手の真意を見抜く能力などない。仕方ないので会長の顔を見返してみたが、腹の内などかけらも見せない様子だ。

俺は触れたスマホをテーブルの向こうへ滑らせた。

「バックアップあるからいいや」

会長は呆れつつもスマホをキャッチし、録音データを見つけ再生した。

「確かに。それでバックアップはどこにあるの？」

「ハツタリですよ」

俺はさらつと答えた。一夏と篠ノ之さんが抗議の声を上げる中、会長はしばらく俺の目をじっと見ていたが何も言わず、虚先輩に目で合図してUSBメモリを出させると、一夏の方に放って寄越した。

「オルコットさんの模擬戦映像と専用機ブルー・ティアーズの開示データが入っています」

虚先輩が抑揚のない声で説明した。

一夏が慌ててキャッチするのを確認すると、会長は俺にスマホを滑らせて返した。

「ねえ音羽くん。キミ、私を信じて渡したの？」

「いいえ」

「じゃあ、なぜ？」

俺はチラツと本音の方を見て、それから会長に向き直った。

「会長が面白い人だからですよ。あ、髪の色的事じゃないです」

「これは地毛よ!! それで、面白い人なら渡していいの？」

「面白い人はケチでつまらない事はしませんよ。他の誰かにやらせりゃいい」

もちろん何の確証もないただの屁理屈だ。だが本当にオルコットやイギリスと繋がっている人間なら、もつと簡単にスマホぐらい奪えただはずだ。俺は護身術の心得もなければ専用ISもない。本気で奪おうとすれば一瞬だろう。こんな手の込んだことをする必要はない。

「……本気でそう思う？」

俺は笑った。

「もし本当に誰かに頼まれて録音データをもみ消そうとしたんなら、会長はセコくてケチ臭い仕事を請負うつまらない青いのです」

会長はイスを蹴飛ばして立ち上がった。

「青いのはやめてよ! もう。分かったわよ」

会長はムツとした顔で答えたが、やれやれと頭を振って座った。

「でもね、君たち三人とも見落としてるといっつか、勘違いしている事があるの。最初に本音ちゃんに言われなかった？ 『ロシア国家代表がアドバイスしてくれる』って。それ私なのよね」

驚いた。まさかとは思ったが、会長はこの若さでG8の一角の国家代表なのだ。

「音羽くん、オルコットさんのこと織斑先生から『外部に漏らすな』って言われたでしょう？ 私がこの情報を揉み消すんじゃなくロシアや他の国に売ったらどうなるかしら？」

ぐうの音も出ないとはこの事だ。完全な俺の落ち度で、今度こそ自分が初代ブリュンヒルデの鉄拳を食らっても文句は言えない。

一夏と篠ノ之さんもギクリとした表情だ。

「織斑くんと篠ノ之さんもね。今のは音羽くんの問題だけれど、本人が悪いとはいえ個人の将来を左右するような情報を安易に他人に渡すものではないわ。例え必要だとしてもね」

まあ私は生徒全体を守る生徒会長の立場だから外部に漏らすことは無いけど、次からは本当に気をつけてね。会長は俺たち三人の顔を見てそう言った。

「試すような真似をして御免なさいね。一応生徒会としても君たちの人となりを確認しておきたかったの」

会長の言葉に面食らっていた一夏と篠ノ之さんはようやく落ち着き、納得の顔を見せた。

一方で俺は自分の考え無しがこんなに恥ずかしい事もない。オルコットの奴も好きにはなれないが、危うくあいつに対して取り返しのつかない事をする所だった。

「俺も自分の判断で勝手な事をして済みませんでした。一夏と篠ノ之さんも巻き込んで申し訳ない」

反省する事しきりだ。まったく、暴力担任より会長の方がよっぽどためになる。

「……でも、私は最初織斑くんに興味津々だったんだけど、話してみるとキミも案外面白いね」

会長は俺を見て興味深そうに言った。

「そいつはどうも」

俺は肩をすくめた。

「皮肉じゃないわよ？　こんなにキミと話すとは思ってなかったんだから。さて」

今度は会長は一夏に向き直ると、また不敵な表情に戻った。

「織斑くん……ISで強くなりたい？」

一夏も真剣な顔で頷いた。

「はい！」

「それはなぜ？　単にオルコットさんに勝つためだけ？　それとも他に目標があるの？」

「それは……」

一夏は少し逡巡する素振りを見せ、俺と篠ノ之さんを交互に見てから答えた。

「大事な人を守るようになりたいんです！」

いい事を言っているのに、俺は一夏が珍しくちゃんとした事を言ったなと思ってしまった。どうも最近色々ありすぎて素直さを無くしているようだ。

「そう……」

会長は頷くと、微笑みつつ立ち上がった。

「じゃあ、行きましようか！」

全員が驚いて会長を見つめた。

「一体どこへ？」

「決まってるでしょ、アリーナよ。ISのコツを教えてもらえるって聞いて来たんでしょ？」

「え？　でも」

「口で言うより実際にやった方が早く身に付くでしょ？」

ホラ早く、と戸惑う俺たちを急かしてさっさと生徒会室から出ると、会長は後ろから声がかけられるのを無視してドアを閉めてしまった。

「時間は限られてるんだから急いで行くわよ。使用許可なら心配しな

いで、生徒会長権限でどうにかするから」

急いでアリーナに向かおうとすると、背後で生徒会室のドアが開いて虚先輩が叫んできた。

「お嬢さまー！ まだ決済の済んでない書類がたくさん御座います！

お嬢さまーっ!!」

「会長、あれは放っておいていいんですか？」

篠ノ之さんが至極もつともな指摘をした。どうやら会長は生徒会の仕事をほっぽってきたらしい。さてはサボりたかったな。さつきちよつと尊敬しかけたのに。

俺は会長の顔をのぞきこんだ。

「お嬢さまく俺たちは生徒会の事には責任持ちませんよ？」

会長は俺の言葉にも飄々ひょうひょうとしていた。

「怒らないですよ『おとーさん』♪」

ゲツ。このあだ名は本音以外に言われるのキツいな！

「んふふ。この場をしのいでくれたらもう言わないであげる」

すっかり人の弱み握ってやがる。食えない『青いの』だわ。

「そんな顔しないの。私の事はたっちゃんていいわよ、音羽くん？

もちろん織斑くんもね」

「……わかったよとつつあん」

「銭型警部じゃない！ たっちゃん!!」

ちらりと後ろを振り返ると、本音が虚先輩に捕まっていた。手足をバタバタさせている。

「おねーちゃん私もいきたーい」

「駄目、お嬢さまがいらないんだから猫の手も借りたの！」

気の毒だが本音には生徒会書記として頑張ってもらおう。これも一夏の訓練の為だ。

廊下の角を曲がって生徒会室が見えなくなると、とつつあん先輩が俺に尋ねた。

「ねえ、まさか織斑先生の時もさつきみたいに煙に巻いてごまかしたんじゃないでしょうね？」

俺は神妙な顔で答えた。

「そのままかですよ。しりとりで勝ったんで一夏は殴られずに済みました」

「うそっ!？」

「ウソに決まってるじゃないですか。では俺はこれで一旦失礼します」

一夏がびっくりして俺を見た。

「なんで一緒に来ないんだよ!？」

俺は右手のUSBメモリを見せた。

「オルコットとブルー・ティアーズのデータを見てみないと、寮に戻るから、訓練が済んだらメールしてくれ。食堂で落ち合おう」

そうやって途中で分かると、うらめしそうな顔の一夏を尻目に寮へ戻った。

「しまった! 散髪……あーあ、もう今日は遅いか」

今からヘアカットの店を探して予約無しで飛び込んで、店から出た頃には一夏達から連絡がありそうだ。仕方なく俺は髪の毛の事は忘れて寮の自分用に割り当てられたPCを起動した。借りたUSBメモリのデータを一応PCにコピーし、中身を確認してみた。両手に余る数の動画ファイルと文書ファイルが一つだ。

「動画データは全部模擬戦か、そこそこ長いし全部見てたらだいぶ時間かかるなあ」

文書データを見ると、あまり量がないので印刷してしまう事にした。寮のプリンターは印刷にホチキス止めまでしてくれる。実際開示されるデータには限度があるし、細かいことはどうせ俺や一夏には理解できないだろう。

その後は模擬戦の映像を見始めたが、どれも文書データにあった大型レーザーライフルと、ドローンのようなISについて動くBT兵器というやつで戦うものばかりだった。強いのは正確な射撃で相手を寄せ付けないのと、6つのBT兵器で圧倒しているかららしい。それ以上は動きが早くて目が追いつかないし、大して知識もない俺には分からない。

「何か弱点ないのかよ?」

さらに幾つか模擬戦映像を見てみた。今まで見たのと同じく、相手にレーザーライフルとBT兵器のレーザーとミサイルを食らわせて倒している。

「あれ？ ひよつとして飛び道具とBT以外に武器がないのか？」

あるにしても、全然使う場面が見つからない。オルコットは強いから、接近戦に持ち込まれる隙を見せないからか？ でも互角程度の相手がいてもいいような……まてよ。

俺はいくつか前の映像をもう一度再生してみた。対戦相手が何度かレーザーをかわしてジグザグにオルコットへと進む。進むと言ってもヘリや飛行機じゃ考えられない機敏さと速度だ。そして目測で5mを切る辺りまでオルコットに近づいた瞬間。

「やつぱり！ 他の武器を出さねえ」

オルコットは急ぎ距離をとり、BT兵器のミサイルで相手を倒した。

「剣とか槍とか、つばぜり合いで役に立つ武器が無い！ あったとしても実戦で使えないか、使い慣れないからイザという時に頼りにはできまい！」

これでとりあえずの方針は漠然と見えてきた。とにかくレーザーとBTをかわして接近するしかない。

俺は大きく伸びをした。オルコットの暴言から始まって、一夏の味噌汁、決闘宣言でもめて生徒会室。よくもまあ一日でこれだけトラブルに遭うもんだ。あれ？

「半分以上発端は一夏なんじゃねえか？」

今日の出来事を詳しく振り返ろうとして、やめた。

「もういいや、どうせ疲れるだけだ」

今後俺に関係ない事は放っておこうと決めた。

夕陽に染まる部屋で映像を見て気がついたことをノートにまとめ、印刷した内容を見直していると、スマホが鳴り始めた。一夏からの着信で、疲れた声で寮でシャワーを浴びてからメシにしようぜと言って切れた。

夕食の後にはオルコット対策について二人で話し、さらに一夏に参

考書で授業に出たポイントを超特急で暗記させなければならぬ。
なにしろ夜9時にはISをまとった織斑先生が今や遅しと待ち構え
ているだろうから。

こんなあわただしい日はもう来ないで欲しいと切実に願った。

……というか一夏はこんな調子でもつのかな？ 最悪一夏が駄目
になったら、俺が模擬戦に出なければならぬのか？

さすがに無いよなー。……ないよなー？

真昼の決闘

怒涛の一週間は嵐のごとく過ぎていった。

初めて一夏が織斑先生にIS訓練と言う名の体罰を食らうのを見た夜は驚愕きょうがくの連続だった。一夏は夕食前に受けた会長のアドバイスが功を奏したらしく、基本的な動作や打鉄の装備の使い方をマスターしていた。いくら一夏がブリュンヒルデの弟にしてもわずか2時間足らずでこれは素晴らしい上達ではなからうか。

しかし織斑先生の『訓練』はえげつないものだった。いくら上達が早いとはいえまだまだ初心者の一夏をサッカーやバスケのボールのように扱ったのだ。それも比喩ひゆではなく本当に拳や蹴りで一夏が吹っ飛んでいくのだ。しかも、『貴様はヒヨツ子、何でも好きな武器を使うがいい。私は丸腰で充分だ』と言ってこれだ。俺は織斑先生の強さと容赦ようしやの無さに言葉を失った。青い顔の俺を『絶対防衛があるのに死ぬ訳があるまい』と笑っているのだからなおさらタチが悪い。ISを用いた目にも留まらぬスピードで行われるスパルタは深夜まで続き、付き合わされた俺も翌朝まで早朝ランニングなど考えられない程爆睡した。

さらに一夏の受難は続いた。多忙な会長は虚先輩に怒られてほとんど来られなくなり、困った時は本音に伝えればいいと言ってくれたのだが、とつくに予約が埋まっているアリーナと訓練機が使えない時間をどうすべきかと思つた所へ、待ってましたとばかりに篠ノ之さんが剣道部の道場へ連れ出し、それから毎日夕食の時間までしごき倒した。

もちろん夕食後はいくらか時間があつたが、いい加減少しでもIS座学を理解しなきゃこれ以上織斑先生を怒らせても止める気も自信もないと言うと、必死になつて俺が図書館から借りてきたIS基礎講座のDVDを観まくつた。

その後もISの訓練相手には事欠かなかつた。SHRかISの授業のたびに一夏は何かしらポ力をやってしまふし、短時間で参考書の内容をマスターするのも不可能なので、結局この一週間のうち平日は

残業の済んだ織斑先生がアリーナでISを装着して待ち受ける日々が続いたのだ。

その後、俺の提案で射撃兵装の得意な人に対オルコット訓練をしてみたいと言うと、現れた助っ人が山田先生だったのにも驚いた。元代表候補生で腕は確からしく、一夏は山田先生の狙撃を避けるのはかなり苦労していた。二度目からは俺もISスーツを着てくるような命ぜられ、打鉄をまもつてみたものの、入学試験の際へ々に動く転ぶ危険があるからと止められたのは伊達ではなく、言われるがままにおっかなびつくり歩いてみても、PIC等で浮かんでみても、危なっかしくて織斑先生にさえ心配される始末だった。どうにも俺はISとの相性が良くないらしい。山田先生も俺の訓練をしてくれたが、緊張が取れず「ひよつとして転倒するのでは？」と思うたびにギクシヤクして上手く行かなかった。

そんなわけで、每晚アリーナでは空中で超サイヤ人同士の闘いが繰り広げられ、地上では山田先生に手を引かれた俺がヨチヨチ歩きしているという奇景が繰り返された。様子を見に来た本音たちやつつあん先輩は最初あまりのシニールさに言葉を無くしていたが、織斑姉弟の肉體言語に飽きると、俺にやれもつとリラックスしろだの、イメージが大切だのとあれこれ好き勝手な事を言い出した。

もともと俺はISのようにパワードスーツ的なものを装着するのは照れ臭くて気が引けたし、人前でこれを身に着けて活動するのは恥ずかしくてたまらなかった。その上見知った連中にやいのやいの言われて、体はそれほど疲労していないのに精神的にどっぷり疲れてしまった。

しかしISを片付けた後体調だけはいやに良くなった。何だか体のしこりや血流が改善されたような感じがした。

その後も一夏は放課後を剣道とIS座学、IS訓練？に明け暮れた。結局日曜のみを貴重な休日として骨休めし、ISの事を忘れる時間にした。

そうして一夏の極端に体育会系な一週間は終わった。

「しかし無駄に露出が多いよな一夏のISスーツは。女子へのサービスか？」

「変なこと言うなよ！」

アリーナのカタパルト裏で待機するISスーツの一夏と、付き添いの俺たちは手持ち無沙汰で無駄口ばかりを叩いていた。

もう作戦らしいものはとづくに一夏も理解していた。無論アタマじゃなく体で織斑先生に叩き込まれたのだ。会長から得られたオルコットの情報で俺たちが考え付くことなんて、狙いにくい不規則な攻撃回避の連続と、移動先を読ませないややこしい軌道で近づき接近戦に持ち込むことぐらいだった。そもそも一夏は射撃が下手すぎて接近戦以外どうにもならないのだ。

「織斑先生に聞いても、一夏の専用機は『今の一夏にぴったりだから問題ない』と言うだけでよく分からんしな」

「千冬姉が言うんなら大丈夫さ。三治は少し心配性なんじゃないか？」

「あれだけ滅茶苦茶なシゴキを毎日のようにやられて、その言葉はどこから来るんだ？」

実際一夏の夜9時からの日課はまず織斑先生主演による数時間連続の空中乱舞で、なんで無事なのか不思議なくらい痛めつけられては「いてて」で済まして帰ってシャワーを浴びて寝るといものだった。俺からすれば理解不能の超速暴力からの素早い日常復帰というシニールギャグを毎晩見せられているようなものだ。

施す訓練ほじくが毎回そんな調子の脳筋教師がまともに頭を働かせているのか、俺は大いに疑問だった。壁に目をやると巨大な画面にISを装着したオルコットがアップになっている。注目を浴びて得意になっているのが見て取れた。

「ブルー・ティアーズか……」

英国淑女ご自慢の愛機だ。あれ一機でステルス戦闘機何機分の値段だったか、とにかくISというやつはえらく値が張るシロモノにして、あらゆる現行兵器を単機で相手にできる、ある意味究極の万能兵器だ。

あんなものをヒョイと渡されれば、相当の人格者でないかぎり調子に乗るだろうな。

「心配すんなって！ バッチリ勝ってきてやるからさ」

一夏が俺の肩を叩いた。織斑先生じきじきの虐た……特訓を受けてきたからだろう、一夏の自信はかなりのものだった。それを見ている篠ノ之さんは自分に話を振ってくれないからかずっと不機嫌だ。

「がんばれおりむー」

「おうー」

本音の応援にも笑顔で答える。そろそろ幼馴染のことも思い出してやれよ。

「ふんっ！ 負けて戻ったら許さんからな」

「わーってるって、任せとけよ！」

ようやくの想い人の言葉に、絵に描いたようなツンデレさんは若干顔を赤くしたようだ。

「と、当然だ！ 私が鍛えたんだからな。篠ノ之流の名を汚すことは許さん！」

そうこうしている内に山田先生がモニター室からのアナウンスで、一夏の専用機が到着した事を告げた。

現れたIS『白式』は全体的にどこかくすんだ色をしていた。一夏が乗り込むと自動的に装着され、すぐに発進態勢が整えられた。山田先生と織斑先生から二、三の注意事項が終わると、一夏は俺たちに顔を向けた。

「行ってくるぜ三治！ 箒とのほほんさんも」

篠ノ之さんはついぞか。まあ今はそんなことはいい。

「ああ、油断するなよ」

「よ、よし。勝ってこい」

「がんばってねー」

一夏は実に爽やかな笑顔でうなずき、カタパルトに乗ってジェット機のような速度でアリーナへと飛び出していった。

結論から言えば、驚くべき展開になった。まず一夏は特訓の始まっ

た一週間前とは比べ物にならないほどの高速でオルコットとの距離を詰めようと動き、慌てたオルコットのレーザーとBT兵器のミサイルにダメージを食らって、スパイラルや折れ線グラフを描くような動きでの連続回避に追い込まれた。

が、オルコットがまともに戦えたのはそこまでだった。突然くすんだ灰色が名前通りの『白』に変わり姿形も変化した一夏の白式はファーストシフトを終えたらしく、急激に機動性能を上げてオルコットをあつという間に追い詰めてしまった。いつのまにやらBTが自律兵器ではない事をあつさり見破り、距離をとろうとするオルコットの狙撃やミサイルをステップを踏むような軽やかな動きでかわして、手のブレードを变形させライトセーバーに似た光の刃でブルー・ティアーズを袈裟斬りにした。

《試合終了！ 勝者織斑一夏》

間の抜けたファンファーレの後に勝利宣言がなされ、ずいぶんあつさりとした決着に、えっこれで終わり？ という顔で観戦者はみな目が点になった。

それから一呼吸遅れてアリーナは歓声に包まれた。無理もない、傍から見れば完全な正義と悪との正面对決で、正義の側が勝ったのだから。

本音も篠ノ之さんも大喜びだし、もちろん俺も嬉しくはあった。

しかし俺にとってはこれからが正念場だ。どう転んでもやるべき事があるというのは何もオルコットだけの問題ではなかった。

「それで？ 俺たちや何をもらえるんですかね？」

アリーナのカタパルト裏、モニター室から見下ろせる場所に、一夏、オルコット、織斑先生、山田先生、篠ノ之さん、本音、そして俺が集まっていた。

オルコットは自前のISよろしく青い顔で、一夏は珍しく引き締まった顔つき、織斑先生は眉をしかめ、山田先生はオロオロし、篠ノ之さんは何が起こるのか不安そうで、本音は心配するように俺を見上げた。

「わ、わたくし、は」

オルコットはまた倒れそうだ。当然だろう。ISと代表候補生の立場を取ってしまえばただの少女、しょせん力と立場におぼれた幼稚な愚か者でしかないし、勝負に負けてそれらを失うかもしれないとなれば到底精神が持たないだろう。

「音羽、もうよせ。充分だろう」

「一体何がですか？ 俺はオルコットに言ってるんじゃないやありません。織斑先生、あなたにです」

織斑先生の顔がさらに険しくなり、どういうことかと一夏や篠ノ之さん達は顔を見合わせている。

「あなたは自分たち教員と誰とも知れぬイギリスの奴らの身勝手に俺たちに決闘ゴツコを強要したあげく、勝敗に関係なく一方的に身勝手な結末を押し付けた。だが負けたならともかく勝ったのだから、こっちは要求を通す権利があります。文句があるなら他に俺たちが納得する見返りを用意するか、最初からこんな事させなきやよかつたんです」

一夏とオルコットが驚き、篠ノ之さんと山田先生はどうしていいかわからないといった様子だ。本音だけは口を閉じてじつと俺を見つめている。

腕を組み尊大な態度を崩さないまま、織斑先生はうんざりしたようにため息をついた。

「もういい、何が望みだ？」

「俺がどうして欲しいか一番分からなきやいけないのはあなたのはずだ。いくら何でもそれぐらい分かっていると思っただのは見込み違いだったようですね。織斑先生、あなたには失望しました」

「おい三治！ いったいどうしたんだよ!?!」

「そうだ音羽落ち着け！ どうしてここでそこまで言うんだ？」

今の自分の態度や言動が、明らかに生徒の立場を逸脱したものであることに自覚が無い訳ではなかったが、我慢ならなかった。

俺は周囲の自制を促す声が終わるのを待つて続けた。

「いいかみんなよく聞け。今度の事はな、自分の国や文化を馬鹿にさ

れた上に見て見ぬふりしてた教師が無理やり代表候補生相手に模擬戦しろと言う、訳分からんし筋も通らんトチ狂った話なんだ。大体オールドコットが最初から謝ってれば、誰も苦労も困りもせず、恥もかかず遺恨も残らないで済んだんだ。ところが、御免なさいで済む話をIS学園とイギリスの偉い奴が、勝手に決闘騒ぎにしてみました。自分たちの勝手な都合でだ。こんなアホらしい話があるか？俺たちや全員無駄な苦労して、人に迷惑をかけて、オールドコットは恥の上塗りだ。全部名も知らん他人の身勝手でだ！」

織斑先生はうつむき、山田先生は何も知らされていないなかったのか驚きの表情のまま固まった。

「で、でもとにかく決着はついただろ？」

一夏が遠慮がちに口を挟んだ。

「決着？そりゃIS模擬戦だけの話だ。今度の話はもう学園のあちこちで噂になってる。一夏やオールドコットのように人気者や代表候補生の前じゃ皆遠慮してるが、俺相手にはそんな遠慮はないからな。たびたびろくでもない声を聞いたぜ。『決闘なんて騒ぎを起こして、進学先に知れたらどうしてくれるの』とか『口喧嘩でISを持ち出すような事件が続いたら学園のイメージダウン』とかな」

途端に一夏が青くなった。オールドコットに至ってはもはや青い顔を通り越して白くなっている。

「こんな事を普通と思って流していたら、IS学園の全校生徒が大迷惑だ。教師や学園外の人間の勝手都合で自分たちの待遇や問題解決が決められるってだけじゃない。この騒ぎが世間に知れたらどうなると思う？この学園の生徒はつまらん理由ですぐISを使って問題を起こす連中だと世間に思われたら？後から入ってくる後輩たちや卒業した先輩たちは周りからどう見られる？そんなの責任取れるのか？」

視界にいるほとんどの者が下を向いて黙り込んだ。

俺も久方ぶりに大きく嘆息した。

「それより問題なのは織斑先生始め教員がそういった事をまるで考えてない点だ。本当に生徒について責任持つてるのか？俺には理解

できない」

「ちらりと織斑先生を見たが、腕組みを解いて下を向いたままで顔は見えなかった。」

「俺だって、あなたが全校生徒が受け入れられる落とし所を決めているのなら、ここまで言う必要なんて無かった。だが織斑先生、あなたは自分たち学園側と英国の連中の都合しか考えなかった。自分達だけが納得する解決を俺達に無理強いして、後は知らん振りだ。これが無責任や自分勝手じゃないなら何です？」

「……私のせいと……こんなことに」

「いつからかオルコットは泣いているようだった。」

「全く同じ事を俺たちが強要したとして、織斑先生は納得するんですか？　するわけがない」

「……それとこれとは話が別だ」

織斑先生は顔を上げたが、目をそらしたまま小さな声でそれだけ答えた

「ともかく、今度の模擬戦を決めた責任者にもクラスだけでなく全校生徒に謝罪してもらうのが俺の要求です。それがケジメというもんだ」

織斑先生がため息をついた。

「そんな事は私の一存では出来ない」

「ふざけるな！　筋も通せず責任も取れない事をなぜやらせた？　ましてなんで職員会議でそんな事を決めたんなんだ!？」

「思わず怒鳴りつけてしまった。織斑先生一人で決められる事ではないのは分かるが納得はいかなかった。周囲は静まりかえり、また織斑先生が少し萎れたようだった。」

「私の一存ではなく関係者多数の賛同を得た案だ。仕方なかった」

「自分たちの勝手都合で理不尽押し通して、しかもその自覚もない。あんたは一体俺たち1年1組の何だ!？」

「お、音羽くん！　もうそのくらいで」

「三治！　わかったからちよつと落ち着けて！」

山田先生と一夏が俺をなだめようと必死だが、俺は力なく立ち尽く

している織斑先生から目を離さなかった。

「私が勝手に今度の責任者たちを代表して謝る事はできません。……だが、私個人で至らなかつた事については謝る」

「ようやくこちらを向いた織斑先生は、普段よりもずいぶん小さく見えた。

「……臨時の職員会議も要請する。可決されるかは分からないが、教職員の間で事の深刻さを危機意識として共有し、出来る限りの対応をする」と約束する」

それだけ言い終える頃には、織斑先生もどうにか普段の調子をいくらか取り戻したようだった。

「……職員会議の結果は別として、学園の言いなりでオルコットの傍若無人を許したのも、その結果他の生徒がどう反応するか考えてもいなかった事も、それでオルコットがぶつ倒れる事になった責任も、それらの不始末を俺たち生徒だけに押し付けて自分たちは責任も取らずに済まそうとした事も、どこぞのバカ共のメンツの為にガキの喧嘩を決闘にしたてて俺たちに強要したのも、なによりこれらの事に何の責任も感じずにふんぞり返っていた事も、織斑先生がクラス全員に謝罪するというのなら……それだけは……納得はしないが理解はします」

俺は一呼吸おいて続けた。

「しかし、今度の事が外部に知られればIS学園やその関係者、生徒たちがどう言われるか、それだけは覚悟して下さい。俺たちではどうにも出来ないし、それで迷惑する連中にも謝る気はない。俺が自分の意志で関わった事じゃないからです」

「……わかった。それも職員会議で議題として取り上げる事を約束する」

俺と織斑先生を除く全員が、ようやく終わったと言いたげに大きく息を吐いた。張り詰めた空気が弛緩し、多くの者に安堵の表情が広がった。

「あ、あの！ クラスの皆さんに謝るならわ、私も。オルコットさんや音羽くんを止められなかつたのは私も同じですし」

山田先生も声を上げた。責任を感じたらしい。

「どうやらひとまず結論は出たみたいね」

急に離れた所から声をかけられて思わず振り返った。

「会長、どうしてここに？」

とつつあん会長が出入口に立っていた。右手の『師弟確執』と書かれた扇子をパタンと閉じる。

「本音ちゃんから聞いて気になったのよねえ。私の仕事はあくまで今度の問題を外部に漏らさせない事だったんだけど、勝敗に関わらず『音羽くんが何を言い出すか分からなくて心配』って聞いて、ね？」

そう言つて目線を本音の方にやり、見られた本音は垂らした袖であわてて顔を隠した。

「も、もーっ！ お嬢のばかりっ！ 言わないでつていったのにーっ！」

「まあ確かにちよつと言い過ぎだったし、止めに入るか迷ったけどね」

会長はニヤニヤして俺と本音を見比べていたが、ふと真剣な表情で俺を見た。

「それでオルコットさんの件、どうするの？」

俺は肩をすくめた。

「オルコット次第ですよ。本人がクラス全員に謝罪するなら遺恨を引きずる理由はありません」

俺と会長が見ると、オルコットは覚悟を決めた表情を見せた。

「許して頂けないかも知れませんが、出来る限りの謝罪をさせて頂くつもりです。それでももし取り返しのつかない時は——」

会長がそこで言葉を差し挟んだ。

「オルコットさん。退学するなんて言わないのよ？ 責任を感じるなら、ここIIS学園で精一杯できる事をすべきだわ」

「ですが！ 私は——」

「貴方は祖国に選ばれた人間なのよ？ 多くの希望者を落選させてまで代表候補生の地位を勝ち取り、専用機まで与えられた。その立場は簡単に投げ出して良いものなの？ 選ばれなかった人たちは、きつとあなたを許さないと思うわよ？」

「ては、どうしたら……模擬戦にも負けて、私はもう祖国の人々に会わせる顔が……」

「人間関係とISで失ったものは、同じく人間関係とISで取り戻すしかないわ。出来ないとは言わせないわよ。それともあなたは、実力でここに入学したのではないと言うの？」

「！ それは……」

「違うと言うのなら、出来るはずよね？」

会長はオルコットに歩み寄ると、その肩に手を置いた。

「あなたのIS学園でのこれからは茨いばらの道かもしれないけれど、それを取り越える義務と責任があなたにはあるわ。あなたが傷つけてしまった人たちに対しても、あなたに期待している人達に対しても、何よりあなた自身に対して」

「はい！」

「よし！ いい返事。それに、遺恨が流せるなら彼女と友達になることだって、できるはずよねえ？」

いきなりの会長の言葉に俺は面食らった。篠ノ之さんも同じようだが、一夏と本音は全く異存がない様子で驚いた。

「もちろん！ これからよろしくな」

「よろしくねーセッシー」

あつさりとまあ、あだ名までつけて。お前ら素直すぎるだろ。確かにオルコット本人が自分の非を自覚して謝る意志があるのなら、ネチネチ引きずるのも嫌だが、いきなり友達と言われてもなあ。

「ほら、キミは？」

なんとも複雑な気持ちで会長の顔を見たとき、ああそうか、この人は最初から最後まで俺たち生徒の事を最優先で考えていたんだと気づいた。たぶん、今度の事でも学園の都合や善悪の問題より、生徒一人ひとりが孤立せず上手くやっていくことを大事にして欲しかったのではないか。たとえ筋が通らなくても、生徒間で対立や隔たり、不健全な上下関係などが出来るぐらいなら、多少ルールを曲げてでも友人や健全なライバル関係であって欲しかったのだろう。

少なくとも俺は、そう信じる事にした。

「オルコット、こいつを見る」

俺は自分のスマホを取り出した。

「お前の誠意を見届けたら、一旦こいつはお前に預ける。どうしよう
とオルコットの自由だ。例の録音も簡単に見つかるだろう」

「!」

「お前次第だ、いいな」

それだけ言うとポケットに仕舞った。オルコットは黙って頭を下
げた。

「不器用ねえ。もつと素直になりなさいな」

とつつあんは扇子の先で俺の胸をつついた。

「男は不器用ぐらいでいいんです。ところで」

俺は出入口にあごをしゃくつた。

「あそこに何人かいるみたいですけど?」

俺の声が聞こえたのか、出入口向こうの廊下からガヤガヤ声が出
て、もろバレな隠れ方でこちらを覗いていた女子たちが出てきた。

「なんだ、大勢で来ている気配はしたが、クラス全員来ていたのか?」

いつもの調子に戻った織斑先生が呆れ顔になった。

「いつまで経っても教室に戻ってこないから、心配で見に来たんです」
谷本さんや相川さんに続いて出るわ出るわ、そろそろと1年1組全

員が姿を現した。一夏や篠ノ之さんは驚きを隠せず、山田先生はみん
な聞いてたんですかあ! と甲高い声を上げた。

「織斑先生の、音羽もうよせ、辺りから全部聞いちゃった」

鏡さんがばつの悪そうな顔をした。

「みんな来てたんだねー」

本音がのんきな声を出した。

てことは何か? 俺と織斑先生の攻防戦も全部聞かれてたって訳
か? うわあ……なんか死にたい。

そう思った所でクラスメートたちが一気に群がってきた。

「さっきの凄かったよねー音羽くん!」

「そうよね! もうIS無しなら向かう所敵なし! って感じよね
!!」

「そうそう！ もうIS全然ダメでも全く問題なし！！ ってゆるーか！」

ほめられてんのかディスプレイられてんのか分からないクラスメート達の声聞きながら、さっきのやり取りだけは録音した奴いませんようにと願った。

「ふっふーん！ 私はバツチリ録音済みよ！」

よりによってとつつあんがそう言って胸を張り、俺は全力でこの青いのを張り飛ばしたい衝動をこらえた。

「そういえばキミ、オルコットさんの会話を録音したのはSHRらしいけど、いつもその時間録音なんてしてるの？」

クラスへと戻る途中、会長が急に聞いてきた。この人は授業とか受けなくていいのか？

「まさか。ISの授業が難し過ぎるんで、復習用にスマホで録音しくようにしてるだけです。あの時は雲行きが怪しくなったんで、後で英大使館に嫌味の一つも言ってやろうと思って急ぎ録音したんですよ。でも肝心の所は半分くらいしか録音できなかった」

「ふうん、だから少し中途半端な内容しか入ってなかったのね。ところで……」

自分のクラスに戻らなくていいのか、会長は歩きながら日曜に散髪したばかりの俺の頭をじろじろ見た。

「何ですか？」

「その髪型あれでしょ！ わざわざコレ持ってきたんだから一度かけてみてよ！」

会長はどこからかレイバンのサングラスを取り出し俺に押し付けた。

「マツコか何かの番組で見たわ！ 西部警察でしょ!! 団長！」
「キャラ狙ってんじゃないやねえって言っとくべきでしたね」

これで髪が減ったら今度はタモリになるのか？ どこまでいってもしまらねえなあど胸の内つぶやいた。

戦士の休息

それぞれの対応は早かった。クラスに戻ってすぐ、オルコットと織斑先生、山田先生がクラスメート全員の前で頭を下げた。オルコットは謝罪の後半はほとんど泣き声でぐちゃぐちゃだったが、気持ちはクラス全員に伝わったようだった。

織斑先生と山田先生も、今回の事のあらましと己の至らなさをみんなに説明した上で謝り、生徒たちの不利益になることが無いよう出来る限りの措置を取ると約束した。

普段は言動が乱暴で腕力に頼りがちな織斑先生だが、この時ばかりは潔く自分の過ちを認める姿を見せ、そこだけは立派だと思った。山田先生は裏事情を何も知らなかったのだが、叱られた小学生のようにわんわん泣いて謝っていたのは少し気の毒だった。

これで本日の時間割も終了し、先生たちは急ぎ職員室へ歩いていった。クラスはいつもの放課後を取り戻し、俺は一夏や本音と一緒にオルコットの机に向かった。

「ほらよ、『授業録音』ってフォルダの中だ」

俺は自分のスマホを当人の机に押しやった。

「本当に、よろしいんですの?」

オルコットはまだ少し赤いままの目で俺を見つめた。

俺はなんとというか、言葉にし辛くて困った。

「……俺はお前の言葉を信じる。もしそれが間違った判断だってんなら、俺の目が節穴ってだけだ」

オルコットの顔を正面から見るのはどうにも照れ臭かった、こういう場面は苦手だ。あっさり素直になれる本音や一夏は大したものだと思う。

「あら、そんな言い方をされては、私もあなたに恥をかかせるわけには参りませんわね」

失礼、とスマホを取り上げると、優雅な手つきで指を滑らせ、件のデータを示して見せた。

「これですわね?」

「ああ、間違いない」

タッチ一つでデータは抹消された。これでオルコットは憂いが消え、俺としてもオルコットへのわだかまりの原因が消え去った。

「寛大なお心遣い、感謝いたしますわ」

オルコットがまともな笑顔を見せたのは、この時が初めてだった。

「ようし！ これで友達だ！」

「改めてよろしくねー」

「まあ、今後ともよろしく頼む」

一夏、本音、篠ノ之さんが声をかけ、俺は差し出されたスマホを受け取った。

「遺憾なし、だ。まあ、なんだ、よろしくな」

突然周囲から拍手が巻き起こった。周囲を見回すと、クラスメートのほとんどが全方位から俺たちを囲んでいた。みんなずっと事の成り行きを見守っていたらしい。

「おめでどう！ これでオルコットさんもほんとの意味でクラスの一員だね」

「よかったー！ お互いはじめはつけたんだし、いつまでも教室の中がギスギスしてるのはヤダもんねー」

「でも音羽くんも硬いよねー、最近素が出てきてるんだしもつと気楽にいこうよ」

「そうそう、あ、団長だったよね？ 団長！」

「団長！ あ、団長って何するの？ やっぱ戦うの？」

何で俺ばかり次から次へとあだ名がつくんだ……やっぱイジリやすいのか？ 一夏はイケメンだから茶化されないのか？

ちらりと見ると、オルコットはきよとんとしていた。元ネタを知らないだろうから当然か。一夏はわざわざスマホで何か検索していると思ったら、あ、これか！ と勝手に納得している。

「なんかずるいぞ三治！ おれも何かカツコイイあだ名が欲しい！」
知るか。

「おりむーでいいだろ、みんなで呼んでやるから」

「イヤだよ！ 箒かオルコット、もう少しマシなのないか？」

一夏の言葉を聞いて、オルコットがふと気づいたように立ち上がった。

「あらあら。そうそう呼び名ですけど、私を友人と思つて頂けるのなら、私のことはどうぞセシリアとお呼び下さいな」

他人行儀に思えたオルコット、いやセシリアの笑顔が少し人懐っこそうに見えた。

「俺も三治でいい。よろしくなセシリア」

「はい、三治さん。それと……その、一夏さん」

セシリアの一夏を見る目が少し熱を帯びているようだ。ははあ……これは惚れたな。名前で呼んでくれと言つたのも、一夏を自然に名前で呼ぶ為か。策士だな。

見れば、一夏とセシリアがもう親しげな会話をしている。篠ノ之さんは一時とはいえ蚊帳の外が御気に召さないらしくおかんむりだ。本音は篠ノ之さんとセシリアを見上げてきよろきよろしている。

とうとう篠ノ之さんにも、本格的にライバル登場だ。最初から一夏に優しくしてりや良かったのに。

「あーセシリア！ 私も名前で構わないからな!!」

篠ノ之さん、じゃなくて箒が大人げなく大声を出した。驚いて振り返つた一夏を挟んで新旧ヒロイン候補がバチバチと音が聞こえそうなほど激しい視線をぶつけ合う。それに気づいた女子たちがそれぞれ仲良しグループで三角関係についての活発な議論を開始した。

クラスに修羅場の季節がやってきた。そもそも女の園に一夏を放り込んで、箒のライバルが現れない方がおかしかつたのだ。

「なんだ二人とも？ どうしたんだよ？」

鈍感の星の王子様は相変わらずだ。この先の事を考えると、織斑先生のゲンコツなんて悩みの内に入らないだろうな。悪い事ばかり当たる俺の勘は強く警告を発していた。

ふと、ぐいぐい腕を下から引つ張られているのに気がついた。

「ねーねー、結局クラス代表はおりむーでいいの？ それともおとーさん？」

ハツとした。そうだ、決闘そのものとその影響ばかり気にしていた

が、そもそもがクラス代表決定が発端だった！

「そうだよ！ 結局誰がなるの!? やっぱり織斑くん?」

「だよねー! 模擬戦で勝ったのは織斑くんだもん! あ、でもその騒ぎの尻拭いしりぬぐをしたのは音羽くんか」

「でも結局I Sで勝ったのは織斑くんでしょ? あれ? でも織斑先生ってブリコンヒルデだよ? 世界最強をやり込めたんだから、音羽くんかな?」

セシリアとの和解が一夏を奪い合う女同士の宣戦布告に変わり、そこにクラス代表を巡る姦しい論争が加わった所で、俺はさつさと帰ることにした。どうせクラスメートのほとんどが一夏を推すだろうから、必要のない喧騒にはお別れだ。

ただ、保険は掛けなきゃならない。

「クラス代表は一夏に決定だ! クラス最高の実力を証明したし、専用機もある。なによりそうしなけりや担任である織斑先生の顔が立たんからな!!」

叫ぶように一方的に宣言すると、俺はカバンを持って廊下に出た。シーンとなったクラスはすぐに大騒ぎになった。クラス代表就任を祝う声や一夏に感想を求める声が入り乱れて1年1組の教室は揺れに揺れ、あまりの喧騒に顔をしかめて教室を見やると、もみくちゃにされながら何事かを叫んでいる一夏が人波の隙間からチラチラ見えた。

「おおーい!? 待ってくれよ三治い!! いきなり決めるなよ!? 置いて行かないでくれえ!!」

俺は聞こえない振りをして階段へ向かった。踊り場まで来たとき、軽い足音がハイペースで近づいてきた。

「待ってよ〜」

走ってきた本音が追いつき、カバンと反対の腕に飛びついた。

「一緒に帰ろうよ」

俺を追いかけてきたのか。生徒会室での事を少し思い出す。俺より一夏のごときは気にならないのかな……。。

「いいのか?」

「いーの。今日は生徒会お休みだし、おりむーがクラス代表になったお祝いは明日の放課後だから！」

「そっか」

答えは聞きたい事と違ったが、むしろそれでホッとしていた。

肩を並べて、というには身長差があつたが、二人並んで校舎を出ると、光学的に表示された標識が指す学生寮の方へ歩く。本音のペースに合わせるので、いつもよりゆったりとした下校になった。

への字を二つ繋いだようなカモメが何羽か群れをつくって飛んでいく。オレンジ色が被さつてゆく景色をゆつくり見ながら歩くのは久し振りだった。入学して次の日からセシリアとの模擬戦や一夏の座学に忙しくて、風景なんかどうでもいいという日々が一週間も続いたからだ。

本音がくんくんと匂いを嗅ぐしぐさをした。

「どうした、スイーツの匂いでもするの？」

「むう、ちがうもん、潮の匂いがするの」

言われてみればIS学園のあるここは人工島だ。内陸部でも風が少し潮の香りを運んでくる。

「どれどれ」

鼻から強く息を吸い込んで嗅いでみた。本音の言うように、かすかにしよっぱい匂いがした。

「ほんとだ」

「でしよ〜？」

えへへーと笑う本音を見ると、何だかIS学園に入学してから今日までの嫌な事やウンザリした事が全て些細ささいなものに思えてきた。

不思議と落ち着く相手だ。一緒にいるのが自然みたいだ。

ゆつくり歩いたつもりだったが、気づいたときにはもう寮の前まで来ていた。玄関近くの自販機が見える。

「あつ、新しいのが出てるー」

さっそく本音が近づいていって、届かない高さにある新商品の見本を見ようとピョンピョン跳ねた。

「おごってやるから好きなの言えよ」

「ほんと!? わーい!」

大喜びの本音を見ていると自然と苦笑いになった。これじゃほんとに「おとーさん」だな。

「おとーさんありがとー!」

パイナップルとキウイのミックスらしい炭酸ジュースをごくごく飲んでいる本音はご満悦だ。まあこんな時間がたまにあるなら、トラブル過多のIS学園生活もそう悪くはないか。

不意に本音がジュースの飲み口を差し出してきた。

「一口あげるね〜」

この学園に来て一番心臓が跳ねた瞬間かもしれない。慌てるな、たかがその、あれだ、なんだっけ?

「おっおう、ただだ……きまず」

「ぐくりと一口だけ——」

「三治! 置いていくなんてひどいぞ!!」

いきなりの怒鳴り声に思わず嘔き出しそうになった。あわてて無理やり飲み込む。味も何もあつたもんじやない!

「なんだよ!」

声の方を向くと、一夏が少し怒った様子でこちらに向かってきた。後ろのセシリアと箒は表情からしてどうにも機嫌が宜しくない。

「一夏! 道場はどうした!? 今日さぼる気じゃあるまいな!」

「一夏さん! お二人の邪魔をするべきではありませんわ。ここは私と夕陽を眺めながらティータイムを一緒に過ごしませんこと?」

どうやら通勤ラッシュのごとき混雑からようやく脱出に成功したらしい。後ろの二人は放課後の一夏を独占しようと必死だ。

ずかずかとやってきた一夏は俺の手を取ってぐいぐい引つ張りながら寮へ入っていく。

「またねーおとーさんとおりむー」

いつの間にか取り戻したジュースを飲み干した本音が手、とか袖を振っている。

「あつ、うんまたな」

「おうまたな!」

放課後の一夏独占権を巡って剣道少女と英国貴族が争っている隙に、俺の手を放さず部屋に向かう一夏に俺は抗議した。あのタイミンで来るか普通？

「急に何だ？ さつきまで両手に花だったじゃないかよ」

一夏はどういうわけか疲れきった表情を見せた。

「クラスのみんなおれにあだこうだと大騒ぎで何言ってるかわかんねーし、やっと教室抜け出したかと思ったら、箒とセシリアが左右から大声でなんのканの言うし、いい加減たまんねえから逃げて来たんだよ。もう模擬戦も終わったんだしいいだろ？」

もう今日は休ませてくれよ。そう言って一夏は俺を引きずったまま彼女候補生二人を振り切り、ダンボールの詰まれた寮監室の隣の部屋に逃げ込んだ。ようやく俺の手を放し大きく伸びをする。

「はあく疲れた！ やつと終わったよなあ。でもずるいぞ勝手にクラス代表押し付けるなんて。おれなんてあの後大変だったんだからな？ まったく今日は参ったよ」

うるせえ俺の青春のひとときを邪魔しやがって。あ、しかしあの時の俺と本音は、なんていうか、そういう風に見えたのかな？ どうなんだろう。チラリと聞いたセシリアの言葉が妙に気になった。

まあそれはそれとして、一夏の言い分も分からないではなかった。実際男がほとんどいない場所で、自分たちのクラスのイケメンがヒーローになったのだから、女子たちが舞い上がるのも当然だ。そりゃ一夏を囲んで大騒ぎになるわな。

箒とセシリアにしても、完全に一夏に夢中になっている。特に箒は入学して日の経たぬ内に剣道場で毎日二人きりの放課後を過ごしてきたのだ。それが決闘は終わったからはいオシマイでは、絶対納得しないだろうな。セシリアにしてもアウェイにして新参という不利な状況を覆すべく必死だろうから、こちらも相当したたかだろう。

俺はカバンを片付けながら忠告した。

「いずれにせよ、箒とセシリアのどっちかが折れるまで二人はあの調子だぞ」

俺の言葉を聞いた一夏がマジかよという顔で俺を見返した。

「な、なんとかならないか？」

お前がどつちか選べば済むんだよ、とはさすがに言えなかった。

「まあ当分は二人に平等に接する事だな。一夏がどつちかどつき合いたいと思うなら別だが」

一夏はなあんだ、という表情になった。

「買い物に付き合えばいいんだろ？ 二人まとめて面倒見てやるよ。もちろん三治もな！」

ああ忘れてた。コイツはこういう奴だった。

「言つとくが付き合いたい方つてのは買い物事じゃないぞ」

言つてからピンと来た。そうだ、考えてみれば女子が一夏を口説き落とすのは至難の業だが、そうかと言つてあの二人を放っておくとまたぞろ騒ぎになる。特に箒は少々短気で怒りっぽい。セシリアは分からないが、それとなく女心を察してくれない一夏に堪忍袋の緒が切れる可能性はある。もとよりプライドは高いのだし。他の女子と違ってあの二人には、恋人気分を手軽に味わえる一夏との買い物は提案できるプランの一つとして心に留めておいた方がいい。

もつともただの一時しのぎだが。

「えっ、買い物じゃないなら何なんだ？」

他に何かあるんだ？ と言いたげな顔を見るに、今まで一夏の周囲の男子たちはこいつを殴りたくならなかったんだろうかと不思議に思った。

「つーかさ、一夏つて中学の頃いきなりクラスの男子に怒鳴られたり殴られたりした事無いか？」

「なんでわかんんだよ!? 三治つておれと同じ中学じゃないだろ？」

「……勘だよ」

俺は真面目に答える気にならなかったが、誰もが俺を責める以前に一夏に呆れるだろう。

「すげーな！ 超能力か？」

「その内教えてやるよ」

靴を脱いでベッドに横になると、全身の力を抜く前に一夏が着替えて制服をハンガーに掛けるとうるさく言った。

「お前はオカンか」

ISスーツより割烹着かつぼうぎが似合うだろうよと言いながら立ち上がってクローゼットまで歩いた。

「一夏はもうアリーナでシャワー浴びただろ」

今日俺夕飯前に浴びるからと言おうとして一夏を見ると、ちょうど私服に着替えた一夏がエプロンを羽織る所だった。

「えっなんだって?」

「……お前、今から家事でもする気か?」

まさか本当に主夫の格好してるとは思わなかった。

「何言ってるんだよ、忙しくてもう一週間も水周りの掃除も今日来た食器の片付けもしてないだろ? 手伝ってくれよ」

何言ってるんだよって、そりや俺の台詞だ!

「清掃は業者がやってくれるし、食器なんてコップくらいだろ? エプロンしてまで片付ける事があるのか?」

「え? そりやあるだろこんな量があんだぞ?」

きよとんとした顔の一夏は、ドアを開け寮監室前に積まれたダンボールを開けていた。

「お前……まさかそれ全部食器か?」

「ああ、千冬姉に頼んでおいたのがやつと来たぜ」

答えた一夏は当然だろと言いたげになぜか胸を張った。

「食堂のメシはうまいけど、毎日外食してるようなもんだからな! やっぱりちゃんと自炊しないとダメだろ?」

一夏が言ったのは正論のはずだがこんないらだつのはなぜだろう。

一番上の箱からはプチプチに包まれた丼や茶碗や皿やらが出るわ出るわ、啞然として声も出ない俺の前でテーブルが一杯になっていった。

「はしとかスプーンのやつを上段にして欲しいよな、上のダンボールが崩れて中身が割れたらどうすんだよ」

一夏の愚痴は全く頭に入ってこない。時として想像の斜め上を行くこいつの行動はとてつもない脱力感をくれる。

「おい一夏、今からそのダンボールの中身全部片づけるってのか？」
「当然だろ。もう一つははしとかが入ってる奴で、残り一つが鍋とか
フライパンだよ」

「全部洗って仕舞うってんじゃないだろうな」

それ俺に手伝わすのかよ。誰もそんなん頼んでねえぞ。

「オイオイしつかりしろよ」

一夏は相変わらず腹が立つほどの爽やか笑顔を見せた。

「洗って仕舞うに決まってるだろ？ いくらプチプチで包んでるつ
たつて、食べ物を上に乗せるんだぞ？」

「……疲れてるんじゃないのかよ」

「？ 疲れてても家事はしなくちゃダメだろ？」

「……ハハッ」

結局家事に疎い俺が一夏と洗い物を片付け、食器乾燥機に詰め込ん
だりフライパンをキッチンペーパーを広げたテーブルに並べたりす
るだけで一時間以上かかった。まさかIS学園に入ってタメの男子
にそんなんじや生活できないぞと家事無能を散々叱られるとは夢に
も思わなかった。

くたくたになつてシャワーを浴び、食堂に向かう頃には夜8時近く
なり、知っている女子と会う事もなかった。

夕食を終えて寮に戻ると、SNS禁止の俺の数少ないコミュ手段で
あるスマホのメールソフトに珍しくメールが来ていた。本音からだ。

「今日はおつかれさま。ジュースありがとう、また一緒に帰ろうね

”

女子からもらうメールは何でこんなに嬉しいのか。特に可愛くて
気になる娘からだどひとしおだ。一夏の理不尽な行動も全部……は
無理でも半分は忘れられる。

結局返信の内容に一時間も悩んで、若干ニヤついている所を一夏に
見られ頭を心配された。そこだけはお前よりマシだ！

長い事悩んだ挙句メールは無難な内容に留まった。今度どつか遊
びに——と入れるのはさすがに勇気がなかった。

一夏の奴に頭を心配されたのはかなり屈辱だったが、一日の締めくくりは上々だ。IS学園に来て、明日に前向きになれたのは今日が初めてだろう。

疲れていたし気分もよかったので、あっさりと深い眠りについた。スマホに内閣府の番号から着信していても気が付かないほどに。

怒りのブレイクスルー

気分よく目覚めた俺を待っていたのは一週間ぶりのおりむーブー
トキャンプだった。スマホの着信を確認する暇もなく学園の島を一
周し、ジムでヒーヒー言わされてシャワーを浴びに戻ると、昨晚から
何度も着信していた政府関係者からの電話がまたかかってきた。

面倒くさいのを我慢して出ると、何でさっさと出なかった掛け直さ
なかったとガンガン怒鳴り声が響き、俺が気のない声で何があったの
かを尋ねると、早口でおおよその事情を教えられた。

何でも昨日の夕方から英大使館や英IS関連企業の日本支社から、
日本の関係省庁や政府筋に様々な形で問い合わせが殺到しているの
だとか。未確認の情報ではIS学園から英大使館へ強い抗議があつ
たというが、その発端が誰であろう我がブリュンヒルデで、なぜか相
当頭に来ているらしい。

何か知らないか、彼女は君の担任だろうか？ というのが電話の理由
だった。

「さあね、駐日英大使に直接問い合わせたらいかがですか？」
俺はそれだけ言って切った。

大方の想像はつく。己のデタラメさを俺にボロクソ言われた織斑
先生が、元凶たる学園干渉の主である英大使館に猛抗議という所か。
あの人は天災篠ノ之博士の親友だと言うし、最悪の結果を恐れた英大
使が事態の收拾を図るべく詳細を知る者とコンタクトを取ろうと
焦ったのかも知れない。たぶん日本政府が絡んでいると勘違いした
んだろう。

だいたい国際条約で定められたIS学園への不干渉を破ったのが
この騒ぎの原因なのに、その条約が有名無実化しているから、それこ
そが原因だと素直に思い当たらないのだろう。

「自業自得だ」

俺のつぶやきに一夏がこっちを向いた。牛乳の入ったコップを手
渡してくる。

「なにが自業自得なんだ？」

俺はそれを噛み砕くようにして飲んだ。こうやって飲むと体が消化吸収しやすいらしい。というかそうして飲まないで一夏が怒るのだ。やはり一夏はオカン属性か。

「イギリスの連中が織斑先生に怒られたらしい」

一夏は顔色をなくした。やはり弟でも相当怖いのだろう。何べんも殴られてるし。

その時俺は大変な事に気がついた。

「セシリアだー」

あいつの所にも当然連絡は殺到しているだろう。しかし彼女の非はIS学園の人間に対してであって、もう決着もついている。英大使館のゴタゴタはあくまで連中とIS学園教職員の問題だ。しかし大使館に事の責任を押し付けられて何らかの処分を受ける可能性がある。今さらセシリアが詰め腹を切らされるいわれはない。

「一夏！ セシリアの携帯に掛けられるか？」

状況が分からず目を白黒させている一夏を急かしてセシリアに電話させた。

先方は1コールぐらいですぐに出た。一夏が話しかける間もなく一方的にセシリアがしゃべりまくっているのが聞こえて一瞬呆れたが、すぐに一夏にセシリアには英大使館から連絡がなかったかを尋ねさせた。

セシリアによると、何度か連絡はあったものの、ブリュンヒルデの怒りを収めるにはどうすべきかという内容ばかりで咎められる事はなかったらしい。どうやら大使館側は生徒を国や組織のメンツのために利用した事を厳しく追及されたようで、セシリア本人に対する責任転嫁などはないようだった。

「取り越し苦労か……」

やれやれと息をついて身支度を整えカバンを持ち、ふと頭に引っかけりを覚えた。

『怒りを納める』とは？

IS学園なり織斑先生なりが英大使館に抗議をしたのは確かだろう。その結果英IS関係者が日本で大騒ぎし、関わっていると見られ

る俺とセシリアに電話があった、そこまではいい。今回は事が事だし、あの織斑先生だから感情的になり先方へ怒りをぶつけた可能性もないではない。だが織斑先生が怒りを見せ、その矛先となった英大使館や関係者は怒りを納めるのに必死……。

織斑先生は一体何をしたのか？

少し考えたが情報がなさ過ぎてまるで結論が出ない。ふと一夏を見ると、話の止まらないセシリアに電話を切れないまま登校の準備もできず、弱った目でこちらを見た。

「食堂で落ち合おうと言え！」

それぐらい自分で考えろよと言うと、一夏は慌てて言われた通り伝えてスマホを切り、大急ぎで制服の上着とカバンを引っ掴んで付いて来た。

考えすぎても仕方がない。どうせ教室に行けば本人に会えるだろうし、セシリアと情報交換すれば何か分かるかも知れない。すぐに分かる事を悩むのはもうやめにした。

寮を出ると登校中の女子たちがそこかしこから歓声を上げて飛んできた。昨日の決闘の結果がクラスの女子たちから拡散されたらしい。

「じゃ、俺は先行くから」

昨日の放課後以上の勢いで女子たちに囲まれた一夏は、餌を求めるひな鳥みたいな連中のおしくらまんじゅうに身動きが取れなくなり、その前に素早く離れた俺は昨日と同じく一夏を置いてテクテク校舎を目指した。

「三治いーっ!! 置いていくなよおーっ!」

女子たちの喧騒からかすかに一夏の声を背後に聞いたが無視した。

「また後でな」

朝陽を浴びる通学路は夕方と違い街路樹の緑があざやかだ。いまだに黒い制服の俺を訝しげに見る一部の生徒の視線に気づかない振りをして、朝の空気を胸いっぱい吸い込む。かすかに潮の味がした。

とにかく、嵐は終わったのだ。いずれまた何かあるとしても、今はこの開放感を手放す気はなかった。

教室の前に食堂へ寄ると、端のテーブルで鷹月さんたちと着ぐるみが手を振った。

「本音のやつ、トーストのジャム口に付いてんぞ」

一夏が勧めていた和風朝食のセットを受け取りテーブルに向かうと、いつの間にか本音たちの向かい側に箒とセシリアが座っていた。皆に挨拶すると、二人は噛み付くように俺に詰問した。

「一夏はどこだよ! 一緒じゃないのか?」

「一夏さんは何処ですよ!?! 今朝はご一緒では?」

二人とも一夏を登校時に捕まえられるもんだから、一緒に登校する俺が来る場所に張っていたんだな。

実際おりむーブートキャンプはその日その日でジョギングコースやジムのトレーニングが変わるので、俺と一夏の登校時間はまちまちなのだ。セシリアとの模擬戦に備えての一週間はやっていなかったが、その時は二人揃ってギリギリまで寝ていたから朝は食堂に行かず購買のパンなどをSHR後に食っていた。

「あいつならさつき通学路で女子たちに捕まってたぞ」

本音の向かいに座りながら答えると、ジャムが口に付いたのを本音に教えてやった。ティッシュで口をぬぐう姿はまるで小動物だ。実際動物みたいな格好だが。

箒とセシリアは悲鳴とも怒りともつかぬ声を上げて、いつも一夏がやってくる方の廊下へと走り出して行った。

「凄い勢いだよねえあの二人」

谷本さんが感心するように言った。本音と鷹月さんも大きくうなづく。

「二人とも織斑くんと朝食を摂るってすごい揉めてたんだよ?」

「ここにいればおとーさんと一緒におりむーが来るって、どっちがおりむーの横に座るかで大変だったんだから」

「朝からそんなに飛ばしてたら、二人ともこの先大変だな」

俺は鮭の塩焼きを口に運んだ。なるほど主夫がほめるだけあって美味い。

よく見ると、俺が座る本音の向かいのイスの両側が二つずつ空けて

ある。近くに何人も生徒たちがいるのに。俺の左右どちらに一夏が座ってもいいようにだろうか？　だとしたらあいつらの執念がちよつと怖い。

「三治！　置いていくなつて言つたらろ!？」

振り返ると一夏がいつもと反対側の廊下から現れた。

「よう遅かつたな。何でそつちから来たんだ?」

一夏はカバンを俺の左側の席に置いて席取りすると、ポケットから財布を出しながら答えた。

「やつとの事で囲みを抜けたんだけど、入口で待ち伏せされてもコワイから今日は裏門から入つたんだ」

すぐ戻るから席取つといってくれよと言い残し、一夏は食券を買いに走つていったが、その直後戻つてきた箒とセシリアに捕まり、二人同時に大声でまくし立てられタジタジする羽目になっていた。

視線を正面に戻し、本音たちと談笑しつつ朝食を平らげた頃になって、ようやく朝食のトレイを持った三人がテーブルに戻ってきた。

「やつと朝メシにありつけるよ」

ようやくだと苦笑いする一夏が座ると、その横にだん！　と音を立てて箒が座つた。

「ちよつと箒さん！　何で私でなくあなたが一夏さんの隣に座るんですの!？」

「私は一夏の幼馴染で剣道の鍛錬の役もある。そばにいるのは当然だ」

「でしたら私はエリートとして一夏さんのIS指南役であるべき立場ですわ！　そこを代わつてくださいまし」

「断る。一夏も私と並んで朝食を摂りたいだろうしな」

どつちを選ぶんだ？　端正な顔の二人が突き刺す視線にしかし一夏は気づいていなかった。

「どうだ三治！　この定食うまいだろ?」

「一夏が勧めるだけの事はあるよな。すぐ食べ終えちまつた」

本音たちもだいたい食べ終えたようだ。俺が立ち上がると本音もジュースの残りを飲み干し後に続いた。高野さん達は興味深そうに

一夏たち三人を観察して動かない。

「え、三治もう行くのか？ もうちよつと付き合えよ」

「今までならそうするが、もうお前の隣は独占しにくいんだよ」
「？」

首をかしげる一夏の空いた右側に、ここぞとばかりにセシリアが滑り込んだ。さつきまでの箒とのやりとりはどこへやら、満面の笑みで一夏との間隔をさりげなく詰める。

箒は結果的セシリアに席を譲った俺が面白くないようだ。

「三治さんたちの邪魔をするのは無粋ですよ？ さ、一夏さん、時間もありませんしご一緒に朝食を済ませてしましましょう」

「さつきと食べるぞ一夏」

そもそも一夏の朝食時間を減らしたのは君たちでしょ？

「またねおりむー、セツシーにしののんもね」

セツシーがセシリアでしののんが箒か。本音のネーミングセンスは相変わらずだ。一夏だけ微妙な顔をしている。おとーさんよりマシだろ。

「後でなみんな。仲良く食べろよ」

それだけ言って俺は本音と教室へ向かった。背後ではいつか聞いた喧騒がパワーアップして轟いていたが、学習能力のない者たちに忍耐力のない誰かの拳がめり込んで静かになった。

「それではクラス代表は織斑とする！ 異論は無いな？」

「はい！」

クラス全員の返事で織斑先生の発言は担保された。

「それと、先日の件だが」

クラス全員が息を飲んだ。具体的にどうなるかは俺にも分からない。俺の背後にいる話がかかっているのか怪しい奴も、頭を押さえた二人も真剣な目で織斑先生を見ている事だろう。

「職員会議の結果、校内放送で学園長が今回の騒動の発端を全校生徒に説明し謝罪する事になった。なお、その際国際条約に抵触するとみられる干渉を行った英国関係者の謝罪文も読み上げるとの事だ」

クラス中でわあつと声が上がった。たかが一生徒の指摘と追及が、限定的にしろかのブリュンヒルデを、そして世界に冠たるIS学園の中枢を動かす、さらに有名無実化しているとはいえ、IS学園に明らかな条約違反の介入をした先進国の外交関係者からも文書とはいえ謝罪を勝ち取ったのだ。自分でもここまで行くとは思ってもみなかった。せいぜい一時的な騒ぎで終わるのが関の山で、織斑先生が己の無神経と無責任を自覚してくれば満足すべきとさえ思っていた。それがまさか責任者全員から謝罪を勝ち取るとは。

俺は改めて織斑先生の顔を見た。

さっきまで神妙な表情をしていたはずの顔は見事なドヤ顔に変わっていた。

それを見て、俺は一つの疑念にとらわれた。

よくよく考えると、織斑先生は話し合いが苦手だ。言葉で相手に理解させるより実力行使の方がずっと得意だろう。普段の指導や一夏のIS特訓を見ても良く分かる。それがどうやってこの決着を勝ち取ったのか？

ひよつとしてこの人、職員会議や英大使館に対し、一夏にやるように暴力を背景にした怒りを爆発させたのではないか？ だから学園長はあっさり謝罪を受け入れ、英IS関係者は恐怖し事態を穏便に済ませるべくなりふり構わぬ行動を？

俺は思わず山田先生の方を見た。俺と目が合うと、一瞬跳び上がりそうな引きつった顔を見せ、さらにその上に無理やり被せたような苦しい笑顔を見せた。それだけで俺は、ブリュンヒルデと呼ばれる女性がどんな『交渉』をしたのか分かった気がした。

ようやく英国関係筋が必死になってこの状況を打破してくれる相手を探していた理由が分かった。彼らは政治スキャンダルを恐れた訳でもなければ、IS学園との関係悪化を恐れた訳でもない。

ブリュンヒルデの怒りを恐れたのだ。彼らは世界最強の怒りを静めるすべを求め夜を日に継いで奔走したのだらう。セシリアに掛かってきた電話もそれだ。責任転嫁してどうにかなる状況ではなかったのだ。

なんてこった。一時的とはいえ俺はドラゴンを繋ぐ鎖を外してしまつたらしい。

SHRが終わり、俺は先生たちが教室から出ようとする所を呼び止めた。

「なんだ音羽、今は急ぐから授業の質問なら山田先生にしろ」

疑惑の本人は引き止められず逃げられてしまった。仕方なく山田先生に話しかけた。

「な、何ですか？」

何も言わない内から無力な小動物のように怯えきつている。そんな様子を見ると、昨日職員会議で何があったのかと尋ねるのははばかられた。

「……済みません、何でもないんです」

泣きそうな山田先生に頭を下げると、俺は急ぎスマホで英大使館の番号を調べ掛けてみた。

応対の女性の態度は冷たかった。現在大使館は急な人事異動で慌しい為、喫緊の用以外は一週間後に掛けなおすようにと冷たくあしらわれた。

俺は食い下がり、誰が異動するのかをしつこく聞いた。

大使です。それだけ答えて電話は切れた。

教室に向き直ると、箒とセシリアの二人が朝飯時の騒動を蒸し返して一夏を左右から引つ張っていた。

大岡裁きかお前ら。

「三治、見てないで助けてくれよ！ ……どうしたんだ？」

「……何でもない」

ここは平和だ。……平和。賽さいは投げられケリはついたのだ。

俺たちはIS学園の生徒、それ以外の何者でもない。今さら学園の内外で起こる大人の事情を悩んでも仕方ないと自分に言い聞かせた。

「話がある」

次の休み時間になってすぐ箒に教室の外へ引つ張られると、鋭い剣幕で問い詰められた。

「私と一夏の、その、あれはどうなったのだ？」

最初は何の事か分からなかったが、入学した日に寮でゴニョゴニョと言われやっと思いついた。

「ああー、日曜のあの埋め合わせか」

そういえばすっかり忘れていた。箒を怒らせたお詫びとして提案した一夏のデートがまだなのだ。その日の内に織斑先生に知れて詰問された上、セシリアとの決闘で特訓の日々が続いた為うやむやになりそのまま忘れていたのだ。

「そうだなあ、後でセシリアのいない時に一夏に言っとくか。次の日曜でいいか？」

「よ、よし、それでいい」

とりあえず箒は納得してくれたので教室に戻ると、セシリアが一夏によりよって週末の予定を聞き込んでいる所だった。

「わりい、週末は三治と出かけるつもりなんだ。中学の時からつるんでる友達を紹介しようと思ってるさ」

あつさりお断りした一夏にセシリアの笑顔が引きつり、その歪んだ笑みが俺を捉えて暗いオーラを放った。同時に背中に鋭い視線が突き刺さる感触がした。

前門の虎、後門の狼。

「あら、三治さん。少しお話がありますの」

「奇遇だな、私もだ。じっくりどういう事か説明してもらおう」

嫌な汗が止まらない。美人に睨まれるってこんなに辛いのか。それとも武道やISやつてる奴は「気」とかいうのが凄いのか？一夏が悲鳴を上げる気持ちをやつと分かった。

「どうした三治？、なんか顔色悪いぞ？」

お前のせいだお前の！、いらんこと言いやがって。

「とつとにかく一夏に関してなら、もう予鈴も鳴るし次の休み時間に話をつけるから」

俺は前後から圧迫してくる殺気につぶれそうになりながら、慌ててそれだけ言った。

SHRからこつち休み時間に休めない。まったく、先の学園と英大

使館がらみの騒ぎといい、ここに入學して以来織斑姉弟がらみのトラブルが続きつぱなしだ！

ん？ よく考えたら、一夏が高校受験の時立ち入り禁止の場所に入ってホイホイIS触ったのが、全国でIS適性検査が行われた原因だし、俺のIS学園にまつわる問題の全ては、元をたどれば全部織斑家のせいかな？

暴力による解決を必死で否定してきた俺だが、俺には一夏を殴る権利があるように思えてならない……。

新聞部のインタビューと記念撮影が終わり、一段落した一夏のクラス代表就任パーティーで、俺はぐったりと扇形のソファに体を預けた。

そもそも俺は後ろに控えて一夏が困ったときだけ助け舟を出す以外何もしないつもりだったのが、一夏が無理に俺を隣に座らせるもんだから、せつかくデート（という名のお出かけ）の確約を取り付け上機嫌だった筈とセシリアの機嫌がまた悪くなりかけた。次の土曜は午前の授業が終わった後筈と出かけ、日曜に出遅れたセシリアは代わりに丸一日一夏を連れ回せるという事でどうにか手打ちとなったのに、昼休みに凄い剣幕で二人がやりあう所を特等席で見せられた一夏は相変わらず全然理解してない。

「おつかれさまー」

一夏と反対側に座る本音だけが今の俺の癒しだ。さつきの写真撮影は対決した一夏とセシリアの二人で取るはずが、シャッターの瞬間クラスのみんなが写り込んだばかりか、一夏とセシリアの間に筈がちやつかり入り込んで写ったもんだから、目の前でまた恋敵同士の口論が始まっている。ちなみに俺も本音に引っ張られて一緒に写ってしまった。

「さつきはまいったよ、いきなり新聞部の先輩が『今後の抱負は？』とか聞くんなんな」

目に入らんのか、眼前の女の争いが。それともそれが眼中にない一夏ってわりと大物なのか？

「そんなん適当に答えろよ。どうせあの先輩適当にウケのいい内容でつち上げるだけだぞ」

セシリアのインタビュの時、露骨に捏造すればいいとか言ってたしな。何言ったところで同じだろう。まったくどこ行ってもマスコミってやつは。

「マジで!? だから三治はノーコメントしか言わなかったのか」

「単に嫌いなんだよ」

実際あんなのが取材に来るとは思わず、無意識に睨んでしまった。「三治のあんな顔初めて見たよな。ちよつと恐かったぞ。千冬姉と言いつつた時でも、大人が子供を叱る時みたいな表情だったし。」

織斑先生やセシリアとやりあった経験から、精神的に強くなったよ
うな気はするが、まさか一睨みで女子とはいえ先輩が怯^{ひる}んで逃げ腰になるとは思わなかった。

それから慌てて先輩は取材を記念写真に切り替え、何枚か撮るとそそくさ逃げるようにその場を去った。周りの女子は引くかと思つたが、俺が家族ぐるみでマスコミに酷い目に合わされたのを思い出したのか何も言わなかった。

「気にしちや駄目だよ」

本音がハイ、とコーヒーのカップを渡してくれた。

「校内新聞に何が書かれたって、私はほんとおとーさんを知ってるもん」

ちよつとどきりとする事を言い、にっこりとした笑顔を見せた。考えてみれば俺は幾度となくこの笑顔に救われてきたように思う。

そうだ、今日こそ、ちゃんと日頃の礼といつかなんといつか、言わないと。

「ほ、本音、その」

「んー? なに〜?」

いつもの眠たげな顔を近づけてくる。かすかにいい香りがした。

「い、いつもありがとう! な……なんてな」

本音相手に素直にというだけの事が、俺にとってはえらく難題だった。やっぱりこう、女子に免疫がないというか、一夏みたいに男女関

係なく同じように接する奴みたいにはなれないな。……いや一夏は例外か。

「ふふ、いいよー私もしたくてしてるんだし」

その返事だけで心の中でガツポーズしてしまう。後で冷静になれば意識しすぎだし深い意味はないと分かるのに、どうしても心のどこかで特別な何かを期待してしまう。

冷静なふりしても中身はこれだからクールなキャラには程遠い。俺はカツプのコーヒーに口をつけ――

「うわっ!？」

ほとんど目と鼻の先にクラスの子供たちが顔を寄せていた。

「なーんだ告白かと思って期待したのに」

「ホント、音羽くんってここ一番って所でヘタレよねー」

「まあほら、織斑くんと違ってジゴロのタイプじゃないのよ、女子に対して不器用っていうかさ」

「そうそう、団長はきつとストイックなのよ。織斑くんみたいに次々に女を落とすみたいなのは正反対の」

「お前らなあ……」

といつもこいつも人のことを面白おかしく喋りやがって。……まあ、今しがた気にするなど言われたばかりだし、な。

一夏は「じごろ」ってなんだ? と聞いている。スマホで調べろ!

ふと本音を見ると、うつむいてケーキを食べている。こんな時も食い気か。

「本音ちやくん? 顔赤いわよく?」

やれやれとコーヒーをもう一口飲んだ途端、聞き覚えのある声が聞こえた。

目の前に、『青春模様』と書かれた扇子を広げた会長が立っていた。「お嬢さま!?! なんでここに?」

珍しく驚いた様子の本音が顔を上げた。確かにほんのり赤みが差している。

……えっ、もしかして。

「もちろん代表就任のお祝いによ？ 本音ちゃんと音羽くんがどうしてるか見に来た訳じゃないわよお？」

とつつあんは面白そうに俺と本音を見比べている。この人忙しいはずだろ？ 何しに来てんだよ。

「も、もう！ お嬢様のほか！ 私知らないもん！」

本音がまた昨日のように袖で顔を隠してしまった。

「御免ね、ちよつと言い過ぎちゃったかな。でも今日はもう一つ用事があつて来たの」

「用事？」

本音が少し顔を隠した袖をずらし、目だけを覗かせた。

「そつ。そうそう織斑くんクラス代表就任おめでとう。今後生徒会のクラス合同会議なんかでもよろしくね」

「え？ あつはい、よろしくお願いします！」

急に真面目な事を言われた一夏が驚いて慌ててあいさつした。

「はいよろしく。それでね、音羽くんちよつと借りていい？ 大事な話があるの」

「そうなんですか？ わかりました」

承諾した一夏は何の用かさっぱり分からない様子だ。周りのクラスメートたちもきよとんとしている。そりやそうだろう俺がそもそも分からないのだし。

とはいえ心当たりはある。例の英大使館の件だ。しかしそれにしでは会長の表情が柔らかい。

「それじゃ行きましようか音羽くん、本音ちゃんもね」

俺ばかりでなく本音まで？ 意外な申し出に俺たちは事情が飲み込めぬまま立ち上がった。

「早く行きましよう、織斑先生たちも待っているわ」

ますます腑に落ちない。それは本音も同じようで、どうやら話の内容を知っているのはこの場では会長だけであるらしかった。

俺たち二人はその場を辞し、会長に続いて生徒会室へと向かった。

「それでどうなの!? 本音ちゃんとAまでいったの？ お姉さんに白

「状なさい！」

「ええ加減にせいやとつつあん！ サボってるって虚先輩にチクるぞ
!？」

女子とはいえ会長まで恋バナ好き過ぎだろ。

わが手に拳銃を

生徒会室での話とは何か？ 歩きながら尋ねても会長は『ここでは話せないから』の一点張りだったが、それ以外については饒舌じょうぜつだった。

「知つての通りIS学園には55の特記事項があり、学園の独立性を維持するための特例として国連総会でも認められているわ。例えば第21項、IS学園に在学中の生徒はあらゆる外的干渉を受けないというルール。でもオルコツトさんの件を見れば分かるとおおり、これまでに学園の特記事項は今挙げた21項を含め遵守じゆんしゆされているとは言い難かったの」

早足で歩きながら、会長は話し続けた。

「これまでもこのような特記事項違反を国際問題として取り上げようとした例は何度もあったわ。でも出来なかった。相手が国力や国際的影響力のある大国だどうしても学園側が二の足を踏むし、運営予算を負担する日本政府も決していい顔をしなかったの」

会長の横顔が苦みしばった表情になるのが見て取れた。

「そうして創立以来IS学園は各国の何かしらの干渉を排除できずにやってきた。この状態を改善するのは不可能に思われたの」

そこで会長は急に俺を振り返った。

「でも突破口は意外な所からやってきたわ。音羽くん、あなたよ。」

俺は望んでもいない期待を託されたような複雑な気分だった。

「どういう意味です？」

「あなたは何者にも気兼ねする事無くこの学園の矛盾と外部からの違法な干渉を指摘し、その結果や自分の身に降りかかるかもしれない不利益を恐れずそれらの公開と改善を求めた。教職員や生徒を問わず、そんなことが堂々と出来たのはIS学園であなただけなの」

買いかぶりだ。確かに俺はあの時どうにでもなれという気持ちだったが、何も恐くなかった訳じゃない。言いたい放題言っただけの結果的にどうにかなったというだけの事だ。

「確かにあなたの言動は多少過激だったし、自分の立場を超えたもの

だったわ。学園側からすれば褒められたものじゃないわね。私から見てもそう思う。だけど、誰かがもつと早くに言うべき事でもあったわ」

ただね、会長はそこで一度言葉をきった。

「その結果織斑先生が感情に走って力を背景にした脅しともいえる強引な交渉を行い、とある国の駐日大使が交代する事にまでなったけれど、それはあなたが気に病むべきじゃないわ。あくまでもそんな手段を用いた織斑先生の責任よ」

会長の厳しい表情が少し緩んだ。

正直そう言われて俺もほっとした。どうやらその件で呼び出しを食った訳じゃない事は確かだ。

「でもそのお蔭で、これまで当然のように I S 学園に不当な干渉を続けてきた各国の対応に変化が現れたわ。織斑先生は無茶だったかも知れないけど、違法な干渉は許さないという意思表示をここまで強く見せたことで、I S 学園は本来のあるべき姿を取り戻せるかもしれない所まで来ているの」

それもあなたの行動が導いた事なのよ。会長は告げた。

「正直に言くと、今度の事を知った時は自分の不甲斐なさを恥じ入る気持ちで一杯だったわ。生徒会長だなんて大きな顔して、一番やるべき事をずっと自分に言い訳して諦めてきたんだから。その上結果的にとはいえ、その役目をあなた一人に押し付けてしまった。感謝と謝罪をどれほどしても足りないの。でも今これだけは言わせて」

会長は今まで見た中で一番真剣な顔で俺に向き直った。

「本当にありがとう、そして御免なさい。それが言いたくて校内放送じゃなく私自身が呼び出しに来たの」

それに大事なはその事だけじゃない、と会長は付け加えた。

「あなたは誰もが思慕^{しほ}を寄せ同時に恐れるブリュンヒルデの専横を臆することなく批判し、腕力や暴力に頼りがちな彼女の指導を少しずつ改善させたばかりか、誰も指摘できなかった非常識さを本人に自覚させたわ。ずっと社会性の無さを問題視されながら、誰も言えなかったことを直接本人に伝えて理解させた。人として当たり前前の事だけど、

それを織斑先生にして上げられたのはあなたが初めてよ」

生徒会室の前で会長は一旦立ち止まった。

「私はあなたの可能性に賭けたいの。勝手な願いで申し訳ないけれど、生徒会役員に加わる事を考えてくれないかしら？ あなたはきつとこの学園のカンフル剤になれる存在なのよ」

会長はドアを開けた。

「連れてきました」

会長に続いて俺と本音が入室すると、中では虚先輩と織斑先生、山田先生の三人がいた。

「来たか」

鷹揚おつようにうなずいた織斑先生は俺たちに座るよう促した。俺と本音が並んで座り、会長を含めた四人と向かい合う形となった。

「今回呼んだのは他でもない。内閣決議により音羽、貴様に外出時の護身用拳銃を携帯することが義務付けられたのを伝える為だ」

俺は目をむいた。白状すれば俺は若干ミリオタで多少は銃の知識もあるし、映画のような銃撃戦を空想した事も一度や二度ではない。しかしまさか自分が本物の銃を携帯するよう指示されるとは。

「なおI S学園の島内であればその必要は無い。あくまで島の外部に出る時のみの規定だ。本来なら織斑のように絶対防衛を持つ専用機を与えるべきなのだが、音羽の場合I S適正が本来の最低基準よりも低いため貴重なコアを割り当てる事は出来ず、学園から訓練機を貸与しようにもI S自体の習熟度も低く使用も今一つ不安定だ。それでも最低限の自衛措置は必要としてこの結論に落ち着いた」

驚いているのは本音も同じだ。対して向こう側にいる虚先輩と会長は先に知らされていたのか動揺はない。

実際俺のI S使用を見ていたら誰でも危なくて見ていられないだろうし、これは俺に自衛手段を持たせるための苦肉の策だろう。

「といっても最近までただの学生だった貴様では基礎知識すらままならんだろう。そこで山田先生に銃の取扱い指導並びに射撃訓練をお願いする事になった。織斑の特訓で見ているように山田先生の射撃の腕はかなりのものだが、それはI Sを使わない生身でも同じだ。大

変かも知れんが間違つても暴発など起こさんようしつかり指導してもらえ」

「よ、よろしく願いますね」

山田先生はもう大分落ち着いているようだが、織斑先生の近くだとまだ英大使館がらみの恐怖心が消えないのか多少挙動不審だ。

俺が挨拶すると、再び織斑先生が口を開いた。

「山田先生もお忙しい身だ。なるべく放課後の空いた時間を活用してご指導頂く様に」

何か質問は？ という問いに、俺は今思いついた事を話してみた。「一つ聞きたいんですが、携帯する銃は自分で選ぶなり購入するなり出来るんですか？」

織斑先生の表情は変わらなかった。

「自分好みの銃を携帯するなら自腹で買う事になるぞ？ IS学園の教練用なら無料で貸与するが」

「音羽くん、何を考えてるのか分かるように話してもらえ？」

会長は何かしら意図がある事に気づいたようだ。

「早い話が、見た目も威力もゴツいものが欲しいんですよ。そして一般の生徒が見ている前で、威力を見せ付けるような破壊効果の大きいのを撃つ訓練も何度かしておきたいんです」

向かいの四人の内、会長を除く三人の表情が疑問をあらわにし、会長だけが成る程という顔をした。

「つまり、抑止力ね？」

わが意を得たり、という所だ。まだ他の三人も本音も頭に？が浮かぶような表情でいる。

「そういうことです。つまり俺が銃でもって身を守る一番の相手は他でもない女尊男卑の過激派でしょう？ そしてここIS学園にも残念ながらそのシンパがいる。そいつらを通して俺が拳銃を持っている事はいずれ伝わる」

一呼吸おいて本音の顔を見た。不安そうだ。織斑先生はじめ向かいの四人は程度の差こそあれ厳しい顔つきになる。

「しかし、俺がアクション映画よろしく大口径拳銃で標的を派手に吹

き飛ばすのを何度も見せたら？ 間違ってもこんなもので撃たれたくないと思うでしょう。そしてそれは外部の連中にも伝わる」

「つまり、貴様の襲撃をためらうような代物を持っているとアピールする訳か。確かに効果はあるかも知れん」

織斑先生たちもようやく理解したようだ。

「そういう事です。避けられる危険は避けるに限る」

山田先生と虚先輩は若干ホツとしたようだが、織斑先生は少し難しい顔をした。

「理屈は分かるが、その要望を満たせる拳銃だとかなり大型で重量も負担にならないか？」

「S&W社製のM329PDなら、弾薬はいわゆる44マグナムですが、重さは弾抜きで710gぐらいだったはずですよ。普通の軍用拳銃くらいの重量だし、あれならどうにか携帯できるサイズでしょう」

「ずいぶん詳しいな。貴様の趣味か？」

織斑先生は面白がっているようだ。やっと俺をいじれるネタを見つけたと思ったのかも知れない。

「まあ、知識だけは」

俺は苦笑した。

織斑先生はその後もいくつか注意事項を説明した。

「——以上のように、拳銃使用に際しては本人の判断に任せられるが、先に挙げた通り制約もある。最後になるが、拳銃の保管管理については——」

急に会長が口を挟んできた。

「それについてですが、音羽くんと同じクラスの布仏さんにお願います」と思っています」

俺は唐突な申し出に混乱してしまった。本音に拳銃の保管を任せるとか一体何を言い出すんだこの人は!?

「なぜだ？」

うさん臭そうな織斑先生に会長は涼しい顔で答えた。

「先生方はご多忙ですし、かと言って本人に管理させてみだりに使用する事があっても困るでしょう？ 彼女なら銃器整備の腕も一流で

す。それに」

そこまで言って言葉を切り、俺の方を向いた。

「間違っても強引に持ち出そうなんて出来ないでしょうし、ねえ？」

会長が織斑先生の前でこんなニヤニヤするとは思わなかった。俺をいじりたかったのはあんたか！

「一応真面目な話をするね、私たち生徒会役員や先生方は忙しくて一々音羽さんの外出に応じていられないし、キミの身近で信頼できる人間となると本音ちゃん位しかいないのよ」

まあ本音ちゃんも生徒会役員なんだけど、あんまり生徒会の仕事にタッチしない方が手間が増えなくていいし。そう会長が締めくくると本音はばつが悪そうな笑顔で頭をかいた。本音よ、真面目に生徒会やれ。

俺と本音を見比べ、さらに会長を見て織斑先生はやれやれと首を振った。本音を正面から見据える。

「布仏、任せて大丈夫なのか？」

「は、はい！ 大丈夫です。おじよ……生徒会長の家にお仕えしてきた間に心得は有りますので！」

本音は珍しく緊張した態度で、大きな声でしっかりと答えた。生徒会長の家？ 会長はお嬢さまと呼ばれているから名家の出身かも知れないが、本音や虚先輩がそう呼びお仕えしているって事は、布仏姉妹は侍女か何かか？

「フツ……そうか、では任せる。だが一時の感情に流されるような判断だけはするな。いいな？」

どこか満足気な織斑先生は本音の返事に余裕のある笑みを返した。「はいー」

本音は少し嬉しそうだ。傍から見ると何となくいい場面だと思うのだが、拳銃よりはるかに危険なISで無茶な特訓と私闘をやらせ、さらに言えば感情的になって体罰名目の暴行を繰り返していた人が言うと思えば冗談に聞こえなくも無い。

と言うか、会長の家で心得があるってなんだ？ 会長の家は警察が自衛隊関係者なんだろうか？

俺が疑問を口に出そうとした瞬間、会長はさつと手で制した。

「詳しい事は今話すと長くなるから、後で本音ちゃんから聞いて保管についてもよく話し合っただけ。山田先生が訓練に来られない場合は私が代わりに行ってあげるから」

微笑む会長に虚先輩が不満そうな視線を投げたが、本人は少しくらいいいじゃないとどこ吹く風だ。こりやまたサボる口実の線が濃厚だな。

「まあいい。私たちの伝達事項はそれだけだ。訓練を受けたい日は山田先生によく確認するように。なおこの事は本来内密にしておくつもりだったが、音羽の方針で行くなら隠し立てする必要は無いだろう」

やがて織斑先生が解散を告げ、山田先生と共に職員室に戻ろうとする際、俺に耳打ちした。

「音羽、もし今すぐにでも外出する必要が生じたら、織斑を連れて行け。あいつはあれでも今は男で世界最高のボディガードだ。政府はSPを準備しているとも言いが、監視されての外出が嫌なら貴様の場合これが最善だろう」

俺がうなずくと、織斑先生はさつきとは違う笑みを見せて生徒会室を後にした。その後続く山田先生は、今日はちよつと、明日なら夜8時から時間が空きますので、と早口で言いドアの所で転びそうになりながら織斑先生の後を追いかけていった。

織斑先生が俺の事にちゃんと配慮してくれているのには感謝したが、割と腕力でむりやり事を進めるイメージが強いのもあって正直意外だった。

俺も立ち上がり、色々な疑問や拳銃の管理について話すため本音と生徒会室を出た。

「で、さっきの話だけどうかしら？ 今なら生徒会長秘書のポスト

を用意してるんだけど。あ、今日の山田先生の代役なら大丈夫よ？」

なぜか会長も後からついてきた。そう言えばさっきの話は本気だったのか。しかし動きがどこかぎこちない。何かを引きずってるみたいだ。

「お嬢さま?」

引きずつてた。虚先輩を。この人目がすわってるよ。

「ちよつと怖いわよ虚ちゃん? ほんの出来心じゃない。それにもう大体の所は片付いたでしょ?」

会長も虚先輩は怖いようだ。しかし忙しいのに一夏の時といい俺の時といい口実つけて仕事から逃げまくる所ばかり見てるな。

「各部活からの陳情メール一つも読んでないじゃないですか。予算増やせ男子入部させると何十通も来てるんですよ?」

会長は虚先輩を引きずつたままざる進んでいる。

「可愛い後輩の生命が掛かった訓練なのよ? 生徒会長の私が行かなくてどうするの。それにほら、上手くすれば音羽くん生徒会に入ってくれるし!」

俺は首を横にふった。

「俺に大した事はやれませんが、会長の過大評価です。それに俺なんかより事務作業手伝う人をたくさん入れて仕事を早く回した方がいいですよ。」

虚先輩が会長を強く引つ張った。そろそろ怒り出しそうだ。

「あくあフラれちゃったか。でもほら、私の家と本音ちゃん達との関係気にならない? その辺の話もしておきたいし」

俺はチラッと本音の方を見た。もう垂れた袖を振り振りいつもの調子に戻っている。

「本音に聞くからいいですよ。それと今日銃と射撃の訓練をしてもらうんなら、虚先輩の了解を取らないとまずいでしよう」

会長はうええという顔で虚先輩を振り返ったが、大きく首を横に振られただけだった。

「じゃ、俺と本音は食堂のカフェで話してますんで、時間が出来たらお願いします」

そう告げると俺たちは歩き始めた。

「待ってよー。そうだ! 二人も手伝ってくれたら——」

「駄目です、決定にお嬢さまの同意が必要な作業なんですから」

未練がましい会長が虚先輩に引つ張られて生徒会室に戻っていく

のを一応見届けてから、俺たちはカフェに向かった。

「私たち布仏家は代々更識家に仕えてきた家系でね、お姉ちゃんはお嬢さま、私のはかんちゃん専属侍女なんだ〜」

「ああ、だから虚先輩も本音も会長をお嬢さまって呼んでるのか」

俺は紅茶を飲みながら、本音と会長の家について説明を受けた。会長から折を見て説明するように言われていたらしいのだが、今回の事がちょうどその機会になったわけだ。

しかし会長の実家が代々対暗部用暗部の家系って、今時忍者みたいな家系があるとは。秘密工作や暗殺の妨害と聞いたので、24のジャック・バウアーみたいなものかと言うと本音はそうかもねーと返事していた。ぼかしておきたいのか本音も実は良く分かっていないのか判断がつかなかった。

だが銃火器の取扱い知識と経験は本物らしい。実銃を触った事もない俺は、まず反動の小さい22口径の拳銃から射撃を始めた方がいいと助言された。

その他にも色々アドバイスを受けたところで一休みし、もう陽が傾いたなと思ったとき、以前会長と始めて会ったとき気になった事を聞いてみた。

「そう言えば、さつき言ってた『かんちゃん』って会長の妹か？」

「えっ、うん……」

なんだか急に声が沈んでしまった。これはひよっとして。

「嫌ならこの話題は止めるけど、会長ってひよっとして妹さんと折り合いが悪いのか？」

「どうして分かったの!？」

本音はびっくりした様子で俺を見た。やっぱりか。

「セシリアとの決闘の件で会長と初めて話した時、姉妹や兄弟は正反対だとか俺は妹より出来が悪いって話した直後に会長が暗い顔をしたから、仲の悪い兄弟姉妹がいるんじゃないかって思っただけだよ」

俺が説明すると、そうなんだーと返事した後問題のかんちゃんこと簪さんについて教えてくれた。

幼い頃から本音と姉妹同様に育った事。俺たちと同一年でIS学園の4組にいる事。内気な性格のため孤立しがちでクラスでいじめられていないか心配な事。幼い頃から優秀過ぎる姉に劣等感を抱いているらしく、姉のように専用機を独力で完成させてそれを解消しようとする事。どこか姉に隔意を抱いているらしく一緒にいることはほとんどない事。実際は日本の代表候補生でありとても優秀な事。

最後にこれは内緒だけど前置きして、突然表れた男性IS操縦者である一夏の専用機、白式の開発を急遽優先されたせいで代表候補生にも関わらず専用機が未完成のままにされてしまい、自分で完成させなければならなくなったと小声で耳打ちした。

「おりむーやみんなには言っちゃ駄目だからね。おりむーのせいじゃなくてタイミングが悪かったただけだもん」

頷きつつも、俺は会った事もない会長の妹さんに同情した。出来のいい兄弟や姉妹と比べられる辛さは俺もよく分かる。それも本人がちゃんと優秀さを発揮していてそれではなお堪^{こた}えるだろう。その上一夏の影響で専用機が未完成ともなれば、ヤケを起こさないだけマシンというもんだ。少なくとも彼女の専用機が完成するまでは一夏にはなるべく会わせない方がいいだろう。まあ本人が会いたく無いだろうけど。

「うーん、しかし会長が自力でISまで作ったとは、にわかには信じられないけどな」

本音が補足した。

「お嬢さまの専用機ミステリアス・レイディはフルスクラッチタイプで組み上げたのはお嬢さま一人だけど、ロシア製のモスクワの深い霧ってISのデータを元に作ってるの。でもかんちゃんの打鉄式はまだ流用できる機体データが無くて」

あーなるほどな。気は焦るがなかなかIS作りは進展しないようだ。俺が納得すると本音が珍しくため息をついた。

「ねえ、かんちゃんの事どうすればいいかなあー？ お嬢さまともずっと話もしないし、いつまでもこのままじゃ良くないよー」

弱った。俺が力になれるとは思えない。俺も妹とは仲の悪いまま疎遠なのだ。

「そうだなあ……会長はどう言ってるんだ？　簪さんにしても一度本音を聞かないことには始まらないだろう」

布仏本音だけに。何かと寒いギャグをかます一夏ならこう言う所だな。

「かんちゃんとお嬢さまの本音かあ……お嬢さまはかんちゃんと仲良くしたいみたいなんだけど」

本音は天を仰いでぼんやりした。本音でも聞くのは難しいのかもしれない。

「簪さんも会長の事をどう思ってるのか、具体的に聞いてみたら？

虚先輩も会長専属なんだし、それとなく聞いてもらったらどうだ？」

「お姉ちゃんに？　そっかー聞いてもらった方がいいのかな」

本音がこれだけ考えている姿を見るのはあまりない。全然らしくないけど。

と、急に俺のほうを見た。

「そうだ、ちよつとお願いがあるんだけど」

俺が会長に話してくれとか？

「なんだ？」

本音は真剣な表情で向かい合った。

「あのね、かんちゃんとお友達になってくれない？　かんちゃんって自分から友達作るのが苦手で、4組でも一人ぼっちじゃないかすごく心配なんだ」

「ああ、なんかすげえ分かるわ」

俺なんて一夏と別のクラスだったら孤立どころか精神を病んでノイローゼになってたかも知れん。まあ今は苦勞も多いが。しかしそうでなくても陰キヤは孤立しやすく辛いものだ。気づけば類友で固まっていたりする。類友もいなければ……。

「まあ俺で良ければ、友達にならせてもらうよ」

さつきから沈みがちだった本音の表情が花が咲いたような笑顔になった。

「よかったー！ かんちゃんってじっくり話を聞いてくれるタイプの人が話が話しやすいから、おとーさんが仲良くしてくれると助かるんだ」

まあ俺にしてみればこの笑顔が見られるなら大概のことは良しとしてしまう。それに会長の妹ってどんな子か気になるし。

その後他愛もない雑談をしていると、一夏から電話が掛かってきた。

「三治!? まだ会長の用事終わらないか? 頼む! 助けてくれ!」

さすがは雰囲気ブレイカーだ。大事な話が終わった途端電話とは、あいつどっかから見てんじゃないのか?

「今終わった。何があった?」

こんな気分じゃ最低限の言葉しか出やしない。どうせ箒とセシリアがらみだろ。

「箒とセシリアがどっちと週末出掛ける話するのかってもめてどうしようもないんだよ!」

そら見ろ、犬も喰わねえよ。

スマホからは二人が一夏に詰め寄る様子がこれでもかと伝わってくる。

「取り合えず今カフェにいるから、ちよつと早いけど夕食にしようって連れて来い」

さっさとスマホを切ると、本音がおかしそうに見ていた。

「またおりむー? セツシーとしののんも大変だね」

逆だろと思つたが、一夏相手に想いが全く伝わらない二人の方が精神的にキツいのかな? まあどっちでもいいか。俺にしてみりや些細な違いだ。

「ごつちに来るってさ。まだ6時前だけど一緒に夕飯にしよう」

「わーい(ご飯)」

窓からオレンジ色の陽を浴びる景色を見ながら、そのうち一夏を彼女候補生二人と遠くへ追いやつて、本音と二人でのんびりしようと考えた。

ほどなく現れた一夏は両腕を箒とセシリアにがっちりホルドさ

れていた。わいわいやりながらそれぞれ注文を受け取ると、またどちらが一夏の隣に座るか揉める前に俺の正面に一夏を、その左右に箒とセシリアを座らせた。

食事中の話題はすぐに一夏がどこへ二人を連れて行くかで大騒ぎになった。

箒はデートスポットとして人気らしいアミューズメントパークをゴリ押しし、セシリアは情緒あふれる港町での散策を主張したのだが、一夏が何時間も待たされる所はお互い大変だし、港町ならこの人工島がそうだとお約束のように二人を怒らせたのだった。

結局騒ぎを聞きつけてやってきた織斑先生にたんこぶを作られ、二人が静かになってから、一夏と一緒にゆつくり過ごせるところならどこでもいいだろうと一応なだめておいた。一夏は何にも理解していないのか、みんなで一緒に出かけようかなどと言い出す始末だった。

結局会長は最後まで食堂に姿を見せなかった。もしかすると今も泣きながら虚先輩と生徒会の仕事に追われているのかも知れない。さっさと人手を増やせ。

俺は一夏と寮に戻ると先週の日曜に買った分厚いダイアリーを開いて、入学以後に起きた事の詳細を書き留めているそれに今朝からさっきまでのあれこれを追記し始めた。

「そういえば三治、いつも寝る前に何書いてるんだ？」

「日記だよ。毎日あった事を出来るだけ具体的に書いてるんだ」

一夏はいつもの爽やかな笑顔を見せた。最近はこの顔が何にも考えていないバカの顔に見えて仕方がない。

「三治はマメだな！俺なんて昨日あったことなんていちいち気にしてないぜ」

お前は一番気にしなきゃいけないんだよ！と言いたかったが今日の諸々を書き込むのに忙しくて口には出さなかった。

俺は本日の出来事を克明に記録しながら、いずれ卒業したらお前らのハチャメチャな実態を回顧録にまとめて出版してやるからなと誓った。

ハートに火をつけて

毎朝一緒に食事をするのが、とにかく上手く行かない。

ただそれだけの理由で、翌日からおりむーブートキャンプ、略しておりブーの参加者が二名も増えた。もちろん新メンバーは一夏の彼女候補生しのんとセツシーだ。二人とも剣道での全国優勝者と代表候補生だけあって体力的なポテンシャルは俺よりずっと上だった。魅力的なボデイラインを堪能、などという余裕もなく、結局へばる寸前でついていくのがやつとの俺を置いて、一夏は好き勝手な話題をまくしたてる二人から逃げるようにペースを上げてどんどん先へ行ってしまった。俺は俺でこれ幸いと大幅に島内をショートカットしてジムにたどり着いた。

おかげでランニングはだいぶ楽になったものの、その後のジムでも肉体美が丸分かりのいでたちでいる美少女二人にまるで反応しない一夏のせいで、日英代表がヒートアップするたびに間に割って入らなければならなかった。

その後シャワーと着替えを済ませ、四人で食堂に向かい本音や谷本さんたちと合流するというのが、今後のフォーマットになるであろう起床後の流れだった。

先日脳天に担任の熱い拳を受けた事もあってか、どうにか箒とセシリアの態度も周囲の迷惑にならない程度には大人しくなった。この程度で今後も推移してくれたら……などと思っではいけない。

そういうときに限って何かが起こるのだ。俺はこのIS学園という場所の特徴というか異常性に気づきつつあった。

「やはり横浜の赤レンガ倉庫前は風情がありますわ。ぜひ日曜は二人で神奈川まで足を伸ばして——」

「一夏！ ま、まあ物は試しと言うかだな、この大観覧車に……いや！ 別に一緒に乗りたい訳ではないが、もしお前が——」

今日もあいつの気を引く為に、恋する二人は必死です。

「そーいや三治、結局千冬姉の話ってなんだったんだ？」

だが無意味だ。現実是非情である。

「IS学園島の外へ出る際の注意事項だよ。それより一夏両サイドの話聞いてるか？」

嘘は言っていない。俺の事よりいつもの二人を気にしなければならぬのも本当だ。

「ホントかよ？ それだけであんな長くかかるなんておかしいぞ。怪しいなあ〜」

こいつは本当にどうでもいい事ばかり勘が良すぎるぞ。もっと自分の身に差し迫った事について頭を働かせろ。

「あのな、いい加減マジで懲りろよ。どんだけ痛い目見れば学習すんだ？」

いかにも俺をからかいたそうなウザいニヤつきの一夏は、急にハトが豆鉄砲食らった顔になった。

「急になんだよ？ 俺なんか変なこと言ったか？」

俺はデザートのヨーグルトを食うスプーンで一夏の左右を指した。『両手に花』なのをまた忘れてるぞ」

一夏が不思議そうに箒とセシリアを見やると、冷え切った態度に熱い怒りを内包した二人が暗い目で一夏を射抜いた。

「一夏……そんな三治の事が気になって私はどうでもいいか」

「ホホホ……一夏さん、難聴が酷いご様子ですわね？ 私とても心配ですわ」

二人とも整った顔立ちで冷笑しながらどす黒さを漂わせる姿は恐ろしくて見ていられない。それは本音たちも同じようで、俺たち外野は大急ぎで朝食の残りをかき込みトレイを手に立ち上がった。

「じゃ後で一夏」

「教室でね〜」

「わ、私たちも先行くね」

結局箒とセシリアの怨嗟えんさと一夏の悲鳴を背中で聞くパターンは今後も続きそうだ。しかし二人とも大声で怒鳴り散らさなくなった方がさらに恐いとは。何も言わない方がよかったのか。

「な、なんだよ二人とも？ なんか恐いぞ？ なあ三治……って先行くなよ!？」

なんで一夏は女子の感情にここまで鈍感なんだろう？　しかしさすがにこれを放置すると、いずれ取り返しのつかない事になりかねない。いくら自業自得といっても、いい加減何か考えとくべきか。

しかし一体どうすればいいってんだ？　女子に対してのみ異常な無関心と難聴って、医者が聞いたら呆れて追い返されるのがオチだ。いやまてよ、精神的な原因によるものとしたら……うーん。

その場の思いつきで考えても分かるもんでもないか。俺は精神科医や心理学者じゃないし、そもそも本人が自分で意識しなけりやならん問題だろ。一夏が自分で意識……根本的に精神を変化させんと無理じゃん。

「その根性はこの私が直々に叩き直してやるから安心しろ。放課後必ず道場に来い。逃げたら……その時は真剣を持って訪問するからな」
「二度耳掃除をして差し上げますわ。ホホホ、もう二度と私の声を聞き逃さぬよう大きく大きく広げましょう」

既に女性陣の対応は始まっているようで頼もしい限りだ。一夏にや悪いが当分は彼女らに任せよう。

まあ何の解決にもならないだろうけどな。

「お、おい二人とも——三治！　ちよつと助けてくれよ！　なんでいつも俺を置いていくんだ!?!」

「だから言ったろ。たまには自分で二人とよく話し合え」

「そんな!?!　二人ともメチャクチャ怒ってんだぞ？　一人ぐらい引き受けてくれよ!?!」

トンチンカンなことを言う一夏が冷え切った空気に挟まれ朝食も忘れてあたふたしだす頃には、われらが織斑先生のジャージ姿が現れ、生徒たちを急かす所でひとまず矛を収めるだろう。

でもその後は大変だ。いつにも増して大変だ。なにせ俺がうるさく言いブリュンヒルデが鉄拳食らわして、人前で感情をぶつけるのを押さえ込んだから、溜まった不満を爆発させたときはどえらい事になるだろう。

一夏のSOSを聞き流しながら、そんなときやIS模擬戦で発散させるかと思った。絶対防御があるんだから何やったって死にやせんわ。

少し価値感が織斑先生に毒されてきたかもしれない。

放課後になり、本音に連れられ簪さんの部屋を訪れる段になって初めて、簪さんは本音と相部屋だと聞いて驚くと同時に緊張した。なにせ本音の部屋にいくのと同じ事なのだ。

手ぶらで行くのもなんなので、一度寮に帰ってカバンを置いてから本音と近くの洋菓子店でショートケーキをいくつも見繕ってから取って返した。三人分のはずだが本音は10個近くを欲しがり、けっきょく6個入りの紙箱を2つぶら下げていく羽目になった。

「かんちゃん、今日はお客さん連れてきたよ」

「おっ邪魔します」

本音がドアを開けると、両手が塞がっている俺は挨拶にちよつとどもりながら中へ入った。

女子の部屋に入るのって初めてだ。妙にどきどきするし無駄に色々期待してしまう。一夏が筈の部屋に入った時とはえらい違いだな。

中には会長と同じ青い髪にヘッドギアらしきものを着け眼鏡をかけた少女がいた。パソコンのディスプレイに向かいキーボードを叩き続けている。

「……誰？」

その顔がこちらを振り向いた。会長と姉妹なのだというのも領ける良く似た顔立ちだが、自信にあふれた態度でポジティブな印象の会長とは正反対の、どこか内気で自信なさげな雰囲気を感じられた。

「あ、どうも初めまして、音羽三治っていいいます。えつと二人目の男性操縦者って言ったら分かるかな？」

やっぱり初対面の相手と話すのは苦手だ。早くも来たことを後悔し始めている自分が情けない。

「黒い制服……あなたが、音羽くん？」

向かい合った彼女は俺のことをまじまじと見た。まあ珍しいのは分かる。ここIS学園じゃ男と言うだけで異端なのに、みんな白い制服の中で黒服の奴がいたら気にならない方がおかしい。

でもこうもジロジロ見られるのはやはり慣れないというか困る。そろそろどこか座つてもいいかなあ。

「そうだよ、今日は本音に誘われてさ。これケーキ、好きな選んで……あの、簪さん？ ……あつ更識さんと呼ぶべきかな？」

「駄目！ ……名前がいい」

いい加減突つ立つてるのも間抜けだが、かと言ってじつと見られている相手にどこか座つていいかと聞くのもためらってしまう。しかし名字で呼ぶのは即座に拒否された所を見ると、姉と比べられる事以外にも実家のことでコンプレックスがあるのかも知れない。

「はいおとーさんはここ座つてねー」

本音が小さなイスをテーブル前に運んで来てくれたので、取り合えずテーブルにケーキの箱を置いて座つた。

「かんちゃんも一緒に食べようよー」

じつと座つたまま俺を見ていた簪さんがようやく立ち上がり、皿とフォークを用意していた本音と一緒にテーブルに着いた。

二つの紙箱を開けるとクリームやフルーツの匂いが漂い、本音が飛びついた。

「わぁーどれにしようかなー私はこれとこれと——」

スイーツの前だと本音は何にも増して食い気だ。なんか大事な事忘れてないか？

「本音、一度に食べ過ぎ。……ほんとに、もらつて良いの？」

簪さんは冷静だ。こうして見ると本当に会長とも本音とも対照的だよな。むしろ俺に近いのかもしれない。

「どうぞどうぞ。そのために買ってきたんだし好きなの食べてよ。俺も適当なやつ食べるかな」

どうも彼女は俺を警戒しているようだ。本音の話だと、今までルームメイトの二人以外がこの部屋に入った事は無いらしい。

そんな調子である日いきなり男子が入ってきたら、そりや気にするわな。俺は二人が選ぶのを待つて、箱の端に残っていたモンブランを取ろうと手を伸ばし——

「あつ……」

簪さんがかすかな声を上げたのを聞いて、思わず手を止めた。ちらと顔を見る。

「……気にしないで」

言葉とは裏腹にすごく気にしている表情だった。いつぱいあるんだから欲しけりや取つとけばいいのに。

「いいよ、食べたいんでしょ？ 12個もあるんだし、俺はやっぱこのチョコのやつにしようかな」

選ぶふりをしつつまた簪さんをチラ見すると、案の定ホツとした顔をしている。

「あーそれ私が食べたいのにく」

今度は本音が口を挟んできた。

「じゃあねえなあ、じゃあ俺はこれで」

「あつそつちのも置いといて〜」

「いい加減にせい！ どんだけ食う気だよ？ 簪さんと俺の分も残しとけー」

食い気にもいい加減限度つてもんがある。俺がちよつと怒つたとき、簪さんが少し体を震わせたのが視界に入った。

「ふふっ」

本音が驚きを示した。

「かんちゃん笑つてる……かんちゃんの笑顔、ほんとに久し振りだよねー」

えっ？ という顔で簪さんは本音を見返した。

「私、そんなに笑った事なかった？」

本音はケーキを口に運ぶのを止めずに頷いた。

「うん、入学してから毎日パソコンとにらめっこで、ちゃんとしたもの食わずにカップラーメンとかで済ましちゃうし、ほとんど他の事しないしお喋りもあんまりしてないし」

ここに来てずっとそうだったよー、そう答えてまた食べかけのタルトをフルーツがこぼれないように大口を開けて押し込んだ。

簪さんはちよつと下を向いてしまった。本人は専用機を完成させるのに必死で、他の事はまるで目に入らない毎日を過ごしていたのだ

ろうか。

「ケーキも良いけど、ここの食堂結構美味いって知ってる？ 値段も高くないしお得だよ」

栄養も大事だし、気が向いたら行ってみるといいよ。俺はなるべく穏やかな声を意識してそう言うのと、甘栗の乗ったマロンを一口食べた。これ中々いけるな。

「あーそれ食べちゃった〜」

本音がまた情けない声を上げた。全部お前が食うつもりだったのか。

「その辺にしないとスイーツで友達なくすぞ」

俺が残りをあっさり口に押し込むと、本音はぶうっとふくれた。フグかよ。

「ふふふ、本音も欲張りすぎ」

簪さんがちよつと笑顔になって、本人もチーズケーキを切って食べた。

「あ……美味しい」

「でしょー？ 布仏さんが腕によりをかけて選んだのだ〜」

本音がえっへんと胸をそらした。また口の端にタルトの欠片がついている。

「お前はあれ欲しいこれ欲しいって言ってただけだろ」

俺の呆れ声に簪さんがこちらを見た。

「……迷惑、だった？」

「いや、そんな事ないよ。ただこんなスイーツ大食い魔人と一緒だと、簪さんも大変じゃない？」

簪さんの不安そうな声に俺は慌てた。つい少し早口になってしまった。

「あー、おとーさんひどーい！ 私は毎日かんちゃんのお世話してるの〜！ お菓子好きでかんちゃん困らせた事ないもん」

本音が抗議するものの、直後にイチゴシヨートをがつつり食べているものだから説得力がまるでない。

「ほんとかよ？ 簪さんまだ一つくらいしか食べてないぞ、本音それ

何個目だ？」

「ま、まだ三つ目だもん」

その時、俺と本音のやりとりを見ていた簪さんが嘖き出した。声を上げて笑う簪さんを見る本音はぼかんとしている。簪さんはずいぶん長いことふさぎこんでいたののかも知れない。

「ごめんなさい……音羽くんは本音が言ってた通りの人ね。『おとーさん』って呼ばれるの、分かる気がする」

ようやく笑いが収まった簪さんは、俺と本音を見比べて言った。

「はあ……」

別に笑われても構わないけれど、おとーさん呼ばわりが分かると言われるとちよつと複雑な気分だ。

本音は急に恥ずかしげな表情で赤くなっている。

「まあいいや、取りあえず二つくらい食べてしまおう。まだ夕飯までには時間もあるし」

そう言つて今度はショコラを取ると、それに続いて簪さんと本音もそれぞれ新しいケーキを一つ取つた。

本音はちよつと遠慮しろ！

「おいしかったー」

本音は大満足の様子でイスにもたれかかっている。お前五つくらい食べただろ。

「そうだな、結構いい店が近くにあつてよかつた」

俺は皿とフォークを片付けようとすると、簪さんを手伝おうとして、手が触れそうになった瞬間キツと睨まれた。

「ご、ごめん」

慌てて手を引っ込めると、簪さんも自分の反応に戸惑っているようだった。

「……ごめんなさい。そんなつもりじゃなくて……」

なんだか、まだ警戒されているように見える。下心があるように見えただのか？ だとしたらショックだ……。

「あの……音羽くんが嫌いとか……そうじゃないの……」

簪さんも、上手く言えない何かがあるのかな。

「男子とかはちよつと、苦手とか？」

彼女は大きく首を振った。

「得意じゃないけど、そんな……特別苦手とかじゃ……ない」

なんだか申し訳無さそうにしている。簪さんが俺や男子自体は苦手じゃないけど、距離を置きたくなる事情……手を触れられるのが嫌ならそれを気にすればいいだけで、反射的に睨みつける事には多分ならない。

ひよつとして、俺ではなく俺を通して他の誰かを警戒しているのか？ そう考えれば確かに心当たりはあるが……。

「もしかして、俺が誰かに頼まれて来たんじゃないかと疑ってる？」

簪さんは体をこわばらせて俺を見た。思い切って尋ねてみたが、どうやら凶星のようだ。

「生徒会長に言われて来たんじゃないよ、本音に誘われたのは本当さ。会長は俺が簪さんと会ってる事すら知らないよ」

心中を見透かされたように感じたのか、簪さんは俺を恐れるような顔で見つめた。

「どうして、それを……？」

少しだけ体の力が抜けたようだが、疑惑の瞳は変わらなかった。やはり、間違いしている姉が俺を送り込んだのではないかと警戒していたらしい。

「俺もIS学園に入る前は長いこと出来の良い妹と比べられて、いい思いはしてこなかったからな。同じ境遇の奴が一番同情されたくない相手は誰か、良く分かるからさ」

入学以前を思い出して、俺は自然と苦い顔になった。簪さんは目を丸くしている。

「……妹さん……いるの？」

興味がわいたようだった。同じような思いをしている人間はあまり身近にいなかったのだろうか。本音は生徒会の仕事をテキパキこなす姉と比べられても全然気にしないだろうし。そう考えるとあいつ結構図太いな。

「ああ。俺と違って要領良くて友達多くてさ、勉強も出来るしスポーツもそこそこ。顔は俺の妹だしまあ……減点対象にならない程度？」

親も俺には失望してたからその分妹には期待してたよ」

苦笑いしながら答えると、簪さんは俺を見ながらじつと耳を傾けていた。

「仲……良かったの？」

「全然！笑っちゃうほど目の敵にされてたよ。俺みたいなダサいのが兄とか最悪だつてさ。特に中2になって、IS適性検査を受けた後からが酷かったよ」

ISと聞いて、簪さんの目つきが鋭くなった。

まずかったかな……。

「妹さん……どうだったの？」

うっかりした事を言つて後悔したが、どうにも答えない訳にはいかない雰囲気だった。

「うん……圏外でさ、かすりもしなかったんだ。最低基準のCどころじゃなかった。あえて言うならFかGだろうって検査官に言われて、その後は滅茶苦茶荒れてたよ。本人はISなんて女なら誰でも動かせるって思ってたらしいから、よけいショックだったんだろう」

話を聞いてなんらかの衝撃を受けたのは簪さんも同じだったようで、ぐつと顔つきが厳しくなった。

「……それで……どうしたの？」

俺はどうにも息苦しくなってきた。

「……まあ、IS学園は完全に駄目になったからね。第二志望の高校に向けて切り替えたんだけど、完全に吹っ切れた訳ではないみたいでさ。よく俺に憎まれ口を叩いてたよ、ISも動かせなくせにって」

「……そうなの？」

「ああ……俺も大人気なかったつて言うか、それはお前もだろつて言い返してさらに怒らせてさ。あいつもいきなり殴りかかってきて、それで力で負けるとそこらにあるもん投げつけては自分の部屋に閉じこもってたな」

「……そう」

簪さんは遠い目になっていた。自分がIS学園に入学する前の姉との関係を思い出しているのかもしれない。

と、また俺を見て尋ねた。

「入学前に……仲直りできた？」

一瞬言葉に詰まった。入学以来、家族のことなんて今までほとんど気にも留めずに過ごしてきた。そんな余裕なんて無かったというのもある、しかし……。

彼女に問われて、自分の家族に対する気持ちが恐ろしく希薄になっていることに気づかされた。

「……いや、俺がIS適正者と知って殺さんばかりの勢いで責められてさ。女の自分が動かせないのに、男の、それもよりによって出来の悪い兄が適正者だってんだから、やってられないってのもあつただろう。でもそれ以上に警察の警備とマスコミの攻勢、周囲の人間の好奇心の視線や凄まじい野次馬を呼び寄せた事が許せなかったんだと思う」
親も倒れたしね。そこまで喋って簪さんの顔を見ると、申し訳無さそうな様子でうつむいてしまった。俺が聞かれない事に答えているのを察したのだろう。

実際簪さんの言葉に、俺は自分の内の一番嫌な所を突かれたようだった。ここに入って以来家族とは未だに連絡を取っていない。連絡先が一向に知らされないというのもあるが、知れた所で俺自身が家族の様子を知るのがなんとなく恐かった。

離れた家族がすでに俺無しで成立していて、俺は赤の他人になっているような気がするのだ。

もし卒業して誰も迎えに来なかったら、俺はいったいどこへ行くんだ？

就職とか進学とか当たり前の進路が浮かんでくるはずなのに、すべてがあやふやで、実体のない雲の上に立っているような落ち着かない気持ちの悪さを感じた。

「おとーさん、大丈夫？」

気づくと本音が俺のそばに立って、俺の背中に手を当ててさすっていた。

そうしてもらうと、不安な気持ちが少し落ち着いたようだった。

「あ……ああ。別に大したことないって」

無理に笑って見せたが、余計に心配させてしまったようだ。本音の顔が不安そうで少し辛い。

「ごめんなさい、私……よけいな事聞いちゃって」

簪さんはすっかりしよげてしまった。彼女を元気づけようとして会いに来たはずなのに、これじゃあ本末転倒だ。

「謝る事なんかない、誰だって自慢できない過去ぐらいあるはずだろ。さつきは俺がたまたまそれを話しただけだよ」

つい語気を強めて言ってしまった。これ以上簪さんが気に病まなければいいんだが。

「……それだったら、私だって……」

急に垂れていた顔を上げて、言った。

「……以前、姉さんにこう言われたの……あなたは何もしなくていい、私が全部してあげる。だから、あなたは無能のままでもいいさって

……私、それからずっと……姉さんのこと避けて……」

苦渋くじゆうをにじませる表情でそれだけ言うと、簪さんは両手を握り締めたままうつむいた。

心の傷の告白は、俺に辛い事を言わせた埋め合わせだろう。しかしそこには辛い過去のほかに彼女の姉への忌避感の原点があるようだった。

俺の余分な一言が、長い間懸案だったという簪さんが会長に隔意を抱く理由を語らせるとは、人間何が幸いするか分からない。

「確かに会長がそう言ったの？」

俺が聞くと、彼女は泣きそうな顔で頷いた。本音も悲しそうな表情だ。

俺は驚くと同時に、にわかにはその話を信じられなかった。あれだけ生徒たちのありようを大事にしている会長が、自分よりいくらか能力が下と言うだけで妹にそんな言葉を——ちよつと待てよ。

俺は簪さんが言われたという言葉をよくよく吟味してみた。何も
しなくていい、全部してあげるから、無能のままでもいい……。

会長の実家は、えーとなんだったか、そうだと暗部用暗部とかいう
対テロ等の秘密工作を生業なりわいとする家系だったはず。そんな所で有能
で色々やってたら、むしろ大変な苦勞をするのでは？ なにせ命の危
険があるだろうし。

つまり会長は、簪さんがそんな苦勞や危険を背負わずに済むように
そんな言葉を？

本音を見ると、何かに気づいたような顔をしていた。同じ結論に達
したのかな？

「……なるほどな。何も分からずにそんな事言われたら、誰だって腹
立つよな。でも」

俺は簪さんを正面から見ても言った。

「多分会長は、簪さんを傷つける為にそんな事を言ったんじゃないと
思う。どうやら事情があるらしいな」

簪さんは驚いて俺を見返した。そんな事は考えもしなかったのだ
ろう。

「どうして……どうしてそう思うの？」

俺はふうと息をつくとき、本音に向き直った。

「今の時間、会長は生徒会室か？」

間髪を入れず本音は頷いた。

「簪さん。その質問に答える前に、会長に確認したいことがあるんだ。
ちよつと生徒会室に行ってくる。すぐに話をつけて戻ってくるから、
少しの間待っていてくれないか？」

簪さんは戸惑った表情だが、どうにか承諾してくれた。

「本音——」

俺の言葉が終わらぬうちに本音が答えた。

「お嬢さまに会うんでしょー？ 私も着いていくから〜」

むん、と拳を握っているのだろう両袖をぶらぶら揺らして、いつも
より強い調子の声だ。

「じゃ、すぐに戻るから」

俺は本音と共に部屋を出ると、並んで生徒会室を目指した。

目的地への道すがら、俺は本音とそれぞれの胸の内を確認しあうと、おおむねお互いの心算は同じだった。

「まったくあのサボり魔は。俺たち相手には飄々^{ひょうひょう}としてるくせに、実の妹相手には……」

よく考えると、俺も人のことは言えなかった。自分の家族相手に素直だったことがどれだけあったろうか。

「気持ちには分かるけど、私はお嬢さまがああいう言い方になったのも分かるかなー」

本音は不満そうな顔だが声音は同情的だった。

「姉妹だからこそ素直にやなれんか」

「あつそれ今言おうと思つたのに〜!」

本音はいい所を取られたと言ってぷりぷりした。

生徒会室のドアを開けるなり、本音が大声を出した。

「たのもうー!」

すぐに中にいた虚先輩がきつい目で睨んだ。

「ここは道場じゃありません。遊ぶなら他へ行きなさい」

うにいくと小さくなる本音に続き、後から入った俺はすぐに言葉を引き継いだ。

「会長はおられますか? 少し話をうかがいたい」

虚先輩の横を視線で薙ぐと、会長がギョツとしてこちらを見た。

「とっ取調べっ? 取調べなのね団長!」

忙しいはずなのになんだかダラダラしている様子だ。虚先輩はい顔をしないでだろうが、少しの間連れ出しても影響はないだろう。

「工作中済みませんが少々お時間を拝借します。本音、出るぞ」

俺は部屋を出るよう会長に合図すると、もと来たドアに戻った。

「自分が連行されるってなんだか新鮮だわ! もうじき夕飯だしカツ丼が出るわね!」

「自腹でどうぞ」

退屈していた所に事件が降ってわいたので、面倒な仕事から逃げられて嬉しいのだろう。ウザいくらいにハイテンションだ。

「お嬢さま！……もう、今週中に終わらなきや徹夜ですからね！」

虚先輩の抗議と会長の放言を聞き流し、本音と会長が出たところで後ろ手にドアを閉めた。

「で？ 話って何かしら。取りあえず今はこれといって思い当たる件はないけど？」

「簪さんの件です」

一瞬会長の顔が野獣のそれになった。すぐにいつもの表情に戻ったので、注意していなければ気づかなかっただろう。

「……一体何かしら？ 事と次第によつては——」

俺は会長の言葉をさえぎって言った。

「本人から話は聞きました。妹さんにこう言ったそうですね」

俺が簪さんから聞いた言葉をそのままそっくり伝えると、会長は苦しげな表情で壁の一点を見つめた。

「あの子の……簪ちゃんの為だったのよ」

深く重いため息一つ。その後会長は普段見せない顔で問題の言について語り始めた。

「あなたは詳しく知らないでしょうけど、うちの家系は表に出せない事が多くてね。人には言えない事情だらけなの。でも、そんな闇の部分に深く関わるのは私だけで充分……あの子にまでそんな苦労を背負わせたくない。ただそれだけを願って伝えた、私の胸の内の願いだった……」

追い詰められたような会長の表情を見て、俺は必要以上に会長と簪さんのプライベートに食い込んだ事を反省した。いくら放っておけないと感じたとはいえ、家庭の事情まで踏み込んでしまったのはやりすぎだったかもしれない。

しかしここまで来た以上、逃げることもできない。

「俺と本音も薄々そうじゃないかと感じてはいました。会長は簪さんに暗部の世界に関わらせたくなかったんだろうと」

俺は言葉を切って本音を見ると、唇を噛み締めた決意の表情を見せた。

「しかし、肝心の簪さんにはそれが伝わっていないんです。単純に全

部姉がやるからお前は無能でいるという意味に捉えてショックを受け、会長に不信感を抱いている。かなり辛い思い出だという口ぶりでした」

驚愕した会長は俺に掴みかかった。

「どういうことよ!? あなた一体簪ちゃんに何を吹き込んだの!」

まさか会長がこんなに狼狽する姿を見るなど想像もできなかった。俺はどうかかなだめようとしたがまるで上手くいかない。

「お嬢さま!!」

思いがけず凜とした声が響いた。会長は大人しくなり力なく手を放した。

声の主は本音だった。あいつがこんな声を出せるとは。今日は知っているはずの人間の知らない面をいくつも見せられて驚くばかりだ。

「かんちゃんに謝って下さい。お嬢さまは良かれと思って伝えたかも知れないけど、かんちゃんは意味が伝わらなくてすごく辛かったんです。ちゃんと謝ったあとに、お嬢さまの本当の気持ちを教えてあげて下さい」

長い付き合いであろう本音の言葉に、会長はやっと自分の立場と何をすべきかを理解したようだった。

「分かったわ……あの子にそんな苦しい思いをさせてたなんて……私は姉失格ね。簪ちゃんに見切りをつけられても仕方がないわ」

魂が抜けたような会長に俺は首を振った。

「簪さんが本当に会長に見切りをつけていたなら、同じようにISを自力で完成させようなんてしないでしよう。会長と同じことをしようとしているのは、そうすることで会長に自分を認めて欲しいからじゃないですか?」

会長は俺を見た。

「……そうかしら?」

「そうですよー。かんちゃんはきつと謝ったら許してくれるよー」

本音のいつもの口調に、会長だけでなく俺も少し救われた気がした。

「そうね……愚痴を垂れるのは後でいいわ。とにかく簪ちゃんに謝りに行きましよう！」

俺はほっとした。すったもんだの後だが、どうにか簪さんに顔向けできる結果になりそうだった。

「ごめんなさい簪ちゃん！あの時あ言ったのはあなたを更識の闇で苦しませたくなかったからなの!!」

察に著くなり会長は土下座し、簪さんに涙ながらに謝った。簪さんも会長の真意を受けて、泣きながら会長を抱きしめて和解となった。

本音も感動して泣いていたが、俺はそもそも部外者だしどうにも湿っぽいのは苦手な性質たちなので、事の顛末を見届けると水を差さないようそつとその場を離れた。

色々あったが、どうやら収まるべき所に収まったようで何よりだ。緊張する場面の連続でこわばった体と神経をカフェで存分に緩ませていると、スマホに着信があった。会長からだ。

《ちよつとどこにいるの？あなたがいないと仲直り記念のお祝いが出来ないでしょ?》

すぐに食堂に來なさいと言われて切れた。ちようど近くにいるし、のんびり歩いて向かうと、大きな円形のテーブル一つを占領した会長たちが多くの料理を囲んで手招きしていた。

「おとーさんはやくはやく〜」

「ほら、キミが来ないと始まらないでしょ!」

「今日は……ありがとう。せめてものお礼。私たちのおごりだから」俺はテーブルに歩み寄った。へたなレストランのコース料理なんかより遥かに豪勢だ。

「うおっ凄い! ……みんな大丈夫か? こんな豪華なもの頼んじやって」

ふふんと会長が立派な胸を反らした。

「この払いは更識で受けるから問題ないわよ! どんどん食べなさい」

「お、おおそうですね、それじゃぐ馳走になりますね」

それって暗部の経費か？ ……まあこれぐらいは許されてもいいよ、な？

「いただきますーすー」

言うが早いかな本音はでかい七面鳥らしき肉にかぶりついている。ほんと食うときはいつも以上に元気だな。

「ふふ、頂きます」

簪さんも料理に箸をつけ始めた。会長はそれを見て安心したのか、自分も同じものを皿に盛って食べ始めた。なんかこの人、よく見ると若干シスコンじゃないか？

俺も遠慮なく頂くとしよう。しかし今日はいろいろと食ってばかりいるな。

……だが、ミートローフとローストビーフを取り皿に載せた時、ふとなにかを忘れていている違和感に胸がつかえた。

なにか、だれか忘れて——あつ！

「会長！ 虚先輩はどうしたんですか!？」

思わず上げた大声に、一同は料理を口に含んだまま凍りついた。

「あふああ、すつふありわふうれふえふあふあ」

「食べ終わってから喋って下さい」

ようやく口の中身を飲み込んだ会長は、開き直った態度でさらりと言った。

「今から電話してあげましょ。虚もお腹空かしてるでしょうし」

ほんとに変わり身早いな！ 忍者だからか？

「別に良いですけど、会長があのと仕事に戻らなかったのは俺たちのせいじゃないですからね」

途端に会長は憤慨した。あんたが怒ってどうする！

「なんでそんなに冷たいのよ!？ 連れ出したのは音羽くんでしょ？

一緒に叱られてくれても良いじゃない!？」

「アホか！ 俺は仕事までサボれとは言っとらんわ!!」

喧々諤々の争いにも本音は一心不乱に料理をむさぼり、簪さんは驚きと呆れの表情で俺と会長の言い合いを見つめていた。

会長のいい加減さにほとほと呆れた俺は、もうこの際虚先輩に了解を取って簪さんにも生徒会に入ってもらい、会長の仕事ぶりを監視してもらおうと思った。

その背後に、分厚いファイルをいくつも抱えた虚先輩がゾンビのように忍び寄っている事も知らずに。

ヒート・アフター・ダーク

「生徒会の人数を増やすって言っても、簡単に選ぶわけにはいかないのよ」

会長はデザートのパフェをスプーンですくいながら言った。

「IS学園生徒会は、教職員と協力して学園内の治安や発生した問題への対処、特定生徒の安全確保なども、仕事である生徒自治に入るの。そうなる学園内で仕事を任せられる信頼の置ける人はなかなか少ないのよ」

その『特定生徒』っていうのは男子の事よ？ 貴重な男性IS操縦者だもんね。会長は俺の目を覗き込むようにしていたずらっぽく笑った。

どうも生徒会の異常な多忙さを改善する道は険しいようだ。俺は食後のコーヒーを飲みながら会長の言葉に耳を傾けていた。8時からお願いしてある山田先生の銃器講習と射撃訓練までまだ2時間近くある。

ちなみに貴重な男子のもう一人からは救援要請らしき着信が入りまくりだがマナーモードで無視している。たまにはお前も自力で頑張れ。

「……そんなに大事な仕事があるのが分かっている戻ってこなかったんですね」

一方で虚先輩の声は氷よりも冷たい。怒って当然か。10分かそこらで戻る予定だったのに、あのまま簪さんや本音とくっちゃべった後、俺も呼んで仲直りパーティーやって気がつきや2時間近く経っているんだから。

「待って！ 怒らないで虚ちゃん！ 簪ちゃんと久方ぶりの気の置けないひとときだったのよ？ 今までの失われた時間を取り戻すにはこれでも全然足りないのよ!!」

相変わらずの言い訳だがいつもとは雰囲気が違う。単にサボりただけではなく、もつと大事な何かのために必死という感じだ。気持ちだけは分からんでもない。ずっと姉妹同士で抱え込んできたわだかま

りがようやくやく氷解したのだから。が、ちよつと妹との時間に執着し過ぎじゃないか？

しかし俺からすれば多少敬意を感じるのも事実だった。考えてみれば物心ついて以来、妹と素直に接した事なんてあまり覚えがない。ましてや勇気を奮つて自分から過失を謝りにいくのは……。

俺には一生出来ない事かも知れない。

しかしいい加減虚先輩が静かにキレそうだ。多分この人が仕事を投げ出したら、生徒会は機能停止してしまうだろう。というかこの人がほぼ一人で生徒会切り盛りしてんじゃないの？

「気持ちばかりですが、簪さんとは和解したんだしこれからいくらでも機会はあるでしょ？ あんまりサボってたら折角仲直りした簪さんに愛想尽かされますよ？」

俺は取りあえず仲裁に入ってみた。ちらりと簪さんを見ると、えつという表情の後に、おずおずと口を開いた。

「まさか！ 簪ちゃんに限ってそんなこと——」

「ちや、ちゃんと生徒会の仕事……した方がいいと思う……虚さんも……困ってるし」

「ほらー！ ……えっ？」

会長のドヤ顔にひびが入った。

「そら見なさい。妹にカツコ悪いとこばつか見られてどうすんですか。少しは生徒会長らしい所を見せなきゃダサイ事務員で終わっちゃいますよ？」

実は以前から会長の制服は何かのアニメで見たアイドル事務員みたいだと思っていた。

「誰がダサイ事務員よ!? これはスーツをイメージしたベスト風なのよ！」

会長は襟を引っ張りながら抗議した。そうだったのか。どうでもいいけど。

「じゃあこの後はちゃんと仕事に戻りますよね？ このままだらけてたら簪さんの見てる前で虚先輩にボロクソ言われますよ？」

「くっ、分かったわよ、もう！」

やっと生徒会の仕事も回りそうだな。会長は生徒会役員でもないのに生意気だわとかブツブツ言っている。肩をすくめて虚先輩を見ると、先輩はやれやれという感じでため息をついていたが、俺の視線に気づいて会釈した。

「……いいですね、お嬢さま？ それを食べ終わったら一緒に生徒会室に戻りますよ。それから本音も」

急にお鉢が回ってきた本音がビクンと跳ねた。

「え、えー？ 私はいよいよ」

「駄目、いい加減きちんと仕事を回せるようにしないと。私とお嬢さまが卒業したら、簪さまと本音が生徒会を引き継ぐ事も考えなければいけないのだから」

うにいと縮む本音を厳しい目で見る虚先輩が、ふと俺の方を見た。

「そういえば私からのお礼はまだでしたね。お嬢さまと簪さまの和解を取り持って頂いて、誠に有難う御座いました。本音、あなたからもきちんとお礼は伝えたの？」

「あーもう伺うかがいました」

本音がまた縮んでしまうので、俺が適当に取り繕った。だいたい今さら水臭い話だ。

「そうですか。ふふ」

俺の方を向いた虚先輩は穏やかな笑顔を見せた。見抜かれたかな。しかしすぐに真面目な顔で俺に質問した。

「そういえば急な質問で失礼ですが、音羽くんは交渉術や人心掌握しやうあくについて造詣ぞうけいがおりですか？」

虚先輩の目は本性を見透かそうとでもするように俺を捉えて放さない。言動からすると、どうも俺が人を上手く操っているのではないかと疑っているようだ。

「いや、あいにく学のある人間でもないんで」

事実その通りだ。俺に人を操るような知識や技術なぞない。そもそもそんなもんがあったら、入学以来こんなにトラブルに見舞われないうような周囲をコントロールできるわな。

「そうですか？　しかしあなたの入学後の活躍を見ると、何かあるように思えてなりません。……これまでの経験か何かで、音羽くんに大きな影響を与えたものはありませんか？」

そう言われて首をかしげた。言うほど活躍してるか俺？　それに大きな影響のある事なんて、ISが動いてここに入学するまでのゴタゴタくらいしか浮かばない。

「多分それではないんですが……それ以前には？」

それ以前といえば、女尊男卑で世の中おかしくなって小中学時代校内で男女のトラブルが増した事ぐらいだ。バカが増長し下らん事で罵声が飛び交い一ヶ月ごとに暴力沙汰があった。本当にろくなもんじゃなかった。

「……大変でしたね。その当時になさった苦勞が、現在の音羽さんを形作ったのでしょうか？」

それはどうだろう？　確かに影響は大きいかもしれないが、それだけで今の自分が出来上がったとも思えない。もしそうなら、女性に強烈な不信感だけで接して今は孤立してそうだ。少なくとも義務教育当時も、まともな女子はまともだったし、度が過ぎる奴は大概オラついた男子にボコられて問題になっていた。ボコった奴は転校したが怪我した方も割に合わないだろう。

「うーん、それもあるかもしれませんが」

今のお前はどうかやって出来た？　何に影響されてそうなった？

そんな事を言われてハイこれですなんて言える奴がいたら見てみたい。……いや、一夏とかセシリアは案外サラッと答えそうだ。一夏はメツチャ短く単純で、セシリアはこないだの新聞部のインタビューみたいにダラダラと長くなりそう。

しかし今日はやたらと俺の過去を訊かれる一日だな。俺は少し冷めたコーヒーを飲み干した。

「ふっふっふ、私はちゃんとして知ってるわよ！　今の音羽くんがどうやって生み出されたかをね！」

いきなり会長が得意げに胸を反らした。あんた一体何をどうやって調べた？

「えー？ お嬢さまほんとにわかるの〜？」

「……お姉ちゃん……入学してから知り合ったばかりの人なのに……？」

「本当ですかお嬢さま？」

会長はドヤ顔のままテーブルに着く全員の顔を見回した。

「……それで、具体的に俺の何を知ってるんですか？」

会長はニヤニヤしながら俺を向いた。

「本人のプライバシーだから詳細は伏せるけど、音羽くんの好みは大體把握してるのよね〜。入学以前の趣味嗜好しこうは既に内閣情報調査室を通じて公安調査庁や警視庁公安部が収集した情報をもらってるし、それに入学してから今日までに通販サイトなんかであれこれ大量に注文したでしょ？ 危険物等の確認の為もあって、生徒会長としては内容を知らないわけにはいかないのよねえ。まあこれは教職員もだけど」

ゲッ!! おいこら暗部やって良い事と悪い事があんぞ?! ……つて教職員もつて、織斑先生とかも知ってるのかよ……まったくプライバシーも糞もねえ……。

「しっかし映画とドラマのBDとかDVDだけでも結構な数よねえ……本と漫画も多いけど。息抜きや趣味も良いけど、あんまりISの方も手を抜いちや駄目よ？」

……ム力つくなあ。言ってる事は正しいけどさ、人の個人情報覗いという何言ってるんだこいつとしか思わん。

軽く仕返ししてやるか。

「簪さんや本音にも同じ事してるんですか？」

調子に乗っていた会長が突然フリーズした。

「えっ？ いったいえそそんなことはなないわよ？」

急に目を逸らしどもり始めた。……これは完全にヤツてますな。

「お嬢さまー？」

「……姉さん、それ本当？」

会長を見る二人の目が途端に冷たくなった。ざまみろ。

「ちっ違うのよ簪ちゃん！ これはあくまで当人の安全と健全さを保

障するための措置で、決して興味本位とか心配でつい覗いたとかそんな事は決してないの!! ほんと、ほんとなのよ!?!」

……ちよつと同情したけどやりすぎじゃバカタレ。

「お嬢さま、さすがに簪さまに対してそれはいかなものかと」

虚先輩にまで言われてしまった。四面楚歌しめんそかだな。

「ちよつと! せっかく仲直りしたのに簪ちゃんから冷たい目で見られちゃったじゃないの! 音羽くんのせいよ!?!」

会長が慌てて俺に絡んできた。知らんがな。

「あ、俺そろそろ山田先生の訓練があるんでこれで失礼しますね」

俺はコーヒークップを置いて立ち上がった。本当はまだ1時間半も余裕があるが、必要とはいえ俺の個人情報覗いてその上ネタにした会長にはしばらく針のムシロを体感してもらおう。簪さんもさすがにこれぐらいの事でまた会長との間に深い溝を作ったりはしないだろうし。

浅い溝は出来るかもしれないけどな!

「本日は有難う御座いました。よろしければまた生徒会室にいらして下さい。歓迎いたしますので」

「……今日は……ありがとう」

虚先輩と簪さんが声を掛けてくれた。いまだにこれだけの事で結構照れてしまう。

「ええ、じゃあまた」

まあ気の利いた返事も出来ないけれど。

「音羽くんまさかほんとにこのまま行かないわよね!? ねえお願いだから簪ちゃんたちに誤解を解いて! これじゃまた簪ちゃんに嫌われちゃうわよ!!」

会長があんまりうるさいので、テーブルを立ち去ろうとした動きを一旦止めた。

「誤解を解くもなにも、勝手にプライバシー覗いた事謝ったらいじゃないですか。あとは簪さんたちにお詫びに何かしたらどうです? 高いもの奢おごるとか、生徒会の仕事毎日頑張るとか……」

むうつとした表情の会長はかなり不満げだ。私は何も悪い事して

ないのにと顔に書いてある。

「音羽くんや簪ちゃんのことを思ってたやむを得ずのことだったのに、もう！」

そうじゃねーだろ。やってる事自体は褒められたもんじゃねーっつうの！

俺が渋い顔をしていると、会長がどこか納得のいかない口調で話しかけてきた。

「……ねえ、なんだか音羽くんって私にだけ厳しくない？」

「気のせいですよ。それじゃあ」

理由を考えろ理由を。俺は会釈してその場を離れようとした。

「じゃあ私も一緒に訓練行くね」

本音が自然と一緒にについて——来れなかった。しつかりと腰周りを虚先輩に掴まれている。

「駄目。さっき言ったでしょ。そろそろ生徒会の仕事を覚えなさい」

「やだー！ 今日はおとーさんと一緒に行くのー！」

手足をバタバタさせている様は子供のようだ。いつだったか前にもこんなの見たな。

「本音、駄々っ子みたいなこと言っちゃ駄目……私も一緒に手伝うから」

簪さんが助け舟を出した。でも初めて会った時はかなり控えめで消極的な印象だったのに、姉に対する心のしこりが取れたら少し明るく行動的になったように見える。

「ほら本音、簪さまもこう言っているのだから」

「うー、分かったよお姉ちゃんにかんちゃん」

どうやらこっちも落ち着いたようだ……しかしこのまま俺だけ去るのもちよつと、なんかあれだよなあ。

ふと見ると、会長が滅茶苦茶期待のこもった目でこちらを見ている……すっごい見てる！ 目ヂカラ全開だろあんた!?

「じゃあこれで」

俺が背を向けると会長の絶叫が背後に響いた。

「何でよ!?! ここは一緒に手伝おうかなってなる流れでしょ!?! 空気

読みましようよお姉さんそういう子キライよ!？」

俺はすぐ振り向いた。

「冗談ですよ。ちよつと約一名の態度が感心できなかつただけです」
約一名つて誰よと怒る会長を無視して虚先輩に向き直ると真面目な顔をつくつた。

「俺も出来ることがあればお手伝いしますよ、あと1時間ぐらいは余裕があるので。まあ大した事は出来ないんですが」

「助かります。正直手の足りない状況ですので」

虚先輩の返事を聞くと、本音と簪さんを交互に見ながら、もうしばらくよろしくなと言つた。

本音は喜び簪さんもはにかんだような笑みを見せた。会長はほらやつぱり時間あるじやないと文句を言い、遊びじやないんだからビシビシいくわよとすごむと虚先輩に睨まれてしぼんだ。

生徒会室に行く前に本音たちが最後のデザートを食べ終えるのを待つ間、虚先輩が持ってきた幾つもの分厚いファイルが視界に入った。虚先輩あれ今週中つて言つてたな。今日木曜日だぞ？

早まつたかも……。

その後みんなで生徒会室に到着すると、虚先輩は手早くファイルを広げてゆき、大量の伝票らしきものや書類を分類ごまじまごとに説明すると、俺たちにテキパキと作業内容を教えて役割を分担させた。

俺は指示された伝票にひたすら生徒会の承認印を押してゆくだけの係だったので困ることはなかつたが、本音は未決済と決済済みの書類の仕分けや、どの場合会長に裁可をもらう必要があるかなどの細々とした説明を、獲物を取れない小動物のようなしおれた態度で聞いていた。結局物覚えのいい簪さんが間に入って、どうにか出来る範囲で作業を開始した。会長は最初悠然と会長席に座り、やるからにはしっかりねと俺たちに釘をさしたが、虚先輩が可否を決する書類の山と読むべきメールを提示すると半泣きで頭を抱えていた。

押印する伝票だけでもかなりあり、それが終わったら会長が未署名の書類について様式ごとに分ける本音の作業の一部を手伝うことになつていた。俺は機械になつたつもりでひたすら決められた箇所

ゴム印を押していったが、少しの休みを入れつつ全ての押印が終わる頃には7時半になっていた。

もう少し手伝ってあげたいが、そろそろ射撃訓練場へ行って山田先生と訓練の準備をしないとならない。

「済みません、そろそろ山田先生の訓練があるのでおいとましますね」

これ終わりましたので、と伝票を渡すと虚先輩が軽く頭を下げた。

「お疲れ様でした。今日は色々とお難う御座います」

簪さんや不平たらたらの方の会長にも挨拶し、部屋を出ようとする時本音の声を引きとめた。

「えーもう行っちゃうの？ お姉ちゃん続きは明日するから今日はもういいでしょ」

本音がまた駄々をこねだした。

「本音、音羽くんを困らせるような事言わないの。後1時間したら休憩だから」

虚先輩先輩が叱ったが、本音はまだ不満そうだ。簪さんも書類を整理しつつも本音と虚先輩のやりとりを見ては、少し難儀な顔をした。

どうせ訓練の後すぐ寮に戻っても一夏の家事を手伝わされるだけだ。ため息をついて俺は口を挟んだ。

「今日は銃の基礎講義と射撃体験みたいなもんですから9時に終わりますし、その後でよければまた来ます」

全員が振り向いた。虚先輩と簪さんは申し訳無さそうな顔で、本音と会長は同時にやったーと声を上げたが、二人で明らかに意味合いが違うようだった。

「気を使って頂いて……でも恐縮ですがお時間をお借りして良いなら是非に」

「ごめんね、関係ないのに……ありがとう」

「わーいありがとう！ 仕事終わったらケーキの残り一緒に食べようね」

「二人ともケーキって何よ？ それは後で追求するとして、この際生徒会役員になっちゃいなさい！ ね？ ハイって言いなさい！ ねっ!!」

虚先輩、簪さん、本音……あとついでに会長から返事をもらおうと俺は一旦生徒会室を離れ、一人射撃訓練場へと向かった。

教習用のディスプレイに代表的な2種類の拳銃、オートマチックとリボルバーの拡大イメージが写った。さらに手前のテーブルには赤や青に塗られたプラスチック製の教練用模擬銃がいくつか置かれている。

「はい、それではまず基本的な拳銃の構造と取扱い方法から始めましょう。あ、その前に憶えて欲しい一番大事な事があります」

山田先生は今思い出したとばかりに慌てて話を変えた。

「それは、銃口を絶対人に向けない、撃つとき以外決して引き金に触れない、銃は常に弾が入っているものとして扱うの三つです！ この三つだけは今日しっかり覚えて帰ってくださいね？」

「はいー」

俺じゃない男子生徒がバカみたいな大声で返事した。

「はい、いいお返事ですね！ 出来れば授業中もそのくらい元気よく答えて頂けると助かるんですが……」

山田先生の笑顔がちょっと複雑なものになった。気持ちは分かる。こいつがISの授業中いい返事が出来た試しがない。いくら難しいだったってたまには自分から予習したらいいのに、織斑先生の特訓が終わった途端にサボり倒した。

でも俺の胸中の方がずっと複雑だぞこのやろう。

俺はそのわだかまりの原因を張本人にぶちまけた。

「おい一夏、なんでお前がここにいるんだ？」

さつきからベレッタの模擬銃をもってあそんでいる一夏に俺は苛立ちを隠さず尋ねた。

「だって三治ずつとスマホに掛けているのにぜんぜん出なかつたじゃないか!? おれ一人で大変だったのに。千冬姉に聞いたたら、三治は今ピストルの訓練で山田先生と一緒に言うからさ」

それを聞いた簪とセシリアがさらにたたみかけた。

「一夏！ 急に千冬さんの所へ行くかと思えば……お前は篠ノ之流が

あるのだから、こんなもの必要ないだろう!？」

「一夏さん？ 射撃を教えて欲しいのならそう仰おっしゃって頂ければ私がいくらでもお教え致しますのに!」

訓練の準備を終えて、山田先生の前に座る俺の右に一夏、さらにその右に箒、俺と一夏の間には後ろから首を割り込ませて話しかけるセシリアという構図が、基礎講義の最初から続いていた。

俺はほとほとうんざりして苦言を垂れた。

「あのなあ、俺は必要だからわざわざ山田先生に時間割いてもらってんだ。遊びで来てんなら寮戻れよ」

箒とセシリアは黙り込んだが一夏はうるさかった。

「冷たいこと言うなよ! 放課後ずっと箒とセシリアがうるさくて落ち着かないんだって」

化学反応のように二人が声を上げた。

「一夏! 煩うるさいいとはなんだ!？」

「一夏さん、それでしたらご一緒に私の部屋でゆっくり紅茶でも」

「あ、あの今は音羽くんの講義の途中ですので、あの」

山田先生はどうしていいかわからずにオロオロしている。俺はもう自重する気はなかった。

「お前ら邪魔するならとっとと寮に戻れ! 迷惑なんだよ!!」

腹から出す声で怒鳴ると全員が驚いて静まりかえり、睨みながら顎で出口を示すとうなだれてとぼとぼと出て行った。

「で、ではその、続きをします……か?」

「お願いします」

俺の急な大声でおどおどしている山田先生に、強く促した。

ようやく再開した講義の続きを聞きながら、さすがにあいつらも懲こりただろうと思った。

俺自身がある程度の知識はあったので、一夏たちの脱線を差し引いても基礎講義自体はスムーズに終わった。最後に初心者向けの22口径のオートピストルとリボルバーを撃って、今夜の訓練の締めくくりとした。

山田先生に手伝ってもらってシャーペンの半分くらいの太さしか

ない小さな弾薬をマガジンに詰めてゆく。ちっぽけな22口径とはいえ、俺にとって実銃を撃つ初めての体験だ。正直言って心が躍る。何が何だか分からぬままISに乗っかってフラフラ動くのとはわけが違う、生身で経験する興奮と没入のひとときでもある。しかしこんな事を言ったらこの教師も生徒も呆れるか怒るだろうか。

射撃ブースに入り、オートマチックにマガジンを下から押し込み、後退したままのボルトを前進させる。安全装置^{セフティ}を掛け、銃・手首・腕・右目が一直線上に並ぶように構え標的を狙う。

生来のガンマニアである俺としては待ちに待った瞬間だが、これは遊びではない。ひたすら無心に安全確実な操作を続け、深呼吸の後に軽く吸った息を半ばまで吐くと、山田先生の指示でトリガーを絞った。

パンという爆竹より少し上等くらいの音がしてわずかに銃が押される感触がすると、10m先の人体標的の同心円に小さな穴が開いた。

「あつ、だいぶ中心に近いですね！ 筋がいいと思いますよ！」

山田先生の声も、その時は耳に入っていなかった。俺は水を得た魚のようにオートトリボルバーを順番に撃ち、用意した100発の弾薬を消費する頃には経験と知識からくる射撃の勘を体に染み込ませていた。

射撃後に薬莖^{やつぎょう}の掃除や拳銃の片づけをしている時、山田先生が話しかけてきた。

「音羽くんは射撃の才能があるかもしれないですね。……でも、その、なんと言いますか」

なんだか言いにくそうな事がある様子で、山田先生は俺の顔をチラチラ見ている目を逸らしていた。

「えつと、なんででしょうか？」

何かまずい事をしてしまったのだろうか。俺は不安になって聞いてみた。

「いえ、別に大したことじゃないんですが、音羽くんは銃を扱う時、どう言えばいいのか、ひどく目つきが尋常じゃないというか、あの、集

中していることは大変よろしいのですが」

「なんだか殺し屋みたいで怖いような、と言って慌てて山田先生は気にしないで下さいと連呼した。」

「はあ……」

間抜けな返事をした俺は、IS学園に入ってからこつち自分は教師にちゃんと評価されたことが無いんじゃないかと、ここ十日間ほどを思い返した。

山田先生にお礼を言つて、一緒に射撃訓練場の施設を確認してからスマホを見た。時計は9時を過ぎてている。取りあえず本音に電話してみた。

《もしもしおとーさん？　すぐ来て！》

それだけ言うのと切れてしまった。

何かあったのか、よく分からないが生徒会室へ急ぐ事にした。また会長がぐだぐだしているのか、それとも本音がとうとう根を上げたのか……。

生徒会室のドアを開けると、紅茶とケーキの香りが鼻をくすぐった。

「だから！　これは私と簪ちゃんが分けるって言ってるでしょ!？」

「姉さん……虚さんも一つも食べてないんだし……」

何が起こったのかと来て見れば何のことはない、俺や簪さんが食べた後に残った3つのケーキを誰が食べるかで揉めていただけだ。

しかも一番わがまま言ってるのが会長なのだから困ったもんだ。

明日買えばいいだろ。

でも12個も買ったのに、もう3つしか残っていないとは。俺と簪さんが2つずつ、本音が5つで計9つ食べたから、それだけしか残ってないのか……だから本音は食べ過ぎだと言ったのに、あいつの胃袋はどうなってるんだ？

「あつ、おとーさん！　お嬢さまとお姉ちゃんがどれを食べるかで揉めてるの〜」

本音の困り顔にも呆れてしまう。もともとお前の食べ過ぎも原因

の一つだぞ。

「お嬢さま、お言葉ですが私にも食べる権利があると思います。そもそも嬢さまが仕事を遅らせて私や本音に負担をかけてきたのは今回ばかりではありません」

平然と言いつ返す虚先輩に会長も挑戦的な視線を送る。

「虚ちゃん？ 更識家当主に逆らうつもりかしら？」

「あの、二人とも」

「私とて疲れた身、甘味を所望するのは当然です」

虚先輩も受けて立つ所存だ。……暗部の家系つてのはケーキ一つにも命を賭けるのか？

「あんたらいい加減にしなさい！ ケーキぐらい明日買って食べればいいでしょ!?!」

俺が声を荒げると二人がようやくこちらを向いた。

「丁度良かったわ音羽くん。このケーキはキミが買ってきたんでしょ。生徒会長である私がまずケーキを食べる権利があるわよね？」

「音羽くん丁度良かったです。我侂^{わがまま}放題の会長を少し叱ってあげて下さい。いちごシヨートは私が頂いて良いはずですね？」

色々ガツカリした。特に虚先輩に。そこまでシヨートケーキに執着するか？ しかし会長の不在と怠慢で今日大変だったし、甘いものぐらいは食べたいだろう。

「ホラ音羽くん、私と簪ちゃんがこのケーキを分けるべきだと言いなさい！ 本音ちゃんも音羽くんも充分食べたでしょ!?!」

「お嬢さま、立場を利用しての強要は信頼を無くしますよ？ 氣遣いの出来る音羽くんは私に譲ってくれるはずですよ」

……IS学園女子のスイーツ好きは異常だ。一種の精神疾患ではなかろうか？ ちよつと恐い。

だがこのまま放っておくわけにもいかないし。

「その、いちごシヨートですか？ それは虚先輩がどうぞ。残り2つは後の4人で分けましょう」

虚先輩は満足気に胸を張り、会長はムキーツとお猿さんのように歯ぐきを剥いて威嚇^{いかく}した

「では頂きましょう。その前に皆さんに紅茶をお入れしますね」

虚先輩が丁寧な手つきでティーカップを用意し、全員にポットから注いで回った。

「なんで私じゃないのよ!? 私がこの場で立場が一番上のはずでしょ?」

憤懣ふんまんやるかたないと言いたげな会長をなだめるように俺は言った。

「本日最大の苦労人は虚先輩でしょ? サボり魔の会長をなだめずかして仕事させ、本音に仕事を覚えさせ全員に作業を割り振って、今日大変な思いしかしてないじゃないですか。会長も今日はまだケーキは食べてないけど仲直りパーティで美味しいもの食べたし、何より俺が言わなきゃ虚先輩ほったらかしだったじゃないですか」

「そ、それはそうだけど、女子としてここは譲れないわよ!」

あんたほんとに暗部の当主か? もうケーキ屋に転職しろよ!

「他のを簪さんと半分こしたらいいでしょ? 買った店教えますから、また時間のある時に買って簪さんとたくさん食べればいいじゃないですか」

シバいたろかという想いを封印し、意識して静かにゆっくりと噛んで含めるように言い聞かせると、しようがないわねえ今回はキミの顔を立ってあげるわよと恩着せがましい答えを吐いてよこした。

虚先輩が紅茶を入れ終わると、ティーバッグでは味わえない豊かな香りが広がった。お蔭で俺のイラつきも幾分和らいだ。ケーキもいが、紅茶も期待できそうだ。

「では頂きましょうか」

いつもより余裕のある態度の虚先輩が言うと、ティラミスに乗せた皿を持った本音が隣に座った。

「一緒に半分こしよ」

寮から持ってきたのか、フォークを俺に渡すと三角形のケーキをすつと2つに切った。

「いただきます」

ケーキを口に運んだ本音を見て、俺も自分の分をフォークで口元に持っていた。

……よく考えたらこういうのって、何日か前の自販機のジュース以来だよな。

本音の顔を横目で見つっ口に入れた。

……甘いなあ。うん。

「おいしかったね」

「うん」

本音の声に俺はしっとりとした味わいを舌で包んでから答えた。

「この抹茶のケーキ結構美味しいわね！ 今度一緒に買いに行きましょ」

「そうね、姉さんの時間のあるときに」

「だーいじょうぶ！ 簪ちゃんの為だったら時間なんていくらでも作るわよ！」

虚先輩の向こうでは簪さんとケーキを分けて食べる会長が舌鼓したつづみと空手形を打っていた。俺は知らんぞ。

今は虚先輩も会長の無責任発言を気にしていないのを確認しつつ紅茶を飲む。とても美味しくて驚かされた。

「おいしいでしょー？ お姉ちゃんは紅茶を淹れるのが上手いんだ」

「そうなんだ。どうりで美味しいわけだな」

本音と俺の会話に、虚先輩は少し照れ臭そうだった。

みんなリラックス出来てよかった。後はやっかいな仕事があまり残ってなければいいが。

「それで虚先輩、あとどれぐらいで終わりそうですか？」

先輩はビクツツとして静止してしまった。

「あの……」

軽く咳払いすると、若干うつむきつつ言った。

「後はまあ、単純作業だけなので……」

急に会長が割り込んできた。

「ちよつとそれは本音ちゃん達だけでしょ!? 私はまだ署名と承認の為の確認の書類が山ほどあるのに!!」

虚先輩は会長から顔をそらした。

「お手伝い頂きたいのは単純作業のみです。量はありますが本音と簪さまも一緒にやりますので、後1時間ほどお付き合ひ願えればと」
「聞いている？ 私だけ日付が変わるまで仕事があるじゃない！ なんでもみんな10時半位で終わっちゃうのよ!? 私の方も手伝うべきでしょー!」

虚先輩がジト目で会長に向き直った。

「音羽くんがいなくなった途端、簪さまと雑談を始めたのは誰ですか？ それで作業が停滞したのが遅くなった原因でしょう。そもそも普段から放課後一定量の作業をこなしていれば――」

「あーもうお説教は聞き飽きたわ！ どう考えたって私の作業量だけ多すぎよ!? 出来る範囲でいいから私の方も手伝ってよー!!」

今度は会長がバタバタしだした。俺はその様子がどつかのアニメの女神だかにそっくりなのを思い出した。残念な形でファンタジー世界に降臨しちゃったやつだ。

……つて、俺がいなくなった途端にくっちゃべってたのか。これじゃ簪さんを生徒会に入れると逆効果だなあ。おまけに本来生徒会に関係ない俺が目を放すとサボるって……ダメだこりゃ!

「出来ません。みだりに関係者以外には見せられない内容が多いですし、お嬢さまが可否を決めなければならぬものばかりですから」

虚先輩の声はいつもの冷静さを取り戻していた。

会長は仕事ばかりヤダヤダーと騒いでいる。俺は会長の作業量をそれとなく虚先輩に尋ねてみた。

「あのファイル全部です。でも今日は一番上のだけでも終わらせてくれれば、それでも構わないのですが」

俺が虚先輩が指差す方を見ると、会長席の前にA4サイズの10cmぐらいあるファイルが5つほど重なっていた。

あつ……あれは俺でも逃げたくなるわ。

「もう嫌! 簪ちゃんと一度寮に戻って仮眠するわ! 残りは明日の早朝やれば良いじゃない!」

会長は簪さんにしがみついている。もうどつちが姉かわかんねえよ。

「姉さん……虚さんも困ってるし……出来るだけやらないと」

困惑の表情で会長をなだめる簪さんは俺の顔を見た。……弱った。どうしたものかな。

「お嬢さま、これ以上皆様を困らせないで下さ——」

「あー虚先輩、会長って仕事の休みはあるんですか？」

虚先輩の言葉を遮って尋ねた。

急に話し掛けられて虚先輩は少し怪訝な顔をした。

「いえ、ここの所仕事を立て込んでまして、最近は一ヶ月近く休みがありません」

つまり、学校が休みの日も出てるのか？

「それは、日曜日も？」

「はい」

虚先輩の声は平常通りだ。

「そりゃ……逃げ出しますよ……」

思っていた以上にぞっとしない話だった。生徒会だけのために一ヶ月全然休めないって、女子高生ならかなり辛いだろう。それも普通の高校生よりずっと忙しいIS学園の生徒でロシア国家代表だろ？ その上暗部の当主って……滅茶苦茶な話だな。俺なら最低でもどれか1つは辞める。

取りあえず、ある程度の休みを挟んでやらなきや心身ともに保たんよ。

「虚先輩、少し会長に休日を作りませんか？ こんな調子じゃどれだけ叱られても本人のやる気が続きませんよ。まず最低限急ぐ仕事のみを済ませて、次の日は羽を伸ばさせたらどうでしょう」

とりあえず、今週中のやつだけ終わらせるとか。そう提案すると、虚先輩は悩む顔になって答えた。

「私もそう考えなくもないのですが、お嬢さまがさっぱり仕事を進めて下さらないので……」

にっちもさっちも行かなくなってしまうたのです、虚先輩はそう言って会長をまたジト目で見た。

おいとつつあん、せつかくあれこれ考えてもあんた全部パーにして

くれてるな？

「……姉さん」

「ち、違うの！ ただ少し息抜きを、とか考えたらいつの間にか何時間も過ぎていて——」

呆れ顔の簪さんに必死の弁解で会長の顔は汗だくだ。

いい加減埒が明かんわい！

「分かりました。じゃこうしましょう！ 今度から会長は虚先輩が良しという所まで仕事を終えれば、次の日は休みをもらおう。その代わりもしサボったり逃げたりすれば……」

俺の強引な主張に全員がこちらを向いて息を飲んだ。

「に、逃げたら……どうなるの？」

冷や汗をにじませる会長の引きつり顔に俺は笑顔を見せた。

「織斑先生に言っただけじゃダメです！ まあ会長なら死にやせんでしょう。専用機があるなら絶対防御が働くでしょうし」

織斑先生には俺から話を通しておきます。そう言った直後に全員の血の気が引いた。無論一番青い顔は会長だ。

「そんな！ 音羽くんは私がどうなってもいいの!？」

「そうですね、音羽くんのお墨付きなら大丈夫でしょう。お嬢さま、これからは休みと引き換えにキリキリ働いて頂きます。今後はきちんとして仕事のオンオフにメリハリをつけて下さいね？」

愕然とする会長の横で虚先輩は涼しい顔でいる。痛い目に遭う立場かどうかで天国と地獄の差だ。

すっかり意気消沈していじけている会長に、簪さんがとりなした。

「姉さん、頑張ったら次の日はお休みなんですよ？ それにこれ以上虚さんに迷惑をかけられないんだから」

会長ははあくあと大きく深いため息をつき、ようやく顔を上げた。

「分かったわよ。簪ちゃんに心配はかけられないし、この辺が折り合いい時よね」

どうにか会長も受け入れてくれたようで、虚先輩もほっとした様子だ。

しかし直後に会長は俺に人差し指をビシツと向けた。

「ただし！音羽くんの勝手な判断で織斑先生をけしかけるのはよし
てよね!? 先入観や思い込みで初代ブリュンヒルデの体罰受けてた
ら洒落にならないわよ」

虚ちやんが怒った時だけにしてよねと釘を刺した。まあ当然か。

俺が了解すると、あーもーこれから大変よと会長はぐったりし、虚
先輩はさあラストスパートですよと緩んだ空気に発破をかけた。

再び退屈で地味な作業が始まった。俺、本音、簪さんの3人は追い
込みをかけてさっさと終えてしまおうとしている。会長は虚先輩に
最低限終えるべき作業を厳命されて、明日は簪ちやんと遊ぶんだから
とぶつぶつ言いつつ仕事を手に付け出した。

もう後10分足らずで終えられそうだという時、またスマホが振動
しだした。

「電話だったら出ていいよー、もう終わっちゃうもん」

本音の言葉に出ない訳にも行かず、しぶしぶ一夏からの着信を確か
めて出た。

《三治！今どこだ!? たのむ、さっきのは謝るから早く戻ってき
てくれ！二人が三治の代わりに一緒に寝るといつて聞かないんだ
よ!》

あいつら全然懲りてねえな！隣が誰の部屋か知らんのか？

《織斑先生呼んでこい!》

それだけ言って切ろうとしたら、怒声が響いたかと思うと二つの痛
そうなゲンコツの音が伝わった。

《あっ千冬ね——いてっ!!》

その後の助けを求める悲鳴に、生徒会の手伝いが終わり次第戻ると
言って切った。

「誰だったの〜?」

じーっと本音が俺の顔を見つめてきた。何を気にしてるんだ。

「一夏だよ、箒とセシリアと一緒に寝ようとして織斑先生にぶん殴ら
れたらしい」

言いながら会長を見ると、嫌々仕事をしていますという顔が引きつ
り、作業速度が急上昇した。

俺が笑いながら作業に戻ろうとすると、虚先輩がいつになく真剣な顔つきで俺を見た。

「音羽くん、真面目な話本当に生徒会に入ってもらえませんか？ お嬢さまがこんな真面目に書類仕事に取り組む姿は初めて見ます」

音羽くんさえ生徒会室に居てくれれば、ずいぶん助かるのですが。熱心にそう口説かれて、俺はこの生徒会の運営がいかにか危うく過酷か再確認させられた。

俺がここに来なけりや、いったいIS学園の生徒会はどうなっていたのか？

聞くのも野暮だろうが、疑問に思わざるを得なかった。

過去を逃れて

「頼む三治！ おれと付き合ってくれ!!」

IS学園の一日は朝からエキサイティングだ。

朝食後に教室へ駆け込むなり、一夏は本音たちと喋っていた俺に飛びついた。痛えよ!

たちまちクラス中が沸き返り、そこかしこで薄い本が厚くなるだの責めと受けがどうのと大騒ぎになった。止める者も居ないから耳が痛くなるほどの金切り声で教室のガラスが割れそうだ。

それより問題なのはきつと、こんな展開に慣れきってしまった自分自身だろう。今後どうなるかも、一夏がこの後何を言い出すかもおおよそ想像はつく。

こんなドタバタを今後防止する手段はさっぱりわからんが。

予想通り後から追いついた箒とセシリアが一夏の声を聞きつけ駆け寄った。

「一夏……いつも私より誰より三治を優先するのを不自然だと思っただけだが、まさか衆道しゅうどうに走るとは……そうか、分かった。黄泉の国で結ばれよう。なに、苦しむ事はない。一瞬でことは済む」

「い、一夏さん!?! いいいいちかさささん!?!」

Oh my goodness!!」

箒は全てを諦めたような表情で暗い声を絞り出し、セシリアはあまりのシヨックに母国語が出ている。

本当にどうしようもない方向へ話が進むので、クラス全員を代弁して俺が尋ねた。

「それで、付き合うってどこへだ?」

「買い物に決まってるだろ? 今日やつとアレが届くんだよ、放課後すぐ材料を買いに行かないと」

一夏はケロツとした表情で返事した。すぐ後ろでいつもの二人がある種の感情を突き抜けさせているのに気付きもしない。

一夏と俺のやりとりに最悪の展開とはかけ離れたものを感じて、二人は少し落ち着きを取り戻した。

「……一夏、あれとはなんだ？」

「い、いちかさん？ 材料とおっしゃるのは？」

ようやく一夏が振り返り、箒とセシリアを見た。

「今日届く炊飯器だよ。ネット注文した奴がやつと来るんだ。だから今日食材買っておかないと週末料理できないだろ？」

むしろ一夏に必要なのは同じ『しよくぎい』でも贖罪の方かな？

勘違いに気付いた二人は途端に大声を張り上げた。どちらも顔は真っ赤だ。

「紛らわしい言い方をするなっ！ て、てつきり私はその……とつとにかく一夏っ！ 一言謝れ！」

「全くですわ！ 私もその、一夏さんがゲ……な、何でもありません！ とにかく謝って頂きますわ！」

自分たちの無理からぬ勘違いに赤面した乙女たちは、感情のままに思考したツケを一夏に払えと要求し、一夏は泡を食って俺に泣きついた。

「なっ？ いつも箒とセシリアはこうなんだよ！ 三治くらいしかまともに話を聞いてくれる奴がいなんだ！ 頼むよ、放課後買い物に付き合ってくれ！ 明日と明後日はこの二人と出かけるから買出しに行けないんだよ！」

せっかく昼休みにセットできるのに。米の種類たごとの炊き分けと、30時間もふっくら保温できる奴なんだぜと、頼み事がしたいのか我慢がしたいのか分からん事を言い出す始末だ。

流石に今回ばかりは自業自得だろ。

「とにかく放課後一緒に買い物行ってやるから、今は箒とセシリアを混乱させたこと謝っとけ」

頭に来ている二人を振り返った一夏は、不思議そうな顔で俺を見返した。

「なんで混乱したんだ？」

その一言に彼女候補生二人は急激にいらだった。その反応は俺も予想してたが止めてやる気にもならない。

「そっそれを私に言わせる気か!? ふぎけるな一夏！ そこへなおれ

!!

「そ、そんなことでレディに恥をかかせる気ですの!?! 見損ないましたわ!!」

「ええっそんな!?! どういうことだよ三治!?! なんでおれが怒られるんだ!?!」

こうしてまたも一夏は自覚の無いまま嵐を起こして、その結果本人にとって理不尽な糾弾と怒りを一身に受けるのだった。めでたしめでたし。

「後で聞いてやるからもう席に戻れよ」

俺は俺でさっさと席についた。そろそろSHRが始まる時間だ。

「ちよっ、置いていくなよ? なんでおれが——」

「いつまでも騒いどらんでさっさと席に着かんか! もうSHRの間だぞ!」

一夏が言い終わる前にドスの効いた声がクラスに轟き、すぐに喧騒も収まり静寂が訪れた。

「お、お早う御座います。SHRを始めます……ね?」

織斑先生と山田先生が入室してシメだ。自制が習慣づいたのか俺の小言が癪しゃくなのか、いずれにせよ体罰でなく言葉で諭すようになったのは進歩だろう。

しかし、もはやこういう騒ぎは恒例行事のようだ。でも三人の内誰かがキレない程度には気にかけないと暴力沙汰になりかねんなあ。

SHRでの連絡事項が終わり、職員室へと向かう織斑先生の後を追おうとした山田先生が、思い出したように俺と一夏の元に駆け寄ってきた。

「言い忘れる所でした! お二人に本日荷物が届きます。近親者からではなく通販業者等からなんです、お二人の頼んだ物で間違いありませんね? 午前中に到着しますので、放課後には片付けて下さいね」

俺が注文した諸々と一夏の炊飯器だ。主夫はいつの間にか俺の隣に来てウキウキしている。そんなに飯を炊きたかったのかお前は?

「中身は先生も存じ上げてますよね?」

ちよつと意地悪な事を聞いてみた。俺と一夏のプライベートは先生方にもダダ漏れらしいので、確かめてみたい気持ちもあった。

当の本人は思いのほかあつさり答えてくれた。

「はい、音羽くんはDVDとか書籍類が中心で、織斑くんは米びつと炊飯器とコシヒカリでしたね！ お二人とも好きなことも結構ですが、ちゃんと本分の学業も——あつ!!」

だいぶ喋ってから気付いたらしい。前から思ってたけど、この人ってかなり隙だらけだよな。

「えっ何で俺たちが頼んだもの知ってるんですか？」

一夏のもつともな質問に山田先生は可哀想なぐらい狼狽ろうはいした。顔は真つ青で冷や汗がダラダラ出て止まらない。

「あああうあああそのそれは、それはですねあわわわ」

知りたい事は確認は出来たし、さすがに山田先生一人を責めるのも気の毒なのでこの場は忘れる事にした。

「最近テロ警戒で、IS学園に運ばれる荷物は発送元から職員室に連絡があるんだよ」

俺は適当な嘘をついて一夏を黙らせた。横目で山田先生にドアの方を示す。

「なんだそうなのか。それなら千冬姉も言ってくればいいのに」

あつさり納得した一夏に山田先生は少し安心した様子だ。人間素直が一番だと言うけど、どうにも俺には疑問でしかない。

「こそ、そうなんですよ！ 音羽くんは詳しいですね、あ、先生はもう行きますね？ じゃ、じゃあもう質問が無ければこれで！」

パタパタと急ぎ駆け出した山田先生はドアの手前で何も無いのに転び、また慌てて飛び起き廊下へ走り出していった。

ちよつとからかい過ぎたかなと思っただが、どうにも俺は面白くない。今後通販とかどうしよう？

そんな俺の思考を一夏の声が遮った。

「それじゃ今日の昼休みには一旦寮に戻って夕方に炊けるようセットしようぜ！ そうだ、三治はごはんを炊いたこともないって言ったよな？ ちよつどいいからやってみろよ。簡単だぜ？ 米を三回研

いで、あとは説明書どおりにタイマーセットすりや決めた時間に炊けるからな！」

このさい今日の夕飯は一緒に作ろうぜと一人盛り上がる一夏に、さっきの一夏の言葉にいまだ疑惑の目を向ける二人の姿があった。

「一夏……今思ったのだが、少々三治と仲が良すぎやせんか？　そもそも一緒に夕餉ゆうげの仕度したくなど、わ、私とすればよかろう！」

「そうですわ！　だいたい何をにおいても三治さんを優先するというのは、なんと言いましょうか、その、お、おかしいですわ！」

やいのやいのと一夏に抗議を浴びせる二人の後ろから、本音たちが俺の方に回りこんできた。

「ねえねえ、今日の夕ごはんおとーさんとおりむーは自炊なの？　私も食べたいなあ」

「何つくるの？　私も行っていい？」

「もう二人とも！　本人の都合も聞かないで……あ、音羽くん、私たちもお邪魔したら迷惑かなあ？　もしいいなら是非ご相伴にあずかりたいんだけど」

本音・谷本さん・鷹月さんの順で夕食をご馳走になりたいとこちらもわいわいやりだし、箒とセシリアの追及を逃れて俺の後ろへ逃げた一夏が快く承諾してしまったため、そこへ一夏を追ってきた二人もさつきまでの抗議はどこへやら、強引に部屋へ押しかける羽目になってしまった。

「急いで食べるよ！　昼休みの内に7合は炊かないといけないからな！」

一夏はおにぎりセットをほお張りながら早口でそう言った。

本当に7人分作るのかよ？　しかも料理経験値1ケタの俺も一緒に？　サンドイッチをぱくつきながら疑問に感じたが、どういうわけか食を急ぐのは本日夕食を共にする全員だった。

「わ、私も手伝ってやろう。なにせ幼馴染のことだしな！」

「一夏さん、私もその、後学の為に是非そのスイハンキとやらを拝見したいですわ！」

特にする事もないのに、一夏の部屋に入りたくて無理に口実を作っているんだろう。邪魔になりそうだが水を差すと怒り出すし放っておくか。

「ずるーい！ 私もおとーさんの部屋見に行きたい〜」

「何かたくさん届くんでしょ？ 運ぶの手伝ってあげるから部屋見せてよ！ ね？」

「あの、迷惑じゃなきゃ私もいいかな？ 勿論できることは手伝うから！ ネット注文したDVDとか本が来るんだよね？」

本音や鷹月さんたちも来る気らしい。午前の授業が終わると同時に食堂まで急いで来たから10分くらいで食べれば多少は時間もあがるが、そんなにアレコレしてたら午後の授業に間に合わない。

「とりあえず、あと5分で食べ終えた奴だけにしてくれ。無理して喉に詰まらせるなよ！」

合間に紅茶を飲みつつ残りのカツサンドを平らげると、紙ナプキンで口元をぬぐいながら周囲を見回した。

「まっまってよ！ むぐぐー！」

さっそく本音がフレンチトーストに食道を塞がれ、谷本さんが慌ててコップのジュースで飲み込ませた。

「おっ！ 来てる来てる！ でもすごい量だな、ほとんど三治の难道？」

入学初日と同じく、いやそれ以上のダンボールが俺たちの部屋と寮監室の間に積み上がっていた。そのほとんどが入学して初めての日曜に、IS適性検査以後に起きた面白くない諸々の腹いせに俺が密林に注文した奴だ。

「俺のは放課後でいいよ。それよりさっさと炊飯器セットしないと昼休みが終わるぞ」

俺が部屋の鍵を開け側面に炊飯器のイラストが印刷されたダンボールを一夏が担いで入ると、後からぞろぞろと女子5人が続いた。

「ふん、ま、まあ小奇麗に片付いてはいるな。お、おかしなものは置いていないだろうな？」

「これが一夏さんの部屋なんですのね、想像以上に質素でいらっしや

るわね……そうですね！ 私がシリツクかカツシーナ辺りでなにか見繕って差し上げましょう！ お気になさらないで、ほんのお近づきの印でしてよ？」

「おとーさんの部屋に入るの始めてくあっサングラスがある！ あっちがおとーさんの机でしょ！」

「へえーここが二人の部屋かあ、なんか普通だね。私たちの部屋と変わんないな！」

「もう！ 二人とも遠慮なさすぎよ！ 音羽くんと織斑くん、何か手伝うものある？」

箒、セシリア、本音、谷本さん、鷹月さんの順で入室するなり好き勝手なことを言っている。俺と一夏は片付けておいたシンクの端にさっさと炊飯器を設置し、また廊下にとって返すと米びつとコシヒカリ2袋を担いで戻り、一夏が冷蔵庫の横に置いた米びつにせっせと米を注ぎ込んだ。

「おいセシリア、勝手なことを言っているようだが、一夏の部屋に妙なものを置かせるつもりではあるまいな？」

「あら、世界的に認められた一流ブランドの家具でしてよ？ 寮の家具も悪くはありませんが、一夏さんがお使いになるにはいささかセンスと高級感に欠けますわ。私の将来の伴侶として、もう少し立場に見合った品をお使い頂きますと——」

一夏に言われるまま米びつのボタンを押して9合の米をトレイに出すと、さっと洗った炊飯器の釜に入れて水で研ぐ。三度もやると白い濁りがかなり減った。炊飯器にセットし保温加湿用も合わせて水を張ると説明書を見ながらタイマーをセットした。

「よしできた！ な？ 三治かんだら？ これからは一人で出来るよな！」

「ああ。一夏が丸一日織斑先生に絞られててもお茶漬けくらいは食えそうだ」

「そ、その時は助けてくれ」

一夏と笑い合うと、ベランダ近くの二人がえらく殺伐さつぱつとしているのが嫌でも目に入った。他の三人は遠巻きに見ているだけだ。止める

よ！

「セシリア、今なんと言った？ 伴侶？ いつから一夏がお前のものになった？」

「あら箒さん、今ではなく将来の話ですわよ？ そもそも貴女が文句をつける必要でも御座いました？ 今現在一夏さんは誰のものでもないはずでしょう？」

「そっそれなら、なにもセシリアとどうこうが決まっている訳でもなからう！ そもそもわ、私が一夏の幼馴染なのだからな！」

肝心の一夏をほったらかしてまあ盛り上がっていること。俺が何か言っただけと言っただけでも本人は当事者意識の欠けた返事しか返さない。

「二人とも何の事でもめてんだ？」

「お前の事だよ！ いいから止めてこい、いつまでもほっとくと教室まで走る事になるぞ」

一夏が箒とセシリアに割って入り、そろそろ戻ろうと言いつつ出すのを確認してドアに向かうと、谷本さんと鷹月さんがヤマトに三行半みくだりはんを突きつけられた通販大手のダンボールを室内へ運んでいた。

「気を遣わなくていいのに。重くないか？」

「何もしないのも何だからね！ ここでいい？」

俺が頷くと二人はダンボールを俺の机の脇によっこらしよと置いた。ふうーと息をついている。

ふと見ると、本音がいくつか積まれたダンボールをじーっと凝視していた。

「なか見てもいい？」

俺を見て聞いてくる。何を買ったか気になるのか。

「あ、あたしも！」

「止めなさい迷惑でしょー！」

谷本さんと鷹月さんは運んでくれたし、少しぐらいいいか。アダルト系は織斑先生に見つかるのが恐くて買ってないし。

本音はほんとは見てただけだけだな。小さいし仕方ないか。

「まあいいか。ちよつと見たらすぐ教室に戻るぞ」

もうあんまり休み時間無いからなと言いつつ一つの梱包を解いた。
「えつとこれは……」

俺が大きい箱を一つ取り出すと、脇からひよいと覗き込んだ本音が
あつと声を上げた。

「おとーさんが出てるっ!!」

「えっ！ どれどれ!？」

「ちよつと！ 私も見せてよ!」

俺が持った箱に三人が飛びついた。二人が拳銃を構え一人が背後
で見守るパッケージ写真の中の一人に釘付けになっている。

「ほんとだそっくり！ これ知ってて買ったの？」

「本当に似てる！ ひよつとして親戚の人？」

俺は大会P A R T IIのDVD—BOXを自分の机に置くと、皆の
見ている前でダンボールを開封した事を後悔した。

騒ぎを聞きつけて一夏と恋の鞆^{さやあ}当て中だった二人もやってきた。

「なんだ開けたのか、何買ったんだ三治？ ……あれっこれ三治が出
てるぞ!？」

「なんだそれは、映画か何か？ 印刷されているのはお前の近親の
誰かか？」

「あら三治さん、その作品はご親族の方が出演なさっていますの？」

俺以外の全員がそれまでの事も忘れてそっくりだのある角度なら
瓜二つだのと騒ぎたて、今後はこのネタでいじられるのかと思うとは
なから中身を知っていた会長の笑顔が脳裏に浮かび、若干うざく感じ
た。

結局放課後の買い物には昼休みに部屋に来た全員で行くことにな
った。めいめいカバンを部屋に置いて、また俺たちの部屋に集まる
ことになった。

「小学2年になるかならないかの頃には、世間というかメディアは女
尊男卑が露骨になってきてさ。漫画もドラマもアニメも映画も、終い
にやゲームまで女が中心のものばっかで欲しいものが何にもなかつ
たんだ」

俺は皆と一緒に並木道を寮へ向かって歩きながら、本音や一夏にせがまれて自分の趣味について話していた。

「TVも見るもなくなって、ある時親父の本棚で昔の小説を見つけて読んだんだ。『野獣死すべし』だったかな、すぐ夢中になったよ。幼い頃戦争で裕福な生活を失った主人公が銃と車を頼りに犯罪でのし上がる話なんだ。凄い迫力だったな。でも書かれたのが半世紀以上も前で、ネットで検索しながらでないと内容を理解するのに苦労したよ。それから作品当時の文化や世相を調べながら昔の小説とか映画やドラマを見て、自分が生まれる前の時代の文化やエンタメに夢中になったな」

一夏が合点がいったという調子で言った。

「ああ、だから三治は昔のアクション映画とか本に詳しいんだな！おれはあんまりTV見ないからそういうの分からなかったぜ」

お前はTVとか以前に本を全然読まないだろ。それどころか下手すると漫画もろくに読んでなさそう……それは流石にないか。

「ふうん、昔の刑事ドラマのDVDとか買うのもそれでなんだ」

「そっか。顔も似てるしね！」

「そうね、てつきり家族の人が出てるから買ったのかと思ったわ」

本音たちも俺の買っ物にちよつと納得したようだ。決して主人公の顔が俺に似てるからではない。むしろ言われるまで気づかなかつたぞ。

「それもあるけど、今のドラマや映画は出演者が特徴がなくて印象薄い、のめり込めるような内容が少ないんだよ。それに1970年代の日本は映画が斜陽で、いい俳優や監督が大勢TVに流れてるからドラマに名作が多いんだ。ドラマの枠で映画作つたようなもんらしい」「でもいいよな三治は！ いろんなDVDとかに映っててさ。俺はここに来てまだ一枚も写真を撮ってないんだぜ？」

一夏は妙なところで俺を妬ねたんだ。それとお前はいい加減似てる人と俺との区別を付けろ。

「出演してるのは渡哲也って俳優で俺じゃねえよ！ ていうかなんで一夏はそんなに写真撮りたいんだ？」

一夏は急に何かを思い出すような顔をした。

「おれは小さい頃の事あまりおぼえてなくてさ。前に千冬姉が昔は側に誰がいたかをちゃんと覚とけつて言ったんで、よく記念写真を撮ってるんだ」

「そうだったのか……」

俺は言いながら前方に目を凝らした。何か事情があるのかも知れないが、記念写真を撮るなら確かこの辺に……あった！

「だから！ この後の夕食では私が一夏と話しをするといっている！」

「箒さんはたかだか半日のお出かけでしょう？ 私は丸一日一夏さんと出かける以上、一緒にプランを練る必要がありますの！」

すぐに後ろで相変わらざるの口論を続ける二人に声をかける。

「二人とも、ちよつと聞いてくれ。一夏、あそこ前に言ったやつに似てるだろ？」

俺の指差す方向に、並木のある歩道に挟まれた片側一車線道路をまたぐ横断歩道があった。

「ああ！ 三治が言つてたやつか！ ビートルズの、えーとなんだっけ？」

「アビー・ロードのジャケットだよ、セシリアはイギリス人だし分かるだろ？」

ようやく箒とセシリアがこちらを向いた。

「あら、言われてみれば確かに似ていますわ。こんな所を見つけていたなんて、洒落しゃれてますわね」

「なんだ？ そのアビー・ロードというのは」

セシリアも同調したが、箒は洋楽に興味無さそうだし知らなくても無理はない。

一夏が記念写真が好きだと言うのを聞いて、学園から寮までの並木道にビートルズのアビー・ロードというアルバムのジャケット写真に似た風景があるのを思い出したのだ。ビートルズのメンバーが横断歩道を歩いているだけの写真だが世界的に有名で、レッド・ホット・チリ・ペッパーズやサザンもアルバムジャケットでパロディにしてい

た。

「一夏が記念写真を撮りたいらしいんだ。今なら車も来ないしここでどうだ？」

俺は箒にスマホで有名なビートルズの写真を見せて由来を説明した。

「なるほど、これの真似か。ま、まあ何でも模倣もほうするというのは感心せんが、一夏がどうしても撮りたいというのであれば一緒に写ってやらない事もない——ってちよつと待て！」

「はい、チーズ！」

箒が照れ隠しか尊大な態度でくどくど言っている間に、一夏・セシリア・俺・本音の順で並んだところを谷本さんと鷹月さんがスマホで撮ってくれた。

「こういうのも楽しいな！ 三治はおもしろいこと思いつくなあ」

「いい記念になりましたわ！ 三治さんには感謝しないといけませんわね」

「おとーさんと写真撮ったの初めてだね！」

三者三様の感想を聞く中、あぶれた箒だけが烈火のごとく怒った。

「一夏っ!! なんで私を無視して撮るんだ!？」

次は谷本さんたちと撮ろうとしている所へ箒が一夏に掴みかかった。

「お、落ち着けて！ 箒が一人でぶつぶつ言ってるから先に俺たちで撮っただけだろ？」

「まあ次は一夏と箒で撮るから、そう慌てなさんな」

可哀想なぐらいあたふたしている一夏に俺も加勢してやった。

「ふ、ふん！ 最初からそうすればいいのだ」

どうにか機嫌を直した箒は、次はどの順番で自分や一夏を並べるかを指図し始めた。

「あ、車だ！ みんな歩道に戻って！」

「あちやー、しばらく待たないといけないねえ」

鷹月さんが注意し谷本さんがつかかりする中、配送業者や宅配業者のトラックが次々と通り過ぎた。個人の荷物やISのパーツなどを

運んでいるようだ。

「なんで私の時だけこうなるのだ！」

箒のいらだちが満タンにならないかハラハラしていると、ようやく車の流れが途切れた。

「今だ！・急いで並べ！」

俺の合図で歩道に飛び出した一夏・箒・谷本さん・鷹月さんの4人が並んだ所で、急いで俺や本音がシャッターを押しまくった。

「撮れたぞー！」

また車が来る前に急ぎ歩道に戻り、みんな撮れた写真データを交換し合った。

「いやあやつとここでの写真が撮れたよ！ おれだけ二回も写っちゃってなんか悪いな！」

「さすがに私は優雅に写っていますわね！ 次は一夏さんのツーショットを……」

「い、一夏との写真。本当に久し振りだ……今度は明日二人きりで……」

三人とも満足のようにやれやれだ。一夏はもちろん、後の二人も言わずもがなだ。

一方で本音たち三人も好き勝手なことを言っていた。

「おとーさん表情かたいよ〜？ 次はもつとりラックスしようねー」

「アハハ！ 音羽くん顔硬すぎ！ でも本音はゆるすぎでしょこれ！」

「癒子は笑い過ぎよ。あ、こっちは急いで撮ったからみんな変な顔ね」
「こっちもこっちで言いたい放題だ。まあまた機会があったら、他の

写真も撮るのもいいかもしれない。

「ねえこれツイッターとか載せていい？」

谷本さんが聞いてきた。女子はSNSとかのアプリがほんと好きだな。

「俺はいいけど、やるなら写ってる人全員に了解取らないと駄目だよ」

結局一夏たちからも許可を得て、谷本さんだけでなく鷹月さんまで載せたいと言い出したのにはちよつと呆れた。

まあ見られて困るような写真じゃないしなと思っていると、いつの間にか周りに他の女子たちが集まっていた。

「ねえねえ、何やってたの？」

「あつ男子とインスタ撮ってるんだ！ ずるーい私もシェアしてもらっていい？」

わらわらと寄ってきた女子の群れにあつと言う間に記念写真は共有されてしまい、週末には世界中に拡散してしまうのだった。

「よーし！ 下味もしっかり付いたしどんどん揚げていくぞ！」

今は珍しく威勢のいい一夏。そりやそうだろう得意分野なのだから。

シヨツピングセンターで高い国産鶏肉を馬鹿馬鹿しいほど買って寮に戻ると、それらをせつせと包丁で切ってタレに漬け込み衣をつくり、下味が付いたのを見計らってオリーブ油を入れたフライ鍋をクッキングヒーターにかけた。

一夏は指図だけでやったのは全部俺だ。初めてなもんだからえらく時間がかかった。少しだけ母や食堂のおばちゃんの苦労が分かった気がする。

一夏は一夏で野菜を大量に刻んで皿に盛ったり味噌汁作ったりと忙しかったから仕方ないが、こうもたくさん作るのもう少し慣れてからにして欲しかった。

鍋の油が温まったので鶏肉を放り込んだ。

「いーい音するわ」

はじける様な音が広がると、テーブルの方から声が上がった。

「早く食べたーい！」

「いい匂いする！ 早くはやく！」

「二人とも落ち着いて待ちなさいよ！ もう」

落ち着きないな、そんなに腹減ってるのか。

「まだか！ 一夏のから揚げは！」

「一夏さんの料理、待ち遠しくてたまりませんわ！」

さらに落ち着きない奴らもいた。しかも完全に勘違いしてる。揚

げてんの俺だぞ。

「よし！ とりあえず3人分出来たぞ！」

俺が揚げている鍋から頃合のいいものを皿に取り分けた一夏がお茶碗に盛ったご飯や味噌汁と一緒にお盆に載せて持っていった。

「わーい！ 美味しそー！」

「ほんとね！ いただきます！」

「いただきますー！」

本音ら三人が先に食べ始めた。舌鼓を打つのがここまで聞こえる。

「ちよつと待て！ なぜ私が後なのだ!?!」

「一夏さん!?! 私の分は？ いえ決して催促するわけではありませんが」

一夏はキッチンから声を張り上げた。

「だって早くに3人分出来たからな！ そのほうが効率がいいだろ？」

いささかこめかみを引きつらせる箸とセシリアの分が揚げ上がり、ようやく自分たちの食べる分まで出来る頃には俺はくたくたで食べるより横になりたかった。

なんのかんの言っても自分で作った料理は美味しいものだ。山ほどあったから揚げはあつと言う間になくなって、めいめい食器をシンクに片付けると本音たちが買ってきたというシュークリームをデザートに雑談タイムになった。

「ご飯はまだあるし、から揚げと野菜の残りで明日の朝飯にしようぜ」満腹の腹を抱える本音と並んだ俺のテーブルの向かいに一夏が座ると、すぐに両側に箸とセシリアがイスごとくつついた。

「一夏、明日の外出のことだが」

「一夏さん、日曜の遠出のお話を」

「こういうときに限って一夏は女子の話聞いていない。」

「どうだ三治、自分で料理するっていいもんだろ？」

「そうだな、色々考えさせられたよ」

左右からサンドイッチにされていながら立場が理解できない一夏の言葉に、いつもなら左右の美少女への気遣いを真っ先に突っ込むと

ころだが、今は別の所に考えが飛んで、そこまで思慮は及ばなかった。
「？ 何か辛気しんきくさいな？ どうしたんだ三治？」

「おとーさんどうしたの？」

いつもと様子が違うことに気付いたのか、一夏の鈍感にキレそうだった二人もこちらを向いた。

「どうした？ どこか具合でも悪いのか？」

「三治さん？ どうかされたのですか？」

谷本さんと鷹月さんも俺の顔を見た。

「何でもない。ただ恥ちずかしいなって思ってたさ」

「何が恥ちずかしいの？」

本音の言葉に俺は軽く息を吐くと、誰にともなく話し始めた。

「正直言って、今朝急に夕食自炊しようとして一夏に言われて面倒だなと思ってたんだ。食堂で食べばいいだろうってさ」

皆は黙って俺に視線を向けていた。

「でもよく考えたら俺って寮暮らしになるまで全然身の回りの事をし
てこなかったんだ。それこそ食事を用意したり洗い物をしたり、洗濯
やアイロンがけや、バスタブに湯を張ることすらちゃんとしたことが
ない。そんな生きてく上で当たり前前の事が、俺はまるで駄目なんだと
今頃になって気付いてさ。ここにきていかに自分が親に頼って生き
てきたかを思い知らされたよ」

一息ついてマグカップのコーヒーを飲んだ。皆の沈黙が少し苦し
くて、ちよつと辛い。

「そうしてやつと一夏は立派なんだと気付いたんだ。自分や周りの人
間のために家事をするのがどれだけ大事で大変なことか、やってみて
初めて分かったよ。自分の面倒も見られないくせに、その苦労がどん
なもんか今まで真剣に考えたこともなかったんだ。それが恥ちずかし
くてさ」

しばらく皆は黙り込んだままだった。俺は自分でこの空気を作っ
ておきながら最初に耐えられなくなつて、シュークリームに手をつけ
ようとした。

「偉い！ 当たり前の事と真剣に向き合い己の至らない点を反省する

のは人間なかなか出来るものではないぞ三治！」

なかなか一夏を良く見ているなど箒は俺に言おうと、一人うんうんと満足そうに頷いていた。俺を褒めるといふより一夏を持ち上げた言葉が嬉しかったらしい。

「いやあ、そんな普通のことではめられるなんて、なんか照れくさいな！ あはは」

一夏が頭をかいた。どうやら和やかな雰囲気になりそうではっきりと周囲を見ると、酷くよんだ空気にびつくりした。

「どっ、どうしたんだみんな？」

思わずどもってしまふほど暗い面持ちの本音やセシリアたちに尋ねた。

「わたし……全然料理できないよ……どうしよう」

こんな暗い顔の本音を見たのは初めてだ。なんと声を掛けていいのか分からなかった。

「いつ一夏さん？ その、そういった事はオルコット家ではあの、主にメイドや執事を初めとする使用人たちの仕事であのその」

「……やばい、やっぱり料理くらいは出来るようになってかないと、男子からの評価が壊滅的に……」

「あの、音羽くんや織斑くんは、やっぱり家事出来ない女子ってあんまり……ごめん何でもないの！」

俺としては自分なりに感じたことを言っただけなのに、女子の多くにとっては地雷どころか核地雷だったらしい。

「あの、今のはあくまで俺の話であって、他の人まで気に——」

唐突に本音が立ち上がった。

「決めた！ 明日からお姉ちゃんにお料理習う！」

谷本さんたちまでそれに続いた。

「あ、私も！ いいでしょ本音？」

「私も一緒にいい？ なんだか不安になっちゃって」

プライドが邪魔するのか普段の付き合いがないからか、セシリアはその輪に入れず一人オロオロしている。こういう時に人付き合いの大切さを痛感するんだよな。俺も身に覚えがあるから良く分かる。

「気になるならセシリアは一夏に教えてもらったらどうだ？」

俺の言葉に天啓てんけいを得たかのような表情になったセシリアは、状況が分からずポカンとしていた一夏に飛びついた。

「一夏さん！ 私にも日本の料理を教えて頂けません？ 今宵こよいのデイナーは大変素晴らしいものでした。是非私も作り方を学んでみたいですわ！」

「ははは、セシリアもやっぱりから揚げが気に入ったか。いいぜ、今度はセシリアも一緒に作ろうか」

「一夏っ！ 今度は幼馴染である私とすべきだとは思わんのか!？」

快諾かいだくした一夏に箒はムツとして割り込み、次の週末は誰が一夏と料理するかで揉め出した。

どうやらいつもの調子に戻ったなと思った所で台所の山のような洗い物が視界に入った。あれ全部片付けないといけないんだよなあ……。

「洗い物なら手伝うよくだでご馳走になったら悪いもん」

「え？ いや気にしなくていいよ、どうせ明日は午前しか授業ないし」
本当に面倒くさいので、半分以上は明日の夕方一夏がデートから帰ってきてからやればいいと思っていた。

「そうよ、片付けは私たちでやりましょ！ ね、癒子？」

「うえくめんどくさいなあ……分かったわよ」

本音と鷹月さんの声に谷本さんは不満げだったがしぶしぶ同意した。

「助かるよ。茶碗だけで7つもあるから」

実際嬉々として7人分の食器を用意した一夏には驚いた。長いこと織斑先生と二人きりだったから、大人数で集まるのが嬉しかったのかも知れない。

箒とセシリアはまだ揉めている。一夏は未だに何ら解決手段を持たないままだ。頼むからその辺も家事レベルに上手くなってくれ。

「女子力か……」

俺が本音たちとキッチンに向かおうとした時につぶやくと、二人は一夏を挟んだままピタリと静止しうつむいてしまった。

俺たちはせつせと食器を洗い乾燥機に入れていった。

「本音えく？　ほんとは音羽くんから織斑くんを遠ざけたかったんでしょく？」

谷本さんがねちつくく聞いた。どういう意味だ？

「ち、違うもん！」

鷹月さんも話に加わった。

「あ、それ私も思ったな。何だかこのままだと音羽くんと織斑くんが夫婦みたいになっちゃいそうだし」

「はあ!？」

危うく茶碗を取り落とす所だった。

「でしょ？　織斑くんって音羽くんにだけ距離近すぎだし。ひよつとして迫られた事とかあつたりして!？」

「ねえよ！」

谷本さんに向いた俺は思わず大声を上げた。

「俺と三治がどうしたって？」

一夏が入ってきたのに気付かなかった俺は背後の声にギャツと飛び上がった。

「ははは！　みんな三治といると退屈しないだろ？　後はおれがやるからみんな休んでいいぞ」

振り返って一夏の顔をまじまじと見る。ふとその後ろに目をやると、箒とセシリアが俺を白い目で睨んでいた。

長く熱い週末 前編

「俺たちは寮で着替えて出かけるけど、言った通りできるよな？」
「ああ。カレーぐらいなら小学校の家庭科でやったよ」

今日は土曜日。半日授業も先ほど終わり、この後一夏は箒と出かけるので、俺が一人で夕食を作れるよう材料と簡単な調理手順を書いたメモをわざわざ用意してくれた。といってもカレーライスだ。むしろ俺の家事能力をかなり悲観してるんじゃないか？ 確かに未だに料理スキルL V 1だけだな。

「一夏は私と出かけるのだからな！ 三治はついて来るんじゃないぞ」

箒は未だに俺と一夏がおかしな関係ではないかと疑っているらしく警戒を緩めない。しかもそれが俺と一夏の両方に対してなのだから、むしろその気苦労に同情する。

「分かった分かった。いっそ朝帰りしてくれ」

「お、おい三治！ 朝帰りなどと……と、とにかく行って来る！」

途端に箒の顔は真っ赤つかだ。いまだき珍しく純情だよな。

急かす箒に引っ張られるようにして行く一夏を見送ると、俺は久々の開放感で席についたまま大きく伸びをした。セシリアは明日のデートプランを練るため既に寮に戻っている。

「ふぁーあつ……今日は好きな映画でも観てゴロゴロするかな」

大あくびすると、ゆっくり立ち上がろうと――

「やつべ忘れてた！ 三治！ 冷蔵庫の牛乳いつまでだっけ!？」

「どうわあ!？」

たった今教室から出たはずの一夏が駆け込んできた。心臓に悪いわアホ！

「何やってんだお前は!？ 箒はどうしたんだよ?」

「だって前の日曜に買ってからだいたいぶ経ってるだろ? 昨日は牛乳買わなかったし消費期限が心配だからちよつと箒を待たせて――」

こいつやつぱりバカだ！ あんだけ箒とセシリアを袖にするたびエライ目に遭ってんのに全然学習しとらん！

「そんなん電話かメールしろ！　いくら俺がSNS禁止だったってわざわざ戻って言うことじゃないだろ！」

「だって牛乳——」

そんなに牛乳が大事なのか!?　一体何がこいつをそうまでさせる？

「俺が買つといてやるからとつとと行け！」

ちゃんと低温殺菌低脂肪のやつだぞとしつこく言う一夏をようやく送り出すと、俺はそれだけでくたびれてしまった。

「昨日だってあれだけ揉めたつてのに、頼むから当分帰ってくんよ」

昨晩は洗い物のあともずいぶんな騒ぎになった。

「コレ観ようよコレ！　音羽くんきつと大活躍でしょ！」

「いいな！　カツコ良さそうだし観ようぜ三治！」

谷本さんが棚に並べたブルーレイやDVDの中から、大都会PART IIとPART IIIを指差して言った。どっちも俺……ではもちろんなく、渡哲也という俳優が主演している俺のお気に入りの刑事ドラマだ。しかし……。

あれから俺は部屋の外にあるダンボールを全部開封して寮備え付けの棚にほとんど収めたのだが、そのなかにはプロジェクターとスクリーンもあり、一夏と女子たちがこれで何か観ようと盛り上がったしまったのだ。

俺は顔がひきつった。あれだけ同一人物のように言われた後に人前でこのドラマを観るのはちよつと嫌だ。でも断る理由がないし……。

「一夏！　私と出かける相談はどうなったのだ!？」

「一夏さん！　今の内に私とデートプランについてお話を！」

俺を押しつけるようにして箒とセシリアが大声で一夏に食らいついた。うるさいけど助かった。でもこれ一夏も俺に助けを求める流れだな。

「三治！　ど、どうしたらいいんだ？」

それを考えるのはお前の仕事だよ！　と言いたい所だが、どうせ今

の一夏ではどうにもならんし俺も説得するには疲れた。ここは本当にみんなで何か観るとしようか。

「そう慌てるな二人とも。とりあえず今はDVDでも観て落ち着けよ」

不満そうな二人に声をかけると、いきなりドアが乱暴に開いて怒鳴り声が轟いた。

「うるさいぞ小娘ども！ 夜中に寮監室の隣で騒ぐ馬鹿は誰だ!？」

声の主は織斑先生だった。珍しく私服？ だ。といつてもシワのよったジャージをだらしなく着てるだけだが。

突然の訪問に部屋は静まり返った。一夏に詰め寄っていた二人は青くなつて手を引っ込めている。

「音羽、何があつたか言ってみろ」

織斑先生は俺にずいと顔を近づけた。……何だか少し赤いしアルコールの臭いがするぞ？

酔っているなら多少はごまかしが効くかな？

「何でもありませんよ、ホームシアターセットが届いたんでみんなでDVDでも観る所です。お暇でしたらご一緒にどうですか？」

俺の落ち着いた返事に織斑先生はしばらく黙つて俺をにらんでいたが、ふんと鼻を鳴らすと何を見るんだと尋ねた。

「そうですね、気楽にみんなで観られるものならこの辺で。多分気に入りますよ」

俺はあぶない刑事^{デカ}のDVD―BOXから一枚引き抜いて見せた。

箒は遊園地、セシリアは横浜の赤レンガに行きたがつてたな。確か9話なら、両方出てくるし丁度いいか。

「……まあいい、そこまで言うなら見せてみる」

箒とセシリアだけでなく、その場で息が詰まりそうになっていた全員がホツと胸をなでおろした。俺は皆に手伝つてもらつてスクリーンやプロジェクターを用意し、スピーカーとBDプレイヤーをつないで再生させた。

ベッドに座る一夏の両側には箒とセシリア……とは行かず、俺と織斑先生が座った。俺のさらに隣には本音、残りの4人は持つてきたイ

スに座つての観賞となつた。

あぶない刑事は近年まで劇場版が製作されていた刑事ドラマだ。ただこの9話『迎撃』は少々趣おもむきが異なる。主人公である刑事コンビを脇において、少年課の課長である女刑事がギャングたちから彼らの秘密を知る少年をかばい、孤立無援の逃避行というストーリーだ。

「なんかカツコイイな、刑事ものか？」

「あーこれ知ってる〜」

「本音は観た事あるのか。意外だな」

「……まあ、たまには良かろう」

軽い感じのドラマだから、気質は一応真面目な織斑先生は今の所あまり良い印象を持っていないようだ。

話が進むにつれて、後ろからもちらほら感想がもれてきた。

「ふん、どうにも出てくる連中の多くが頭の軽そうな輩ばかりだ」

「少々品が無い描写が目立ちますわね」

「TVで映画版やってたよね」

「そうそう、でもこれ出てる人今よりだいぶ若くない？」

わいわいやつている内にドラマは進んでいく。

捜査課に比べ自分たち少年課は正當に評価されないと嘆く女刑事は、たまたま少年が脱走したギャングたちに追われている所を保護する。だが助ける余裕のない部下をやむなく見捨て、拳銃は弾切れしパトカーの無線も破壊されて、味方も呼べない状況にも関わらず子供嫌いの女刑事と生意気盛りの少年は喧嘩ばかり。しかしやがて互いに心を開き、逃げ込んだ遊園地で追い詰められた女刑事は少年だけでも逃がす為、いちかバチかの賭けに出る。

弾切れの拳銃に命を託すシーンで、女刑事がひとり歌を口ずさむシーンが印象に残った。

「面白かったなあ！ あの女刑事カツコよかつたぜ！ なんか昔の千冬姉を思い出したな」

「面白かったねー！」

「楽しめたようで何よりだよ」

「……」

背後にいる観客も口々に感想を言っていた。

「本来なら同性のああいいう手合いはあまり好かんが、今度ばかりは気に入ったぞ！」

「あまり品の良い作風では御座いませんですが、まあ、興味深く拝見させて頂きましたわ」

「古いドラマみたいだけど、街とかファッションもオシャレだし、なんかカッコイイよね！」

「主役がいかにも仕事も恋もデキる女って感じだったわね。何かバブルっぽいけどそういう時代かな？」

箒たちも楽しんでくれたみたいで何よりだ。なんやかや言ってセシリアも手に汗握って展開を見守っていたのをちらつと確認している。あと何気に鷹月さん鋭いな。このドラマ放映当時はバブル真っ盛りだった。

ともあれ、30年も前の刑事ドラマでこれだけ楽しんでもらえたのだから上出来だろう。

それに一夏には長いこと姉弟二人で苦労したと聞いている。年の離れた二人の男女がギリギリの状況で心を通わせるこのエピソードなら、織斑先生も多少は面白く観てくれるのではないかと俺は考えていた。

俺はふと織斑先生を見た。腕組みをしてエンディングを映すスクリーンを睨んでいたが、不意に俺を向いて言った。

「音羽。あの女刑事が口ずさんでいたのは何と言う曲か分かるか？」

俺は意外な質問に驚いた。

「中島みゆきの、アザミ嬢のララバイという曲です」

「……そうか」

織斑先生はそれだけ言うと、また機会があれば呼んでくれと言って立ち上がった。

そう言えばあのシーンで女刑事は、一人で眠れぬ夜は泣いてちやみじめだと歌っていたな。

「今日の所は大目に見るが、明日が半日授業だからといってあまり羽目を外し過ぎるな。特にその二人！ 時と場所を^{わきま}弁えろ。いいな

？」

一瞬で硬直した箒とセシリアに背を向けると、「音羽に感謝するんだな」と呟きそのままスタスタとドアから出て行った。

ドアが閉まる音がすると少しの間をおいて、全員が気の抜けたようなため息をついた。

「いや〜助かったよ三治！ やっぱ千冬姉が怒った時は三治だよな！」

一夏は自分が何にも出来なかったのも忘れて、俺を食べあわせか酒に合うツマミみたいに言った。

「助かった……三治、礼を言うぞ」

「お陰で助かりましたわ三治さん。あのままではどうなっていた事か……」

口々に礼を言われたが、そもそもの原因についての反省が無いのが少々気に食わなかった。

「次は無いぜ」

言つてすぐ事の発端である三人は飛び上がりそうな顔で俺を見た。

思わず噴き出しそうになるのをぐっとこらえ、俺はあえて真面目な顔を作った。

「冗談だよ。ただもう少し自分たちが周りに迷惑かどうか考えて行動した方がいいんじゃないか？ 今の騒ぎが俺のいない時だったらどうなってたか、身に覚えがあるだろ？」

俺の言葉に三人はぼつが悪そうに顔を見合わせていた。俺が生徒会の手伝いで居ない夜、派手にゲンコツを喰らったのをよもや忘れてはいまい。

説教臭いのが続くのも俺が疲れるので話題を変えた。

「そうそう一夏、明日は箒と遊園地だろ？ さっきのドラマみたいにお化け屋敷で箒にダサイとこ見せんよ？ うちのクラス代表はオバケが怖いじゃ格好つかねえからな」

今日は一夏を褒めたりけなしたりと忙しい。

「うるさいなあー。三治こそほんとは苦手じゃないのかよ？」

一夏は少しむくれた。

「それにエンディングで出てきたレンガの建物、セシリアが言った横浜の赤レンガ倉庫だぞ」

「マジか!? あのエンディングで走ってジャンプするのマネしたいんだよな! 日曜は三治も一緒に——」

まだセシリアを女性として意識していない一夏には『お出かけ』であつて、デートという意識は無いから仕方ない。だがセシリアの顔が目に見えて引きつった。

「ごらー! 日曜はちゃんと約束したセシリアと行け! 二人とも横浜行くの初めてなんだろう? 一緒に写真撮つて来いよ。また今度みんなで行けばいいじゃないか」

一応セシリアが物申す前に釘を刺した。

「わ、わかつたよ」

一夏は結果的に俺からいろいろ言われて面白く無きそうだが、二人に怒鳴られないよう間に入ってやったんだから、むしろこっちは感謝が欲しいところだ。

しかし説教ばかりじゃ俺も含めて皆つまらない。

「まあ小言はこれくらいにして、まだみんな時間があるならもう一話一緒に観るか」

軽く歓声が上がリ、慌ててみんな声を潜めた。ついさつきうるさいと叱られたばかりだ。しかし俺の好きなものを皆が気に入ってくれたのは正直嬉しい。

それに俺が大都会シリーズに出てるとか騒がなくなった事でほくそ笑んだ。

俺はDVDを入れ替えて2話を再生した。例の赤レンガ倉庫がアクシヨンシーンでも登場する。

今度は主役の二人が派手に活躍する話だ。ブランド物のスーツに身を包み、ジョークを飛ばし犯人と撃ち合う。無茶でスタイリッシュに犯人を追い詰める姿は、時代を超えて観る者を魅了することを再確認したのだった。

追い払うように一夏を見送った俺は、学食で本音や会長たちと昼食

を撰っていた。

本音と俺が座るテーブルの向かいに会長と簪さん、それに虚先輩が座っている。生徒の数はまばらだ。せつかくの土曜日なので、みんな午前のみの授業が終わり次第着替えて出かけたり、寮でダベってたりしてるんだらう。

「昨日は楽しかったね〜」

「人気があるなら、また上映会でもやるか。正直女子が楽しめるやつはあまりストックがないけど」

本音と昨日の事を話していると、どこかやつれた顔の会長が口を挟んできた。

「ちよつと、私たちのいない所で二人で何してたの？ 白状しなさい！」

「会長は簪さんと姉妹水入らずだったんじゃないんですか？」

俺は鴨そばをすすった。最近では簪さんも学食で会長と一緒に食事を取っている。ただ一夏には近づきたくないので、俺と本音が一夏を食堂端のテーブルに誘導し、反対側の端にあるテーブルに会長と簪さんが座るといふ形をとっている。

「ふふん、聞いて驚きなさい！ 私たちは簪ちゃんの打鉄うちがねにしき式完成に向けて急ピッチで製作進行中なのよ！ ここ数日はその突貫作業中でね……お姉さんあまり寝てないの」

それで疲れた様子なのか。見ると簪さんと虚先輩は会長の様子を気にしているらしい。妹の為とはいえ忙しいのによく頑張るもんだ。

「あれ、それじゃ俺が本音と遊んでたらまずいのでは？ 本音も手伝わないと」

簪さんは首を振った。

「いいの……音羽くんには私もお姉ちゃんもお世話になったし、本音は音羽くんのそばにいてあげて欲しいから」

音羽くんも色々大変なんですよ？ そう言われてほつとしたような嫌な事を思い出すような、複雑な気持ちになった。

「そっか……悪いな気を遣わせて。ところで——」

生徒会の仕事は大丈夫なんですか？ そう言おうとした所で会長

に遮られた。

「あ、今私が生徒会の仕事をサボッてると思つたでしょ!? 違うわよ、ちやあんと虚ちゃんからは打鉄式式の完成までは猶予をもらつてるんだから!」

「他ならぬ簪さまの専用機の為ですし、今回ばかりは特別です。無論私もお手伝い差し上げておりますし、これが終われば休日を含んでギリギリ働いて頂きますので、どうぞご心配なく」

俺の心を読んだのか、二人はしつかり疑問に答えてくれた。その後で会長はもう少し休憩したいわよと文句を言い、早く完成させれば時間の余裕が出来ますねと虚先輩が受け流していた。

「ま、虚ちゃんの他にも整備科の助っ人を呼ぶ予定だし、上手くすればギリッギリだけど来週のクラス対抗戦に間に合うわ! ……もつとも機体だけで装備までは厳しいけどね」

「大丈夫……お姉ちゃんや虚さんに手伝ってもらつた機体。……絶対に負けないわ」

簪さんは小さいが力強い声で答えた。俺はそれを聞いて、あまり無理しないで下さいねという言葉を引きつめた。今は無理をしなければならぬ時なのだ。彼女たちの誰にとつても。

「その意気よ! そうだ、クラス対抗戦直前まで粘れば装備も——」
「お嬢さま? 簪さまはまだまだ挽回のチャンスは御座いますが、お嬢さまには後に執務も控えております。次回の休日は無くなりますがよろしいですか?」

虚先輩の容赦ない言葉に相変わらず会長はブーブー言っていたが、急に真剣な顔で俺を見た。

「まあその辺の諸々はいずれ片付くとして、音羽くん、ちよつと聞きたい事があるのだけれど、いいかしら?」

「急になんです?」

いきなり真面目な顔をされて俺は戸惑った。ちよつと考えたが身に覚えがない……けど一夏がらみなら何かあつても不思議じゃないな。

「最近、ISの訓練ちゃんとやってる? キミが入学してからずっと

アリーナ使用許可を申請した形跡が見当たらないんだけど」

「それは……」

俺が一番忘れたい事を突きつけられて言葉を失った。正直やりたくなかったのだ。一夏の特訓のついででヨタつきながら歩いたりしてみたものの、出来たのはそれだけだ。あれからISの操縦には強い苦手意識がついてしまった。ISそのものは嫌いではないけれど、どうしても転倒や怪我の不安が頭から離れず、積極的にはなれずじまいだ。それにISを装着した姿を人に見られるのが恐い。恥ずかしくて辛いのだ。

その事を打ち明けると、会長は厳しい顔つきになった。

「冷たいことを言うようだけれど、それは音羽くん自身が克服しなければならぬ問題だわ。周囲の助けを借りてもいいけど、最終的にはキミが自分でISと向き合って折り合いをつけなければ解決はしないわよ？ 強制されたとは言え、入学した以上音羽くんには何らかの形でISのオーソリティとなるべき義務があるの」

それに、と会長は続けた。

「こんなこと言いたくは無いけれど、内閣府や政府関係者で口の悪い人たちはキミの事を『適性D』と呼んでいるわ。IS操縦者の最低基準のCよりさらに下だと言って馬鹿にしているのよ。ISから逃げ続ければ音羽くんの評価はずっとこのままだわ。むしろもつと酷くなるかも知れない。それで本当にいいの？」

よく見ると会長の目は哀しそうだった。俺は返す言葉もなく会長から目を逸らした。

ツケが回ってきた、と思った。散々人を批判しながら、自分のことは棚に上げてきたのだからお笑いだ。今まで他人の欠点ばかりが目立っていたため指摘されなかったが、俺自身IS学園にいるにも関わらず一番根本的な問題を抱えながら解決の努力もしていないという、存在意義自体を疑われる不甲斐なさを突きつけられたのだ。むしろ言われるのが遅かったくらいだろう。

しかし一方で、自分はしよせんバグのようなものだとも思っていた。たまたまプログラムのミスに似た何かによってちよつとばかり

ISが動いたに過ぎないと。ブリュンヒルデの弟でありサラブレッドのような一夏とは違い、本格的な動作を行えるほどの能力は初めから無いと諦めていた。

「……『適性D』か。確かに言われてみればその通りかも知れません。一夏の特訓中にさんざん動かしてみても、さっぱり思うようにはなりませんでしたし」

小さな声でそれだけしか言えなかった。だがそれに対し会長は驚くべき返事を俺に放つてよこした。

「本当に操縦能力が低いかどうかはとことんまでやってみなければ分からないわ。私にはISコアが動かす資格もない者に反応したとは思えない。少なくとも私はISコアもある程度は人を選ぶものだと考えてるの。キミもコアに選ばれた一人として自覚を持つべきだと思うわ」

コアに選ばれた？ 俺は適性検査でISが起動して以来、一度としてそんな事は考えもしなかった。いくら未解明の部分が多いとしても、動かす人間を選別する能力がISコアにあるとは思えなかった。

会長はそんな俺の疑問などお構い無しに続けた。

「ISコアは未解明のブラックボックスである事は知っているわね？それが意識を持つ存在である事までは分かっているけれど、近年の研究では一部の操縦者に対して何らかのコンタクトを取ろうとするらしい事が分かってきたの」

驚いた。まさかコアがそんな事までするとは。ではコアは能動的に操縦者へ働きかけるものなのか？

「ISが意識を持ち何らかの形で操縦者に影響を与え、さらにコミュニケーションを取ろうとする。それはつい最近分かってきた事だけれど、キミは身に覚えがあるはずよね？」

言われてハツとした。花粉症の治癒……体調の変化……確かに思い当たる節はあった。

「それは確かに……しかし……」

「それだけでは疑問に思うのは無理もないわね。まだ科学的な検証は

始まったばかりだもの。でもISがキミに働きかけたのは事実よ。なのにキミが逃げていてどうするの？　まずはやってみることよ。今日は織斑くんも出かけてこれから暇よね？　実は第5アリーナを貸切にしてあるの」

思わず目を剥く俺に、生徒会長権限よといたずらっぽくウインクした。

「本当なら来週月曜まで整備中ってことになってるけど、どうせ後はシールドの点検ぐらいで主な作業は終わってるしね」

唐突な話にどうしたものかと思っていると、一気に会長が畳み掛けてきた。

「自分に自信を持ちなさい！　あなたがISを動かしてここIS学園に入学したことには、必ず何か意味があるわ。それを自分の力で証明するのよ。私たちを変えた音羽くんならきつと出来るわ。とにかく今日から、出来るだけISに触れてみることに、いいわね!!」

「は、はいー」

会長の勢いに圧倒されて思わず返事してしまった。周囲の反応が気になって周りを見ると、本音や簪さんはほっとした顔をしている。まるで俺の反応を最初から伺^{うかが}っていたようだ。ひよつとして、最初からこの話を知ってたのか？

「よかった〜！　おとーさんがイヤって言ったらどうしようかと思っ
たもん」

「本音?」

安心しきった表情の本音を虚先輩が少し睨んだ。

あーやっぱりかと思つたとき、簪さんが口を開いた。

「やっぱり、気がついた?　……ごめんね、騙^{だま}す気はなかったの……でも音羽くんにも、ISを好きになつて欲しくて。……せっかくISが動かせるのに、ISが苦手なままできて欲しくなかったから」

「黙っててごめんね。だけどスパルタで上手くなれるおりむーと違つておとーさんは繊細だし、ISの影響で辛い目にも遭つてるから、ま
ずはおとーさん自身がISに親しみを持って、それからやる気になつてくれるようお嬢さまにお願いしたの〜」

「そうだったのか……二人とも心配かけて申し訳ない」

簪さんと本音の言葉に俺は納得した。最初から俺がIS実技を頑張れるように皆で協力した上での事だったのだ。

会長が再び話し始めた。

「簪ちゃんが相談してきたのよ。このままだと音羽くんはISが苦手なままする過ごしちゃうんじゃないかって本音ちゃんが言ってたって」

「私たちは音羽くんにお世話になったにも関わらず、あまりご恩返し出来ていないのを心苦しく思っております。皆で相談しました所、一番良いのは音羽くんがISで一人前になるのを手助けさせて頂く事ではないかということで意見が一致しまして。要らぬ節介ではないかという懸念も御座いましたが、やはり私たちが出来る最善はこれではないかと」

会長の言葉を虚先輩が引き継いで結びとした。

やばい、嬉しくてちよつと泣きそうだ。今まで俺にここまで向き合って支えてくれた人ってほとんどいなかったよ。

……でも本音の言い方だと一夏はちよつと気の毒か。

「いらぬ節介だなんてとんでもないです。俺の方こそ生徒会には決闘騒ぎやらでお世話になってるのに、こんなに気にかけて頂いて。感謝の言葉もありません」

俺は深く頭を下げた。一夏や織斑先生に厳しく当たりながら、自分は未熟なところを最初から諦めてほったらかしていたのだ。それをわざわざ気にして助けてくれるなんて、ここIS学園でなければそんな人たちには出会えなかっただろう。散々一夏たちに大きな態度を取ってきた事も少し反省した。

そんな俺の頭を本音がよしよしとなでた。ひどく照れ臭い。

「そうと決まれば善は急げよ！ 食べ終わったらすぐISスーツに着替えて第5アリーナに向かいなさい。私たちは行けないから本音ちゃん、しっかりとサポートするのよ？」

「はい、お嬢さまー」

話がまとまって、場は暖かい空気に包まれた。

「頑張つてね……私も専用機が完成したら、アドバイスや模擬戦で協力できるから……」

簪さんの言葉に俺が礼を言うと、会長がいつの間にか食べ終わったオムライスの皿にスプーンを置いて、イスにだらしなくもたれかかった。

「あく一仕事ついてホツとしたわ！ なにしろ内閣府の連中が二人目の操縦データがまだ提出されないが何かあったのかってうるさいんだもん」

「お嬢さまっ！」

虚先輩が今度はギロツという擬音がピッタリの恐さで会長を睨んだ。なんだ、そういう事情もあったのか。

そういや入学して10日以上経ってるのに、ISの操縦データを未だに内閣府に渡していない。ロクに動かせていないのもあるが、他に色々ありすぎて忘れていた。実際俺がISを操縦する時には、必ず政府関係者から渡されたUSBメモリに似た記録デバイスをISに取り付けデータを収集することが義務付けられている。もつとも歩くのがやっとの今までのデータを渡してもろくな反応は返ってこないだろうが。

しかし、会長の言葉のお陰でほんの少しだが自信がついたように思う。とにかくISを動かしてみなけりや始まらないのだ。周りが何を言おうがどう思おうが、自分の成長とは関係ない。できる事から始めよう。

……それはいいのだが、何だか気になる点もある。ISコアからのコミュニケーション、ISが人を選ぶ……そんな事がありうるのか？ 一体何のために？ その一例を体験したとはいえ、俺にはどうにも判断しかねた。

ちよつとした疑問にとらわれていると、俺たち5人がほぼ食べ終わったのを確認した会長が言った。

「最初は誰でも初心者なのよ。まだ音羽くんがISを操縦するようになって半月も経ってないじゃない？ キミの技量を測るには早すぎるわ。人に見られるのが恥ずかしいなら、また時々ギャラリーのいな

いアリーナを用意してあげるから」

俺が頷くと会長は満足そうな笑みを見せた後、さあそろそろ行動開始よと言って立ち上がった。

「よし、とりあえず歩行訓練だな！」

と、勢い込んで打鉄を装着したものの……どうにも動きが硬いなあ……。

アリーナでISスーツ姿になった本音の胸が意外にデカくて、思わずガン見してしまったのもすっかり忘れるほど、俺には早くも絶望感がただよい始めていた。

「おとーさんがんばってー」

本音の声援に引きつった笑顔で答え、えっちらおっちら足を動かすのだが、どうにもIS自体が動くのを渋っているような、ギクシヤクした歩き方になってしまふ。転倒しないよう気をつけて慎重に進んでいるつもりなのだが、頭から不安が離れないためか、何だか他人の体を借りて動いているようだ。

俺と本音しかいないアリーナで、俺の打鉄が立てる重たげな足音だけが響く。

「うゝん……一人で歩けるようにはなっただけ進歩はしてるのかな」

俺が歯切れ悪く言うとお本音は、じゃあ手本を見せてみるねと言いつつトテトテと格納庫へ走ってゆき、やがて俺と同じ打鉄をまもって戻ってきた。

地面スレスレをなめらかに滑空して。

「ただいまー。あれ、どうしたのゝ？」

なんでもない、そう答えたが内心凄く気が重くなったように感じた。

歩くのにもこんなに苦労して……俺、大丈夫なんだろうか？

「だいじようぶ？ 少し顔色がよくないよゝ？」

「だ、大丈夫だって。しかし本音はもうそれだけ動けるんだよな。そこそこ操縦経験あるのか？」

本音の言葉に慌てて返事する。

「この移動は初歩で……あつ！　ごめんね、こんなの見せられたら自信なくすよね」

「そんなことないって！　ええつと、なにかコツは……そうか、イメージが大切って言ってたよな。うーん……」

本音の沈んだ声にまた焦つて、変に高い声が出てしまった。

「そうだよ。じゃあ例えばー、ISでしてみたいことは？」

「してみたい事かあ、ええつと」

ISでしてみたい事……？　よく考えたら俺、ISを装着しているときは単に動かすのが精一杯で、それ以外の事なんて考える余裕なかったな。転ばないようにとか怪我しないようにとか、頭の中はそればかりだった。それ以前はISなんて俺に縁もゆかりもないシロモノだと思つてた。入学後もどこか他人事のようにだったし。

……うーん、ダメだこりゃ！

俺がアカンという顔をしたのを読み取ったのか、本音はまた別のアプローチを提案してくれた。

「んーそれじゃあ何か楽しそうなことを考えてみてー。ISでやったら面白そうなことー」

「面白そうな事か」

「そうそう、気楽に考えればいいんだよー」

本音の言葉に、何となく最近見た楽しそうなことを思い出してみた。

そうだなあ、確かあれは……ISだと少し浮かんでないと足で地面を削りそうだから……こんな風に。

「あつ！　ムーンウォークだ！　すごーい!!」

「えっ?」

ふと気付くと、視界がゆっくり後退しているのが分かった。なんか俺バツクしてる？

「わっ！　もう動いてる!」

自分でも気付かない内に滑らかな動きですべるように後ろへ進んでいた。ちよつと思ひ浮かべただけなのに、早すぎる！

「面白そうー！　どうやったの?」

本音の無邪気な質問に、状況についていけない俺は返答に困った。それからは取り敢えず思いつき次第あれこれと出来そうな事をイメージしてみた。バク転、側転、空中でのブレイクダンス、パルクールもどき、はっぱ隊、ウンジャラゲ体操、ゲッダン……。

気がつくのと、時刻は夕方5時を回っていた。

「調子はどう？ 一段落ついたから様子を見に来たけど——何やってるの!？」

「えっ?」

俺と本音はコマネチしている所を急に声をかけられて振り向いた。

「あ、会長。簪さんの専用機の方は目処がついたんですか?」

「あくお嬢さまくかんちゃん打鉄式はどうですか?」

俺たちは間抜けなポーズを止めて呆れ顔の会長と虚先輩に近づいた。

「整備科2年のエースに協力の約束を取り付けた所よ。でも一体何やってるの?」

俺が会長に呆れた覚えはあっても、会長が俺に呆れるのは珍しかった。まあ、普通はもうちよつとISらしい事してると思うわな。

「何って、訓練ですよ。とにかく出来る動作を片っ端から試してるんです」

「おとーさんが最初に出来るようになったのムーンウォークなんですよ」

俺と本音の答えに、会長と虚先輩はなんともいえない表情になった。本来なら模擬戦の役に立つ武道関連の動作から始めるだろうから、俺みたいなのは異端もいい所だろう。会長はてつきり二人きりでイチヤイチャしてるに違いないと思ったのにか言つて虚先輩をさらに呆れさせている。

「はあ、じゃあちよつと何かやってみなさい」

「そんじやまあ」

会長の言葉に、俺は少し動きやすいよう距離をとった。

頭の中で、以前動画サイトで見たマイケル・ジャクソンのPVを思い浮かべる。すると知らない内に体がISに釣られるようにして動

いていた。

「なにそれ!? ISでそんな細かい動作をする人始めて見たわよ?」

「その動作はどのようにして会得したのですか?」

会長はもとより虚先輩も顔にこそ出さないものの驚いている様子だった。そもそも宇宙空間での活動を想定して生み出され、現在では競技用を隠れ蓑みのに軍事用を想定し製作されているISで、こんな細かい動きをする奴は世界でも俺だけではないだろうか?

まあ模擬戦の役に立つもんでもないし、あまり意味ないけどな。

「えっへん! 私が指導したんだよ」

本音が割と豊かな胸を反らして誇らしげだ。確かに本音のアドバイスのお陰でなめらかにISを動かせるようになったし、実際気負いせず一緒に訓練できる相手でもあるからな。

いずれにせよ、ヨチヨチ歩きが半日でこうまでなったのだから、それだけで俺にとっては快挙だ。

動きをイメージしたらほとんど無意識のうちにISの方から動き出した事を虚先輩に説明していると、さつきからスマホで何か調べ物をしていた会長が俺を向いて言った。

「あく今踊ってたのはこれね。ちよつと動画で見比べただけでもかなり似てるわよ? 再現度が高いわね……そうだわ! ちよつと真似ただけでアレなら曲を流せば全編PVを再現——」

「おいとつつあん方向性完全に間違ってるだろ」

訓練の成果確認もそこそこにはグダグダになった。

結局その日は自炊の買い物もあるので訓練はそこまでとなった。ISスーツ姿だとスタイルが分かりやすいだの、本音のボディはどうだったのとうるさい会長が虚先輩に首根っこを掴まれて消えていくのを見送り、シャワーを浴びて着替えると本音と二人でショツピングセンターに向かった。

驚いたことに、途中で既に普段着に着替えた筈と出くわした。

「あつ……」

俺たちと目が合うと一瞬羨ましそうな顔をして、すぐ気まずそうに

視線を反らした。

「もう戻ってたのか？ 一夏は——あつ」

よく考えたら、箒が一夏と行きたがってた遊園地はIS学園からそこそこ遠い。今の時間に戻ってよそ行きの服から着替えたとしたら、4時過ぎには向こうを出ている訳で。せつかく一夏と出かけたのにそんなに早く帰って一人でいるというのは……。

「しののん元気がないよー。どうしたの〜？」

そこで正面から斬り込むか本音？ しかしよく考えると、竹を割つたような性格の箒にはそれが正解かもしれない。

「貴様らはなぜ……なぜそう自然に一緒にいられるのだ？」

箒の懽然とした、それでいて^{すが}絶る様な表情に俺は固まってしまった。

「あ〜……何かあったのか？」

俺たちはショッピングセンター前の自販機横にあるベンチに場を移すと、それぞれ飲み物を買って座った。箒はうつむいたまま、成り行きについてぽつり、ぽつりと語り始めた。

聞けば、二人で遊園地についた当初は順番待ちの短いアトラクションを選んでそこそこ楽しんでいたらしい。が、昨晚話題にしたお化け屋敷に入った際、箒が背後から脅かしてきたギミックを反射的に壊してしまい、怒られた上に出禁を喰らい追い出されたという。

おまけにその事で一夏と喧嘩別れとなり、だいぶ前に寮へ戻っていたらしい。

「あちやく、それは……大変だったねー」

さすがの本音もどう言うべきか困っている。

「そもそも三治があんなDVDを見せるから——」

しまいに箒は俺に責任^{てんか}転嫁しだした。

「……そこはお前、驚いた振りでもして一夏に抱きつく所だろ？
せつかくのチャンスだったのに」

俺を睨みつけ恨み言を続けようとした箒はその一言できよとんとした顔になり、直後に悔やんでも悔やみきれないという表情で頭を抱えた。

「あああ……！ 千載一遇せんざいいちぐわうの機会を私はっ!!」

夕闇迫る大きな建物の片隅で、箒は勝手に怒ったり泣きそうになつたりと目まぐるしい感情の変化に振り回されていた。矛先が俺から逸れたのは助かったものの、別の意味で困った。

「おとーさん、早く買い物しないと帰りが7時になつちゃうよ〜?」

本音の言葉を聞くまでもない。しかしこのまま放つて置くわけにも行かず、俺が箒をなだめすかして立たせる間に、本音はジュースのペットボトルをもう一本空にした。

「あつ、そういえば牛乳も買うんだつた!」

結局箒には夕食の支度を手伝ってもらい、そこで俺と本音も口ぞえして一夏と仲直りするという事で箒を落ち着かせ、買い物に付き合ってもらつた。しかし帰り際になつて一夏に頼まれていた牛乳を買うのを思い出したのだ。

「え〜と低温殺菌低脂肪は……」

「なんだ、牛乳もいるのか?」

俺が牛乳コーナーで物色していると、箒が口を挟んできた。

「一夏が買つといてくれてき。あいつ妙なこだわりが——」

俺が言い終わらぬ内に箒は一つの製品に目をつけ、素早く俺の買い物カゴに放り込んだ。

「これでいいだろう、さつさと寮に戻るぞ」

「えっこれ? いや一夏は低音殺菌低脂肪のを欲しがってたんだよ」

俺の言葉にムスツとした箒はいつになく強硬だった。

「ならそれも買えばよからう。金は私が出してやるから、一夏には私が選んだほうを飲ませておけ」

まあそれぐらいいいか。俺は特に不利益もないので言われた通りにし、三人で寮に戻った。

結局カレーは一夏を加えた4人で作ることになった。引きずらない性格の一夏は箒と喧嘩したのかどうかも分からないぐらいさっぱりした態度で、プライドに阻害された箒のもどかしい謝罪も笑顔で受け入れた。

そのまま和やかな食卓を囲むかと思いきや、ちやっかりセシリアが訪れたのみならず一夏が織斑先生を呼びに行つたのには驚いた。何でも織斑先生の普段の食生活が心配だからだそうだが、よりにもよつて昨日怒鳴られたばかりの織斑先生の合流で夕食の空気が少々重くなつてしまった。一夏だけは嬉しそうにしていたが、一夏の隣を織斑先生と俺に奪われた箸とセシリアは微妙な顔でスプーンを口に運んでいた。

おかわりをしたのは一夏と本音だけだった。

「あれ？ ノンホモ牛乳もあるぞ？ あまり好みじゃないんだよな、品質にムラがあつてさ——」

のどが渴いたと冷蔵庫を開けた一夏が首をかしげた。それは今日箸が買つていたやつだ。

間髪を入れず箸とセシリアが声を上げた。

「毎日飲め一夏。三治もな、忘れずにだぞ」

「そうですね一夏さん！ 三治さんもなるべく毎日お飲みくださいまし」

何かを察した本音は困つたような笑顔をし、何がなんだか分からない一夏と、無意味な事をと呆れる俺を見比べた織斑先生は一人ため息をついた。

長く熱い週末 後編

ホモじゃない牛乳を飲んだ後、一夏がまた皆で何か見たいと言いつた。

どうせ明日は休みだし、ゆっくり映画でも観たいところだ。しかし皆で楽しめて織斑先生が怒らず、俺もイジられなくて済むものとなる、俺のアーカイブスではちよいと厳しいのが現実だ。一夏は確実にアクションものを期待してるだろうし、と言つてあまり死人が出る作品も不味い。あとは売春婦とかふしだらな女が出てこず、主人公は子供でも一夏でも分かる正義の味方……。

やれ時代劇をやれだの恋愛ものもいいだの言う問題児二人は脇において、結局『ポリス・ストーリー／香港国際警察』にした。体を張つたアクションなら世界一のスーパースター、ジャッキーチェンのベスト映画の1つだ。

映画が始まってから、立て続けに目が放せないアクションの連続している間は誰も話さず、危険なシーンの連続に全員が見入っている。合間に挟まれるラブコメ調のギャグも展開に緩急をつけ笑いを誘つた。ただ、主人公の刑事が女性証人を家に匿かくまつたため恋人に浮気と勘違いされトラブるシーンでは、約二名が渋い顔をしていたが。

そこまでは良かった。しかし主人公の刑事が犯人たちに濡れ衣ぬれぎぬを着せられてから、観客たちに不穏な空気が漂い始めた。特に織斑先生と問題児二人が顕著けんちやくだ。箒は歯ぎしりしセシリアは若干毛を逆立てているように見える。織斑先生に至つては殺気が……ホラー映画以上の恐怖を演出しないで欲しい。

クライマックスでは、その鬱憤うつぶんを晴らすのごとく伝説と化した壮絶アクションが繰り広げられる。麻薬組織相手にデパート内を縦横無尽に暴れ回る、文字通り「体当たり」アクションの連続に、さつきまでの不穏組も大熱狂だ。

「外道どもを蹴散らせ！」

「やつておしまいなさいー！」

「やれ。私が許す」

最後には明確な嫌疑のない弁護士をも怒りを抑えられずボコってしまうラストだが、感情移入しすぎたのか元々倫理道徳が薄いのか、織斑先生は特にこれといった苦言を呈することも無かった。

しかし何度観ても凄まじい命がけのアクションだらけの映画だ。俺もこれを観るのは確か3回目くらいだが、飽きるどころか毎回ジャッキーを初め俳優が死ぬんじゃないかとハラハラしつつ放した。今はこんな大怪我覚悟のアクションを自前でやる役者は余りいないだろう。

ついでにその事で一夏に一言っておかなきゃならない。

「すごいなジャッキー！ 超カッコ良かったよな三治！ メチャクチャ面白かったぜ!! 俺も——」

やってみたいとか言うんだろ？ 俺は一夏が言い終える前に冷たい声でさえぎった。

「絶対真似すんなよ一夏。このNG集をよく見ろ」

ジャッキーチェンの映画にはラストにNG集がつきものだ。しかもかなりヤバげなアクションスタントの失敗が大量にあり、見ているだけで痛くなる。まあ映画本編でもかなり痛そうだけど。

「うわあ！ すごく痛そうだよ！ あっあぶない！」

本音が思わず声を上げる。止まるはずのバスにひかれそうになったり、大ジャンプ後の着地に失敗したり、主演のジャッキーだけでなく脇役の女優まで激痛が伝わりそうなNGシーンの連続だ。お茶目な失敗も混じっているが、一度見れば素人が安易に真似るのは躊躇ちゆうちゆうするだろう。

「ひええ！ あれは失敗するとヤバそうだなあ」

「だろ？ 間違っても真似るなよ。死ぬほど痛い思いをしたけりや別だが」

絶対しないと青い顔をする一夏を見てやれやれと思った。ジャッキースタントは必ず子供が真似したがるものだから、一夏も確実にそうだろう。この際はつきり言うが、一夏は精神年齢は12歳児だ。

「少々煮え切らん男だが、なかなか骨のある主人公だったな！」

「自身を顧みかえりず正義を貫く精神に打たれましたわ！ 女性関係は煮え

切らない所が玉に瑕ですが」

「……一度じっくり酒でも酌み交わしたい男だな」

不穩組にもおおむね好評だ。煮え切らないというのは、女性証人を連れ帰った主人公が恋人との三角関係に見えたからだろう。

「ハンチモー！ ハーンホンジイー！」

「てんちよんけっさんじいー!!」

一夏と本音は広東語の主題歌を意味も分からず歌っている。実際一度聞いたらクセになる、結構熱くてノリのいい曲だ。

「それは英雄故事って曲だよ。気に入ったならCD持つてるからスマホにダビングさせてやるぞ」

「マジかよ!? サンキュー！」

「わーいありがとー！」

それを聞いた箒たちも頼んできた。織斑先生もスマホを出したのには流石に驚いたが。

「なんだ、私が頼むのは可笑しいか」

「いえ、別に」

じろりと睨むブリュンヒルデに、俺はそ知らぬ振りで目を反らした。

「そういえば三治、なんでこの曲『踊るパンティー戦士』って言うてるんだ?」

「そう聞こえるだけだっつーの」

「んじや、行ってくるわ。7時までには帰るよ。アチャー！」

「おう、門限ギリギリまで帰ってくるなよ。あとうるせえ」

ジャツキーの真似をしている私服姿の一夏をドアまで見送ると、俺はベッドの上に転がって大きく伸びをした。

一夏は昨日の箒に続いて今日はセシリアとデートだ。絵に描いたような非モテ人生を送ってきた俺なんかとはつくづく正反対だが、そのわりにはさっぱり羨ましくないのが皮肉というか、何とも一夏らしい。

「というか今度こそ上手くいつてくれよ。」

俺は俺で本日のIS訓練は午後からの予定なので、午前中は入学以来久々にのんびりするつもり……だが。

「あいつ、また急に戻ってこんだろうな?」

俺は立ち上がるのと一夏の出で行った玄関を開けて廊下をよく見回したが、だらしのない格好の女子が腹をかきながらトイレに歩いてゆく背中が見えただけだった。ここは元々女所帯だったせいもあり、無防備にだらしのない女子の姿をたまに見かける。

「どうやら一夏は寮を出た後らしい。俺はラフな格好のまま大あくびすると、少しそのまま二度寝しよう」と――

「やっべ忘れてた! 三治! 今日米買つといってくれ!!」

「どうわあ!?!」

「たつた今玄関から出たはずの一夏がベランダから入ってきた。またかお前は!」

「どっから来てんだお前は!? セシリアはどうしたんだよ?」

「ほら、昨日おととい昨日と大勢で食事しただろ? 今日のうちに米買つとかないと無くなるからさ、ちよつと白式でベランダから――」

馬鹿野郎! あんだけみだりに起動させてはいかんと座学で習つてんのにもう忘れやがって!

「そんなんで専用機使うな! また織斑先生に怒られるぞ!」

「でも米――」

「買つといてやるからとつと行けつ! 早く!!」

今日ササニシキが安いんだよとうるさい一夏を急ぎ立てる俺は内心、一夏の到着が遅いとセシリアがブルー・ティアーズを展開して向かってくるのではないかという不安に駆られていた。そんな馬鹿な事はある得ないと信じたいが、どうにも俺にとって一夏たち三人は心臓に悪い。

「あいつはオカンか!? 今は家事よりデートを優先しろや!」

セシリアとの待ち合わせ場所であるモノレールの駅に向かう一夏を『今度こそ』見送ると腹のうちを吐き捨て、直後に全く無駄な言葉だと思ひ直して、今しがたのやり取りを頭から振り払った。

正気と常識を失わずに一夏と付き合うには、済んだ事はさっさと忘れるのが大切だ。

でも一夏はフェイント技をやめろ。

今度こそゆっくりしようとしてベッドにごろりとした。最近少し疲れていることもあってすぐとうとうとした。しかし浅い眠りは1時間もしないうちに遠慮がちなノックで覚めてしまった。

「はい？」

日曜の朝10時に訪問される用事が思い当たらない。教師の誰かか、一夏目当ての女子かな？

ドアを開けると、立っていたのは箒だった。なにやら神妙な面持ちでこちらを見ている。手に何かの袋を提げていた。

「入ってもいいか？」

「ああ、どうぞ……一夏は出かけた後だぞ？」

分かっていると答えつつ入室した箒にテーブルのイスを勧めると、つまらない物だがと羊羹ようかんの包みを渡された。早朝にわざわざ買って来たらしい。

礼を言つて緑茶を二人分淹れると、互いに皿に載せた羊羹を前に向かい合った。

「……それで、どうしたんだ？」

何か言い出しにくそうな箒を刺激しないよう、出来るだけ柔らかい口調で聞いてみた。

「その、だな……すつ済まなかった三治！ この通りだ！」

箒は急に頭を下げて謝罪を口にした。俺は何の事やら理解が追いつかない。

「えつと、どういうことだ？」

「……昨晩皆と別れてから、頭を冷やして考えたのだ。折角せつかく三治が私と一夏のために『せつていんぐ』とやらをしてくれたというのに、己の未熟さで他人に迷惑をかけたばかりか一夏とも仲違いする結果になつてしまい、あまつさえ恩があるはずの三治にまで八つ当たりする

始末……わ、私は自分が恥ずかしい！」

本当に申し訳なかった、この通りだ。そう言っただけでなかなか頭を上げようとするに慌てながらも、俺は内心驚いていた。なにせ会った当初は感情的で自己中心的な印象だった筈が、素直に自分の非を認め謝罪してきたのだ。彼女は確実に成長していると思う。

同時に筈を幼稚な奴だと決め付けていた事を反省した。友達だと言いながら俺も彼女の未熟さは変わらないと見てびびっていたのが恥ずかしい。むしろ俺の方こそ成長しなければ置いて行かれるだろう。「それで土産片手にわざわざ謝りに来たのか。筈は律儀だな。俺もそういう所を見習うべきだなあ」

「う、うむ。……それでだな——」

褒められて照れたのか筈は少し赤くなっている。俺はにやにやしてしまいそうになるのをこらえ——

「ま、またその、せっていんぐとやらをしては貰えんか？」

「——えっ」

……まあ、予想は出来たけど。そろそろ筈も自分から一夏を誘ったら……喧嘩にならないためにはセシリアとも交渉する必要があるから、やっぱ難しいかな。

「わ、私の事を言うなら、三治はどうなのだ？ 少なくとも私は、お前が自分から布仏を誘っているのを見た事が無いぞ!!」

思わずギクリとした。また痛い所を突かれてしまったようだ。よく考えてみると、食堂へ行くのも一緒に帰るのも、全部本音から声を掛けてもらっているんだよな……。

「成長か……そうだよな、俺も自分から行動しないと……」

俺も筈のように自分から変わろうとしなければ、本音との仲も今より先に進まない……す、進むって！ 今より関係が進むと具体的にはアレか!? 俺みたいな奴からしたら都市伝説級の——!!

「? ま、まあとにかく頼めるか? ……出来ればあれだ、セシリアよりも先にだな！」

筈の切実かつ強引な説得に、俺は妄想から急速に現実へと引き戻された。

「おっ、おう……」

「今度は一夏とデートさせる口実どうしよう……？」

「箒が帰ってすぐ、俺は本音の携帯に電話を入れた。とにかく行動だ。それはいいけれど……」

「何に誘えばいいんだよ？」

「とっ取り敢えずあれだ、あいつスイーツ好きだし、またケーキでも買いに行ってみんなで食おうとか……あつ！ よく考えたら箒がくれた羊羹あるじゃん！」

「何コールもして出たのは何故か簪さんだった。」

「もしもし……音羽くん？ 御免ね、本音はまだ寝てるの」

「張っていた肩の力が一気に抜けた。あいつまだ寝てんのかよ。もう10時半だぞ？」

「昨日音羽くん達の部屋から帰ってきた後、ずっとIS製作を手伝ってくれてたからくたびれてると思うの。……申し訳ないけど、しばらく寝させてあげてくれない？ お昼には食堂に顔を出すから」

「そうだったのか、本音のやつ無理しやがって……でも親友が目の前で苦労してるのに、自分だけ遊んでられないよな。よく考えたら、俺のせいで負担が増えているのでは……？ なんとなくきまりが悪くなった。」

「何か手伝えないかと聞いたが、まだまだISの素人である俺に出来ることは無いようだった。」

「音羽くんは気にしないでね、本音には私から言っておくから……それじゃ、また」

「簪さんが通話を切ると、一人の部屋がずいぶん静かに感じた。平穩で自由な休日を欲していたはずなのに、」

「なんか空しい。」

「……俺も何か努力しよう」

「とは言うものの、具体的に何をしたらいいか分からない。とりあえず昨日のIS訓練でイメージによってISをそこそこ動かせたのを思い出し、何か参考になるものはないか、ネットで動画を検索する事にした。」

その日のお昼時、食堂には昨日と同じメンツが集まっていた。昨日と同じようにテーブルを挟んで向かい合う。会長は少し目にクマが
でき、簪さんも疲れが顔に出てきたようで少し心配だ。本音は……。
「起きろ！ 食器に顔突っ込むぞ！」

キツネの着ぐるみ姿で、昼食を終えた途端にうつらうつらしている。
今にも突っ伏して寝てしまいそうだ。

「済みません。本音も昨晚は余り寝ておりませんので」

虚先輩が本人に代わって答えた。仕方が無いので本音の食器も一緒に片付け、本音を少し休ませる事にした。本人はそのままテーブルにへばりつくようにしてうたた寝している。

「……休むなら、ちゃんとベッドに行かないと……でも……」

簪さんの言う通りだがとても起きそうにないし、部屋に連れて帰るにも……。

「あーあー、誰か本音ちゃんを部屋まで連れて帰ってくれたらいいのになく。誰か居ないかな？」

会長のいつものわざとらしい声を上げてニヤニヤした。照れる以上にうぜえ。

しかし、流石にほっとけないし、ここは――

〃お姫様抱っこしなさいよお姫様抱っこ！〃

――ささやく雑音は無視しておぶっていこう。

俺が簪さんに手伝ってもらって本音を背負うと、小声でそそのかしていた会長が不平を垂れた。

「もう、ヘタレねえ！ 音羽くんはもっと乙女心を理解しなさいよ！」

「……姉さん」

「お嬢様？ 無料ですよ」

簪さんと虚先輩にたしなめられて不満げな会長がやっと黙った。

本音を背負って簪さんと部屋まで歩く。会長と虚先輩は自室に戻った。徹夜のIS製作でスタミナ切れになる前に数時間仮眠を取るそうだ。

体力に自信の無い俺でも、本音はそう重くなかった。しかし3歩も歩かぬうちに、背中を圧するたわわの双子にすっかり気もそぞろだ。おかげでふいに簪さんから話しかけられてキョドリかけた。

「私も一旦休憩するつもり。ここで潰れちゃう訳には行かないから……」

「う、うんその方がいいよ、簪さんも疲れが出てるみたいだし」

あーびつくりした、話しかけられるまでたわわの事しか頭になかった。まあでも仕方ないよな。こんなにかう、密着するの初めてなんだから、意識しない方がおかしいよな？ 女の胸なんて……触ったことないし……。俺は簪さんの後について歩きながら胸の内誰にともなく言い訳した。

そのとき、急に本音が胸を押し付けるようにしてくっついてきた。ドキリとする俺の首筋に軽く吐息がかかる。

「おとーさん。……私といると……退屈？」

かすかな囁きが、背中の方から伝わった。

「えっ？」

「おとーさんって、自分から私を誘ってくれることが無いし、いつもおりむーが割り込んでくるし、何かとしののんとセツシーの面倒見てるし、何かあるとすぐおりむーが連れてつちやうし……。だから、このままだと私のこと忘れちゃうんじゃないかって時々心配になるんだく……。もうちよつと、こうしてて……。いい？」

俺にようやく聞き取れるだけの小さな声で、本音は俺の耳に口を寄せてしやべった。

「ああ……そうだったのか」

俺は囁き声で返事しながら、今朝箒に言われた事を思い出した。本音から構ってくれるのに甘えて自分から本音を誘わなかったり、一夏たちにかまけてちゃんと本音を見ていなかった事が、彼女をそんなに不安にさせていたのか。本音の事は毎日見てたつもりだったのに、全然気がついてなかった。

「……言ったことないよな。……好きとか、付き合ってくれとか……」

でも、今の状況でそれは……有力者や組織団体やらが、俺の『お相手』を巡って血脈やら利権やらで綱引きし合っているという現在はともかく、俺の今後をいつ勝手に決められるか分かったもんじやないし……。

それを差し引いても、今ここでは場違いって言うか……そもそも今まで恋愛とか、そんな俺には縁のないクサイ話としか思ってたのかなかったし、こういう時はどうしたら——ああもう今はそんなのはいいや！ 後の事は後でいいんだよ！

「ほ、本音！ あおき。今日は無理だけど、来週の日曜とか空いてるか？ 学園島の真ん中あたりの丘にある公園なんだけど、風が気持ちよくて学園全体が見渡せる景色のいい場所らしいんだ。俺、学園島の外はまだ難しいから、もし暇だったらさ、そこに……」

俺は小声で慌て気味にそこまで言うのと、慣れない一言になけなしの勇気を振り絞った。

「二人で行かないか」

その後の沈黙は、きつと時計の秒針が1、2回動く間しかなかったはずなのに、気が気じゃなくなるほどに長く感じた。

「行くー」

本音の大声に、俺も前を歩く簪さんもぎよつとなって振り向いた。

「本音……起きたの？」

驚き顔の簪さんに慌てた本音はしまったという顔をし、イタズラがばれた子供のように舌を出した。

部屋に着くと、簪さんにドアを開けてもらい本音をベッドに下ろした……おろしたが本音の腕が離れない。

「もう行っちゃうの？」

「え？ うん……」

本音が腕を俺の首に絡ませたまま離さないのを見て簪さんはくすくす笑った。

「ねくもうちよつとだけ」

「こ、こら。簪さんが困るだろ？ あつそうだ！ 今朝箒が羊糞くれたんだ。疲れた時は甘いものって言うし、簪さんも一緒にどう？」

「ふふふ。……それじゃ私もご馳走になろうかな」

簪さんの視線に恥ずかしくなって俺は目を反らした。

「じゃ、じゃあちよつと取って来るから」

本音が腕を放すが早いのか、俺が来たばかりの部屋を出て自分の部屋に向かおうとすると、本音が今度は俺のTシャツの背中をつかんで着いて来た。

廊下に出ると、ふいに本音の手が腰に回った。後ろからぎゅつと抱きしめられ、思わず立ち止まったまま硬直してしまう。

「ほ、本音?」

「ごめんね……私ってめんどくさいかな……?」

なんだかいつもより元氣のない声だ。俺は出来るだけ明るく返事した。

「そんな事ないぞ。それに俺も反省したよ。あまり自分から誘うとか無かったし、本音の気持ちとか……あんまり分かってなかった」

俺は今朝の箒とのやり取りを話して聞かせた。

「箒が本音にもよろしくとき。あいつも成長してるんだなあつて。俺はあんまり自発的に進歩できてないけど。人に言われてから気づいたり行動したりばっかだし」

こういうのも指示待ち人間っていうのかなあ。さつき本音を誘うだけでもかなり勇気が要った。

「そんなの気にしなくていいと思うよ。進歩とか成長つて、いろんな人とふれ合つて、お互いに違いつか相手の良い所とか意識したり、互いに影響や刺激を与え合つたりして起こる事も多いんじゃないかなあ」

本音は俺の背中から離れて横に並んだ。

「それにおとーさんは学園に良い影響を与えているつて、お姉ちゃんもお嬢様も言つてたもん。言い過ぎて騒ぎになった事もあつたけど……。『音羽くんがIS学園に来たことで、良くも悪くもIS学園に変化の季節が到来したわ』つてお嬢様が」

あの会長がそんなことを言つてたのか。しかし良くも悪くもつて……全くその通りだな。どちらの比率が多いかは考えたくないけど。

まあ今この場の俺は小さい変化でいいや。

「ほら、簪さんが待ってるぞ」

そう言った俺は何も考えないようにして本音の手を取った。だぶだぶの袖の上からだけど。

……アカン、軽い気持ちだったがめっちゃ緊張する。

「あ……」

女子と手を繋ぐなんて初めてだ。し、しかも自分から。まあ、人目がないから出来たようなもんだが……本音は嫌がってない、よな？

「行くう」

自然な笑みを浮かべて言ったつもりだが、ちよつと引きつっていたかも知れない。

「ま、待って」

ふいに本音が手を離れた。もう死にたいと思った瞬間、本音が急ぎ着ぐるみの袖をまくってあらわになった、小さな手が差し出された。

「はい、行くうー！」

笑顔の返事に、混乱していた頭の中身は吹き飛んだ。温かく柔らかな手を握って、俺は本音と共に歩き出した。

手を繋いで戻ってきたときは簪さんに見られてかなり気恥ずかしかった。簪さんは目を丸くして、今日は本音に驚かされてばかりねと微笑んでいた。その後俺に聞こえない声で本音とぼそぼそ話しては、ダボダボの着ぐるみにばんばん叩かれて笑っていた。

羊羹は例によって本音が自分の分を一番大きく切ろうとし、結局俺が包丁を握って三人の小皿に二切れずつを載せた。しようがないので本音の分は心もち分厚くしてやったが。

羊羹をつつきながら先ほどの話を簪さんにも話した。無論、変化と成長の話だ。

「音羽くんは悩んだかもしれないけれど……少なくともその変化のお陰で、私はお姉ちゃんと仲直りできたと思う。……良くない影響もあったとしても、音羽君なら失敗からも学んで成長できると思うし」「そうだよ、悩んでも失敗しても、そこから成長すればいいのだ〜！」
簪さんの答えを本音が後押しした。

考えてみれば、IS学園に入学する前は一銭にもならない学校行事や課外活動なんか嫌いだつた自分が、成り行きとはいえ生徒会活動を手伝う事になるとは驚きだ。今までは他人の事など無関心だったのに、積極的にではないにせよ一夏と女子たちとの仲を取り持ったり、生徒会のトラブルを仲裁したり……。自分もここに来て短い間に変わったのかもな。やっぱり環境の変化、ここに来て悪意や偏見のない大勢の女性と関わったことが大きい、特に一部の人たちからの強い影響が作用しているのを意識せざるを得ない。

その良し悪しはともかく、自分に影響を与えたと思う人たちの思い浮かべた。真つ先に本音が浮かんで顔が赤くなる。

「どうしたの？ ……顔、赤いけど」

俺は慌てて何でもないと首を振った。何か別のことを考えて忘れようとする。

皮肉なことに(?) 即一夏の顔が浮かんだ。 ……ついでに織斑先生も。

「今度は変な顔してるけど……大丈夫？ どこか具合が悪いの？」

俺の表情の急変に、簪さんは不思議そうな顔をした。

「いや……良くも悪くも人付き合いは影響を与え合うものだよな、っ
て思っただけ」

いい影響ばかりとは限らない。どんな相手でも人付き合いにはプラスマイナスの両面がある。そのことを俺はひしひしと感じた。

羊羹を食べて駄弁った直後、本音は今度こそ本当におねむになつた。キツネっ娘をベッドに寝かしつけると、俺はIS訓練のため一人アリーナへと向かおうとした。が、ISスーツを持っていない事を思い出し、慌てて寮へ取って返した。

その途中だった。寮への並木道ですれ違った、大きなボストンバッグを背負った女子に呼び止められたのは。

「あー！ ちょっと待ちなさいよアンター！」

俺が振り返ると、その背の低い見慣れない女子は俺を指差して大声で問いただした。

「その黒い制服、一夏と一緒に写真に写ってたでしょ？ 二人目の男子っていう」

「写真？ ああ、ネットに流れたやつか」

以前この並木道の横断歩道で一夏たちと写真を撮った時、大勢の女子たちが一夏の写真を欲しがりSNSで拡散させたのを思い出した。

「なんで今さらそんな事を？ ここの生徒なら——」

もうみんな知ってるだろ、そう言いかけて気づいた。目の前の女子には全く見覚えがなく、背中に荷物を背負っている事、さらに一夏を名前で呼び捨て……まさか。

その女子は美人というよりは可愛い部類の整った顔に不敵な笑みを浮かべ、両手を腰に当てて誇らしげに慎ましい胸を反らせた。

「フツ。いい？ 私はね——」

「一夏の知り合いの転校生か？」

思わず口を挟んでしまった。

「先に言わないでよっ!! てゆうか何で私のこと知ってるわけ!? 国から聞いてたの?」

「悪い、何か言動からしてそうじゃないかと思って」

俺が答えると、彼女は面白くなさそうにこちらをじろじろと見つめた。

「ふーん。アンタ、一夏の友達？ あいつと付き合いのある男子は軒並みバカだったけど、アンタはそう見えないわね」

「そいつはどうも」

類は友を呼ぶとは言うが、一夏のIS学園以前の友人もあいつとどっこいの脳筋だったのか。俺も頭のいい方じゃないが、そいつらと比べられるのも複雑な気分だな。

俺が皮肉げに苦笑すると、まだ名前も知らない彼女はギョツとした顔をした。

「恐い笑い方しないでよ! 何かあたしに恨みでもあんの!？」

「初対面でそこまで言うか……」

あまり鏡を見ない性分だが、そんな凶悪なツラなんだろうか？ これ以上外見について言われたくないので、ごちゃごちゃ聞かれる割に

まだ互いに名乗ってもいないと話題を変えると、彼女はアニメキャラじみた栗色の長いツインテールをゆらして再び胸を張った。やはり本音に比べるとずいぶん寂しい。

背丈は本音とそう変わらないけど、いろいろと対照的な女子だ。

「あたしはファン鳳 リンイン鈴音！ 専用機持ちの中国代表候補生よ。今日から一夏のライバルってわけ！」

自信たっぷり宣言する鳳に、俺は驚きよりも気まずさを感じていた。そりゃ、新たに専用機持ちの代表候補生が来たことや、それが一夏の知人というのは確かに驚きだ。だが俺にはそれ以上の懸念が生まれていた。

「驚くのも無理はないわね！ まさか一夏のライバルが突然海の向こうから現れるなんて思わなかったでしょ？」

「……鳳さんと言ったな。やっぱり一夏が好きなのか？」

「だけどまだ一夏には内緒にしときなさい——えっ？」

得意満面で話し続ける鳳さんの顔が凍りついた。恐ろしいものを見るような目で俺を見上げ、直後に激昂した。一瞬で顔が真っ赤だ。

「なんで知ってんのよっ!! まだ誰にも言って——まさか一夏から聞いたの!?!」

「……いや」

やっぱりな、俺はかぶりを振った。しかしこの学園は一夏に想いを寄せる女性を呼び込む引力でもあるのか？ わざわざ入学の後になってまだ増えるなんて。そのうち手が付けられなくなるんじゃないかな？

「一夏は何も言っていない。そもそもあいつにとっちゃ女心なんて存在すら理解できないブラックボックスだぞ」

一夏と多少なりとも付き合いがあるなら知ってるだろう、俺の言葉に彼女はぶすつとして目を逸らした。

「だって、アイツ本当にどうしようもない唐変木だし……って、そんな事はいいのっ！ それより、その、なんで分かったのよっ！ あ、あたしが……一夏のこと……その……」

激昂したかと思えばもじもじしてみたり、一夏がらみの女子は揃っ

て感情表現豊かな娘が多い。

「IS学園に入ってからまだ短い付き合いだが、一夏に惚れた女子の態度は散々見ているからな。それに一夏を気安く呼び捨てする女子が、入学式の後にわざわざ海外から転校してくるなんて、あいつを追いかけてきたようなものじゃないか」

だいたい箒とセシリアの二人共がプライドが高く好きな相手に素直になれない人種だ。そこへ目の前の風さんまでが、一夏相手に親しくも挑戦的とくればな。まったく一夏ラヴ勢はあつらえたように不器用者ばかりだ。

「余計なお世話よっ!! あつ、今一夏に惚れた女子って言ったわよね? あの写真に写ってた女子ってやつぱり——」

「悪いが今日はこれから訓練なんで、続きは今度にしてくれ」

じゃ、と俺はその場を離れようとした。ダラダラ立ち話をしていてうっかり墓穴を掘ってしまった。俺の自己紹介はまだだが、どうせ興味は無かろうし、とつとと退散——

「待ちなさいよっ! アンタにはまだまだ聞きたい事が山ほどあるんだから! 逃がさないわよ!!」

——出来なかった。驚くほどの力でがっしりと腕を掴まれて離れない。なんのかんのとわめき散らす駄々つ子を引きずって行く訳にもいかず、結局一緒にISスーツを取りに寮に戻り、アリーナで訓練がてら話の続きをする事になった。

「なんでずっと地上なのよ? ISは3次元機動するもんでしようが!?!」

「そう言われてもな、俺はまだ初心者なんだよ」

「んなもん私がやった風にやればいいのよ! ホラ行くわよ!」

俺の抗議も空しく、強引極まりない臨時講師のちびっ娘は赤紫と黒を基調とした専用機を展開すると、ツイントールをなびかせて大きな螺旋をアリーナの空中に描いて見せた。

「ほらやってみなさい! このあたしが直々に教えてあげてるんだから、これくらいすぐマスターしなさいっての!」

「はあ……」

未だ名目上整備中でがらんとしたアリーナに二人で入り、俺が訓練機の打鉄を引っ張り出して装着したまではよかった。だが俺がジロジロ見られて訓練するのに慣れず動きがぎこちないのを見て鳳さんは酷く苛立ち、臨時コーチを買って出てくれはしたものの、『ノリで動かせ』や『感覚で分かれ』など、どうにも俺には理解が辛い指導内容だった。

アリーナに着くまでにも一夏の女性関係について根掘り葉掘り詰問し、俺が返事するたび『箒だかモップだか知らないけど、一夏の幼馴染といえば私でしょうが!』だの『一夏に模擬戦で負けるって、そのセシリアとかいうのも大した事ないわね!』だのと好き勝手言っていたが、おんなじ調子で俺の訓練についても自分の感覚というか感情をあれこれ言われ、中身の無い言葉を実践するよう迫られるのには参った。

「う〜ん……浮かぶのが精一杯か……」

「しつかりしなさいよ! 友達のあんたがそんなじゃ一夏まで笑われるでしょ!」

プライベート・チャンネルも使わず頭上から怒鳴る声に、俺はだんだん鳳さんをアリーナに連れて来たことを後悔し始めていた。

理由はさっぱり分からんが、俺がISを装着した場合『飛ぼう』と考へても地上で静止したまんま。前方に三角錐さんかくすいを展開するイメージとかいう、IS飛行の基本を実践しても50cmくらい浮かぶだけ。一夏や他の女子たちのようにはいかないのだ。

……では、自分が飛ぶ姿をイメージした場合は?

昨日は動画サイトで観たPVやらコントやらの動きをイメージした事でスムーズに動いていた。しかしその動きは俺の意思と言うよりも、ISの動きに俺が合わせている様なものだった。

……いや、俺の体がISを動かすのではなく、ISに合わせて知らぬ間に体が動いているのだ。それも驚くほど正確に俺が見た映像の記憶をトレースし、俺自身も覚えていないような細かい動きまで再現して、PV動画と比較した会長たちも驚いていた程だ。

……思い返してみると、まるでISが俺の脳や体をハッキングしているように思える。昨日は訓練後も買物やら箸やら夕食の支度やらでせわしなく、深く考える余裕がなかったが、今になって考えると何だか気味が悪い。

ISは俺に何をしているのか？

誰かに相談すべきだろうか？ でも誰に？ 悪い癖でグダグダ悩んでいると、臨時教官様が怒り出した。

「いつまでそうしてんのよ！ チンタラしてると一撃ぶち込むわよ!?!」

いつの間にか大きな青竜刀を展開して振り回す姿に、俺は慌ててイメージを頭の中に浮かべようとした。悩むのは後でいい。取り敢えず一度それっぽい動きをして凰さんを満足させたら、今日は調子が悪いとでも言つて訓練を切り上げよう。

さっきの凰さんの動きを思い浮かべる。取り敢えず飛行の真似事でも出来りや上等——どわあ!?!

「そうよ！ やればできるじゃな——きやあ!?!」

「避けてくれーっ!!」

気づいた時には凰さんの手本よりも高速でアリーナの中空をループしたかと思うと、よりによって凰さんのISに突っ込んでしまった。

「あだだだ……絶対防衛があっても滅茶苦茶痛い」

「いたた……あんた何してくれてんのよ!?! 変な気起こしてんなら叩っ切るわよ!!」

「ごめん、まだ飛ぶのは初めてで……本当に申し訳ない……」

俺は凰さんと絡み合ったままアリーナの地面に転がってしまい、痛みでなかなか体を起こせなかった。

どうにか彼女から離れようと上半身を起こすと、10mほど向こうにあるアリーナの入り口が開いた。

「おとくさくん、差し入れに……あれ?」

入ってきたのはISスーツ姿の本音だった。手に何か提げている。

「あつ、本音——」

「なに……してるの？」

こちらを見る本音の表情は今まで見たこともない無機質なものであった。まるで感情の無い人形だ。……目から光が消えている。

「その人、だれ？」

本音のものとは思えない背筋の凍りそうな冷たい声。それを聞いて、俺はIS装着状態で凰さんの上にかぶさる様な体勢でいることを思い出した。

「ち、違うんだ！ たまたま一夏の知り合いが来たんで訓練を——」

「ちよつと！ そんなの後にして早くどいてよ！」

あつちからもこつちからも女子の厳しい言葉が飛んでくる。一夏はいつもこんな感じなのか。慌てて凰さんから離れつつ、ルームメイトの苦労を少しだけ分かち合った。

「ふうん、じゃありんりんもおりむーが好きなんだ〜」

「す、好きって！ もう……ま、まあ一夏がどうしても、っていうんならね？ ……昔の約束もあるし」

本音の言葉にギクリとして焦り気味の凰さんの答えは、最後の所だけ小声だった。

あの後俺はISを片付けて事情を説明し、どうにか本音が事情を納得した所で、俺たちは本音が持ってきた差し入れ品を手に互いに自己紹介した。早速あだ名を付けられて凰さんは呆れ顔だったが、話題が速攻恋バナに変わってそれ所ではなくなった。

「わ、私はいいのよ！ そういうあんた達こそどうなのよ!？」

「えっ」

話がこちらに飛び火して、俺はスポーツドリンクを取り落としそうになった。

「え、え〜と……」

さりげなく目を逸らしたものの、視界の右隅に本音とその向こうの凰さんがじーつと俺を見つめる姿があった。

「ま、まあ来週一緒に出かける約束してるし……」

俺が答えに窮きぼうしてその場しのぎの返事をする、凰さんがすぐにム

キーツと髪を逆立てた。

「何よ自慢!? あたしだってねー! すぐに一夏と——そっその……」

「やっぱり〜。おりむーも追いかけてくる女子が3人に増えて大変だねー。おとーさんの係は私一人だけど〜」

「またも頬を紅潮させた凰さんとほんわかした本音のやりとりが再開して、かなりホツとした。」

「実際、内閣府からもハニトラがらみの注意についてはうるさく言われているものの、恋愛云々についてはあまり触れられていないのが実情だ。俺が国やIS委員会について良い印象を持っていない事から、あまり細かい注文をつけ過ぎてヤケを起こしたり、最悪自殺するのを恐れているのもあるが、各省庁と与野党派閥に経団連、さらには国内外の大物資産家らが様々な思惑から互いに牽制し合い、それぞれが俺を誰とくっつけようかと論争や駆け引きの真っ最中らしい。何しろ一夏のような後ろ盾のない唯一の男性IS操縦者だ。最大限有効活用したいと言うのが連中の思惑だろう。」

「だから、今はいい。だがこれから先は……。正直自分がどうなるかわからない立場で、本音に好きだの何だの言えるもんじゃやない。それだけにそこに触れられるのは辛かった。それに今、わざわざそんな暗い話をしなくてもいいだろう。」

「しかし……格差社会だよなあ。」

「音羽ー。今あたしと本音の胸見たでしよ!? なに比べてんのよ!!」

「目ざとい凰さんの怒声にヒエツとなる。ようやく本音の機嫌も直ったのに、気が抜けた途端余計なことをしてしまった。しかしチラツと見たただけなのに、女子は男子のそういうところよく見てるなあ。」

「わ、悪かったよ」

「もくだめだよ〜おとーさん。女の子はチラ見でもちゃんと分かっているんだから〜」

「本音がミルクコーヒーを飲むのを止めて釘を刺してきた。ラツキースケベな一夏の事を言えんわ。」

「凰さんはすぐ俺に興味をなくすと、本音のたわわに鋭い視線を向け

た。

「だいたい本音、あんたはあたしと背格好変わらないくせに、なんでそんなデカイの持つてんのよ!？」

「あはは〜かんちゃんにもよく言われるよー」

今俺たち三人はISスーツ姿なので、体のスタイルが嫌というほどよく現れている。お陰で本音と凰さんのボディラインの差が残酷なまでに浮き彫りになっていた。二人の背丈が近いだけになおさら違いが明確で、スレンダーな凰さんの怒るのもむべなるかな、である。しかし胸さえ気にしなければ、凰さんのスタイルだって決して悪くないと思うのだが、彼女の場合はそんな言葉こそ火に油だろう。

「くうーっ! このナマイキな胸っ! このっ! このっ! こんなわたただの脂肪の塊じゃないの! 男は何がいいのよこんなもん! ふんっ!!」

「りりんちよつと痛いよ〜」

凰さんがぐにぐにと本音の胸を、胸を! うわーすごい柔らかそう、ダイナミックに変形しとる……。

「あーもう! どうせこいつにも揉ませてるんでしょ!?! 少しくらいなによ! ……はあ、あたしも一夏に揉んでもらえば大きくなるのかしら……ちよつちよつと今のオフレコだから! 誰にも言うんじやないわよ!?!」

自ら墓穴を掘るスタイル。この辺りも先行する二人と共通してる気がする。いつそライバル同士仲良く一夏を三等分してくれねえかな。無理か。

「ね、ねえ? 実際その……も、揉んだの? 揉んで大きく……なつたりとか、す、する?..」

「え、いや、揉んだことなんか無いし!..」

「もっ揉まれてないから分かんないもん!!」

おずおずと尋ねる凰さんに、俺と本音は顔を赤くして首を振った。

まだ早い、4時過ぎくらいに俺たちはシャワーと着替えを済ませてアリーナを出た。今日は一夏も遅くなりそうだから夕食は食堂だ

し、米買って帰るだけだからゆっくり——あ、一夏のやつササニシキが安売りとか言ってたな。特売とかならもう残ってないかも……まっいいか。

「でも音羽のあだ名が、音羽三治だからおとーさんって傑作ね！ 流石に笑っちゃうわよ」

「うるせえほっとけ」

「え〜いい呼び名なのに〜りんりんだっていいでしょ〜？」

3人で陽の傾いた並木道を歩く。俺と本音は買い物だが、凰さんは職員室に到着を知らせたり転入手続きなどもあるらしい。IS訓練に付き合ってもらつといてなんだが、それ最初にしとくべきじゃないか？

「大声でりんりんって言わないでよ！ もうホントあんた達といるとペースが乱れるわ」

ため息をつくと凰さんは思い出したように俺たちを見た。

「そうそう！ さっきも言ったけど、一夏にはあたしが転校して来た事はまだ内緒だからね！ なんてつたつて、あたしと一夏は明日運命的な再会を果たすんだから!!」

どうもそういう事らしい。アリーナにいる間も散々言われて耳タコだが、本人は一夏がクラスにいる所をドラマチックに登場し、来週のクラス対抗戦での2組の代表として挑戦状を叩きつけるつもりらしい。

「どうせあたしが入る2組には他に専用機持ちもないし、少なくともクラス対抗戦に出馬する代表はあたしで決まりでしょ——あつ！」

俺と本音の前を歩く凰さんは振り向いたまま得意気に話していたが、前方を向くと何かを見つけて急に走り出した。

「ここですよ!? あんた達が一夏と一緒に写真撮った『ISロード』つてやつ!!」

パタパタ走って行った凰さんが、見覚えのある風景の横断歩道でびよんぴよん跳ねながら騒いだ。

「ISロード？」

「あんた自分で撮影しといて何も知らないの？ しょうがないわね

え」

俺が首をかしげると、凰さんが俺の無知をたしなめるように説明した。しかし彼女は小さな体に大きな態度がなんともアンバランスというか、微笑ましいというか、どうにも苦笑を隠せない。

凰さんによると、SNSに皆で撮った写真が拡散してからというもの、どうもこの場所はアビー・ロードならぬ『ISロード』として国内外でずいぶん話題になっており、いまや最も記念撮影したいスポットとして世界中に知れ渡っているという。

そういやこの横断歩道は、最近女子がたまに集まっているのを見かけたが、まさか世界規模で話題になっているとは。IS学園島は普段一般人の立ち入りは制限されているから、ここで写真を撮りたいほとんどの人は来る事すら適わない訳だ……っーかただの横断歩道だぞ？ ビートルズのアビー・ロードの方がよくないか？

しょうもない事で有名になったもんだと思っていると、凰さんが文字通り地団駄を踏んでいた。

「まったく一夏つたら！ あたしもぜーつたい一緒にここでいっぱい写真撮ってやるんだから!!」

「りんりんもライバル意識すごいよね……またおとーさん大変そう」

まったく、ただの写真なのになど呟くと、俺が放ったそっけない言葉にツインテールが速攻で反応した。

「簡単に言うわね！ ……ここは世界で唯一男性IS操縦者が二人揃って写真に写った場所としても世界的に話題なのよ？ あんたの実家や生まれた産婦人科だって、一夏みたいにブリュンヒルデの血筋じゃないのに男性IS操縦者が生まれ育った場所だって、世界中からご利益期待の連中が押しかけてるじゃない!!」

あんたの実家を取り壊してIS神社を建てようって話もあるんですよ。そこまで言われて俺は余りに行き過ぎた状況に理解が追いつかなくなった。

「でえーっ!?! マジで!?!」

バツカじゃねえの!?! どいつもこいつも大馬鹿だ!!

「あ、あはは……あんまり気にしちゃだめだよー?」

本音は知っていたらしい。俺に気を遣って黙っていたのだろうが、今はその気遣いすら胸にグサリと来るものがあつた。

「もういいや……さっさと米買って帰ろう」

まだバタバタしている凰さんを生温かい目で見ながら、ササニシキ残ってるかなと頭の隅で考えた。

途中で凰さんと別れ、まだ残っていた特売ササニシキ3袋とお菓子を買って配達を頼んだ。どうせ今日は自炊しないからと、嫌な事を忘れて屈託のない会話をしながら本音とゆるゆる帰ってくると、見るからにご機嫌斜めのセシリアと寮の手前で鉢合わせした。

「あつ……」

この状況は昨日の筈と余りに酷似している。まさか……。

「セツシーおかえり……どうしたのー?」

今になって、こういう時は嫌味のない本音に尋ねさせるのが一番良いのではないかと思った。

「あなた方はどうしてそう自然に二人で——はっ! て、手を繋いでますわね!」 一つの間になんか進歩を!!」

やっぱりまたか。本音と手を繋いでるのを指摘されても照れ臭さも感じやしない。恨めしい表情だったセシリアが驚愕に満ちた反応を示した所で、俺は急ぎ口を挟んだ。

「まあ立ち話もなんだし、話があるなら一旦寮に戻ってからカフェで落ち合わないか? どうせ夕食までは時間があるだろうし」

今日は自炊じゃないしな。そう言うと、セシリアは渋々といった風に承諾した。

寮に入ってゆくセシリアを見送りながら俺は特大のため息をついた。今日一日でこんだけ色々、その上……。スマホで一夏に電話しつつ、問題児が更にもう一人増えたのを思い出した。

いつまでたっても前途多難だ。しかもほぼ九割がた一夏のせいとは。そろそろ縁を切った方がいいのかも知れない。

「あ、配達の受け取り……一夏にやらせりやいいか」

一夏の番号を押しそうとすると、本音がきよろきよろしつつ心配そうな顔で空いている俺の手を引っ張った。

「大丈夫だよ、いよいよよとなったら織斑先生に丸投げするから」

いい加減持て余すようなら、鬼にでも来てもらえばいいさ。

「誰に何を丸投げするんだ？」

背後からの低い声は、明らかに諸々の元凶の姉のものに間違いない。思わず取り落としたスマホから、一夏のもしもとと言う声が出た。

「本音とどっかに転校したい……」

異邦人

織斑先生は買い物帰りらしくコンビニ二袋を手に提げていた。俺を睨みはしたものの、振り返った俺の疲れた顔にやれやれという表情で首を振り、あまり根をつめ過ぎるなど言っさつさつと察に入っていた。自分の弟が原因だと察したのだろうか。去り際に袋からのぞいた何本ものロング缶が陽光を反射した。ひよつとして早く飲みたかっただけか？

「あゝこわかったゝ」

本音はいつからか俺の手を握り締めていた力を緩めた。やっぱり本音もブリュンヒルデは恐いか。

《もしもし、三治か？》

足元に落ちたスマホからの声にハツとして、俺は事の発端を思い出した。

セシリアの言い分と一夏との通話を総合するところいう事らしい。セシリアと二人で行った横浜の赤レンガ倉庫の前で、一夏はあぶない刑事のファンだというよそのオッサン達と意気投合し、セシリアをほっぽって一緒にエンディングを真似して写真を撮ったりして盛り上がり、すっかり怒らせてしまったという。セシリアはその後一日お冠^{かんむり}で、一夏も謝罪の甲斐なく不機嫌のままケンカ別れしてしまったという。

流石に今回は一夏が悪いが、謝っても許そうとせず拗ねてしまったセシリアもちよつとなあ……。

俺は二人を会わせる前に、それぞれに一对一で話をした。同情はしつつも大人げの無さをそれとなく示唆^{しき}し、もう少し広い心と謙虚な気持ちで向き合った方がこの先上手くいくと淡々と語った。二人とも少々不満げではあったが、一夏は何かと俺に借りがある負い目か、セシリアは俺と本音の仲が地味に進展している事に話の説得力を認めたのか、どうにか双方を仲直りさせてその日は落ち着いた。

こいつらが自分たちで痴話ゲンカを収める日が早く来て欲しい。俺があれこれ言い過ぎるのが悪いのかも知れないな……。

日付が変わって月曜日。本日は入学以来初のIS実習だ。スクール水着かと思まがう姿の女子が整列する中にいるのは酷い違和感と気恥ずかしさを覚える。そりやまあ、近くでこんな格好の美少女たちを眺められるのは眼福だが、同時に周囲の女子たちの視線も飛んでくるので変な所は見られない。ましてやそんな所を織斑先生に見つかったらどうなることか。

まあ今の俺は本音がいるし！ ……いまだに何も出来ないけどな。一方で先生二人は色気も味気もないジャージ姿だ。山田先生のISスーツ姿はちよつと見てみたい気もするが。

やがて織斑先生の指示で専用機を展開した一夏とセシリアは、アリーナを周回飛行や着地、装備の展開などを行い、先生たちによる指導で終了した。一夏は着地のときISの足を1m近くめり込ませて織斑先生に大目玉を食らっていたが。

せっかく全員ISスーツに着替えたというのに、見学の後専用機持ち以外は10分ほど訓練機に乗るだけで終わってしまった。一夏とセシリアの実演をカットすれば全員もつとIS実習出来たんじやないのか？ というか一夏が失敗して困るなら、先生二人がさらつと訓練機で手本を見せりや良かったのに。

「今回は訓練機による実習が中心だ」

自分の番が終わってチラッと織斑先生の顔をうかがうと、眉を寄せた表情で言い訳のようにそう言った。

俺に言い訳されても困る……というかさらつと人の心を読むなよ。あんたはエスパーか？

「そうだ！ ISならスタントやつてもケガしないだろ？ 白式でジャッキーになるぜ！」

いきなり一夏が快心の発想だとばかりに思い付きを口走った。

「白式は剣があるだろ、わざわざ格闘戦する意味あるのか？ まだ飛び道具の方が必要だろ」

「そんなこと言って、三治もやってみたくせにさあ」

俺の気のない返事に対する一夏のニヤニヤ加減が絶妙にウザい。

「ジャツキーごっこより穴埋めごっこを先に終わらせろよ」

「そんな冷たいこと言うなよ！ それに何で三治は手伝ってくれないんだ!？」

着地失敗で開けた大穴を埋めるよう織斑先生に厳命された一夏のウザ顔が泣き顔になった。

「一夏！ せっかく私が手伝ってやっているのに、口より手を動かさせ！」

「そうですね、しっかりなさいませ！ 私のような高貴な者が、このよ
うな野良仕事の真似事までして差し上げているというのに!!」

一夏と共に白式の開けた穴をスコップでふさぐのを手伝う箒とセ
シリアが声を上げた。

二人に一夏を手伝うよう強引に言った時はちよつとやり過ぎかと思
ったが、なんやかや言って二人とも一夏と過ごしたいし、俺があれ
これ口を挟むより、それが何であれ邪魔のない所で一夏と過ごす時間
を増やした方がいいと思った。今後はもう少し口出しを減らして、な
るべく3人一緒に居させてみよう。箒だって成長しているのだ、セシ
リアと一夏だって少しずつでも変わってゆくだろう。たぶん。

「じゃ、俺は先行くから」

「ま、待ってくれよ！ おれもすぐ行くからさ」

一夏は慌てて作業を再開した。

クラスの女子たちは今週行われるクラス対抗戦の話題でもちきり
だった。なにせうちのクラスの代表は、ブリュンヒルデの弟にして模
擬戦で代表候補生を破った専用機持ちなのだ。期待しないほうがお
かしいだろう。

「2組代表との対戦もうすぐだよね、織斑くん勝てるかな？」

「二週間でセシリアさんに勝てるぐらい強くなったんだし、きつと楽
勝だって！」

本音もたれ袖をぶんぶん振って盛り上がっている。

「楽しみだね〜デザート無料券!」

「そうだな……え? 無料券って何?」

俺が尋ねると谷本さんが説明した。

「クラス対抗戦で優勝したクラスの生徒たちは食堂のデザートフリーパスがもらえるの! 織斑くんには是非頑張ってもらわなきゃ!」

「音羽くんからも発破をかけといてね! なにせウチのクラスのスイーツ事情がかかってるんだから!」

相川さんも拳を握って力説してくる。ひよつとしてみんな一夏が勝つよりデザートのほうを重視してない?

「まあ1年で他に専用機持ちいるの4組だけだし余裕だよ」

鷹月さんが言うのを聞いて俺は複雑な気分になった。4組の専用機持ちとは簪さんのことだ。一夏の白式製作による影響で専用機の製作が頓挫、本音も手伝い会長のコネからも協力を募^つって今まさに完成を急いでいる最中でもある。もし一夏と簪さんが勝ち進めば、二人は対決することになるわけだ。

因縁の対決か……どちらを応援すべきかな……。

その割には本音は無邪気にはしゃいでいる。まあ本音の性格からして、細かい事は気にせず両方応援するとか言いそうだ。別にこの勝敗で完全に優劣が決まる訳じゃなし、俺も素直に応援……待てよ?

2組は確か――

「その情報、古いよ」

聞き覚えのある声が廊下から響いた。開いたドアの向こうで、長いツインテールに低い背と傾斜の少ない胸を持つ女子が八重歯をひらめかせた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの! 今日は宣戦布告に――

――って、一夏はどこよ?」

「あ、りんりんだ〜」

本音の言を聞くまでもなく、それは凰さんだった。

「一夏なら箒たちとアリーナの穴ふさいでるぞ」

「穴ってなによ!? なんてあのバカは肝心な時にいないわけ!? 音羽

! あんたわざと一夏をあたしから遠ざけてないでしょうね!」

一夏を探して1年1組をくまなく見回す凰さんに教えてやると、昨日散々聞いた怒声をまた聞くことが出来た。嬉しくない。

「もうじき帰ってくるから落ち着けよ」

おバカな問答をしている内に一夏たちがクラスに戻ってきた。それを見て2組のクラス代表さんは矛先を意中の相手に変えようとした。

しかし会話の口火を切ったのは一夏のほうだった。

「おまえ鈴か？ 久しぶりだなあ、何かツコつけてんだ？ ぜんぜん似合っていないぞ」

確かに衝撃的な再会になったようだ、凰さんにとっては。

「あ、あんたねえ……」

想定外の展開で言葉を失う凰さんに追い討ちを掛ける一夏。

「中学の時の友達に連絡したか？ あいつらすげえ喜ぶぞ」

さらに一緒にいる箒とセシリアが凰さんとの関係について聞いただと、一夏はこともなげに返事した。

「幼馴染だよ、箒と入れ替わりで転校してきたんだ。箒がファースト幼馴染で鈴はセカンド幼馴染ってとこだな、うん、ここは譲れん」

あの馬鹿なに言ってるんだ。凰さんが苛いら立っているのに気づきもしない。

……いかん、凰さんが歯を食いしばったまま握り拳を固めて震えだした。どう見てもキレる寸前だ。

その時予鈴が鳴った。

「なあ、続きはまた後にして、そろそろクラスに戻った方が良いと思うぞ」

「あんたは黙ってなさいよ！」

一夏とのコミュニケーションがままならぬ腹立たしさをこちらにぶつけられてしまった。まあ無理もない。昨日も言ったが一夏に女心を、ましてや恋心を察しろと言うのは裏返したトランプの数字を当てると言うようなものだ。しかしそうと分かっているも想い人に気持ち伝わらないのは辛いだろう。まして凰さん気が短そうだし。

「何してる！ さっさと教室に入れ」

言ってる間に時間切れだ。むっとして振り返った凰さんが固まった。

「ち、千冬さん」

「織斑先生だ」

そそくさと教室に入る一夏たちに、また来るから逃げるなど早口で言うとう凰さんは逃げるように2組へ飛んで行った。

「鈴のやつどうしたんだ？　なんか様子がヘンだったよな」

「まあ、後でゆっくり話をしてみろよ」

後ろから聞こえる一夏のつぶやきにそれだけ言っておいた。

昼休みに本音や一夏と連れ立って食堂へ入ると、もう凰さんは先に券売機の列に並んでいた。

凰さんと二人でゆっくり食べれば良いものを、料理を持った一夏は俺まで引つ張って扇状の席に座った。本音も俺の隣に座る。

「友達なのにいつまでも凰さんなんて水くさいだろ？　鈴も三治のこ
と名前で呼べよ」

俺と本音がついて来て凰さん改め鈴は微妙な顔をしていたが、食べながら一夏と話すうちに昔話に花を咲かせ、それを聞いていた俺と本音は色々な事を知った。鈴の家が昔中華料理屋で一夏がよく食べに行っていたことや、しょっちゅう鈴が一夏の家に遊びに行っていたこと、鈴は昔から織斑先生が苦手なこと……。

友達どまりの二人が我慢できずに思い出話へ割り込んだためその後にはぐだぐだになったものの、一夏との再会が多少不憫な結果になった鈴の機嫌が直って良かった。

なにせ、セシリアと同じ専用機持ちだし。痴話ゲンカにISなんか持ち出されたらたまらん。まあ流石にそんな事はある得ないか。

放課後になるといつものように一夏は箒に引つ張られていき、俺は本音と帰ろうとした所をセシリアに呼び止められた。

「お話が……ございますの……」

カフエの目立たない端の席、本音と並んだ俺はセシリアに頭を下げ

られた。

「先日はお見苦しい所をお見せしました、せつかく三治さんにお話を通して頂いたと言うのに。そもその原因である私の不徳も併せて謝罪いたしますわ」

昨日のデート失敗による八つ当たりについての謝罪だった。セシリアにだって貴族としてのプライド以前に、自分の無作法を恥じ相手に謝罪する理性や誠実さがあるんだ。彼女とていつまでも一夏がらみで大人げない真似を続けるほど子供のままではいないだろう。

「今朝の授業の後一夏さんの手伝いをするよう仰ったのも、未来の伴侶と苦しみを分かち合い互いに支え合うことを学べという事でしたのね！ 流石は三治さんですわ」

「いや、そこまでの意味は……」

紅茶とケーキをご馳走になりながら、鈴ももう少し大人になってくれたらなどと考えていると、急にセシリアが勢い込んで俺に詰め寄せた。

「それで、その、次回の一夏さんとの逢瀬おうせについての調整を願えますかしら!?! 出来うれば是非箒さんよりも先に!!」

「あー……やっぱそうなるか」

となりを向くと、いつの間にかケーキを平らげた本音がカップを手にあははくと苦笑した。

セシリアとの話は予想以上に長くもつれ込んでしまい、カフェを出る頃には陽が落ちかけていた。俺は本音と手をつないで寮まで戻って来ると、廊下で別れて自室に向かった。本音と話し合ったが、ついこの間まで女子校だったIS学園で、わざわざ人目の多い時にイチヤイチャするのは周囲に喧嘩を売るようなものなので、あまり目だたない放課後や休日だけ手をつなぐことにしたのだ。個人的にも本音が周りに白い目で見られないか心配でもあった。本音は普段から絶対防御のある専用機持ちではないのだ。

「ただいま」

ドアを開けると、いきなりかん高い声で出迎えられた。

「やつと帰ってきた！　お願い三治、あたしと部屋替わって!!」
中にいた鈴がすっ飛んできた。部屋の真ん中に昨日背負っていたピンクのボストンバッグが置いてある。

無言で一夏を見ると、お手上げの様子で俺を拝んできた。

「すまん！　鈴のやつとれだけ言ってもここで暮らすって言っただけ聞かないんだ」

俺が下に向き直ると今度は鈴が不平をたれた。

「あんたあたしに一夏と同室って言わなかったじゃない、なんで教えないのよ?」

「普通分かるだろ?　男子は二人しかいないんだから」

「ちゃんとやいなさいよそういうのは!　とにかくいいわよね?　あんたも男同士より可愛い女の子と同室になる方がいいでしょ?」

全くたいした行動力だが、あいにく間に合ってるし俺が決められる事でもない。ゆっくり息を吐き出すと、イライラしだした鈴に落ち着いて話した。

「条件がある。この部屋のとなりが寮監室なのは知ってるな?　この時間ならもういるはずだから、行って部屋割り変更の許可をもらってこい。それさえ出来ればすぐにでも部屋を替わってやるよ」

鈴は楽勝だと言わんばかりの顔ですぐに部屋を出て行った。一夏の止める声も聞かずに……。

すぐに寮監室のドアを乱暴に叩く様子が伝わってきた。ドアが開く音がしていくらか言葉のやり取りがあった後、鈴が凄い勢いで駆け戻ってきた。勢いよくドアを閉めて勝手にカギとチェーンまで掛けている。

「三治っ!　あんた騙したわね!」

睨みつける鈴に俺は肩をすくめた。

「騙しちゃいないさ、織斑先生が寮監ってだけの話だ。その許可が出なきゃこの話は無しだ」

鈴がムキーツと怒りの表情を見せると、箒とセシリアがやってきた。
俺はカギとチェーンを外して入れてやった。

「一夏、三治、入るぞ——ん？　なんで貴様がここにいる？」

「失礼しますわ一夏さんと三治さん、今週末に教えて頂く日本料理について——あら？　鈴さん何故こちらに？」

怪訝な態度の二人に鈴は小柄な体で精一杯ふんぞり返った。

「あたしは一夏の幼馴染だし、一緒に居るくらい普通でしょ？」

その一言でむきになった箒たちがやいのやいのと言いだしたのも気に留めず、鈴は一夏に向き直って尋ねた。

「ねえ、一夏。……約束、覚えてる？　小学校のときにした——」

「ああ、鈴が料理の腕を上げたら、毎日酢豚をおごってくれるってやっだな！　ちゃんと覚えてるぜ！」

直後に鋭い音と共に強烈なビンタを喰らい、一夏の頬に紅葉みたいな手形がついた。

「最っ低！　女の子との約束も覚えてないなんて、犬にかまれて死ねっ！」

その後あれよあれよという間に二人の話はこじれ、一夏と鈴は今週のクラス対抗戦で負けた方は勝った方の言うことを何でも聞くと決めて喧嘩別れしてしまった。鈴はすっかり怒って部屋を出て行き、箒とセシリアもそんな一夏をボロクソに言っただけで帰ってしまった。

「何だよみんなして！　おれが何を間違っただよ！」

俺がカバンを片付け私服に着替えても、一夏は怒られた原因が分からず憤慨していた。

「なあ三治、おれ何かおかしなこと言ったか？」

何となく察しはつくが、一夏から詳しく話を聞いてみる事にした。面白くなさそうな顔のまま一夏は緑茶を二人分淹れ、俺は昨日買った栗饅頭を二つ出してテーブルに座った。

「取り敢えずさ、昔鈴と約束したって時の事を詳しく教えてくれ」

俺は栗饅頭の包みを開けながら水を向けた。

「くわしくも何も、さっき話してた通りだぞ。三治も聞いてたろ？」

一夏が言うには、小学生の頃放課後に鈴と二人きりの教室で、『私の料理の腕が上がったら、毎日私の酢豚を食べてくれる？』というような事を言われたらしい。

それ、ある意味プロポーズの言葉じゃないのか？ まあ少し分かり難いかもしれないが。一夏は額面どおりに言葉を受け取る性格だから、言葉に込められた意味には気づかないだろうな。

「そんなこと言われたら、普通は毎日酢豚を食わせてくれるもんだと思うだろ？　なのに鈴のやつ、『約束の意味が違う！』って。じゃあ何なんだよって話じゃないか！」

これだよこいつは。言葉そのままに受け止めてる。恋愛的な解釈には全く思い至らない所もいかにも一夏だ。

「まあ、一夏ならそうだろうな……」

まさにこの性格ならではのトラブルだ。でも箒とセシリアもアドバイスしてやるつもりは毛頭無いだろうし、誰も何もしなけりや鈴とはこのまま仲違いしてしまうかも知れない。それはそれで後味が悪いが、あんまり口出しする事でも……。

「おれならって、ひよつとして三治には分かるのか？」

「え、まあ大体はな。でもこれは一夏が自分で分からなきや意味無いぞ」

「えっ？　なんでだ？」

「何でって……」

普段は素直でいい奴だけど、こういう時はほんとに困る。おそらく鈴は一夏が自分で約束の意味を理解して謝罪しないと納得せんだろうし、とって一夏にヒントを出すのも……。

「いじわるしないで教えてくれよ。それだけ分かればすむ話だろ？」

「いや、あのな？　こういうのは何て言うか、人に聞く事じゃなくて……そういうのは無粋で、自力で理解するのが誠意だと思うぞ？」

「なんで聞いちゃだめなんだよ？」

お前少しは自分で考えろよ。

「だからさ、えくと……例えば一夏が織斑先生に伝えたい気持ちを、織斑先生が自分で分かってくれなきや嫌だろ？　一夏も自分で鈴の言葉の意味を分からなくちゃ駄目ってことだよ」

「えっ？　千冬姉はおれの言ったことちゃんと分かるぞ？」

「あのな、そういう意味じゃなくて……」

禪問答ぜんもんどうじみた展開へんぎに辟易へきえきしていると、急にドアがノックされてビクツとしてしまった。

「おとーさくん、食堂いこ〜」

間延びしたゆるい声がドア越しに聞こえ、俺はホツとした。

「とりあえず夕飯に行こう」

俺は本音のタイミングの良さに感謝した。

……その後結局一夏を納得させることは出来なかったが。

翌朝、食堂で会っても鈴はふいと一夏から顔をそむけて反対側のテーブルに行つてしまい、箒とセシリアも珍しく厳しい態度でほとんど一夏には寄つて来なかった。おかげで今日は一日一夏に食いつかれ、一緒に過ごす時間をがつつり削られたせいか、本音はのほほんでなくむうつという雰囲気ふんいきで放課後を迎えた。

「三治、訓練付き合ってくれよ。箒もセシリアもあんな調子だしさ」

明日はいよいよ2組代表、つまり鈴との対戦日……だというのに、本来なら自分から強引に同行を求める二人が先に怒つたまま下校してしまい、IS訓練をする相手がいないのだ。特にセシリアは専用機持ちで、訓練相手には最適なのに。

それで一夏は俺に声を掛けてきたのだが、はたと困ってしまった。

「う〜ん……」

弱つたな。ISを動かすのもまだ怪しい俺では一夏の訓練相手にならない。いつそ会長に頼んでみようかとも思ったが、いくら打鉄式の製作協力が2年整備科の助っ人に移つたとはいえ、妹のライバルを鍛えてくれとは流石りゅうせきに頼めない。

クラスの中で他に操縦そうじゆうに自信のある人は……既にほとんどの生徒が帰宅した今からではまず無理だ。いつそ織斑先生か山田先生に頼んでみようか？ それこそ無理か……。

「えいっ」

急に胸にぽふつと柔らかいものが当たる感触がした。

「ほ、本音」

「えへへ〜ハグした事はまだないよね〜」

真正面から本音に抱きしめられて、俺はどぎまぎして何も考えられなくなつた。まだ少し人が残つてるのに大胆な奴だ。どうにもかわない。

「おとーさん、何か悩んでたでしょ？ おりむーの事？ それともりんりん？」

いつになく真面目な顔で俺を見上げてくる本音にどきりとする。やはり顔に出ていたか、まったく本音に隠し事は出来ないな。

「まあ、両方かな」

俺は、一夏の訓練相手と鈴との和解について困っている事を告げた。

「ん〜、おりむーの訓練相手は今からだとちよつと難しいかなー。りんりんの方は時間がかかると思うよ〜」

ゆつくり離れた本音は腕を組んで考え込む表情になつた。

「だよなあ……どうにもならん事を悩んでもしょうがないか」

俺は本音の頭をそつとなでた。髪から少しいいにおいがする。

「ありがとう本音」

結局いつも本音には助けられてばかりだ。考えてみれば心配ばかりかけてる気もする。

「ふふつくすぐつたいよー」

「三治はのほほんさんと仲いいんだな。次は俺な！」

今の今まで存在を忘れていた声の主を見た。両腕を開いて俺を待ち受けるように立っている。

「……お前何してんだ」

「えっ？ 次は俺の番だろ？」

普通男同士でハグして楽しいか？ ホラ早く、と急かす一夏に、俺はフリーハグというものを教えようか本気で悩んだ。

明日がクラス対抗戦一日目だからか既に訓練機の使用許可は満杯で、俺が悩んだ理由の半分は悲しいほど無駄だった。結局一夏は箒に道場で相手してもらえないか頼んでみると言つて剣道場へと向かつた。急ぎの用がなくなつた俺はここ数日抱いているISに関する不安について、迷つたものの簪さんのIS製作から離れた会長に相談す

る事にした。

本音が言うには、徹夜続きでクタクタになった会長は今日一日虚先輩とのんびり過ごしているらしい。携帯で連絡を入れると、退屈していたらしくカフェで本音との進展具合を教えろと抜かしてきた。

扇形のソファに並んだ俺たち4人の会話は、めいめい頼んだ品に口をつけながら会長のいつもの調子で始まった。

「それで本音ちゃんとはどこまでいったの？　ちよつとぐらい教えなさいよ！」

もはやこのノリも恒例行事のように感じる。他に聞く事ないんだろうか。

「ほんと気楽に聞きますよね。大体俺が自由に恋あ……女子と付き合えると思ってるんですか？」

「何言ってるのよ？　本音ちゃんは代々御国に奉公してきた更識家に仕える布仏の娘よ？　利権を争う省庁や海外資本はともかく、政府や霞ヶ関からすれば音羽くんが交際するにはかなり安心できる対象じゃない。むしろ私たちは本音ちゃんではつとしたわよ？　キミに身元の怪しい女子が近づいたときの対処について、私たちがどれだけミーティングしたとか」

大変だったわよと両手を挙げたポーズを取る会長と、隣でうなずく虚先輩。

「なっ……そんな話は初耳ですよ！　なんで今まで言わなかったんです！」

会長の言葉は俺にとって余りに意外で驚きそのものだった。一瞬で何を考えていたのかも忘れ、思わず立ち上がって会長に詰め寄せた。

にまにましながら会長はクリームあんみつをすくった。

「だつて聞かなかつたじゃない？」

くそつたれめ！　俺が散々悩んだのは何だったんだよ！

「おと～さん」

本音に袖を引っ張られ、不満がおさまらないまま俺はしぶしぶソファに尻を落ち着けた。

「まったく……そのうち鼻に小豆を詰め込んでやる」

「やめなさいよ！ キミが言うのと冗談に聞こえないのよ!？」

俺のささやかな反撃を大げさに嫌がる会長に軽く嘆息すると、俺はさっさと話題を変えた。

「まあそれは置いて、本題のISについてなんですが」

「ねえ！ やっぱり音羽くん私に対して冷たすぎない？」

俺は会長の抗議を無視して、ここ数日の訓練で感じたISに関する言いようのない不安について語った。

「どうにも俺の意思でISが動くのではなく、ISが俺の脳内を読み取って勝手に動いているように思えてならないんですが、似たような例はあるんでしょうか？」

ISには生体維持機能もあるというが、それにしたって操縦者の体までコントロールするなんてやりすぎだ。それとも俺のIS適正が低過ぎるのを補うためにこうなったのだろうか？

俺の話を聞いている内に会長はさっきと打って変わって難しい表情になった。

「……残念だけど、私の知る限りそんな実例は報告されていないわ。虚ちゃんはどう？」

話を振られた虚先輩はかぶりを振った。

「私も存じ上げている情報でそのような話は覚えがありません。音羽くんの話が確かであれば、おそらく初の事例ではないかと」

結局さっぱり分からんという事か。俺はため息をついて本音を見た。

「早く分かるといいね」

本音はパフェをぱくぱく食べる手を止めて俺を見上げた。こいつは本当に甘いものをよく食うな。

「そんなの食って夕飯食べられるのかよ？」

「甘い物は別腹だもくん」

会長は腕を組み真面目な顔つきで俺の方に向いた。俺の目を見る。冗談やイタズラの類でない事を確かめたのか、直後に目を閉じて首をひねり、要チェックねとつぶやくと再び俺に向き直った。

「申し訳ないけれど、すぐに答えを出す事は出来ないわ。取り敢えずこの件は私に預けてくれないかしら？ いずれ国の方に報告は入れるとしても、しばらくこちらで調べてからにしたいのよ。政府機関や関係各所でも調査や情報交換はあるけれど、ここIS学園ほど多くISに直で触れた記録や生の情報が集まる場所もないもの。そういえば、IS操縦データはちゃんと連絡員に渡した？ 無関係な人に預けちゃ駄目よ？」

「ああ、もちろん直接渡しますよ。明後日に内閣府の人間が取りに来るそうです」

こういう手際の良さはさすが生徒会長というべきか。まあちゃんと調査はしてくれるだろうし、何か分かれば余程の事でない限り教えてくれるだろう。……だが何も分からなかった場合は？

知らず知らずの内に眉をしかめていると、いきなり白い指で額を突っつかれて我に返った。

「そんな顔しないの。たとえ政府が音羽くんについて要調査という結論を出しても、いきなり研究所で人体実験なんて事にはならないわよ、世界でたった二人の男性IS操縦者なんだから。各国もDNAでの要因解明を諦めつつあるし」

「……そうですか」

本音がそつと俺の手を握ってくれた。それで少しだけ落ち着きを取り戻した。

実際、適正検査直後から俺のDNAを入手しようと各国の情報機関が暗躍し、ガバガバな日本の防諜体制では防ぎようもなかったと聞く。そもそも人間生きてりゃ汗もかくし毛も抜けるし咳もくしゃみもするのだから、どこかで何かしら洩れても完璧には防ぎようがない。適性検査の翌日には中学に残っていた俺の私物は全部消えたと言おうし、この前の散髪だって事前に内閣情報調査室に連絡を入れて、俺の散髪が終わった直後に店内の清掃をして全ての髪を焼却処分していたが、髪一本も洩らさなかったかどうかなんて分からない。

しかし、DNA調査で判明しないなら、結局俺自身を調べるという事になるんじゃないか？

俺の納得しきれない顔に会長はやれやれとため息をついて見せた。そんな態度にいささかイラツとする。あんたは他人事でも俺は当事者なんだよ。

「仕様がないわねえ。いい？ 確かに音羽くんを体中隅々まで調べれば何か分かるかも知れない。でも政府にしてみればキミは金のガチョウであり金の卵を産むニワトリなのよ。そう簡単にバラバラになんて出来やしないわ」

「……金のガチョウとニワトリ？」

気休めはよしてくれと言いたくなつた俺は意外な言葉に首をひねった。

「金のガチョウの童話は知ってる？ 頭の弱い正直者が手に入れた金のガチョウを欲しがる人達が、ガチョウにくつついて離れなくなつちやうのよ。それを見て笑顔になつたお姫様とその男は結婚してめでたしめでたしってお話」

なんとなく分かる気はする。有力者や力を持つ組織・集団はみな俺に擦り寄ってくるようだしな。

俺の反応を見つつ、会長はどこか下品な笑いを浮かべて普段以上にうっとうしい顔をした。

「金の卵を産む、これについてはまだ推測の域を出ないけれど……音羽くんに男の子が出来た場合、おそらくISを動かせる可能性が高いと各国のIS関係者の間で見解が一致しているのよねえ」

「はあ!? それこそ初耳じゃないですか!! 何か根拠でもあるんですか!？」

俺は今度こそ飛び上がりそうになつた。そりや考えれば誰でも想像つくといえばそうだが、世界中の専門家で同じ意見が出ているとなれば話は別だ。政府関係者もハニトラにうるさく言う訳だよ！

「ないわ。ただ、織斑先生の血縁者である織斑くんがISを動かした事もあって、その可能性は高いと関係各所で意見は一致しているの。いえ、正確には希望的観測だけれど、それだけキミと織斑くんが男児をもうける事を世界中の男性有力者が期待しているのよ」

「……はあ。そりやまたずいぶん身勝手な話ですね」

産れるかどうかも分からない人の子供に勝手な期待すんな。あまりに他力本願で、この上なくいい加減な話だった。それにそんな事もっと早く言っただけ良かった。

「さっきもそれを言おうとしたのに、勝手に話題を変えるもんだから言えなかつたのよね〜」

またも会長の言葉にイラついた。今回悪いのは自分とはいえ、この人の言う事はいちいち俺の神経を逆なです。それとも俺が過剰に反応しすぎなのか？

「だ・か・ら、本音ちゃんとの進展はとーっても大事な話なのよねえ……で、どうなの？ ねえねえ！」

会長は無駄に目を輝かせてしつこく迫ってくる。やっぱりイラつくわ！

「何もありません」

俺はにべもなく答えてさつきと残りのコーヒーを飲み干した。

いらんお世話も無くはないが、あれで会長も会長なりに俺の事を気にかけてくれているのだろう。でなければあそこまで俺の気持ちや立場を考えて色々言ってくれはしまい。

しかし、さっきの話で気がかりな事がある。以前会長は俺と一夏の安全確保も生徒会の仕事だと言った。俺の付き合う相手についての監視もだ。であるならば……。

……ひよつとして、入学当日に本音が話し掛けてきたのは、俺を監視あるいは管理するためだったのか？

考えたくはないが、今まで一緒にいたのも……全部、生徒会か布仏家の仕事としてだったのだろうか？

可愛い女子と過ごすなんてこれまで一度も無かつたもんだから、今の今まで舞い上がって不自然さなんて考える事もなかつた。他に色々有り過ぎたというのもあるが。

しかし今になって考えてみれば、俺のように絵に描いたような陰

キヤコミュ障に女子が寄って来るなんておかしくないか？ 理屈っぽい感情が顔に出やすいし、女子の喜ぶような会話が出来てもなし、ISやその他の能力に優れるでもない。

同じISを動かせる男子なら、一夏の方に寄っていくのでは……？ やっぱり本音が俺のそばにいるのって——

「おとーさん？ おとーさん！」

「わっ!? あ、本音……」

本音に横から呼ばれて我に返った。大声を出されるまで気付かぬほど深く、暗い想像に没頭していたらしい。

なんだか、酷く暗い場所から急に明るい所へ出たようだった。

「大丈夫？ すごく顔色が悪いよ？」

「そ、そうか？」

なんだか寒気がする。なんとなく額に手をやると、べっとりとした嫌な汗がついた。

「……保健室へ行きなさい。本音ちゃん、連れて行ってあげて」

会長の急に冷静な声で、俺は急速に頭が冷えていった。

食堂へと夕食に向かう女子たちとすれ違い、アリーナに続く道の近くまで来ると、俺もだいたい冷静さを取り戻していた。

さっきの事は、忘れた方がいいのかな……本音には聞くべきじゃないのだろうか。

また悩んでしまうが……疑い始めるときりがない。俺は無駄に考え過ぎるクセがあるし、確たる根拠もないのにどうせドツポにはまるだけだ。

なにより、俺はここIS学園に入学してからずっと本音に助けられてきた。

「今は本音を信じよう……」

「信じるって、わたしの何を？」

うっかり口に出していた。最近脇が甘いというか隙があるというか、やはり疲れているのか……。

「い、いや何でもないんだ」

不思議そうな本音の顔から目を逸らすと、視界の端に見覚えのある長い髪が揺れたような気がした。

「あー！ りんりんだ。お〜い」

その直後本音の声に振り向くと、ちょうどアリーナの方から訓練を終えたらしい鈴が歩いてくる所だった。

「鈴……」

懸念を抱える相手に意外な所で遭遇して、思わず固まってしまった。何も言わずに去るべきか、それとも何か言うべきか迷う。本音も俺が一夏を理解させようと四苦八苦していたのを横で聞いていて、おおよその事情は知っている。

「あ〜、あのさ」

やぶ蛇かも知れないが、放っておいてこのまま身近でギスギスされるのも気分が良くないし、もしこれが原因で1組と2組の生徒全体が険悪になったら怖い。しかし何をどう言ったものか……。

1秒足らずの葛藤かつとうだったがこの相手には長すぎたようだ。

「なによ？ 何か用なの？」

せっかちな言葉に俺は慌てて何か言おうとしたが、鈴に先を越されてしまった。

「どうせ昨日の事でしょう？ あたしだって分かってるわよ、一夏が超鈍感野郎ってことくらい……でも、あの約束だけは、あの事だけは！

ちゃんと理解していて欲しかったのよ!!」

そう言うとき鈴は歯を噛み締めた。うつむいて肩を震わせる。

なんにも言えなくなってしまった。覚悟もなしに他人の事情に首を突っ込んで反省したのはつい最近の事なのに、俺という奴は成長も覚悟も足りない。

ふとその時、数日前に聞いた本音の言葉を思い出した。『ゆっくり変わればいい』

それに、箒やセシリアの成長や変化。急激にはないにせよ、皆昨日よりも先に進んでいる。

箒たちの成長……ゆっくり変わればいい……。

俺は要らぬ世話なのは百も承知で鈴に話しかけた。

「確かに今の一夏は鈴との約束の正しい意味は分からないだろう。でも、あいつだつて少しずつ成長してるんだよ。どれ位かかるか分からないが、その内きつと自分で正解にたどり着く……と思うぞ」

最後は自信がなくて少しあやふやになってしまった。我ながら無責任な言葉が情けない。

反応を伺うと、細目でにらんでいた鈴はこちらに向き直った。

「脇から勝手なこと言ってくれるじゃない。あたしはあんたより一夏との付き合いはずつと長いんだからね」

言いながら背を向け、俺が自分の口下手を後悔し始めたとき、

「あんた意外とおせっかいよね。でも……一応礼は言つとくわ。ありがと」

先ほどよりは明るい声でそう言い立ち去ろうとして、急にまた振り向いた。

「あつ、でも明日は絶対に手加減しないから！ 一夏には覚悟しろつて言つときなさいよ？ いいわね！」

それだけ叫ぶように言うと、寮の方向へと駆けていった。

「ばいばいまたねー」

照れ隠しのような鈴の捨て台詞に苦笑しつつ、俺は本音とその後ろ姿を見送った。

保健室のドアを開けるなり、保健医が厳しい顔をした。

「あのねえ二人とも、保健室はラブホテルじゃないのよ？ そういうことは場所を考えなさい」

「ちげーよ！ どのつもこいつも恋愛脳からいい加減離れろ！」

まだそこまで踏み込んだらんわ！ 教師まで色恋に焦がれすぎじゃ!!

本音の制止にようやく気を落ち着けながら、この学園の最大の欠点はまぎれもなく男日照りだと痛感した。

白昼の狂騒

「なあ、結局鈴の言いたいことってなんだったんだ？」

「……もうその事は人に聞くな。分かるまでじっくり考えた方がいい」

翌日の放課後。とうとう何もしままま1組対2組の対戦を迎えてしまった。箒もセシリアもカタパルトまで見送りには来てくれたが、相変わらず厳しめの表情でいる。今頃は簪さんも、3組対4組の試合に臨んでいるはずだ。応援に行けないのが心残りだが、彼女と一夏が勝つと俺にとって正直複雑な展開になる。

「訓練通りにやれば勝てる。落ち着いて行け」

「私と違い接近戦型ですわ。同じ調子で行くと痛い目に遭あいますわよ」

口も利かなかった昨日よりは二人の態度は和らいでいるが、まだいくぶん声が硬い。

「おりむーガンバレーー！」

無邪気な声援に俺の方が支えられる気分だ。ああ本当に本音だけが俺にとって心のオアシスだな。一夏は都合3人もの美少女に慕したわれながらギスギスしているなんて、ある意味凄いで。

「まあ、勝つてもあんまり無茶な要求はするなよ？ 約束の意味を教えろとか」

「わ、わかってるって！ 試合前からプレッシャーかけるなよ」

昨日の一夏との打合わせで、取り敢えず鈴の油断を誘って一気に必殺技をかける戦法で行くことにしている。鈴はセシリアとの決闘を見た訳ではないので、一夏の正確な実力は分かっていない。そこでわざと何度か単純な動きで攻撃してこちらの実力を低く見誤らせ、一気にカタをつけようと鈴が大技なりデカい武器なりを繰り出した隙を突いて、零落白夜とかいう強烈な単一仕様能力で決着をつけようというわけだ。

鈴の短気な性格からして、長期戦より短期決戦の方が好みだろうし、そう悪い戦術ではないはずだ。しかしアテが外れた場合、文字通

り短期決戦型の武器しかない白式ではかなり分が悪くなりそうだ。その時どうするかはちゃんと決めてはいない。

「ま、そんなときやそんなときで何とかするさ！ 心配すんなよ」

笑顔で安心させる言葉を返す一夏に、俺はしかし妙な不安を憶えた。

クラス対抗戦と言っても、しよせんアリーナで行うIS同士の模擬戦だ。いくら頭にきている鈴が一夏をボコツた所で心配する要素なんてないのに、なぜか胸騒ぎがする。

俺がその原因を掴めずにいるうちに、スピーカーで呼び出された一夏は白式と共にカタパルトをすべるように加速していった。

そういえばここは、先週末シールド点検中に俺が独占使用させてもらったアリーナでもある。IS訓練で鈴にぶつかって怒られたっけ……ん？ シールドの点検……まさかね。

「どうしたの〜？」

「ん、いや……」

本音に生返事をした時、大きなモニターに写る幼馴染同士の対決が始まった。

短い問答の後、二人は闘いの火蓋を切った。まずは一夏が打合せ通り直線的な動きで突撃を繰り返し、それを軽くない鈴は大きな二つの青龍刀をつなげて振り回し始めた。直後に一夏が瞬時加速で一気に距離を詰め、驚く鈴に雪片式型を振るおうとした、その時だった。いきなり腹に響く轟音と共に天井のシールドをぶち抜いた光柱が、アリーナの地面で爆発した。刃を交える寸前だった二機は突然の出来事に気をそがれて動きを止める。

コンソールをいじっていた山田先生が真っ赤に光るディスプレイを見て異常事態を告げ、織斑先生が試合中止と退避を命じる中、アリーナを覆う爆煙が晴れ、地上に黒く大きなISらしきものが姿を現した。黒い体から白い骨をむき出したようなグロテスクなデザインで、胴体並みに太く大きな両腕が地面につくほど長い。

誰もが初めて見るであろうその威圧感と異様なたたずまいに、モニター室の全員が言葉を失った。

「……なんじゃありやあ?」

こいつがさっきの光と爆発の原因か?

どこか不気味な印象を持つそいつは、対戦を一時中断していた二人を襲い始めた。

「一夏!」

「一夏さん! 退避を!」

箒とセシリアが絶叫する中、一夏は敵らしきISからのビーム攻撃を素早くかわした。なぜか鈴をお姫様抱っこして。

……あいつ案外余裕あるのか?

一夏と鈴は指示通り退避するどころか、モニター室での喧騒をよそに黒い侵入者と戦い始めた。もつとも襲撃者の様子を見るに逃がしてはくれなさそうだ。

「みんなが逃げる時間を稼がなきゃ! ここは俺たちで何とかします!!」

画面越しに一夏がそう叫び、見る間に一夏の白式と鈴の甲龍はそれぞれ光跡を曳いて侵入者に飛びかかっていった。

そうだよ、一夏はこういう時は格好良いんだよなあ。勝手な言い草だが、専用機を持っている事がうらやましくなる……しかし、あの黒いやつの実力が不明である以上、二人がかりでも勝てるかどうかは全く分からない。

不安からか、本音は俺の右腕にしがみついていた。

「織斑くん!?! 鳳さん!?!」

山田先生が呼びかけるも、答える余裕もないのか返事はなかった。

俺が不安を拭えないまま織斑先生を見やると、箒とセシリアの二人が必死の表情になって訴えていた。

「織斑先生! 是非私にIS使用と救援の許可を!」

「何か、私たちに来る事は無いんですか!?!」

それに対する織斑先生の答えは素っ気ないものだった。

「ゲートの遮断シールドが最大のレベル4、その上ドアは全部ロックされている……誰もここから逃げることも、救援に向かうこともできません」

「まさか……あのＩＳがハッキングしていますの!？」

「い、一夏……」

気落ちする二人に追い討ちをかけるように、織斑先生は続けた。

「政府に救援要請も出したし、3年の精鋭がアリーナ開放のためのクラッキングも行ってている。入り口さえこじ開けられれば、即応態勢の突入部隊が救援に駆けつける。今出来るのは待つ事だけだ」

もう打つ手は無いと言わんばかりの織斑先生に、ＩＳで突入したいセシリアと心配する箒も動けなくなってしまった。

一方で俺は最初から蚊帳の外だし、全くの役立たずである事も痛いほど自覚していたので、皮肉にも箒達よりかえって冷静になることが出来た。

警報が鳴り響く中、ただでさえ照明が控えめにされているモニター室は試合前よりずっと暗いように思えた。幾つかのディスプレイには、ドアロックされたアリーナから出られずにパニックを起こしている生徒たちの姿が映っている。

今必要なのは生徒教員の避難と正体不明ＩＳの撃破だが、乗っ取られたアリーナのセキュリティによって避難も救援も阻止されているという皮肉な状況だ。今の所それに対して講じられている手段はクラッキングのみ。他に道を開く手段は無いのか……？

俺が他人事のように冷めた感覚で状況を整理していると、しかもつ面で下を向いていた織斑先生が急に顔を上げてつぶやいた。

「本人たちがやると言っているのだ。やらせてみようじゃないか」

無茶な話だが、現状一夏と鈴以外にこの状況を打破できる者はいない。黒いＩＳが出入口を塞ぎ暴れている今は、二人が勝たなければアリーナにいる全員の身が危ないという訳だ。

「し、しかしー」

ブリュンヒルデは副担任の反論も気にしない風でコーヒーに砂糖を入れる。カップに口をつけ、直後に嘔き出した。

「織斑先生、それ、塩です」

動揺している証拠か。しかし山田先生の指摘に顔を赤くする織斑先生に俺は首をかしげた。この人は無茶を平気で言う事もあるが、流

石に命がけの無謀を生徒に押し付けたりはしないように思う。やらせてみるというのは、何か理由があるのでは？

解決のヒントになるかどうか分からないが、どうにも気になる。俺は用があるからと一旦本音から離れた。

「織斑先生、少しいいですか？」

担任の顔は薄暗い部屋の濃い陰影のせいでやつれたように見えた。

「なんだ？」

俺は声を潜めて囁いた。

「一夏と鈴が戦っているISに心当たりがあるんですか？」

一瞬大きく目を見開いたが、すぐに落ち着きを取り戻した織斑先生の声は硬かった。

「何故そう思う？」

何かあるとは思ったが、あつさり反応したものだ。俺はこの人が何をどの程度知っているのかを考えつつ話を進めた。

「しばらく考えた後で、一夏たちにやらせようと言ったでしょう。あれは2人でどうにかなると思える判断材料があったからでは？」

普段の先生なら成否のはっきりしない事を簡単に決めはせんでしょう”

織斑先生は俺をジロリと見て、うんざりした顔でため息をついた。俺を引つ張つて部屋の隅に寄る。

「いいか、誰にも言うな。あれはおそらく……私の『知人』の差し金だ”

俺を正面から見据え、俺にだけ聞こえる声で言った。

「知人、ですか」

「そうだ。それ以上でも以下でもない。私が言えるのはそれだけだ。それがどうかしたか？」

「いえ、何かヒントになればと……しかし知人なら、交渉の余地があるのでは？」

さつきよりも更に苦い顔になった織斑先生は、噛み締めた歯の隙間から「それが出来ればとづくにやっている」とかすかな声をしぼり出し、もう行けと俺を箒達の方へ追いやった。

「……」

ヒントは見つからず、聞きたい事がさらに増えるだけに終わった。『知人』とは誰なのか、なぜコアの限られたISを送り込めるのか、いかなる理由でこの事態を引き起こしたのか、ブリュンヒルデの異名を轟かす織斑先生が苦虫を噛み潰して、交渉も出来ず打つ手なしと判断するのは――

「っ!!」

まさか!? ISの生みの親である篠ノ之 束その人か!! たしか入学前の情報では、織斑先生の幼馴染だとか。なんてこった、よりもよって行方不明で国際指名手配の天才ならぬ天災が相手とは……。「どうしたの〜?」

本音の声に我に返る。とてとて歩み寄ると俺の腕にまたくつついた。

「ああ、ちょっと織斑先生と話をな」

密着以外はいつも通りの本音の態度にホツとする。ディスプレイに映る死闘が目に入り、自分たちの置かれた状況を思い返した。とにかく、今はあの黒いヤツをどうにかすることだ。どこにいるかも分からない天災を気にしてもしょうがない。

今考えうるアリーナ建物内部からの手段……外部からの手段……。

そうだ、いま生徒会は?

「なあ本音、こういう時会長はどうすんだ? 救援に来たりとかは?」

生徒会はIS学園の安全にも責任があると言っていたはずだ。会長はロシア代表だし専用機持ちだろう。

しかし本音は首を振った。

「そうしたいのは山々だと思うけど、アリーナに入れないよ」

「あのISが侵入する時天井にあけた穴は? いくら高性能なISでもそうそうアリーナの遮断シールドは破れないだろうが、奴はやつた。このアリーナは先週末までシールド点検中だったよな? 奴がビーム兵器で貫通した場所は点検の際何か細工されたんじゃないか? そこからならまだ外から侵入可能では?」

俺の話を聞いていた山田先生が織斑先生を振り返って尋ねた。

「どう思いますか？ 織斑先生」

同僚の問いかけにもブリュンヒルデは渋い顔だ。

「希望的観測の側面がありますし、今からでは間に合うか微妙でしょうが……一応、生徒会長には連絡して下さい」

山田先生が会長の I S に回線を繋いでいる間、俺は深くため息をつくこと、織斑先生の方を向いた。

「なんだ。まだ何かあるのか？」

非常識な相手には非常識な手が必要かも知れないが、これは言うべきかどうか……。

「悪手あくしゅですがもう一つ手が……セシリアをアリーナへ送る方法です」
「……言ってみろ」

睨むように俺を見る織斑先生に一旦深呼吸して気を落ち着かせ、再び話し始めた。

「遮断シールドを破壊したヤツのビーム兵器です。攻撃をうまく誘導して、一夏が発進したカタパルトのシールドに強烈なものを撃ち込ませれば……危険ですが、アリーナへの突入口は開けるはずですよ。ただ……カタパルト周辺に人がいなければの話ですが」

俺が言い終わるが早いかな、箒とセシリアが慌てて割り込んできた。

「三治!? いくら何でも無茶が過ぎやせんか!？」

「三治さん！ 私とて一刻も早くという気持ちは同じですが、流石にそれは……」

俺は二人を両手で制しつつ答えた。

「無茶は承知だが、代案も思いつかん」

首だけで織斑先生を見やると、二人もそれにならった。当の本人はしかめっ面のまま目をつむっている。責任者に決断は委ねられたのだ。

「……山田先生、カタパルト周辺の人員はどうなっていますか？」

織斑先生が瞼まぶたを開くと同時に尋ねると、山田先生から即座に返事があった。

「織斑先生、生徒会長との連絡はつきました！ あっ、それからカタパルト周辺の施設ですが、現在人のいる場所は……そのう」

そこまで言って、山田先生は急に口ごもった。

「どうしました？」

「あの……カタパルト付近で人がいるのは、ここだけです」

困り顔の山田先生の言葉に、織斑先生を除くモニター室の全員が目をむいた。

「あつー！」

コンソールを操作していた女子生徒の一人が悲鳴を上げた。全員の視線が一番大きなディスプレイへと向く。

黒いISの攻撃を避け損なった一夏が、アリーナの観客席を覆う防護シャッターに叩きつけられていた。

「畜生……」

誰もが絶句する中、思わず悪態が口を突いて出た。何がやらせてみようだ、一夏の零落白夜は白式のシールドエネルギーも消耗する諸刃の剣なんだぞ。絶対防御にも限度がある。ヤツが一夏の攻撃を避けきったら手詰まりどころか一夏の命が危ういじゃねえか！

背後では歯ぎしりややりきれなさを手近なものにぶつける気配があった。

「時間がない、試してみる価値はあるか……全員退避！ 織斑と凰への連絡は私が行う！」

「ちよつと、織斑先生！」

織斑先生の思わぬ言葉にまたも全員が顔色を変えたが、もはや逡巡しゆんじゆんの余地は無かった。

「みつ皆さん！ 私について退避してください！ 全員で中継室へ移動しますよ!!」

覚悟を決めた表情の山田先生に続いて、俺たちは織斑先生に後を任せてモニター室を飛び出した。

「待って！ 皆さん待ってくださいあい！」

モニター室を出るが早いのか、行き先が分かる生徒たちが我勝ちに駆け出して行ってしまい、その後を追う俺たちが続き、誘導するはずの山田先生が走るのが一番遅く最後に置いて行かれるという残念な構図での避難になった。

「やまぴーが置いてけぼりになっちゃうよ〜」

一緒に走る本音の声に俺はがっくりと来た。非常事態だし引率する立場だったのに……。

「まったくこんな時に、ほら山田先生！」

俺は慌てている副担任の手を強引に掴むと、反対の手で本音の手を取って再び走り出した。

自分の世話で手一杯の時に限ってこれだ、よくよくツキの無い場所だなここは！

「あ、ありがとうございます！ あ、あのもうちよつとゆっくり走って下さいい！」

もう大分箒たちからも離されてしまった。山田先生の悲鳴に応じる余裕もない。

一夏たちは織斑先生の指示で上手くやっただろうか——そう思った瞬間、背後からドスの効いた大声が響いた。

「間に合わん！ その場に全員伏せろっ!!」

もう考えるひまも無かった。立ち止まり山田先生に伏せるよう身振りで示し、その場に這いつくばる本音の上に被さった。

音と衝撃は同時だった。耳を聳^{ろう}する爆発音と固い何かが壊れる音と建物全体の軋^きみがまとまって、アリーナ全体が砕けそうなショックと共に廊下の向こうから叩きつけられた。

気付いた時には三人ともバラバラに廊下に転がっており、割れた蛍光灯の破片や建材の欠片がそこいらに散乱^{ほり}していた。舞っている埃^{ほこり}プレートにつまづき転びそうになった。

「大丈夫か本音？ 山田先生も」

本音に近づくと、山田先生共々自力で立ち上がる所だった。特に怪我などは無い様で安心する。俺は二人の頭や服の埃を払ってやった。

「あくびびっくりしたー!! おとーさんも大丈夫？」

「こっ怖かったですう〜!! そうだ、お二人とも大丈夫ですか!? ケガなどは？」

俺は振動と破砕音がやってきた方を見た。破壊の中心に近いから

か、まだ微細な破片や埃で霧のように煙けむっている。その中から織斑先生が飛び出してきた。

「皆無事か!? オルコットを呼べ、突破口は開けた!」
「本当ですか!」

織斑先生も無事のようにだった。我ながら無茶を言ったもんだが、大した怪我人も無く侵入口を開けたのは僥倖げんじょうだ。

「今確認してきた。すぐに呼んで織斑たちに加勢かぜさせろ!!」

その声を聞きつけたのか、先行して脱出したセシリアがブルー・ティアーズを展開させ文字通り飛んできた。

「セシリア・オルコット、ただ今参ります!! 三治さん感謝しますわ!」

壁際によけた俺たちをかすめ、廊下を飛び過ぎて行つた。たまに鼻持ちならない所も見せるが、今は大変に頼もしい限りだ。

「頼んだぞ!」

「がんばってセッシー!」

「きつ気をつけてくださいね!」

俺、本音、山田先生がその背中に声援を送った英代表候補生は、あつという間に視界から消えていった。

「ふん、これで少しは安心できるか」

織斑先生が誰にともなく呟くと、セシリアが来た方から箒が駆けて来た。

「三治達も無事か!? 織斑先生! 入口は出来たのですか?」

俺たちがうなずくと、そうかと言ったきりセシリアの消えた方向を複雑な顔で見つめていた。自分にも専用機があつたなら、そう考えているのかも知れない。

再び中継室へ走つた俺たちは、モニターに映し出された戦闘に釘付けになった。3対1となり一夏たちは形勢を立て直していた。セシリアの射撃に牽制された所を鈴が正面から斬りかかり、地面に倒された所で一夏の零落白夜が直撃、右半身ごと片腕を切り落とした。

一瞬の静寂の後、中継室は歓声に包まれた。うるさくて耳がおかしくなりそうなのはいつ以来か。

「勝負あつたな。こりや乗員は……ん？」

てつきり一夏のシールド無効化攻撃でグローションを見せられると踏んでいた俺は、無機物しか見えない敵ISの断面に首をひねった。乗員がいない？

「音羽。おそらくあれは無人機だ」

俺の態度を察した織斑先生が説明し、途端に中継室の全員がざわめきだした。

「織斑先生！ あのISは無人で稼動出来るんですか？」

「えーっ！ そんなの有り得るんですか!？」

中継室は驚いた生徒たちの質問攻めで収拾がつかなくなった。無人機云々^{うんぬん}はともかく、頭が痛いという様子の織斑先生とあたふたする山田先生を少々気の毒に思っていると、下から袖を引つ張られた。

「おとーさん、しののんが」

本音の指差す方を見ると、喧騒を尻目に箒が部屋を抜け出すのが見えた。

「まさか、シールドの穴からアリーナに入る気か？」

俺は気になって本音と後を追った。

「箒！ アリーナに行くのか？ まだ危険じゃ——」

室内の騒ぎで聞こえなかったのか、廊下に出た時には足音を残して姿を消していた。

「大丈夫だろうけど、一応ついていくか。今から無茶して織斑先生に怒られてもつまらんだろ」

「しののんまつて〜」

本音と廊下の破片やがれきをよけつつ後を追うのは意外に時間がかかった。どうにかモニター室辺りまで戻ると、本音共々思わず足を止めた。

その様子は一変していた。モニター室のあつた場所の半分以上がえぐれて、カタパルトごと巨大な洞窟のようなトンネルになってアリーナに続き、そこから陽光が差し込んで明るくなっている。

今さらだが、俺はとんでもない提案をしてしまったらしい。後で問題になるだろうとは思ったが、責任追及なんて事になったら本気で

逃げたい。

「……うわく、大変だあ」

「あくあ……どうしようもねえなこりゃ」

箒の姿は無い。どうやらカタパルト跡を通ってアリーナを見下ろす位置にまで行ったらしい。

「おっいしのーん！」

間延びした本音の声が響くが反応は無い。仕方なく俺たちはあちこちえぐれてデコボコになったカタパルトを歩いてアリーナ入口まで進んだ。閉じていた隔壁の破片がそこらじゅうに散らばっている。

箒はカタパルトの終点で、眼下に広がるアリーナを見おろしていた。その横に並んで100mほど下の地上を眺めると、巨大なクレーターの真ん中におお向けで停止した黒いISと、向かい合った一夏が白式のまま座り込んでいるのが見えた。たぶん一夏は零落白夜でシールドエネルギーを使い果たしたのだろう。鈴と、セシリアは空中で静止していたが、ことが済んだと判断したのかゆっくり降下して一夏に近づいていった。

箒は一夏を見つめているらしい。なんだか己の無力さに打ちひしがれているように見えて、声を掛けづらかった。俺とて大した事は出来なかったが、箒は今回出来ることがほとんど無かったのが歯がゆく、また辛いのかも知れない。

俺たちに気付いたらしく、一夏はこちらを向くと笑顔で手を振った。手を振り返しざまちらりと箒の顔を見たが、表情はすぐれない。箒もあの天災の妹なんだし、専用機ぐらいあればいいのに……俺は自分のことも棚に上げてまた無責任なことを考え、その後すぐに苦労の末専用機を完成させた簪さんの事を思い出して己の浅はかさに恥ずかしくなった。

しかし天災である箒の姉が現実に送り込んだのは、彼女の想い人である一夏たちを殺しかねない危険な無人機だったというのは皮肉極まりない。

この事は箒も知らない方がいい……。

と、いきなり本音が俺の腕を強く引いた。

俺が驚くのと、停止したはずのヤツが再びパイロットランプと思しき光を発するのは同時だった。

「馬鹿な!?」一夏っ！ そいつはまだ生きてるぞ!!」

「セシリアー！ 鈴！ ヤツを撃て!!」

箒と俺が絶叫する中、一夏が両腕で頭部をガードしセシリアと鈴が慌てて飛び道具を照準しようとした、その時だった。

起き上がった無人機が残った左腕のビーム砲を一夏に向けたのとはほぼ同時に、その無人機が侵入した穴から水色のISが轟音と共に飛び込み、液体をまとい付かせたランスを瞬またたく間にヤツへと突き立てた。

「伏せてー!」

アリーナに響く声に俺たち三人が腹這いになると、本日二度目の大爆発がアリーナと全身を揺るがした……。

「全く、揃いも揃って余計な世話をかけおって!」

織斑先生の言葉に俺、本音、箒の3人は黙って頭を垂れるしかなかった。

あの後俺たちはアリーナの爆発の振動をやり過ぎたあと駆けつけた織斑先生達に助けられ、無人機の破壊……というか爆発後ハッキングの解けたアリーナから出た。その後先生方にこつてり絞られたというわけだ。

織斑先生の説明によると、一夏と鈴は連携して無人機をカタパルト付近で挑発し、2機まとめて破壊しようとしたと強烈な一撃を撃たせるのに成功した。そしてセシリアも加わり3機共同で倒したものの、一夏がエネルギー切れで動けなくなった所をヤツが再起動したらしい。再起動した無人機に天井から突入しとどめを見舞ったのは会長のミステリアス・レイデイというISで、お陰で一夏への攻撃は止まったものの無人機は撃破直後に自爆、一夏は衝撃をもろに受け意識を失ったという。

「危うく生徒会長が間に合ったから良いものの、自分達に攻撃が向いたらどうするつもりだったんだ?」織斑達に助けてもらおう算段でも

あつたか？ うん？」

まるで返す言葉も無い俺たちだが、何だか担任教師は俺に対してばかりお叱りの言葉を向けているように思える。普段の指導態度にあればこれ文句をつけている俺を堂々と叱責するしっせき機会は無いらだろうか。織斑先生は少し楽しそうに思えた。

「あ、あの、一夏は無事ですか？」

普段はこういう時口を出さない筈が、珍しく言葉を挟んだ。一夏たちの救出現場の雰囲気から緊急医療が必要なほどのダメージは無いのが想像できたが、それでもやはり心配なのが乙女心だろう。

織斑先生はぴくりと眉を動かしたが、素直に教えてくれた。

「織斑をはじめあの侵入ISを撃破した面子に重傷者は居ないから安心しろ。爆発に巻き込まれた織斑も、絶対防御及び生体維持機能により負傷は最小限に留められた。一時的に意識を失ってはいるが軽い脳震盪だ。すぐに意識は戻る」

「そ、そうですか！ 良かった……」

筈は心底ほつとしたという表情を見せた。それを見て俺が少し心を和ませた所へ、事後処理に駆け回っているらしい山田先生が小走りにやってきた。

「織斑先生！ 大まかな損害報告とアーリーナの収録映像のまとめが終わりました。確認お願いしますね。それと……」

もじもじしている山田先生に織斑先生は戸惑いを見せた。

「なんででしょうか？」

「あの、音羽くんたちも反省したでしょうし、もうその辺で……ほ、ほら織斑くんももう意識が戻る頃ですから！」

まくし立てる山田先生に珍しく織斑先生は気圧され、もう行つていと俺たちから報告書を手に離れて行った。

「助かりました山田先生」

「有難う御座います」

「ありがとやまびー！」

俺たちの感謝に山田先生はニコニコした。

「良いんですよ！ さつきはその、音羽くんに助けて頂きましたし！

……あの、やまぴーって?」

本音は悪びれもせずに答えた。

「もちろんやまやのあだ名だよ」

「や、やまや……うう、やっぱり私、教師としての威厳が足りないんでしようか?」

俺は教師にまでニックネームを付けている本音にメツをした。

「うう〜いいと思うのにー」

「あだ名が付けられるのは山田先生が皆に慕われている証拠ですよ。それに正直、勢いと自分のペースが全ての織斑先生よりも、山田先生の授業のほがずつと丁寧で分かり易いです」

俺のフォローにまた副担任はニコニコした。

「そうですか? いやーそんなに褒めても何にも出ないですよお〜えへへへ」

前から思ってたがこの人チョロ過ぎるんじゃないか? プライベートが心配だ。本音と箒は若干呆れが顔に出ている。

もうこの現場で俺たちに来ることは無いようだ。一夏の様子を見に行こうかと言いかけたのを本音の大声にかき消された。

「あっかんちゃん!」

本音が向いた方から、調査のため出入りする教職員や避難する生徒たちの隙間を縫^ぬって簪^{かんざし}さんが駆けて来た。よく見るとISスーツ姿だ。スタイルの出る格好の簪^{かんざし}さんは初めて見る……よく似た姉妹でも大きな違いが出るなあ。現実是非情である。

「二人とも大丈夫だった?」

非常事態を聞きつけて、息せき切って駆けつけくれたらしい。

「大丈夫だよ」

「心配かけたみたいだな。俺達もほとんどの人も無事だよ」

約一名安静にしているのが居るくらいで。一夏に良い印象の無い簪^{かんざし}さんに伝える必要も無いだろう。

「良かった……姉さんにISから連絡をもらった時はどうしようかと思つて……あ」

「どうしたんだ?」

簪さんがなぜか急に沈んだ表情になった。何となく簪さんの揺れる視線の先を見ると、箒・本音・山田先生の……あつ。

唐突に手の甲をつねられた。

「おとーさん、今変なところ見てたでしょ！ も〜」

最近女子の胸を見るのがクセになつてるな。俺は自分が思うよりオツパイ星人だったのか。

「わ、悪かったってば」

本音の言葉にハツとした簪さんは、小さな声でじゃあと云ったきり校舎の方へ小走りに行つてしまった。

やはりたわわの格差が原因か。胸を気にする男ばかりじゃあるまいに……俺が言つても説得力ないな。事情が飲み込めない山田先生はきよとんとしている。

そうこうしている内に箒が苛立たしげに声を荒げた。

「おい！ いい加減一夏の見舞いに行くぞ!？」

俺たちは山田先生と別れ、今度は保健室に向けて忙しく歩を進めた。

保健室の前で、会長たちとバツタリ鉢合わせした。背後には書類が入っているであろうブリーフケースを手にした虚先輩と、セシリアを従えている。セシリアは疲れた顔だ。会長らに例の無人機についてあれこれ質問責めにされたのだろうか？

「あら、みんなも無事で何よりね。篠ノ之さんは急いでるようだけど、怪我は大した事ないといつても、やっぱり心配なのかしら?」

また始まったな、と俺は一人ごちた。まだ助けてもらった礼も言わない内にため息が出る。どうやら会長が色恋沙汰でからかうのは俺に限った話じゃないらしい。おそらくセシリアもその手の攻勢で疲労困憊ひろうこんぱいという所か。

「いつ、一夏のこととは別に……私はただ、幼馴染として見舞いに来ただけです!」

急に態度が固くなった箒と対照的に会長は実に楽しそうだ。相変わらずこの人は恋バナが絡むと無駄に元気になる。

「あら〜? 私は別に織斑くんの事とは言つてないわよ?」

歯ぎしりの音がして背筋が冷たくなる。箒が喧嘩腰になりかけているので、俺は割って入った。

「もうよせ。この人はスイーツと恋バナを与えるとキリが無いんだ」

「ちよつと、命の恩人に対してそんな言い方はないでしょ？」

もちろん不満げな会長にもフォロワーを入れる。

「そうですね、会長の鼻に小豆詰めるのは延期します」

「撤回しなさいよ!？」

会長の冷静さはきれいに吹き飛んだ。

「お嬢様、お見舞いに来たのではないのですか？」

虚先輩も加勢してくれてようやく会長も口を閉じ、俺が保健室のドアを開けた。他にも寝ている生徒が居るかも知れないので、小声で呼んでみる。

「一夏、もう気がついたか？」

と、めくれたカーテンの隙間から眠っている一夏と、その頬に唇を寄せている鈴が見えた。

俺が固まった横を気付かなかつたらしい箒らが通り過ぎ、件のベッドに近づいた。

「あら、事情聴取したいもう一人はここにいたのねえ」

会長のわざとらしい言い草に俺は肩をすくめた。どうせ一夏を含めて無人機と戦った三人とも、後々じっくり話を聞くつもりだろう。

「一夏、もう目が覚めたか？ ま、まだ寝ているか？」

「一夏さん、お見舞いに参りましたわ」

「おりむー大丈夫？」

途端に一夏のベッドから鈴が飛び退く様子と、目覚めた一夏の声が伝わってきた。

「そこで何をしてる!？」

「べ、別に？ 何も無いわよー!」

箒と焦りにかられた鈴のやりとりを聞くだけでお腹いっぱいだが、一応一夏の無事を確かめにベッドを覗いた。しかし鈴もなかなかどうしてやるもんだな。

「よう三治！ みんなも無事だったか？」

「そりゃこっちの台詞だよ」

病衣姿の一夏は怪我らしい怪我もなく元気そうだった。話を聞くと、零落白夜を使いエネルギー切れで座り込んでいた所をいきなり無人機が動き出した意外、織斑先生と会長から聞いた内容とほぼ同じだった。

「空から来た水色のISってのは生徒会長の専用機だよ。一応礼を言っとけ」

俺が振り返ると、さつきから揉めている鈴や箒を見てニヤニヤしていた会長がこちらを見た。

「久し振りね織斑くん。本当なら明日の放課後クラス代表会議で会う予定だったけれど、意外な形で早まったわね」

さつきまでのニヤつきはどこへやら、余裕たつぷりな態度の会長に一瞬呑まれた一夏だが、普段の会長を知る俺は若干醒めた気分だった。

「あのとき生徒会長が助けてくれたんですね！　ありがとうございます！　す！」

一夏が多くの女子を落としていそうな笑顔で礼を口にしても、鷹揚な態度で微笑んで見せる。これだけを見ると実態を騙されそうだな。ISの腕が凄いのは確かだけど。

「まあね。これもIS学園生徒会長としての仕事の範疇よ。もつとも倒しはしても、その後の自爆までは防げなかったんだけど。無事で本当によかったわ」

優雅ささえ感じる仕草で『片手間仕事』と書かれた扇子を開いて見せたが、すぐにその表情が真剣さを帯びたものに変わった。

「実は今日訪問したのはそのお詫びとお礼のためなの。織斑くん、生徒会として貴重な男子生徒である貴方を完全には守りきれなかった事、謝罪するわ。それに有難う、オルコットさんと凰さんも。貴方達が今回の試験機暴走の鎮圧に危険を顧みず協力してくれたお陰で、多くの生徒と教員が救われたわ。貴方達の協力に対して学園側からも何らかの感謝の印が贈られるはずよ」

虚先輩共々深々と頭を下げる会長に、みな慌ててかしまった態度

になった。俺も一応表面上はそうした。知る事実と噛み合わない言動は別として。

無論目端の利く誰かさんがそれに気付かないはずもない。皆と向き直った会長は表面上穏やかな笑みを浮かべつつ、一瞬俺に『余計な事言わないでね』という視線を放ってよこした。

無論きつちり余計な事を言った。

「普段のデスクワークもそんなくらいの手際なら虚先輩もニツコリですね」

「私はフットワーク派なのよ！ デスクワークの類は得意じゃないのっ！」

一気に地が出てしまった。あつという間に周囲の表情が微妙になる。

「んもう！ せっかく格好良い先輩の姿を印象付けたかったのに台無しじゃない!! あゝあ、この後織斑くんを生徒会に勧誘する筈だったのに」

「はがれやすいメッキでしたね」

がっかりした会長と塩対応の俺に周囲は呆れ顔を見せ、神妙な空気が台無しになった。また女子たちの一夏を巡る泥仕合が始まると会長は俺に素早く耳打ちした。

「後で生徒会室に来て」

俺は微かに頷いた。一夏に向き直り、そろそろ帰る旨を伝えようとした途端、当人が思い出したように大声を上げた。

「そうだ鈴！ あの昔の約束のことだけどさ……悪かった。鈴にとっては凄く大事な約束だったんだよな？ なのに、おれはちゃんと分かってなかった。すまない、この通りだ！」

一夏は自分がさっきまで失神していたことも忘れてベッドの上で土下座した。もうほぼ元気だなこれ。

しかし一夏も変わったな。今までならムキになって喧嘩したままか、他のゴタゴタで忘れそうだなもんな。このまま行けばその内……は無理でも、在学中はどうにかなるんでないかな？

もつとも一夏にとっては精一杯の誠意でも、人前でこんな真似をさ

れた鈴は展開について行けずに大慌てだ。前回一夏が土下座した時は俺が焦ったけど。

「別に土下座なんかしなくていいわよ！ あくもう、あれはその……し、宿題！ 宿題にしとくからね！ 近いうちに必ず正しく理解して、あたしに言いに来なさいよ？ 分かった!？」

一夏は起き上がるといつもの笑顔を見せた。

「ああ、必ずそうするよ。約束する!」

「よーし、絶対だからね！ それじゃあたしはもう行くから。一夏、また明日!」

鈴はさつきまでの箒たちとの口論も忘れて、若干満足げな様子で保健室を足早に出て行った。

やっぱりさつきの鈴……言うだけ無粋か。

「私たちも失礼するわ。織斑くん、ゆっくり体を休めてね。また明日クラス代表会議で」

「俺ももう行くわ。一夏も元気そうだし」

「私もくまたねおりむー」

会長や俺が場を辞すのを告げると、一夏は急に慌てだした。

「ええー三治までもう行っちゃうのか!? おれもう平気だし一緒に行っていいだろ?」

制服に着替えようとバタバタする一夏を、乙女の前で肌をさらすなと怒る箒と頬を染めるセシリアに任せて俺たちは保健室を出た。

会長、虚先輩、俺、本音の4人は紅茶のカップを前に生徒会室のテーブルを囲んでいた。

「虚ちゃん、お茶請けもう一つくれない?」

「お嬢様、太りますよ?」

もう陽が傾く頃合だ。本音は空腹を抑えるべくさつさと自分のお菓子を完食し、俺の分を虎視眈々と狙っている。

数名の食い気のせいで緊迫感とは程遠い空気だが、予想される議題は胃もたれするレベルの重さだった。

「はあ、ただでさえ書類仕事が溜まってるのに、こんな騒ぎまで起きる

んだからホントついてないわ」

本題は会長のため息と共に始まった。

「お嬢様？」

「ハイハイ、分かっているわよ。まず音羽くん、私に言いたい事があるでしょう？ 保健室での話についてよね？」

微笑んではいるものの目は笑っていない。

「はあ、まあ……しかし俺がどうこうよりも、『実物』を調べる方が重要なんじゃないですか？」

会長の質問に俺は当たり障りのない答えを返してみた。

「ざっとは見たけれど、詳しくは整備科の調査結果を見なければ何とも言えないわね。それはそれとして、キミだけが知ってる事があるでしょう？ 私が聞きたいのはそれよ」

だから保健室で反応したんでしよう？ 会長の表情と隙の無さは変わらなかった。

俺は黙って肩をすくめた。曲がりなりにも織斑先生には誰にも言うなど釘を刺されたのだ。

会長はあの事件が試験機の暴走事故だと言った。本当にそうなら織斑先生は俺にあんな事を言わないだろうし、皆にも会長と同じ事を言ったはずだ。天災がらみかとはともかく、やはりあれは外部から送り込まれたものだろう。

多分会長は織斑先生から話を聞いてはいない。だから何故俺が保健室での嘘に反応したか気になるんだろう。無人機を調査した結果事実を知ったか、それとも無人機を作れるのは天災のみだと判断したのかは知らないが、俺がどういう理由でアレは試験機ではないと判断したかを聞き出したいのだ。

「本音ちゃんにも言っていないのよね。私にも話せない事かしら？」

「いや別に。というか想像は……いや調べはついてるんでしょ？ 学園アリーナの遮断シールドブチ破って複数の専用機持ちと互角に戦う無人IS。んなもん作れる国や組織があるなら、とっくに世界の軍事バランスというかISバランスは崩れてる。世界中が情報収集や対策に大わらわになるでしょうから何かしらの異常が伝わるし、この

IS 学園生徒会や教職員でだって問題になるはず——いや、現れた際の対応にしてもマニュアルくらい出来たはずでは？ 少なくともあの無人機が学園の試験機なら、一時的な混乱はあっても教職員の誰もアレが何物か分からないのはおかしいでしょう」

うんうんと聞いていた会長は、じつと俺の瞳を覗き込んだ。

「概ねはそうね。では、アレは何だと思うのかしら？」

俺は馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに鼻を鳴らした。

「あんなもんどこも作れないし、作れる奴に心当たりもない……IS に一番詳しい人間を除けば、ですが」

顔だけは微笑を絶やさなかった会長が初めて眉間にしわを寄せた。

『天災』篠ノ之 束博士の差し金……確かに、白騎士事件という前科もあるしね」

俺はうなずいた。例え織斑先生に何も聞かされなくとも、アレがIS でありコアが世界でも数少ない貴重品と知っていれば、最初に疑惑が向けられるのはIS コアを製造できる唯一の人物なのは当然だろう。あのアリーナのシールドが整備中に無人機が侵入できるような細工がなされたのも、おそらく天災の仕業だろうという事だった。

真面目な表情になった会長は質問を続けた。

「それは、純粹に音羽くんだけの考えかしら？」

内心ちよつとギクつとした。あの時のモニター室でのやりとりを知っているのだろうか？

……そう言えばあの時、織斑先生に耳打ちされた際本音は聞いていたのだろうか？ 例えそうだとしても、あのブリュンヒルデがそれを見逃すとは思えない。

ちらりと本音を見ると、心配そうな目つきで俺を見上げている。

「そうだと何かまずいんですか？」

会長は首を振った。

「私の勝手な推測だけど、あの事件のさなかで織斑先生あるいは篠ノ之さんは何かを知っていて、音羽くんはそれを聞いたんじゃないかしら？ 彼女らは今回の件の渦中でたった二人の篠ノ之博士と縁の深い人間だし、あの混乱のさなかでキミは二人が何か洩らしたのを聞いて

たとしても不思議じゃないわ。なにしろ事態打開のきつかけを作ったんだし、音羽くんは何かと彼女らの面倒を見てきたでしょ？ 事件解決のためヒントになりそうな事を聞き及んでいても不思議じゃないと思うのよ」

いったん言葉を切つて、会長は紅茶に口をつけた。

「それこそがキミが『試験機』の実態を知る理由だと思つたし、もしそうなら私の知る以上の何かを知っていると思つただけけれど、違つかしら？」

そこまで考えたのか。流石に学園の治安まで預かる立場の人間だけある。もつとも俺に対しては多少買いかぶりというか、考え過ぎではあるが。

「残念ながら俺もこれ以上は分かりませんよ。役には立ちそうもないですね」

俺が答えると会長は、そうでもないわと言つて微妙な笑顔を見せた。

虚先輩が俺と会長のカップにお代わりを注いでくれるのを待つて、会長は続けた。

「どんな意図があるにせよ、今回のことは明らかに学園や生徒に対する武力攻撃だったわ。今後もこんな襲撃や破壊活動に対処するのは当然としても、事前に防げるものなら防ぎたいのよ。でも篠ノ之博士の情報は極端に不足している上に3年前から行方不明。見つけることも、行動を予測することも出来ない。今回の襲撃の目的も、敵意を抱く理由も判然としない……そんな中で、篠ノ之博士本人と交渉できるチャンネルがあるとしたら、キミならどうするかしら？」

俺は思わず立ち上がった。

「まさか！ 織斑先生と箒に篠ノ之博士と交渉するよう説得しろとでも言うんですか？」

会長の立場も言うことも分かるが、それは酷く残酷な話じゃないだろうか。例えテロリストだとしても二人にとって篠ノ之博士は身内だろう。

「実は今まで織斑先生は個人的に天災とコミュニケーションを取るこ

とを拒絶してきたわ。様々な勢力や有力者に利用されるのは目に見えているものね。でも……おそらく今後は変わると思う。いえ、変わらざるを得ないわ。IS学園とその生徒が襲われたのだから。私がお願したいのは、同級生の篠ノ之さんの方なの」

今度は俺が顔をしかめて眉間を押さえた。言葉も出ない。現実的な話、今回の無人機が撃破された事で次はさらに強力なISが送り込まれる可能性が高い。そうなったら今度こそ一夏たちでは……その上犠牲者が出る危険も大きい。しかし……。

「無理にとは言わないわ、本来なら私がやるべき事だし、こんな事を頼まれたくはないわよね」

穏やかに話す会長。俺は黙っていた。

「出来ればで良いの。もちろん篠ノ之さんだつて拒否する権利はあるわ。でも正直、今は藁にもすがりたいのよ。あの天災が相手では分が悪すぎる。気が向いた相手としか話さないという情報もあるわ。残念ながらまともに交渉は出来そうにないし、ISで対抗するにも限界がある。でも……せめて学園生徒の安全だけは守りたいのよ」

忸怩たる思いがあるのだろう。話の最後で会長は見ていて痛いほど右手を握り締めていた。

「ま、そういう訳だから、一応は頭の隅に留めておいてね?」

回答に悩む俺に会長はわざとのように軽い調子で話を締めた。

「あまり悩まないでくださいね。これはあくまで生徒会の仕事ですし、音羽くんは本来生徒会役員ではないのですから」

虚先輩もフォローを入れてくれた。ん? 今気がついたけど、この人も生徒会で俺と同じようなポジションなんじゃないの?

急に本音が俺の右腕にぎゅっと抱きついた。

「おとーさんお腹すいた〜」

いつものゆるい様子に気が抜けた。ぐじぐじ悩むより、とりあえずは腹ごしらえでもするか。

「……やれやれ、それじゃそろそろ晩御飯にするか。会長たちも食堂に……一緒にしません?」

自分の中で張り詰めていたものがふっと緩んだ。会長たちも今の

調子じやリラックスするひとときがきつと必要だろう。

しかし会長の返事はいろいろナナメ上だった。

「そうね、でも……この後死ぬほど忙しいのよ！ 私はず!!」

いきなり怒鳴りつつイスを蹴飛ばし会長は立ち上がった。気の重い用事が終わってタガが外れたのか？

「は、はあ？」

俺が要領を得ない反応なのも気にせず会長は一人でがなりたてた。

「簪ちゃんの専用機が完成して！ やつと！ 事務仕事前に休息が取れると思ってたのに!! なんなのよ無人機って!! もう今週ずっと完徹決定よ!! どうしてくれるのよもおおっ!!」

「えええ……」

会長にとつて本日はブチ切れデスマーチの幕開けだったらしい。

「申し訳ありません音羽くん。お嬢様は溜まっていたデスクワークに加え無人機襲撃事件の後処理と調査、さらには無人機のアーリーナ侵入経路調査、それに加えて政府とIS委員会への報告に中止となったクラス対抗戦の対応などで予定が完全に埋まってしまいました、今月はもう休みも取れそうにないのです」

「え、今月いっぱいですか!? まだ半月もあるのに……」

き、キッツいなあ。IS学園生徒会長はブラック社員か？

虚先輩の話にいささか気の毒に感じていると、さつきまで泣きそうだった会長がこつちをチラツチラツと見ている。手伝って欲しいなら素直に言え。

「等についてはまあアレですが、事務作業くらいなら手伝えなくもないです」

俺が言うとう会長はまた不平を垂れた。

「そこはあ素直にい手伝いますって言って欲ーしーいー」

「うるせえもう来ねえぞ」

会長のワガママに対し俺が冷たく吐き捨てると、虚先輩が横目で駄々っ子をギロリと睨んだ。

「お嬢様？」

すぐに皆がヒツとかすれ声を出して押し黙った。

本当に生徒会を仕切ってるのはやっぱりこの人かも知れない……。

会長と虚先輩は後で簪さんと一緒に夕食を摂るらしく、俺と本音はまた食後に手伝いに来るということで、泣く泣く報告書に目を通す会長と、それを腕組みして見おろす虚先輩を後に本音と食堂へやってきた。

しかし今日という日はつくづく波乱と驚愕に満ちている。いい加減何にもない退屈な日が来ないもんかな……まさかこの年でこんな事を願う日が来ようとは。

「あー！ いたいた、やっと見つけたぞ！」

そらきた。券売機の列に並んでいると、さっきまで保健室にいたはずの一夏が駆け寄ってきた。大した外傷もないようだし、もう大丈夫なんだろう。女性関係を除けば。

「一夏！ 今日はその、何だ、あの化け物を倒した祝いに私が奢ってやろう！ だから二人で——」

「一夏さん！ 今宵は共に強敵を撃破した記念として二人きりで——」

「一夏！ あたしはあっちの席がいいから、早く来なさいよね！」

すぐにその後ろから件の3人くだんが^くついてきた。本音の言った通り、今度からは一夏を狩る者たちが一人増えた。

まあ、大して変わりやしないさ……大してな。

「三治！ 一緒に晩飯食うだろ？」

「おりむーすっかり元気だね〜」

「もちろんさ！ それより三治聞いてくれよ。千冬姉がさ——」

一夏の女子に対する無関心も無駄にサワヤカナ笑顔にも今は何も感じない。今日一日のアレコレに比べりやこの程度なんでもないな。それに一夏は会長と並んで本日のMVPでもある。今日ぐらいいちいち目くじらを立てることもないだろ。こんな事でこいつらが大騒ぎしてられるのも、今ここが平和な証拠だし。

でもさ……。

退屈で平凡な日常こそが、学生本来の姿じゃね？ この学園はやっ

ぱりおかしいよな？

ポニーテールは振り向かない

「昨日の試験機暴走鎮圧の功績を讃え、織斑、オルコット、それに2組の凰及び生徒会長の4名は、明日臨時の全校朝礼で学園長より表彰される」

SHRでの織斑先生の発表にクラスは沸きかえった。一夏がクラス代表になって以来の騒々しさだ。

「静かに！ それと今回の事件を受け、事態の調査やアーリーナの安全等を鑑みて^{かんが}クラス対抗戦は中止となった。なお放課後にはクラス代表会議があるので織斑は忘れないように。それから織斑とオルコットはクラス代表会議の後に教員と生徒会合同の聞き取り調査がある。本日は以上だ」

クラス対抗戦中止と聞いた途端、沸いたクラスの空気が一気にしぼんでしまった。可哀想だが、優勝クラスに与えられるデザートフリーパスもこれでチャラだからな。むしろ見事無人機を倒した一夏たち3名にこそ景品でも出してやるべきだ。会長は調子に乗りそうだからいいや。

それより気になるのは、担任の明らかに不機嫌な顔つきだった。俺のあずかり知らぬ所でいかなる話があり、また本人の葛藤や決断があつたかは不明だが、おそらく彼女は天災と連絡を取る可能性が高い。あるいは既に？ いずれにせよそれが良い結果をもたらす事を期待するのみだ。

一方で箒の顔を横目で見やると、何やら難しい顔で正面を睨んでいる様子だった。彼女も馬鹿じゃない、今度の事件が実の姉による犯行の可能性が高いことに気付いていても不思議はないが……。

必要事項だけ言つてさっさと教室を出て行く担任を見送り、さてどうなるかと思つた所に、山田先生が俺の席へ危なっかしく駆け寄つた。

「忘れてました！ 音羽くん、今日の放課後空いてますか？ 射撃訓練の方を今の内にと思いました」

「今日ですか？ 大丈夫ですよ」

生徒会室へ手伝いに行くのが遅くなるけど、今日は会長もクラス代表会議があるから手伝いは7時以降くらいからでいいし。ていうか今さらながら一夏のやつにクラス代表として出席させて大丈夫かな？

「あー良かったです！ 今週は明日からI S襲撃対策……じゃなくてはわわ、か、会議！ 会議やアリーナ損傷の修理計画なんかで忙しくなっちゃいますので!!」

「おいおい、『I S襲撃』って言っちゃってるよ！ 俺知らないと……。」

「そっそれではまた放課後に！」

急ぎ用件を済ますとやまびーは廊下へ駆け出していった。

「せわしない人だな」

山田先生は口に出す言葉をもうちよつと吟味して喋った方がいいぞ。

それよりも、箒はどうするだろうか？ 立場があり守るべき生徒もいる織斑先生にしてもそうだが、今回のことが実姉の仕業と知ったとしたら……？

さりげなく一夏のファースト幼馴染を見ると、目が合って驚いた。お互い慌てて目を逸らす。

箒のやつ、なぜ俺を見たんだ？ 生徒会とつながりがあるからか？

「三治ーっ！ 助けてくれーっ!!」

いつもの大声に振り向くと、一夏がまた熱狂した女子たちに揉みくちゃにされていた。デザートフリーパスがパーになった分無人機撃破のネタで騒ぎたいのか。こういうのもう恒例行事だし驚きもしいな。

すぐそばでは一夏に近づけないセツシー様がプンスコだ。

「わたくしも功績ある者の一人ですのに！」

「それに鈴と会長もな。まったくうちのクラスは平常運転で何よりだよ」

約一名を除いてな。俺は再び箒の方をうかがった。

彼女の顔は落ち着きが無いというか、俺の方をチラチラ見つつ何か

を言いたくて言えないもどかしさを訴えていた。

結局あのまま何があるでもなく放課後を迎えた。俺は筈に何も言えず、当の本人もまた俺に何か言いたそうだったが、お互いきっかけが掴めず周囲に多少怪訝な目で見られつつ双方無言で通した。

「なあ頼むよ三治！　ついて来てくれるだけでいいから！」

「お前は親離れできない子供か？　クラス代表は一夏なんだからお前が自分で行かなきゃ駄目だろ」

クラス代表会議に一人で行くのが不安だからと、一夏は俺も一緒に引っ張って行こうとするさい。一夏にしてみりや体力勝負は得意でも委員会だの会議だのと辛気臭いのは苦手だろうし、女子の中に一人だけ男子というのも精神的にキツイ。でもこの先何度もある事だし、今の内から及び腰でどうするのか。どうせ逃げられないんだし、さつさと慣れた方がいい。

そう言う和我らがクラス代表は、冷や汗を垂らしそうな表情で言葉に詰まった。

「うっ、それはそうだけどきさ……」

「おりむー緊張し過ぎく。もつとりラックスしようよ」

「そうですわ！　一夏さんはこのクラスで私が認めた人物なのですから、自信を持って下さいな！」

一夏は本音とセシリアの言葉にも渋い顔だ。

「二人は他人ごとだからそう言うんだよ」

俺は厳しめの顔をつくって叱咤した。

「しっかりしろ！　お前は1年1組の代表なんだ。シャンとしなきゃクラス全員が恥をかくんだぞ？　それに今日は初日だし難しい事がある訳じゃない。大丈夫、1度行けば慣れるさ。分からない事は後で誰かに聞けばいい」

ほんと背中を叩いてやると、やっと安心した様子を見せた。

「そっか、だよな！　ありがとう三治、おれなんだか自信がわいてきたぜ！」

勢いだけで言うだけ言うと、一夏は呆れるほどあつさり元気になっ

た。こんな単純ならさっさとやる気スイッチ押せりやいいのに。

「二夏ーっ！　一緒に代表会議行くわよ！　さっさとしなさいよねっ」

ちやうど教室前まで来た鈴に呼ばれ、一夏は俺にすがり付いていたのも忘れてさっさと教室を出て行った。

あれくらい単純だと、むしろ羨ましいわな……俺が悩み過ぎなだけか？　まあそれは置いて。

「さて……」

一夏に同行できず不機嫌なセシリアはさっさと教室を出て行った。本来なら同様に悔しがるはずの箒は……。

何気ない素振りを装って背後を振り返ろうとするが、気になる事が事だけに動きが固くなってしまう。

「どうしたの〜？」

隣の本音が言うが早いか、本人がいつの間にもやらすぐそばに現れた。

「三治……折り入って話があるのだ。どこか、二人だけで話せないか？」

来た。

「悪いな、急な話で」

「別にいいよ、山田先生の訓練までまだ時間あるし。しかし本音にも聞かれたくない話って言う……かなり難しい事か？」

「う、うむ。ちよつと他には話せないと言うか、相談……し辛くてな」俺たちは陽の傾きつつある屋上で、飲み物片手に下校する生徒たちを見下ろしていた。本音は先に帰ってもらった。今ここには俺と箒以外誰もいないのは確認済みだ。

しかし……箒もやはり無人機の出所に気付いてしまったのか……そりや実の姉が天災なんだし、気付かない方がおかしいよな。

俺はなんと言っちゃったら良いのだろうか？

「実は、その、昨日の事件のことだ。私はあの時……己の無力さが悔しかった。普段あれほど道場で一夏に厳しくしてきたというのに、肝心

要の時に私は何も出来なかった」

明らかにその声は沈んでいた。俺は早くも居心地が悪くなって何でもいいからフォローを入れようとした。

「あ、いや、でもそれは仕方のない事だろ？ あの状態では専用機の無い人間はどうしようもなかっただろうし」

俺の当たり障りのない答えに、箒は歯を噛み締め拳を握った。

「確かにそうかもしれない。でもあの時私は何もまともに考えられなくなつて、その一方で鈴やセシリアが妬ましくて仕方がなかった。専用機さえあれば！ それさえあれば私が、私こそが一夏を助けられる……いや、専用機があれば一夏のそばにいられる、並び立てる、私が一夏を独占できると！ そう思ってしまったのだ!!」

「それは……」

視界の遠く右側に、大型重機や訓練機まで駆り出し、早くも急ピッチで修理の進むあのアリーナが見えた。

「そんな、そんな恥知らずな考えを……あれだけ大勢の人間が恐怖に苛まれ、一夏たちは命の危険すらあつたというのに、私は」

「箒……」

己への怒りを吐き出したかと思うと、箒は急にしおれたようになった。

「聞いてくれ三治。私は事件のすぐ後、どうしても専用機が欲しくて、ねだつてしまったのだ、姉に……専用機が欲しいと。本当に恥知らずなんだ、私という奴は！ お前や他の大勢の生徒たちは、それがために必死の努力と研鑽を続けているというのに！ 私は……一夏の隣を独占したいという独りよがりだけで、専用機が欲しいなどと……あれほどISを発明した姉を嫌っていたというのに。こんな事、努力と才気で専用機を手にしたセシリアや鈴には話せない。一夏にだって……とんだ独り善がりだが、私と同じく専用機が欲しくとも与えられない立場のお前くらいしか、話せる相手を見つけられなかったのだ……」

夕陽に染まる力ない姿とかすれた声が痛々しかった。

「そうだったのか……んっ？」

あれ？ 箒は無人機を送り込んだのが姉だと気付いてない？
……ん、まあ本人の心理状態からして、そこまで考える余裕なんて
なかっただろうけども。

って、専用機を姉に、天災に頼んだあ!? おいこれ大丈夫なのかよ、
IS委員会や学園は何て言うか分からんぞ。それに生徒会もか。し
かしそれが可能なら、箒の姉は好きなようにISコアを生み出せるっ
て事だよな。こいつは大変だぞ……。

「三治、私はどうすればいいのだろう？ 言ってしまった言葉を今さ
ら無かった事には出来ないが……今からでも、姉に連絡して、その、専
用機の件を……取り消すべきだろうか？」

箒はさすがのような、それでいて答えを聞くのを怖がるような表情で
そう言うと、目を伏して黙った。

正直参った。会長に頼まれた天災との交渉役依頼だけでも相当言
い辛いのに、よりによってそんな話が箒から出てくるなんて。箒も相
当思い詰めてるし、もう会長の依頼どころじゃない。というか……。

マジで何て言っただりやいいんだよっ!?

「ううむ……そうだな……」

何度か深呼吸してから口を開くと、当人はびくつとしてこちらの瞳
を正面から覗き込んだ。

俺は努めて平静を保ちつつ、噛んで含める様に喋った。

「確かに、理由はどうあれ自己都合で専用機が欲しいとIS開発者の
姉に頼むのは、傍から見れば褒められたものじゃないかも知れない。
だが……」

俺がそこまで言うと、箒は唇を噛み締めてうつむいてしまった。

「専用機を欲しがる理由なんて、結局は人それぞれだろう？ 一夏の
相棒になりたいからというのも立派な理由の一つだろうし、入手法は
ともかく大事なのはそれを手に入れてどうするかじゃないか？ そ
れに、もし箒が専用機を持って後ろめたい気持ちがあるとしたら、多
分それは自分に分不相応だと感じるか、自分だけ特別なコネを利用す

るからだろう。持つべきじゃないのに持つ、そう感じるから今度のと
とで専用機を持つのが恥ずかしい。違うか？」

箒は顔を上げ、考え込むような表情をした。

「……」

「でもそれなら、箒自身が専用機を持つにふさわしい実力者になれば
済む話じゃないか？ 姉から専用機を貰うなんてずるいと言われて
も、自他共に認める十分な実力と責任感があるなら、専用機を受け
取ってもなんら恥ずかしい話じゃないと俺は思う。本当に恥ずかし
いのは、あるべき腕前も、それを持つ者としての振る舞いや自制心も、
誇りも無く専用機を持つ事じゃないかな？」

ようやく天災の妹は、何かを悟ったように顔つきから険が取れた。

「専用機持ちとして認められる、あるべき姿……」

「そうだよ。織斑先生は不満かもしれないが、専用機持ちにとって本
当に大切なのはそういう所だと思う。もし箒が姉から専用機を与え
られても、専用機持ちに必須であろうそれらが備わっていれば、たと
えやつかみを言う輩がいても堂々としていられるはずだ。だろ？」

「何か言われても、実力や態度が備われれば、堂々としていい……」

「きつとそうだと思う。それで悪ければ、専用機持ちとそうでない奴
の違いは何だって話じゃないか？」

「専用機持ちとしての実力と品格……そうか、感謝する。昨晚あんな
に悩んでも答えが出ずに苦しんだというのに、お前のお陰で昨日から
の胸のつかえが取れた……息苦しさから抜け出して今は爽快な気分
だ。恩に着るぞ三治！」

ようやく箒が翳^{かげ}りのない笑顔を見せた。しんどい空気の中じつく
り語って聞かせた甲斐があったというものだ。

「そうか、良かった！」

「もう迷いはない！ 己の実力を限界まで高め、一夏やセシリア達に
も私が専用機を持つに足ると証明し、姉に頼んだ専用機を受け取る!!
相談して本当に良かった……有難う、本当に有難う!!」

箒は俺の両手をつかみ、ぶんぶん振って興奮気味に謝意を示した。

「おう……おう？」

……あれ？ 何かおかしいような……？

「そうと決まれば早速鍛錬、いやIS訓練だ！ じゃあな三治!!」

「ああ、頑張れよ……あつー!」

元氣よく駆け出してゆく箒を見送った後で、自分がとんでもないことを言ったのによく気がついた。

「俺なに言っちゃってんだよ!? 箒を焚き付けてどくすんだ!!」

あ、アホか!! 箒を完全にその気にしちまったじゃねーか!? いくら箒がIS実力者になった所で、明らかに問題ある手段で専用機を手に入れるのは変わりねえだろうが!!

といって今さら口に出したことを戻す訳にも……ああもう俺は何やってんだ、取り返しのがつかねえ事しちゃまって。

「なんであんな事言っちゃまったんだよ俺は……」

屋上で校舎と共にオレンジに染まりながら、俺はひとり頭を抱えてうずくまった。

9ミリ口径の鋭い銃声が矢継ぎ早に響く。グロック17は俺の手の中で神経質にガクガク跳ね、苛立ちばかりがつのった。

「うーん、どうにも弾着が右に偏っていると言いますか……どこか体に不必要な力が入っていますね。やっぱり大口徑は緊張しますか?」

前回とはうって変わって標的の中心に弾痕が集まらない俺に、何も知らない山田先生は首をかしげて見当違いの反応を示した。確かに無駄な力が入ってしまったているが、それは緊張なんかのせいじゃない。

俺は空のマガジンを抜いてグロックを射撃ブースに置き、今度は45（11.4ミリ）口径のキンバーSISを手を取った。

IS専用機。この学園のほとんどの生徒はその為だけに必死だといっても過言ではない。それぞれが国家や企業といった組織に代表者として認められ、それを与えられることを至上命題としている。

IS……それを手にするため学園の皆があらゆる努力を惜しまないIS。しかし、この世界にとってISとはいったい何だ？

かつての天災による革命的なIS発表と有識者らの酷評……その意趣返しや数年後に天災が起こした白騎士事件……結果ISは恐るべき戦略兵器としての地位を確立、同時に既存の全兵器に勝る戦術兵器としても認識され、既存の兵器を一挙に旧式化させ世界中にIS軍拡を巻き起こす……その後のアラスカ条約という軍事利用を上辺だけ禁ずる茶番劇と、巨大利権団体IS委員会の誕生……男がISを動かせないが故の女尊男卑による社会の歪みと混乱、天才の逃亡、IS学園の成立……そして現在も続く兵器としてのIS開発競争と、いまや代理戦争と揶揄されるモンド・グロツソを初めとする、実質的な軍事競争でしかない専用機同士の模擬戦……。

馬鹿馬鹿しい……何もかもが茶番だ。

そもそも宇宙を駆ける翼として発表されたはずのIS、その名である無限の成層圏インフィニットストラトスの意味自体が失われ、最強兵器で女尊男卑の神輿みこしとしか見られない現状が、産みの親である篠ノ之 束の望んだ結果なのか？

もう『無限の成層圏』などではない。いつそ『汎用人型決戦兵器』とでもしたらどうだ？ 皮肉だがISよりはよほどしつくり来るし、むしろ実態を正しく表している方だろう。

誰のための、何のためのISだ……？

そのせいで家族をバラバラにされ妹の箒には恨まれ、拳句の果てがその箒の目前での無人機襲撃とパニックだ。これがもし箒に専用機を欲しがらせるための思考誘導だとしたらそれこそ最悪だろう。

今までは専用機がなくても、少なくとも傍目には箒は一夏や他の専用機持ち達と上手くやってきたはずなのに、あんなもんがアリーナに現れたせいで、あいつはすっかり専用機持ちちに焦慮しやうりよを憶えるようになってしまった。その上、伝えそびれたとは言え織斑先生と共に天災

の交渉人まがいの要望まで……。

何もかもあの天災のせいだ。そう考えると25m先の人体標的と、天災が送り込んだあの醜悪な刺客が重なって見えた。

スライドを引く。銃口を上げるなり撃った。45口径の鈍く重い銃声が射撃場に響く。強いが大らかな反動が8回繰り返され、金色の撃ち殻が宙を舞った。

「あーっ！ 凄いですよ！ 全弾的の中心に……ワンホールです！ だいぶ要領がつかめたようですね!!」

硝煙ゆらめく銃口を降ろして、ターゲットの中央に空いた大穴を見つめた。

ISの学び舎でISに苦しめられてりや世話はないぜ。

つかえた胸の内を本音に悟られぬよう祈りながら共に夕食を終え、差し入れ片手に生徒会室に向かうと、タブレットやファイルを抱えた教師たちがぞろぞろと出てくる所だった。彼女らは美味い話にありついたようなどこか卑しい笑顔で談笑していたが、俺たちに気付くと急に黙り込んでジロジロと見てきた。

すぐに本音が俺の前に出て、生徒会事務の手伝いをしに来た旨を伝えると納得した様子で帰っていった。

「なんだあの連中？」

俺の言葉に本音は首を振った。

「分かんないけど、なんだか雰囲気がおかしかったよ」

それは俺も感じた。だから柔和な印象を持つ本音に任せたのだ。俺が口を開くと喧嘩腰になってしまったかも知れない、特に今は。

「とりあえず今日の会長の機嫌をうかがってみるか」

ドアをくぐると、意外な顔と目が合った。一夏とセシリア、それに鈴もだ。食堂に現れないと思ったら、どうやら今しがたようやく昨日の無人機についての事情聴取が終わったらしい。

「三治い！ もうメチャクチャ疲れたよ!! 代表会議が終わったと思ったらすぐに先生たちが入ってきてさあ、そのまま1時間以上もあれこれうるさく質問されまくったんだぜ!? 晩飯もまだだし、腹へっ

たよー！」

俺の顔を見るなり不満を吐き出すと、一夏はへばった様子でイスにだらしなくもたれた。

一方で英中二国の代表候補生はすこぶる不機嫌だった。

「まったくですわ！　いかに無人機襲撃の件が喫緊きつぎんの課題だとしても、質問の内容といい教師たちの態度といい、ほとんど被疑者に対する尋問と違ってよい酷さでした!!」

「あいつら何なのよ!?　あたしたちから根掘り葉掘り聞き出して、自分たちで無人機でも作るつもり!?　いくらIS学園の教師だからって、もう少し質問する側の態度つてもんがあるでしようが!」

事件の聞き取り調査というより、ほとんど取り調べのようだったらしい。

部屋の中央に空けられたスペースに三つだけ並んだイスに座ったまま、それぞれ不満をもらす専用機持ち三人に、会長がねぎらいの言葉をかけた。

「三人とも、どうもご苦労様。昨日の今日なのに大変な目に遭わせて御免なさいね。今晚の夕食は生徒会が会計を持つから、食堂で好きなものを食べて頂戴」

会長は優雅な態度で努めて笑顔を見せていたが、その顔にも疲労の色が見え隠れしていた。

「マジですか?　ラッキー!　二人とも早く食堂行こうぜ、それじゃ三治、また後でな!」

「ああ、たくさん食べ。おかわりもいいぞ」

「ひゃっほう!」

俺がいい加減なことを言うのと入れ替わりに急に元気になった一夏は、疲れの抜けないセシリアと鈴を連れ生徒会室を出て行った。

ドアが閉まると同時に深々とため息をついた会長は席にもたれかかった。昨日はアリーナに緊急出動だったし徹夜も続く。いい加減くたびれもするだろう。

直後にその右手が拳を握り締め、ドンと音を立てて机に叩きつけられた。

「……ほんつとうに……教師どもは何を考えてるのっ!!」

いきなりの会長の大声に、声を掛けるタイミングを逃した俺と本音は思わず少しのけぞった。

「無人機と闘った生徒に心配も労ねがいもなく、一方的に無人機との交戦データや無人機の性能についてばかり! ふざけんじやないつてのよっ!!」

なるほど、さっきの教師たちは一夏たちを聞き取り調査していたグループか。しかし皆の話を聞く限り教師連中も相当自分たち本位だったらしく、今度ばかりは会長も相当頭に来ているようだ。

「まあまあ、差し入れも持ってきましたし、一服入れませんか」

「おとーさんがお菓子いっぱい買ってくれましたよ」

本音のゆるい声にふいところらを向き、会長は俺が提げたビニール袋を穴が開くほど見て、ついで虚ちゃんお茶とつぶやいた。

でかい特大シュークリームを欲張って三つも胃に収めた会長は、満足げに緑茶を飲みながらくつろいだ。

「全くあいつらときたら……あれでも教師のつもりなのかしら? 自分たちの損得勘定ばかりで」

どうやら落ち着いたらしい、主に胃袋が。それでも不満が出るあたり相当ご立腹だったようだが、そろそろいいだろう。

「で、先生達は一夏達から具体的に何を聞いたんです?」

会長は眉をぴくりとさせたが、湯飲みを置くなり感情を抑えられない声音で話し始めた。

「そもそも今回の聞き取り調査は、無人機襲来時の詳しい状況確認と情報整理を行い、今後の学園における安全確保と危機管理に生かすのが目的だったはずなのよ。それがあの連中ときたら、今回の事件で蓄積された専用機持ちたちの戦闘データ収集やら、無人機の戦闘力調査ばかり! 自分達の利益にどうつなげるか、そんな事ばかり聞き出そうとするのよ!! もう頭に来るわ!!」

「利益優先って、またあんな事態が起きたら今度こそどうなるか知れないっていうのにですか?」

驚く俺に虚先輩が注釈を付け加えた。

「もちろん現状を憂う教師達もいますが、I S学園の教職員も一枚岩ではありません。どこから洩れたのか教師それぞれの母国や出身団
体から今回の件について問い合わせが殺到していますし、一部の教員
に至っては、むしろ回収した無人機のコアや残骸の分析結果はもちろ
ん、この件で得た様々なデータを学園の貴重な財産としてどう活用す
るか、本来の職務そっちのけで議論しているようです」

それがさっきの奴らという訳か。冷静に考えたらこの状況で損得
勘定優先って、I S学園って世界有数の利権争いが酷い教育機関なん
じゃないか？

流石の本音も話の内容に呆れかえっている。

「そういった『棚ボタ』を加味すれば、今回のアリーナの被害を差し引
いてもおつりが来るって、ホクホク顔で喜んでるのよ？ 一歩間違え
れば多数の死傷者が出たかも知れないのに、あの馬鹿教師ども！
『再度無人機の襲撃があったとて、今回のように専用機持ちの迎撃で
十分』って、自分でやってみなさいよ！ 戦闘教員は何にも出来な
かったくせに!!」

怒り心頭の会長に、今回ばかりは虚先輩も深くうなずいた。

なるほどな、廊下で見かけた教師達がずいぶんとご満悦だったのは
それが理由か。会長の台詞じゃないが、あいつらそれでも教師か？

この様子を先日のアリーナで恐怖を味わった連中が見たら何と言う
だろうな。

それにしてもI Sってやつは、関わる人間を片っ端から不幸にする
上に、人の命もずいぶんと軽くしてくれるらしい。

「それが今度の件を取り巻く現状ってわけですか……つくづくあの無
人機も罪作りですね。自爆した後も禍根を残していきやがる」

箒の件を思い出した俺の皮肉げな言葉に会長は背もたれにどすん
と勢いよくもたれた。

「まったくくだわ……昨日は緊急職員会議があったんだけど、その実態
なんてほとんど事件当時の現場責任者だった織斑先生の吊るし上げ
だったのよ。自分達の無能無策は棚に上げて、あの状況をもう少しど
うにか出来なかったのかと言いたい放題。ふざけた話だわ。無人機

がらみの利権について口出しさせたくない一心から大勢で一方的に責めたてて、本人が折れたら、今後は職員全体でよく話し合って対応しましょうってね。いつぞやの英大使館がらみの意趣返しもあるでしょうけど、実際はそれに加えて他国政府や企業が以前通り学園に介入できるように、それらとコネのある教師達が学園運営の主導権を奪い返すのにも利用したのよ。アリーナのシールドに工作されたらしい事もまだ解明出来ていないっていうのに」

会長はしかめっ面で天井を睨んだ。内心は忸怩たるものがあるのだろう。あれほど嫌っていながら止めようがなかった外部からの学園介入が、理由はともあれ一端収束に向かったというのに、またぶり返してしまったのだから。とはいえIS学園生徒会長一人では教員間で横行する腐敗や不正はどうにもならないらしい。

しかし、そんな腐った連中を切れないのが今のIS学園か。こりや本当にひどい。いつか外部にリークしてやりたいな。

どことなく居心地の悪い沈黙がしばらく続くと、おもむろに会長がまた口を開いた。

「本日付で、織斑先生は専用機である暮桜使用を解禁したわ。とある事情で封印されていたけれど、本人が強引に押し切ったそうよ。表向きは学園の警備強化が名目だけど、もうさつきみみたいな利権ゴリ押し
の教師達に生徒の安全は任せておけないもの」

俺は一瞬何のことか分からなかった。

「くれぐれぐら……あの織斑選手が現役時代の!? モンド・グロツソで織斑先生が使っていたISですか! ……いよいよ本腰ですね」

旧式化したとは言え使い慣れた専用機を現役復帰させるあたり、織斑先生も本気ということだろうな。いよいよ警戒レベルがMAXに近づいてきた。

会長は厳しい顔のまま続けた。

「生徒会としても生徒間での即応体制を固めなくちゃならないわ。具体的にはファーストレスポonder制の導入を今週中にも発表する予定よ」

ファーストレスポonderとは「最初の対応者」という意味で、非常

時に救急隊や警察等が到着する前に応急処置を行う者などを指す。ただ今回会長が提唱したのは、緊急時に学園全生徒がそれぞれの立場や技能、状況に応じてどう行動するかをまとめたものだった。

会長が言うには、学園内の人間を大雑把に3種に分類し、今回のような非常事態に際しそれぞれがどう行動するかを定めた非常マニュアルを策定、非常時の行動について教員等の指示が得られない場合、自己判断でどう行動するか大まかな指針とするということだった。

「簡単に言うと、専用機持ちや即座に訓練機を起動できる状態の者、状況に対処できそうな技術や装備を所持する者、それ以外の者の3種類の生徒が、発生した危機に応じてそれぞれどう行動するかということです」

虚先輩の補足を聞いて、俺は特に出来ることがなんにもない人種に分類されるのが分かった。なんだか安心したような、がっかりしたような妙な気分だった。

「そういえば、貴方に頼んだ篠ノ之さんへの交渉役依頼はどうだったの?」

「え!」

やべえすっかり忘れてた! 交渉役頼むどころか、その篠ノ之博士に専用機頼んだ筈を後押ししちまったんだ!!

俺がすっかり青い顔になったのを見て、会長は察し顔で苦笑した。

「ダメだったのかしら?」

「はあ、まあ……」

俺はあいまいな答えでごまかした。

「そう。篠ノ之博士につながる窓口が生徒会にも欲しかったけれど……仕方ないわね。強要できる事でもないし」

「おとくさん気にしなくていいよ」

嘆息した会長に俺は内心ホツとした。筈を勢いのままたきつけてしまった事はバレていないだろう。だが本音の気遣いがかえってつらい……親しい者に嘘や隠し事はしたくないものだ。

「まあそれはいいわ。実は続けざまに悪いけれど、もう一つお願いがあるのよ」

一端そらした顔を慌てて会長に向け直した。箒に言えなかった協力要請以外にまだあるのかよ？

「織斑くんを正式に生徒会に勧誘したいの。彼の白式の単一仕様能力……零落白夜なら、ほぼどんなISでも一撃で屠れる可能性が高いわ。ただし白式はピーキーな性能だから、全力で敵に当たるためには支援する専用機持ちが必要だけど」

確かに、零落白夜を上手く使えばほとんどのISの襲撃を防げる。しかし一夏の性格と白式の特長からして、それこそ体当たりしかねない勢いで接近戦に持ち込むだろうし、相手の火力が強い場合などは確実に支援が必要になるだろう。

「だ・か・ら、まずは友人であるキミから織斑くん相談してもらいたいのよね。何も今すぐ生徒会役員にならなくてもいいの。ただ緊急時に生徒会と協力して対処するサポートメンバーになって欲しいのよ」

「常時拘束するわけではありませんし、織斑くんの交友関係からしても、事に当たる際は協力してくれそうな専用機持ちも何人かいるようですから、まずは彼の意志の問題かと。音羽くんにはその後押しをお願いしたいのです」

虚先輩の言葉もあり、箒が専用機をよりによって天災に頼んだのを後押ししてしまった後ろめたさからも、俺は断り辛かった。

「まあ……よく考えてから話してみます。言葉を選ぶでしょうし……」

お前は専用機持ちでうってつけのワンオフ・アビリティもあるんだから、緊急時には命がけで戦えとはさすがの俺も言えなかった。そもそもどうにかなったとは言え、一夏はつい先日危険な目に遭ったばかりなのだ。その上援護のために他の専用機持ち、つまりセシリアと鈴にも話をせねばならない。学園には次の危機が迫っているかもしれないが、昨日の今日で危険な義務を背負うよう依頼するのは気が引けた。

「生徒会役員でもないキミに頼むのは本来筋違いなのは分かっているけれど、あの時アリーナで織斑くん達を完全に守りきれなかった私が

言うのもはばかられるのよ。無論タダとは言わないわ、ハイこれ」

会長は何かのチケットを二枚俺に差し出した。

「何すかこれ？ 浅草花やしきフリーパス？」

「本音ちゃんが行って来ればいーじゃない、平日休んでもいいわよ？」
会長のウインクが最高にダサかった。下町遊園地フリーパスが報酬かい！

「もうちつとマシな買収しろや！」

本音などもはや毎度の事とばかりに何個目かのエクレアをくわえている。案外こいつ大物だったりして……マイペースなだけか。

「お嬢様、そろそろ本題を」

会長の心底どうでも良い茶番に軽く鼻を鳴らして虚先輩がうながした。

「ちよつとくらい肩の力を緩めるユーモアも必要でしょ？ ま、それはそれとして」

会長はいきなり手首をスナップさせて何かを放った。

それを本音は驚くほど機敏な動作でキャッチした。右手でつまんで俺に見せると、それは寮のカギらしかった。二人のやりとりは一瞬のことだが、普段のゆるい空気が嘘のような本音の反応に理解が追いつかなかった。

「お嬢さま〜？」

本音の反応をよそに会長はニコニコ顔で俺に告げた。

「おめでとう音羽くん！ 来週から本音ちゃんと同室よ。良かったわねえ！」

俺は疑念そのままの顔を隠しもせず虚先輩を見たが、彼女はやれやれとため息をついただけだった。

「おいコラ青いの、ネタはもういいって虚先輩が言っただろ？ そろそろ真面目にやれ」

俺の言葉に会長はあからさまにムツとした顔を向けてきた。

「私は至って真面目よ！ 本来に来週月曜日から音羽くんと本音ちゃんは同室になるの！ 織斑くんは新しい部屋に移動して転校生と一緒に暮らすわ」

驚きよりも疑いばかりが先に来た。

「転校生？　こんな時期にまたですか？」

本当かよ。本音と虚先輩を交互に見ると、虚先輩は無表情で首肯しゅけんして見せたのに対し本音はポカンとした顔で、目が合うと顔を赤くしてそっぽを向いてしまった。

どうにも胡散臭うさんくささやトラブルの臭いが漂う話だった。鈴の時はわざわざ中国から一夏を追いかけてはるばるやって来たが、本題はISよりも一夏との恋愛というのが驚き呆れつつも年相応の微笑まじきがあった。果たして今回はどうなのやら。

「それがねえ、なんと音羽くんと同じ男子なのよ。織斑おりむらくんと音羽くんに次ぐ、第3の男性IS操縦者ってわけ」

会長はえらく重大なことをサラッと述べた。

「はあ!?　そんな情報全然知りませんよ!　そもそもそれが事実なら、大いにマスコミを賑わすじゃないですか?　それがそんな騒ぎはどこにも無い。誰も話題にさえしていないでしょうに」

まるで腑に落ちないという俺の態度も、会長はどこ吹く風だ。

「でも実際そう連絡があったし、事実来週転校してくるのよ。その彼、シャルル・デュノアくんがフランスからね」

フランス政府はまだ彼の事を表沙汰にはしたくないらしいわ。何でもないような調子でそう言つて、会長は俺の反応を見るかのようにこちらを見つめた。

なんともすわりの悪い話だ。俺はえもいわれぬ不安を解消しようとして無意識に答えを探した。

「シャルル・デュノアねえ……待てよ、フランスのIS製造会社にデュノア社ってあったんじゃないですか?　そのこの回し者——いや、御曹司か何かですか?」

答えはそうよの一言だけだった。どっちだよコラ。

どうにも会長の反応が薄すぎる。というか、とんでもない情報のわりにずいぶん落ち着いているな?

それより、俺の反応を観察しているかのような態度が気に入らな

い。

「もつと俺に言っておく事があるんじゃないですか？」

「どんな？」

「どんなって、注意事項とか、どういう奴だとか……」

「どうして？ そんなこと必要かしら？」

「そもそも何でわざわざ寮の部屋変えさせてまで一夏と転校生を一緒にするんですか？」

「学園の決定よ。生徒会が決めたことじゃないわ」

「どういう訳か会長は取り付く島も無い。しかしいい加減こうも態度が極端に淡白だと、逆に何かあるとしか思えない。」

「一夏には何も言っておかないんですか？」

「織斑くんには先生方が連絡するでしょう？」

「まあそういう事だからと言って会長は話を終えようとした。」

「……そいつ、確実にいわく付きでしょう？」

「さあ、どうかしら？ 会って確かめてみたら？」

「やっぱり、知っていながら教えてはくれないようだ。何かしらあるが、教えずに匂わすだけなのは珍しかった。大した危険が無いからか、それとも直接言えない事情があるのか、はたまた既に生徒会で対処済みなのか。」

「まあ正体はおおかた再び学園介入しやすくなった事から送り込まれた潜入者の類だろう。スパイか作業員か。暗殺者という事はあるまい。そもそも危険人物ならまず織斑先生が一夏と同室なんて確実に許さないしな。」

「結局その辺はうやむやのまま、いつものように事務作業を開始した。せいぜい今週中に一夏の尻を叩いて引越し作業を完了させないとならない。しかし、あの大量の食器やら調理器具やら全部移動するのか……。」

「それじゃ織斑くんに依頼の件よろしくね」

「ほんとに部屋移動が報酬あつかいかよ!? つーか男女が同室でいい

のか!？」

とりあえず事務作業が一段落し、虚先輩の入れた紅茶を飲んで一服して時だった。生徒会室のドアがせわしなくノックされ、会長の許しを得るのも待たずにドアが開けられた。

「あーやっと思つた! お願い! もう一回取材させて!! いーでしよたっちゃん!？」 かなり協力したじゃない?」

げ、新聞部の……なんでここまで来るんだよ。

そこには一夏とセシリアが対戦した後のパーティに取材で現れた新聞部員の先輩がいた。名前なんてつたっけ……?」

会長をたっちゃんと呼ぶあたり、結構親しいのかな。しかし協力つて、この人も生徒会の仕事手伝ってんのか?」

当人はお構いなしに駆け寄ってくると、俺と会長に一方的にまくし立てた。

「お久し振り! 私のこと覚えてるわよね? ごめんね! もう一回取材させてくれないかな? 前の取材で出した号が先生たちに発禁扱いされちゃってさー困ってるのよ!」

「発禁?」

どうせこの人の事だ、ろくでもないゴシップか嘘だらけのインチキ記事でも書いたんだろうさ。

「そうなのよお織斑先生に凄い剣幕で怒られちゃって、全部回収になっちゃって部長にも大目玉! もうこうなったら話題の男子二人に世界最新独占インタビューでもしなきゃ挽回できないのよ。ね、いいでしょ!？」

ちらりと会長を見ると、アチャーという様子で俺に舌を出した。

「ゴメーン忘れてたわ。そこの薫子は新聞部の副部长なのは知ってるかもしれないけど、整備科2年のエースでもあるのよ。簪ちゃんのI S組立にかなり貢献してくれたんで、ちよっと断れないのよねえ」

「えっ!! この人が!？」

俺は初めてじっくりとこのやかましい先輩を見た。ええ、会長が

言つてた簪さんに協力した整備科エースってこいつかよ……。

「ふっふっふ！ 驚いた？ わたし新聞部の敏腕記者にして整備科のエースなの！ 褒めてくれてもいいわ」

一方的で多少イラツとくる所といい、自分のペースでぐいぐい来る所といい、良くない意味で会長に似てるな。類は友を呼ぶ、か。

「なんか意外つつうかガツカリですわ」

途端にピノキオばりに高くなっていたエースの鼻がポキツと折れた。

「ちよ、ちよつと酷くない!? 悪評記事書いちゃうわよ!?!」

「ダメなもん書いたから怒られて回収になったんでしょ？ そもそも何を書いて怒られたんですか？ そいつを確かめてから決めます」

んあゝもう！ と頭を抱えると、エースで記者は俺に向き直った。しようがないなあと持っていたタブレットに電子版を表示する。

「今は公開停止中なんだけど……ほら、これよ！」

「どれどれ」

そこには好ましくないセンサーシヨナルな見出しがいくつも躍っていた。

《織斑先生 実弟に恐怖の暴虐スパルタ訓練!》

《特報! ブリコンヒルデの弟、天災の妹と英代表候補生との三角関係発覚!!》

《会ってガツカリ! 二人目の男性IS操縦者は口ばかり達者なチンピラ!?!》

俺は思わず嘖き出してしまった。こりゃ織斑先生もキレるわ!

しかし、あの先輩捏造とか言ったり大げさな売り文句掲げたりしてるけど、わりとだいたい合ってるのが皮肉だな。俺が口ばつかでISがてんで駄目なもの、少なくともあの時は事実だったし。

「もういいでしょ? とにかく今は簡単でいいから何か聞かせて!」

不機嫌そうに早口で言う新聞部副部長にやれやれと向き直ると、不

意に会長が耳打ちしてきた。

“そうそう、彼女は音羽くんのISデータ解析もほとんど一人でこなしてくれている功労者でもあるから、あんまり機嫌を損ねないでね？”

「んなっ!? だからそういう事は先に言えつての!!」

あんたはいい加減に大事なことを後出しすんなっ! しかし俺のISデータ解析を頼める最優秀な整備科生徒までがこんなんとは、ついてない。

「薫子、まだ生徒会業務の途中だから手短にお願いね。それと、もう人を馬鹿にするような記事書いちゃ駄目よ?」

「分かったってば! さあ、生徒会長の許可も出たことだし。まず音羽くんはいつから生徒会役員になったの?」

食い入るように俺に尋ねる先輩に俺は肩をすくめた。会長も一応あんな記事を書いて差し止められた事は把握して釘を刺してくれるわけだ。俺としては一夏一人を取材対象にして欲しいけどな!

「なつてません。たまに手伝ってるだけです」

「はあ!? なにそれ?」

結局会長より数倍疲れる相手とのやりとりは30分近く続き、あれこれ質問をまくし立てる新聞部に俺だけでなく本音たちまでくたびれてしまった。

無遠慮な質問を幾つもぶつけられてむっとしないでもなかったが、今おそらく一番頼っているであろう人間がこの人なのだと自分に言い聞かせ、出来るだけ温和な態度でしのいだ。

「今度正式取材する時はちゃんと織斑君も一緒に呼んどいてね? 頼んだわよ! やっぱ二人目よりイケメンの一人目がいないと写真も絵にならないのよねー。それより何より、毎晩寮に男同士で二人きり、何も起きないはずが……ってね! 楽しみだわ!」

本音との仲は辛うじて嗅ぎつけられずに済んだが、やっぱりIS学園の校内新聞はトラブルの種になりかねんな。

「不健全だしやはり今号は生徒会で発禁にしましょう」

「そんな怒らないでよ! エロくなるのはまだまだこれからなのに

!!

不穏なことを言い出したのでいつそ新聞部を廃部に追い込んでやるうかとさえ思ったが、なんやかんや言って会長が毎号楽しみにしているのもそれは駄目らしい。どうせ鼻の穴膨らませて読んでんだろ。小豆を詰め込むには丁度良いや。つーかもう面倒だしポッキーとかでいいかな。ひよつとして会長がかしま姦しいのはこれが原因か？

「そうだわ、音羽君も何でもいいから記事を寄稿してくれない？ コラムでも川柳でもダジャレでもいいから！」

質問してる最中もそうだったが、どんどん要求が厚かましくなつて来た。

「駄洒落だけは一夏が喜びそうですがね。そうだな……『生徒会長の鼻にプリッツを刺したら、イチゴポッキーになつて出てきました。これってトリビアになりませんか？』っていうのは？」

「アハハハ面白い！ それイタダキね！」

「ちよつと本当にそれはシャレにならないわよ!？」

血相変えてとつつあんが飛び上がった。

「あくあ。いつそ生徒会長を虚先輩に変えられれば、いろいろ一気に解決するのにな」

新聞部の黛先輩が帰った後、作業を進めつつ俺はぼやいた。つーかこの人生徒会長に向いてないんじゃないの？

「あー知らないの？ 生徒会長になれるのは学園最強の生徒だけよ？」

校則で決まってるわ」

会長はここぞとばかりに例の扇子を広げて見せた。『学園最強！』と達筆で書かれている。

「ふくん、面倒臭え校則ですね。そんなんタチ悪い奴や模擬戦強いだけのバカが最強だったらまずいんじゃないですか？ そいつより強くないとリコールできないし」

そう言つて、もし将来一夏が学園最強になったらどうなるのかと気がついた。あいつが生徒会長？ どう考えても務まらないだろ？

もし冴えた悪党の一人でも生徒会役員にいればあつさり利用されか

ねんど。それ以前にどえらい仕事量に即日パンクするわ！

一夏が学園最強にならないよう調整するなんて無理だし、そんなの無粋もいいとこだ。しかし困るなこんな制度は。

「今すぐにもそんな校則は変えるべきですよ……将来本当に模擬戦と家事だけが取り柄の一夏が生徒会長になったら、それこそ洒落になりません」

「あら、織斑くんの事支えてあげないの？ 友達でしょ？」

「あいつの為を考えても生徒会長をやらせるのは良くないですよ。それ以前に今の会長でこの体たらくなのに、さらに一夏が会長になるなんて……これ以上生徒会がらみで苦労したくないです」

「何だか私にも彼にも酷い言い様ねえ！ 私だって最近はやんちゃしてるのよ!?!」

ちよつと怒ったので、その口に俺のフルーツパイを突っ込んで黙らせた。もぐもぐやって取り敢えずとつつあんは黙った。

色々あり過ぎて忘れていたが、次に箒に会うのが気まずい。俺はどうしたらいいのだろうか？

俺の部屋に引越す準備のため、本音は作業後すぐ部屋に戻った。少し憂鬱ゆううつになりつつ俺は一夏と離れる事になる寮の部屋へと戻った。

「まいったよホントにさ、会議室に入るなり一斉に囲まれて昨日の対抗戦の質問責めにあうし、鈴はなんでか不機嫌になるし……ぜひ新1年を代表して抱負を！」とか言われて、あの場には居ないのに思わず三治さんじどうしようって言っちゃったよ！ あはは！」

含むものなど何も無い一夏の笑顔を、俺は何とはなしに見た。

あのな一夏。箒はお前の傍に居たいというだけで、やばい橋を渡っちまったんだよ……俺も止めるどころか背中を押してしまったんだ……。

一夏には何の非もないのは分かっているが、どうにもやるせない気

持ちが胸にからまっていた。

「その後は生徒会と先生たちから例の無人ISについて根掘り葉掘り問い詰められてさ、たまんねーよ全く——三治？ 黙りこくってどうかしたのか？」

「いや、何でもない……あれから箒はどうしてた？」

一夏はきよんとした顔になり、えーと確かこれからまたIS訓練だとか言って張り切ってたぞと答えた。

「箒のやつ急にやる気出してどうしたんだろうな？ それがどうかしたのか？」

「そうか……いや何でもないんだ」

それより真面目な話があつてな、大事なことからきちんとして欲しいんだと告げ、俺はテーブルにイスを引き寄せた。

一夏が首を傾げつつコーヒー二人分を入れるのを待ちながら、俺はほおづえをついて壁時計の針を見つめた。

わずか5分足らずの話で、一夏はどんと胸を叩いて任せとけよと笑った。

あまりにあつさり承知した一夏に、俺は不安と不審を感じて何度も繰り返してファーストリスポンダー制について説明した。案の定ISで悪い奴と戦うぐらいしか理解してなかった。

「ああそう言えば、一夏は来週から転校生と一緒に部屋になるんだってさ。今の内から引越しの準備しとけよ？」

「えーっ?!?! どういう事だよ三治?!」

もう決まった事だから仕方ないんだと言いつつ俺はシャワーの準備を始めた。いい加減疲れた。本音も今頃は引越し準備で忙しいのかな。手伝ってやらないとあいつ一人じゃ大変だろう。……よく考

えたら、ほんとに本音と二人部屋になるのか、な、なんかびつくりだな。ど、どうしよう、いや、別にどうこうするわけじゃないけど！

「おい三治！ それシャワー用のタオルじゃないぞ?！」

「え!? お、おっと。ま、まあ大量にDVDとかある俺が言うのも何だけど、一夏の皿やら鍋やらフライパンやらはどうすんだ?！」

「急にそんなこと言われても……どうしよう三治?！」

言った途端に一夏は半泣きでオロオロしだした。まああんなだけ片付けるの滅茶苦茶大変だったしなあ。

「明日にはアイロンとか掃除機も送ってくるのに!！」

「まあ俺も少しは手伝……なんだって?！」

「手伝ってくれよおくれ一人じゃムリだよ!!」

お前さあ……クリーニング店も清掃業者も学園と契約してる所が利用できるだろ……。

「いいけど……俺も他を手伝ったり週末は予定もあるから、平日だけだぞ。それとな、これ以上家電を増やすな。頼むから」

一夏は心底不思議そうに聞いてきた。

「ええー? 何でだよ?！」

「〴〵何でだよ?」じゃない!!」

もうお前はこれ以上面倒を増やすな!!

スタンド・バイ・ミー

「そのまま動くなー！」

俺の言葉に、一夏はのどを詰まらせたような顔で身を硬くする。

次の瞬間、鋭い発射音と共に銃口を飛び出したBB弾が一夏の頭上にある空缶を快音と共に跳ね飛ばした。

「おおー！」

さっきまでの怯えはどこへやら、透明のゴーグルをした一夏は声を上げてはしゃいだ。

「次おれ！ 次おれの番な!!」

コーラのアルミ缶を拾い上げ、ウキウキしながら今度は俺の頭にそれを乗せる。

「一夏、撃つまで引き金に触るなよ?」

「わかってるって! へっへっへ、一発で当ててやるぜっ!」

ノリノリで俺からパイソンのエアガンを受け取ると、ちよつと危なっかしい芝居のかかった握り方をした。

「おれは、狙ったエモノは外さない!」

カッコつけてる所悪いが、どうにも構え方が怪しい。狙いがゆれ気味で大幅に的を外しそうな……こいつスタイルにこだわって正しく狙えてないな。

「お、おい? ちゃんと狙えよな? 硬い家具とかに当たったら跳ね返るぞ?」

俺もゴーグルを付けて怪我の心配はないとは言え、だんだん不安になってきた。

「大丈夫だって! い、いくぞ! おりゃ!!」

一夏がグイと引き金を絞り、ついに変な構えのせいで狙いがブレた瞬間だった。

「織斑、音羽、入るぞ」

ドアがノックされ、振り替える間もなく不意の来客が入室した。

「あ」

ほとんど同時に一夏の放ったBB弾がよりにもよってそちらへ飛

び——パシツという音と共に片手でキャッチされた。

「織斑、貴様は最近訪問客にこういう歓迎をするのか？」

「げ、千冬姉！」

あくあやりやがった。だから言ったのに……しかしまさか発射されたBB弾を手でつかむとは。飛ぶ蠅はえを箸はしでつまんだという宮本武蔵を越えてるんじゃないか？

俺に向き直った織斑先生はジロリとひと睨みした。

「音羽、貴様の入れ知恵か。何をしていたのか私に説明できるんだろうな？」

「済みませんでした……同室の内に男同士で馬鹿をやっておきたかったもので」

俺が平身低頭して謝ると、困ったもんだという顔で織斑先生はため息をついた。

「その様子だと、織斑が別室に移動することは聞いているな？ その事を早めに伝えて引越しの準備を始めさせるはずだったが」

直径6ミリの小さな玉を部屋の反対側にあるゴミ箱へポイと放り込み、担任は散らかった部屋を見回した。いくつものゲーム機、ダンボールで作った剣と盾、本とDVDで作ったコースにミニサイズのラジコンカーなんか転がったままだった。

「ずいぶんと散らかしたものだな？」

「千冬姉！ 三治をあまり怒らなくてくれよ！ おれがワガママ言っ てつき合わせたんだからさ、すぐ片付けるよ！」

そもそもは昨日引越しの話をしたものの、今日になつて俺が一夏の引越し荷物のあまりの多さに気が遠くなりそうになつたので、もう料理に使うやつは全部おいとけと言つたのが原因だった。

「どうせ織斑先生も隣のここに食べに来る方がいいだろ？ なら一夏が普段から必要な物だけ持ってけばいいさ」

「それなら楽でいいな！ じゃあ荷造りと引越しは土日で十分だし、それまでは男子同士で遊ぼうぜ!!」

途端にぱつと顔を明るくした一夏は、今まで彼女候補生らが姦しくて出来なかつた男子同士のアフター5を熱望し、いろいろ悩む所あつ

て気分転換が欲しかった俺も、久し振りの男子らしい馬鹿騒ぎに賛成したのだった。

程々に切り上げろと言いつつ残して担任は去っていった。ドアが閉まりその姿が完全に消えると、俺と一夏は大きなため息をついて床に座り込んだ。

「はあくなんか一気に力が抜けたなあ」

「まさか夜の8時に急に入って来るとは思わなかったよな。流石にドタバタはもうこの辺にするか」

床に転がった諸々を片付けようとすると、あつそうだと言つて一夏が本棚から一つのDVDを取ってきた。

「じゃあコレ観ようぜ！ 前からどうしても気になってさあ!!」

一夏は忘れたとばかり思っていた大都会PARTIIのDVDを持っていた。どうせなら西部警察とかにしといてくれよ、コレはハードで鬱な展開が多いからわざわざ遠慮して奥に仕舞つといたのにさ。

それに一話目から飛ばしている。しょっぱなからラブホ前でヤクザに絡まれるカップルをシカトし現場に急行、しかも事件は連続レイプ殺人！ 買った俺が言うのも何だが、IS学園でこの第一話を見るのは女子に見つからないようにするのが死活問題だ。

「やつぱりこの角刈りサングラスの刑事は三治に似てるぞ。見た目だけじゃなくて、無茶もするけど色々思案したり知恵を巡らせたり、ちゃんと周りの面倒も見てるし」

徹夜勤務の刑事部屋。容疑者が分からず年配刑事が上司に嫌味を言われ、それを自分の事のように激昂する若手刑事と角が立たぬようなだめる主人公。そこへ主人公の妹がブラック勤務を心配し、下着毎日変えてるかと電話してくる。

「まるでおれと三治だな！ おれもついカッとなった時や困った時は、だいたい三治が間に入ってくれるもんな」

だんだん一夏はこの刑事ドラマに妙な事を見い出していた。

ついに犯人逮捕へ向かうという所で、主人公の妹が心配してわざわざ新品のパンツを届けに来る。よりにもよってパトカーに乗るタイミングでハチ合わせしメチャクチャ怒る主人公。

「うくん、なあ三治？　なんかこの主人公と妹ってき、誰かに似てるって言うか……なんだろう？　すごく身近な——あつ!!」

「何だ？　今度は何が分かったんだ？」

「わかったぞー！　ほら、この三治みたいな刑事とその妹、性別を入れ替えたらほとんど千冬姉とおれじやないか!?　いや、ほんとそっくりだよ！　千冬姉が仕事の鬼で全然家事しなくて、おれがいちいちパンツとか食事とか心配しなきゃならないとかか！　まさかこんなのが買ってるのは、三治には相変わらずビツクリさせられるなあ」

「えええ？　今度は織斑先生かよ……」

そう言えばこの主人公兄妹は子供の頃家が全焼し両親も焼死、高校生で二人して東京に出てきて苦労したという凄まじい設定がある。まあ貧しい人も苦労も多かった昭和のドラマだからだが、その事を言うで一夏はなお一層感情移入してしまった。

「昔はおれも千冬姉とほんとに苦労したからさ、この兄妹のつらさがよく分かるよ。千冬姉はいつもバイトで、おれが家事全部やってたんだ。千冬姉がISに乗るようになってからは大分楽になったけど——あつ！　千冬姉、ちゃんと隣りの部屋掃除してるのかな？　……いや絶対してないな。引越しが終わったら一度見に行かないと、洗濯物もたまってるさうだし洗い物も——」

急に姉のだらしなさについて心配し始めた一夏は話を中断して、珍しく難しい顔になった。何だか違う意味で心に響く内容だったらしい。

しかし織斑先生、家事せずに寮で一人暮らしか。普段はビシツとしてるけど、実態は2年以上そんな調子で過ごしてるのか？　男所帯にウジがわくという古い言葉があるけれど、果たして隣は……やめよう、考えたくない。

しかし今日はよく騒いだもんだ。以前に女子抜きで過ごしたのはずいぶん前の気がする。明かりが消えた部屋でベッドに横になると、ぼんやりと天井を見つめる内にうとうとし始めた。

と、急に一夏がとなりのベッドから声を掛けてきた。

「なあ、三治。起きてるか？」

「ん？」

「今日は楽しかったよな。久しぶりだよ、男同士でくだらない事して騒いだの」

「そうだな」

「一緒にいる最後の夜だから言うけどさ……おれ、感謝してるんだ、三治にさ。ほんとだぜ？」

「急にまた……どうかしたのか？」

「三治が初めてだったんだ。会って間もないのに俺の話を一から十までちゃんと聞いてくれて、一緒に真面目に悩んでくれて、時には答えをくれてさ。おれの言う事を最初から否定したり茶化したりなんて絶対にしなかった」

「……そうか」

今夜の一夏は、いつになく饒舌じょうぜつだった。

「IS学園に来るまで、まともに付き合いが続いた男友達は弾と数馬くらいだよ。他の奴はおれが女子にもてるとかいい気になるなどが、わけわかんねえ事言ってるからんだりシカトしたりしてさ。その弾たちも、おれの悩みやトラブルを真剣に考えてくれる事はあんまり無かったんだぜ？」

うん、それは半分仕方ないわな。

「よせよ今さら水臭い、背中がかゆくなるだろ？」

「なに言ってるんだ、すごく大事なことだぞ」

思った以上に真面目な話らしい。一夏の声には熱がこもっていた。「怒った千冬姉にも正面から立ち向かってさ、それも腕力にも誰にも頼らず堂々と言葉で論して。他の奴は大人も同級生もみんな怖がつて逃げ腰になるか、ほんとに逃げ出してたもんな。おれすごく驚いたよ、千冬姉と一対一でにらみ合って、一步も引かないんだから。それも何度も。そんなやつ今まで見たことないよ」

「ああ……」

俺からすれば、織斑姉弟みたいなのを見たことないけどな。暴力と威圧とISに頼りきりの初代ブリュンヒルデ姉と、モテ過ぎる鈍感

ハーレムイケメンで家事と健康に異常にこだわる弟。実際その弟のこだわりのせいで、引越し準備で死ぬ所だった。

……ナベが3つに土ナベが2つ、フライパン4つにボールとざるが3つずつ、包丁お玉にまな板さいばし……皿や椀やコップに至っては数えたくもない。そこへ炊飯器と米びつだ。プラス掃除機とアイロンのか……もうこれほぼ一夏の家じゃね？

ひよつとすると一夏は、普通の家族を持たない寂しさから無意識にこの部屋を自分の家庭にしようとしたのかも知れない。時々週末に夕食を共にする顔ぶれ。姉である織斑先生、幼馴染の箒と鈴、それに姉と対等？ の男子である俺、それにクラスの親しい面々……。時々一夏は両親のいる俺を羨ましがっていた。俺自身も家族と離れ離れになりいつ会えるか分からない境遇に置かれて、親に捨てられたという一夏の寂しさが少しは理解できるようになったと思う。

「だからさ、三治はおれにとっても千冬姉にとっても、運命の人だと思うんだよ」

「うん……うん？」

なんか雲行きが怪しくなってきたくないか？

「なあ三治、千冬姉のこと、もらってやってくれないか？ きつとさ、千冬姉も三治のことは認めてると思うんだよ。千冬姉も仕事とか立場抜きで対等になれる異性って、おれ以外だと三治しかいないと思うんだよな。初日におれが千冬姉に殴られた時に三治がかばってくれてから、ずっと考えてたんだ。世界でたった二人、男でISが操縦できて、千冬姉とも対等に話せて、俺の親友で……千冬姉と一緒にになれる男なんて、他に考えられないじゃないか？ なあ？」

急に何言ってるんのお前は？ 話が飛躍し過ぎだろ！

「ええ……ちよつと落ち着けよ、それはさすがに解釈が行き過ぎだろ」いきなり向こうのベッドから跳ね起きる気配がした。

「なんでだよ！ おれはものすごく真剣なんだぞ!!」

寝るまでの暇つぶしにちようどいいくらいの声が、静かな夜にとど

ろく大声に変わった。

「千冬姉はつい最近まで男っ気なんてまるで無かったんだぞ!? それ
が最近では、三治の事をちよくちよく話すようになったんだ!! 初めて
なんだぞ!? 千冬姉がおれ以外の男の話を何度もするようになった
の!!」

ヒートアップした一夏はベッドから降りて姉の部屋とを隔てた壁
をバンバン叩いた。

「わかったから、ちよつと落ち着けて! もう夜中だぞ?」

こんな大声で騒いだら、それこそ隣りの――

「やかましい! いつまで騒ぐつもりだ貴様らは!!」

言うが早いかご本人の再登場である。俺は慌ててベッドから飛び
出し止めようとした。

「済みません! ちよつと一夏が興奮しまして、もう静かに――」

「ちようど良かった! 千冬姉も言ってやってくれよ! いま三治が
千冬姉のことをもらってくれるかどうか大事なこと――ギャー!!」

止めようもない鉄拳が夜中に騒ぐ馬鹿の脳天にクリティカルを極
めた。頭を押さえてのたうち回る一夏。

「おい音羽」

「は、はい!」

「これは体罰ではない。躰しつげだ。家庭内の問題に口を出すな、いいな
?」

「あっはい」

啞然とする俺にフンと鼻を鳴らすと、いい加減静かに寝ろと言って
担任はさっさと出て行った。

「なあ三治、千冬姉のことだけどき……」

「そいつは一旦忘れろ。特に人前であんな事言ったの聞かれたらまた
ゲンコツだぞ?」

「ちえっ……いいと思うのにな」

未練タラタラの一夏を促して、ようやく一夏の新部屋はととのつ
た。

朝早くから始めたお陰で、昼前にはほぼ引越しを終えることが出来た。移動先の部屋には既に同居人の荷物が届いており、黒いガムテープで梱包されたダンボールの山にはフランス語らしきアルファベットが並んでいたが、それだけでは持ち主や中身について分かるはずもなかった。

「どんなやつが来るんだろうな？ 箒みたいに怒って木刀振り回したりしなきゃいいけど」

「あれは完全に一夏が悪いけどな」

頭のたんこぶも忘れて笑う一夏に、俺は一つ爆弾を投下してやった。

「それがな、なんと男だそうだな。世界で3人目の男性IS操縦者だよ」

「えーっ!? それホントか？ 千冬姉そんなこと一言も言っただけで？」

「生徒会長から聞いたんだ。まあ確かだろ、多分。織斑先生はまた女子が騒ぐといけないから当日まで黙っておく心算なんじゃないか？」

疑わしそうな一夏の態度がみるみる驚きと希望に満ちあふれたものに変わった。

「マジかよ……それじゃ男子がとうとう3人になるのか!? やったな三治!! うわあおれ興奮して待ちきれねえよ！」

見るからにオラわくわくすつぞ状態の一夏に、伝えた情報の胡散くささについてわずかばかりの罪悪感を憶えつつ、同時にお前は美少女だらけの今の環境には興奮しないのかと突っ込みたいのを耐えた。ようやく俺と姉をくつつけるのを忘れてくれたしな。

「じゃ、俺はそろそろ用事があるからこれでな。また騒いで怒られるなよ」

「大丈夫だって！ いやあ悪いな三治！ 手伝ってもらった上におれだけまた男同士で！ まあいつでも遊びに来いよ！ あははは!!」

また男子と同部屋と知って呆れるほど上機嫌の一夏の部屋を後にし、俺はスマホで電話した。

「本音か？ 今片付いた。すぐに始められるぞ」

「わかったくすぐにお引越し……の前にお昼にしょーよ」

「やつぱりかい。まあいいや、昼がすんだら直ぐに始めるぞ。荷物まとめとけよ」

一夏にや悪いが、次の同居人が本音だと考えるだけでワクワクだ。ちよつと顔が緩んできた。

食堂の前に本音の荷物を運ぶスペースを確認しようと、一旦部屋に戻ってきた。

閉めておいたカギを取り出そうとすると、いきなりドアが開いて見慣れた相手が裸エプロン姿で大声を出した。

「お帰りなさいアナタ！ ご飯にする？ お風呂にする？ それともア・タ・シ？」

俺は即座に会長の肩をぐいと押して中に入り素早くドアを閉めた。

「んもう、ノリ悪いわねえ！ もうちよつと反応してくれないとつまんないわ」

「何やってんだ青いの!? 鼻にプリッツ詰めてもらいにでも来たのか!? 誰かに見られたらどうすんだよ!」

焦りと苛立ちで詰め寄る俺にも更識家当主は涼しい顔で肩をすくめるだけだ。

「やれやれ、もうちよつと冗談が通じる余裕があると思ったんだけど。ところでわたし今こんな格好なんだけど、なんにも感じない？」

ほとんど白エプロン意外何も身につけていない姿の会長のプロポーションは、実際俺から見ても中々のものだった。全く女子に免疫のなかった以前の俺なら理性がかなりの危機だったに違いない。

そこへわざわざ胸を強調するようなポーズを取る会長。

「なんだ揉んで欲しいのか、どれ」

俺がいきなり手を伸ばして胸をわしづかみにしようとする、驚くほどの素早さで飛び退いた。

「ななななにするのよっ!? ほっ本当にさわる気!」

さっきまでの余裕は消し飛んでしっかき二つのたわわをガードしている。

「やつぱりそんな気無いんじゃないか。俺が本気で押し倒したらど

うするつもりだったんだよ？」

さつきと一夏が使っていたスペースを見回して、残っている荷物が無いのを確認して部屋を出ようとした。

「くっ……生意気だわ、情報では女性経験ないくせに」

くやしそうな会長が俺をにらんできた。

「あんたも男性経験無いでしようが？ 人の事言えんだらうに」

出ていこうとする俺を会長は慌てて通せんぼした。

「ちよ、ちよつと待ちなさい！ 大事な話があるの！ と、それよりな、何で分かったの？ 私が……その、」

「なんすか？ 最後の方聞き取れな——」

会長は顔を真っ赤にした。

「なんで！ 私が！ け、経験豊富じゃないって知ってるのかって聞いているのっ！！ はっ、まさか本音ちゃんが——」

「そんなんさつきの態度見りや誰でも想像つくでしようが？ 大事な話ってのは何です？」

完全に男に免疫ない反応だったよな。

「とりあえず座って！ まったく、年上の魅力アピールが台無しよ！」

しようもない事は置いといて、俺たちはテーブルに向かい合った。

会長は座るなりやれやれという態度を一変させ真面目な表情になった。

「例の転校生の件だけど、状況が変わったわ。唐突だけれど、フランスのシャルルに続いて数日遅れで1年1組にもう一人の転校生が来るのよ。今度は真正銘女の子の子なんだけれど……ちよつとこれもいわく付きでね」

「ただ俺のクラスは、いや1年は転校生が来るんだ、それもこんな中途半端な時期に。最初から入学しとけ！」

「またいわく付きの？ 一体どんな奴なんですか？」

「ドイツからの代表候補生で、名前はラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ連邦軍からの出向という形で、表向きは連邦軍幼年学校の生徒でIS操縦者を名乗っているけど……実際は出自が不明瞭で、秘密IS特殊部隊【シュヴァルツェ・ハーゼ】の隊長なの」

憂いの表情を見せる会長だが、神妙な顔しても裸エプロンじゃマヌケだな。

それで……なに？ 表向き軍学校出身のIS操縦者だけど、実体は正体不明で秘密IS部隊隊長？ 何それ？ そもそもISは軍事利用禁止で、少なくとも公式にはIS部隊なんてあつたらダメだろ。しかもそれでここに転校？ それに部隊長って、どんだけ年上の女が来るの？ IS学園の制服着て？ うちのクラスに通うの？

……なんで!?

「痛すぎるー！ いろいろ異常で正気を疑う上に、何がしたくて来るのか訳分からん!!」

会長も面倒くさそうな顔でうなずいた。

「本当に意図が分からないから不気味なの。隊長に任せられる割にはかなり若くて音羽君たちと同じ16才、少女IS操縦者ばかりの部隊らしいけど、IS学園との接点はないし、今回の転入もかなり強引なやり口で認めさせているわ。手がかりといえば、以前織斑先生がこの部隊の教官を勤めていた時期があることぐらいかしら」

「……えっ」

それって、まさか……。

「ほぼ織斑先生目当てなのでは？」

織斑先生は現役選手時代から世界中に信者クラスのファンが多数いたことでも有名だ。現にそれから何年も経った入学当初でさえうちのクラスはあの騒ぎだった。以前担当した訓練生か何か彼女に心酔し、必死で喰らい付いて来ようとしても不思議じゃないと思う。

それに俺らとタメだ。そんな年でISを志す少女が憧れのブリュンヒルデと間近に接し、じかに訓練を受けていたら、崇拜対象にしてしまってもおかしくは無い。

俺の言葉にしかし会長は難しい表情を変えなかった。

「そう単純に考えるには、彼女の出自の謎と軍機相当の立場が厄介すぎるわ。とにかく、シャルル・デュノアなんかよりこっちの方が要注

意って事」

今日わざわざ伝えたかったのはこれよ、そう言って会長はぐでくとテーブルにのびた。

「あー疲れた、音羽くんったら全然想像してたのと反応違うんだもの。予想外の展開にくたびれちゃったわ」

くるっと顔だけをこちらに向け、さっきの事本音ちゃんに言っちゃおうかなくと悪戯っぽく笑う。

「本音にもバカにされますね」

「されないわよっ！」

その後会長が着替えるまで待ち、ぜんぜん自分の魅力に参らない俺に対してぶつくさ言う青いのを連れて食堂へ向かった。先に待っていた本音と簪さんは、俺が会長と一緒になのが不思議そうだった。

一日に二度も引越しを手伝うのはきつい。へばった俺は自分のベッドに寝転んだ。

「はあく……だいぶ雰囲気変わったな」

昨日までの一夏のスペースには、可愛らしい小物や少女漫画や大量のお菓子が棚を占領し、その上にはぬいぐるみが所狭しと並んでいた。クローゼットにはバリエーション豊かな着ぐるみがいっぱいだ。

「おつかれさま〜おとーさんありがとうね〜」

袖まくりし机を片付けていた本音もようやく一息ついたようだ。おでこの汗をふく仕草が可愛い。

「おつかれ……ん？」

そのままとてと近づいてきたと思うと背後に回り、ころんと寝転がって背中にくっついた。

「つかれた〜おやすみ〜」

「え？ おい本音——」

問う暇もなく背中では寝息を立て始めた。今日は珍しく忙しく作業していたし、やはり相当疲れていたらしい。

「ま、いいか」

俺もくたびれた。このまましばらく昼寝してしまおう。

二人して引越し疲れでまどろんで、そのままうたた寝してしまっ
た。

気がつくともう窓から差し込む陽で部屋はオレンジ一色に染まっ
ていた。

俺が身を起こすと本音はネコのようにくるんと丸まって、つかんだ
布団を放さない。

「あと五分〜」

寝ぼけてるのか起きてるのか、間の抜けた声でむにやむにや言っ
ている。

小動物系女子を見ながらぼんやりしていると、ふと何か頭に引つか
かるものがあった。

……なんか忘れてるような……明日あたり何か……。

「なあ、明日ってさ。なにか——」

「ん〜？ ……あーっ！ 明日はいつしよにお出かけする日だ！ た
いへん、なに着て行こう!?!」

跳ねるように起きた本音は大慌てでベッドを飛び出すと、クロー
ゼットに飛びつき中を物色し始めた。さつき片付けたばっかなのに。
あれでもないこれでもないベッドに放り出すが、みんな着ぐるみ
ばっかりだ。

部屋の明かりをつけ、よく考えたら俺もさしてよそ行きの服持っ
てないなと思った時、廊下から慌しい足音が近づいてきて、激しくドア
をノックされた。

「二夏ーっ！ いるんでしょ?! 夕飯食べに行くわよ!」

「二夏、今日はまるで姿を見せないが、たまには私と模擬戦をだな」

「二夏さん！ ぜひ明日のデイナーはこの彩り鮮やかなチラシズシと
いうものを御一緒に作りませんか?」

例によってトリオのご登場だ。正直めんどくさいが放ってもおけ
ない。俺はドアを開けて3人娘に無感情な声で言った。

「二夏なら今日付けで別の部屋に変わったぞ。来週転校生が来るか
ら、そいつと同室になる」

3人の期待に満ちた笑顔が急にドス黒くなった。

「はあ!? 何なのよそれ!」

「そんな話は聞いていないぞ?!」

「それは一体どここの馬の骨ですの!?!」

つかみ掛からんばかりの彼女らを両手で制し、あまり騒ぐと織斑先生が怒鳴り込んでくるぞと釘をさしてから部屋を教えてやった。

すぐに方向転換して3人とも駆け出した——と、急に鈴だけが駆け戻ってきた。

「ちよつと三治! 箒とセシリアには一夏とデートのセッティングしたらしいけど、あたしには何も無いなんて事ないでしょうね? あたしに借りがあるの忘れた?」

「え? ……あつ」

「そーいやアリーナで訓練に付き合ってもらった時、空中衝突しちまったんだったなあ。それを言われると弱いな。」

「まいったな……。そーうだ、じゃあコレやるからさ、一夏と行って来いよ」

俺は会長にもらった花やしきフリーパスを鈴にくれてやった。まあ本音とはもうちよつとまったり出来る所に行きたいしな。

「ふーん、遊園地の一日フリーパスか。ま、有難くもらっておくわ!」
上機嫌でその場を離れようとして、またも鈴は戻ってきた。

「ところで、一夏が出たあと誰が入ったのよ?」

止める間もなく俺の脇をすり抜けて室内に入り、すつとんきような声を上げた。

「あーっ! あんたいつの間にな!? ずるいじゃないあたしは一夏と部屋になれなかったのに!!」

「あーりんりん! どうしたの? おりむーならお引越したよ?」

俺があわてて取って返すと、鈴はまた矛先をこっちに向けた。

「どういうことよ三治!?! あんた千冬さんにワイロでも渡したわけ!?!」

まさか、二人つきりなのをいいことに本音に変なことしてないでしょうね!!」

もうここまで来るといい加減おせっかいだぞ。

「あの織斑先生に賄賂なんざ渡せるか？ それに変なこと何も今しがた引越してきたばかりだつうの！ だいたい隣がその織斑先生なのに、変なこと何もできる訳ないだろがっ!!」

イラツとして言い返すと、若干疑わしげな目で俺を見返した。

「ふーん、まあいいけど……本音！ こいつが何かしようとしたら、すぐ誰かに言いなさいよ？ いいわね！」

まったく失礼な奴だ。俺がセクハラする前提かよ。一方で鈴のピリピリした態度にも本音はいつものほほんモードだ。

「おとーさんは無理やりそんな事しないもーん……そういう時はちゃんと……えへへ」

「え？ ちゃんとなにによっ？」

え……今すぐく気になることを言ったような……？

「なんでもないよ！ それよりおりむーのどこ行かなくていいの？」

「あ、あたしは慌てなくていいのよ！ それより答えなさいよ！ 今なんて言おうとしたの?!」

「おしえなくい」

一転してぐぬぬ顔の鈴は、とにかく本音にやらしい事するんじゃないわよと言い捨ててドアに駆け出したかと思うと、またハツとして本音の元に駆け戻り、何事か小声で本音に囁いてまた飛び出していた。

「何度も行ったり来たりして、本当に騒がしくて落ち着きのない奴だよ……あいつ最後に何て言ったんだ？」

本音は服を体に合わせては姿見を眺めつつ、何でもないように返事した。

「おとーさんと進展があつたら教えてくって」

「ふくん……えっ？」

おいおい、俺と本音の仲が進んだら報告すんのかよ?!

「ちよつ、そんなん律儀に答える必要ない——」

「えへへくだつておとーさんのこと自慢したいんだもくん」

楽しそうに笑う本音に俺の反論はかすれて消えてしまった。

だって、とびつきりの笑顔でそんなこと言われたら、文句も言えないじゃないか……。

「まあ……いいや……それよりせつかく片付けたのに、またこんなに広げて。後が大変だぞ？」

「うゆう〜あとで手伝つてよくあ、どうこれ似合うかな〜？ あーこれもいいな〜」

上機嫌で洋服を見せびらかす本音についつい頬がゆるんでしまう。

いろいろ悩む事はあるが、ここでこうしている時くらいは、今この時間だけを大事にしたい。

そう、本音と二人きりの時間だけは。

きゆるると誰かの腹が鳴った。

「お腹すいたなあ〜そろそろ晩ごはん行こうよ〜」

「やれやれ、簪さんたちも誘うか」

マイペースな小柄の着ぐるみを連れ、すっかり陽の傾いた部屋を後にした。

日曜は朝から学園島中に春の陽気が広がっていた。窓から広がる青空にはのんびりとした雲がたゆたっている。

「は〜い、もういいよ〜」

互いのスペースを隔てる間仕切りがスーツと消えると、初めて見る私服姿の本音が現れた。

本音はゆつたりとしたニットに短めのスカートを身に着けていた。体のラインが出にくい服装なのに豊かな胸は隠しきれず、普段の着ぐるみからは想像のつかない意外と長い素足がまぶしい。

「えへへ〜……ど、どうかなあ？」

「う、うん。すごく可愛い」

他に言うことなんてない。というか全然思い浮かばない。自分と出かけるために、わざわざ本音がおしゃれしてくれて、可愛いと言われて嬉しそうにはにかんでるのを見て他に何と言えるのか。たとえそれが出かけるまでに2時間近く待った後だとしてもだ。ほんとに

女の準備は時間がかかるんだなあ……。

くらべて俺はパツとしないパンツにジャケットを羽織っている。シャツがチエック柄でないだけマシな方だ。

本音は優しいのでそんなこと気にしないのだ……気にしないのだ。

本音はぐつと片腕を上げた

「それじゃ、しゅっぱあーっ！」

「しゅっぱーっ！」

俺もそれに合わせ、互いに笑いあつた。

引越し疲れかいつものことか、本音は8時前までくーくー寝て、急ぎ身支度整えてのお出かけだからもう10時半近い。今日は騒がしいメンツとすれ違わないように寮の裏口からそつと出て、学校とは反対方向へとテクテク歩いてゆく。

「いいお天気でよかったね〜」

「ほんとだな。見事に行楽日和で、寮にいたら損してたな」

会話は自然にしてるつもりでも、どうにも浮ついた足取りになってしまう。最近よく一緒に下校してはいるが、プライベートで気になる女子と二人で出かけた経験なんて今まで一度も無い。それが本音みたいな可愛い娘となんて、ドキドキしないほうが変わった。

何となく本音の方へ手を少しだけ伸ばすと、互いの手が触れ合った。

思わず顔を見合わせる。

「あ、えと、手……いいかな？」

「うん！」

自然に恋人つなぎになった。そのまま腕をからませる。まさか、悪夢のように感じたはずのIS学園入学で、こんな相手ができるなんて。人生分らないものだ。

それはそれとして、もう今なら俺死んでもいい。いやマジでそういうレベルですわ。一夏ならどうだろうか？ 知らん。

西のはずれにある小高い丘までには賑やかな通りがあり、どこかでお弁当を買おうと話している所へ俺が散髪した理髪店を通りかかった。今どき珍しい昔ながらの散髪屋だ。

「あゝここで散髪したんでしょ〜？」

「え、なんでわかんのか？」

「TVでやってたの見たことあるもん。大阪名物の店だったのに再開費で無くなるから、IS学園島の出店募集に応募したら当たったんだって〜。古今東西の有名人の髪形を再現してくれるんで人気なんだよ〜」

そ、それでか！ どうりで適当に短くしてくれと言ったら、〃よっしゃ任しとき！ おばちゃんが昭和の男前にしたるさかい！〃とか言ってこの頭になったのは!!

「あはは〜でも似合ってると思うよ〜」

「はあ〜まあいいか」

途中本音が見入って動かない焼き立てパン屋で菓子パンやサンドイッチを買い、ついでに飲み物も仕入れて、丘へと続くなだらかな坂をゆるゆると登っていく。

「あー！ 見て見て〜海が見えるー！」

標高が高くなるにつれて、遠方の景色に海が広がってきた。フリーや海自の護衛艦が行き交い、魚を求めて白い海鳥たちが数羽ずつ、きらめく海面近くをすべるように滑空している。

いつか本音と一緒に下校した時にもかいだ潮の香りが、かすかに漂ってくるようだった。

あの時本音が追いかけてきてくれて、初めて一緒に下校したんだよな……。

色々有り過ぎるもんだから、あれからずいぶん時が経ったように感じてしまう。

「気持ちいいね〜」

その声に振り向くと、涼しげな風が本音の髪をふわりとなびかせた。普段は見えないうなじがあらわになる。それだけのことでドキツとした。いつも意識している女子の、今まで目にした事のない何気ない様子や仕草が妙に気になって他のすべてを忘れてしまう……俺もやっぱ異性に免疫ねえな。

丘の頂上は芝生の広場がある公園だった。高台の開けた視界からは、どこその芸術家がデザインしたとか言う尖ったねじくれタワーを中心とする学園全体が一望できた。

人もまばらな芝生にレジャーシートを広げて腰を下ろすと、ちょうどお昼の時間になった。

「お腹すいたあくお昼ごはんにしよ〜」

「だいぶ歩いたしな、ちょうどいいか」

菓子パンをパクつく姿はいつもの本音だった。俺もサンドイッチを口にしつつ、ふと思った。

これってデートだよな……今さらだけど、デートだ、うん。

ニヤけそうになるのを必死でこらえる。何も言わずにいると考えることがバレルような気がして、俺は焦って適当な話題を振った。「えっと、今さらだけどさ……会長はよくあつさり本音を俺と同室にしたよな?」

紅茶のペットボトルを手にした本音は笑った。

「にひひー、お嬢様もわたしの後かんちゃん部屋の移ったしね〜ういんーういんなのだ〜!」

呆れた。今まで気付かなかった俺もマヌケだが、最初からそのつもりだったのか。

「なんだ、とつつあんの奴ちやつかりしてやがんなあ」

なあ〜にが報酬だか。むしろこつちが本命なんじゃないか? むしろ俺を喜ばせて目をくらませたのかな? まったく青いのはこういう時はほんとに策士だわ。

その後は雑談に花を咲かせたり、利用者センターで借りたfrisビーで遊んだりした。ホットケーキに似てるよね〜と言いつつ、口でパクツとキャッチした時はさすがに焦った。

「あ、大きい船が出港するよ〜。やつほ〜!」

遊び疲れた本音はシートに座って島の反対側にある港を眺めていた。

「そりや山の時だよ」

俺が苦笑すると、港を出て行くコンテナ船が本音に答えるかのよう

に去り際に汽笛を鳴らした。

「ばいばいー！」

海に向かって大きく手を振る本音を見ていると、疲れからか頭に眠気が強くのしかかった。

うつらうつらしている内に、俺はいつの間にか眠ってしまった。

夢を見ていた。

渡り鳥らしき鳥が、たった一羽で飛んでいる。

まっすぐに飛んでいるように見えて時々ふらつき、どうも方向を定めあぐねているようだ。

よく見ると翼はあちこち傷つき、ところどころ羽根を失って地肌が見えたり、わずかに血を流したりしている。

飛ぶのもつらくなったのか、速度を落とし始めた時、横合いからスズメくらいの小さな鳥が現れた。

渡り鳥の隣につくと、ゆっくり飛びながら渡り鳥の毛をつくろい、傷口をなめ始めた。

やがて元気を取り戻したのか、渡り鳥は小鳥と共に速度を上げ、並んで夕陽の彼方へ消えていった。

ふいに目が覚めた。陽もかげり、見回すとすっかり夕暮れ時だ。

それより、なんだか頭の下が柔らかく温かい。これは……。

膝枕されてる……本音に……なんかもう、幸せ過ぎて言葉が出ない。

本音がそつと顔をのぞき込んでくる。

「すごくぐっすり寝てたよ？ 疲れちゃった？ ごめんね私嬉しくてはしやぎすぎちゃった」

申し訳なさそうな本音に俺はあわててフォローを入れた。

「謝る事ないよ、俺も今日はすごく楽しかった……今日はありがとう」
「えへへ〜良かったあ〜」

その笑顔に胸が温かくなる。本音がそばに居てくれて本当に良かった。

「そろそろ帰ろうか」

「うん！」

シートを片付け、ふたり手を繋いで広場を後にした。

あちこち寄り道しながら帰る道中のこと。のんびり歩きながら、ひよつとしてきつきのはキスとかそういうチャンスだったのでは、など不毛なことを考え始めてしまった。

というか、どこかで聞いたセリフだが、やっぱり俺ってヘタレなんだろうか？ よくよく思い返してみれば、もつと本音と親密になる機会がたびたびあったのでは……。いや！ あまり強引なことをするべきじゃない。本音とはもつとじつくり、こう、あれだ、絆を深めていくとか、互いの気持ちを確認し合うとかだな!! そういう――

「あ、おっいおりむーりんりん！」

「ひゃ!？」

いきなりの本音の大声にギョツとなってしまうた。なんかこうなるの久しぶりかな。

「おーい三治！ あれ？ のほほんさんも一緒か」

横断歩道の向こうに私服姿の一夏と鈴がいた。昨日あげたフリーパスを使ったのか早速ふたりで出かけたらしい。一夏はともかく鈴はオシヤレな格好だが、よく見るとミニスカートなのは本音と同じでもずつと活動的に見える服装で、インヒール……じゃなくて厚底の靴をはいている。やっぱり背が低いのは気になるらしい。一夏と肩を並べて歩きたかったのかな？

「だから！ あたしと一夏で――あ！ あんたたち丁度いい所に来たわね！ ちょっとあたしたち撮ってくれない？」

「あゝ、りんりんはまだおりむーとここで写真撮ってなかったんだね」

気付かぬうちに、以前一夏たちと写真を撮った場所に来ていたらしい。いまや話題の撮影スポット『ISロード』だ。

「早くして！ 珍しく他に人がいないんだから！」

鈴にスマホを押し付けられ、二人を写そうとすると、

「待てよ、せっかくだし三治も一緒に写ろうぜ！ のほほんさん頼むよ、ほら！」

一夏に腕を引つ張られた。お前はまた連れの意向を無視しやがって。背後でセカンド幼馴染がどエライ顔になってるぞ。

「ア ン タ は ど う し て、そうなのよっ!?!」

「うわっ!?! り、鈴！ ISはまずいって!! うわあ!?!」

ムードをぶん投げブチ切れモードで甲龍を起動させた鈴が暴れだすのを3人で必死になだめ、偶然通りがかった谷本さんたちに頼んで俺たち4人で撮ってもらうことで、どうにかその場はおさまった。

「はあ、一夏と記念写真撮るだけで一苦労よ！ ま、取り敢えずはこれで箒たちとの差は無くなった訳だし……ところで何で三治と本音は一緒にいるの？ まさかデート!?! ちよつとマジで？ どこ行つて何してきたのよ?! 教えなさいよちよつと!!」

「えへへ〜♪ 知りたいい〜?」

鈴のやつ切り替えが早いと言うか現金と言うか、こういう時の女子の食いつきといたらダボハゼ顔負けだ。それが鈴ともなればうるさい所の騒ぎじゃないので本音に任せてほつときたいが、何を喋っているのか気になってついつい聞き耳を立ててしまう。

「あいつ自分も一夏とデートしてきたくせに、人の事のほうが気になるのかよ」

「でーとって何の話だ？ それより聞いてくれよ！ 今朝早くおれの部屋に鈴が来てさ、〃今日は一緒に出かけから早く支度しなさいよっ!〃てうるさいのなんの！ 普段なだめてくれる三治はいないしや——」

俺の意識は鈴の「えっ！ うそ!?!」だの「くう〜うらやましいー」だの「ぬぐぐ、それに比べて一夏は!」だのに引つ張られ、一夏の話も1/3くらいしか頭に入ってこない。

「——でき、フリーパスあっても混んでるのは変わらないだろ？ な

のに鈴ときたら……三治！ 聞いているのか?」

「ん？ ああ悪い、ちよつと考え事しててさ」

悪いけど今それ所じやないんだよなあ！　ちよつと静かにしてくんねえか本当に!!

「それでねく……の時、そーつと……ざまくらしてあげてねく」

「えーっ！　それで？　それからどうしたのよ!？」

「えへへく。全然目を……ないからく、こつそりちゆ……」

「しようがないなあ三治は……そうだ！　今度はおれたちで遊びに行こうぜ、男同士むだな気遣いなしでさ！　そうだ転校生も入れて3人で!!　今からすつごく楽しみだよ!!　あはははっ!!」

耳をすませる俺に、一夏が顔を近づけるようにして大声で話しかけた。

「えっ!!　それホント!?　ちよつと本当に!!?」

ん？　今なんて言ったんだ……鈴がえらく興奮してるぞ？　あくもう、一夏のせいで聞こえなかったじゃないか！

俺は思わずむつと顔をしかめた。

「そうそう、それからおれの地元も案内したいんだよなあ！　弾と数馬もはやく紹介したいし」

……なんだか一夏はずいぶん楽しそうだな。まあ……いいか。今日は俺も本音とのデートを満喫したし、いちいち小さな事で怒らなくてもいいや。

とりとめのない話をしながら夕陽に染まる並木道を一緒に歩く。そのうちに一夏の誘いにも付き合ってやって、その次は本音と水族館にでも行こうか。本音の喜びそうな所はどこかと考えつつ、そつと手を伸ばす……俺の手をつかんだのは一夏だった。

「なんだ手をつなぎたかったのか？　それくらい言ってくればいいのにさ」

違う……ちがうぞ！　ちがうんだよ!!

この上なくさわやかな笑顔で俺の腕をぶんぶん振る一夏の姿を、恋バナに夢中の二人に気づかれなかった事が、俺の本日最大の幸運だったのかもしれない。

ちなみに、鈴がISで一夏をぶん殴ろうとする所はキツチリ他の生徒に撮られており、後にSNSに流出して織斑先生に大目玉を喰らうことになるのだった。

……俺が一夏と手をつないでる所も撮られてた……ちくしょう。

なぞの転校生

腹にこもるドラムに神経質なトランペットの調べが重なって流れる。スマホにセットした朝のアラームだ。

起きて曲を止めようとするが、なんだか体が重い。寝返りを打とうとしても体が、というか腹が重くて動かない。

これって、いわゆる金縛りか？ まさか、目を開けたら幽霊が……しかし、歴史の浅いIS学園に幽霊？ ……て言うかも朝だぞ？俺はそうつとまぶたを開いた。

「……本音、どきなさい」

お前が乗ってたのか！ そりや重いよ!!

「うゆう〜あと少しだけ〜」

本音が俺の上から抱きつき、俺の胸のあたりに頭が乗っかっている。俺は抱き枕か？

「だあくもうー!」

腹上の本音を抱えてベッドに降ろすと、俺は机上のスマホ画面に指を滑らせ、フレンチ・コネクションのテーマ”を止めた。

まったく、昨夜は隣りのベッドで寝てたはずが、いつの間にやらのしかかられるとは。俺より本音のほうがよっぽど油断できんぞ。

……本音のやつ、俺が何かするとはまったく考えてないのかな。

「ほれ起きろ。もう朝だぞ」

本音の肩を揺らす。

「にゆうう〜」

ころころと器用にベッドを俺の方に転がると、ぎゅ〜と腰にくっついてまた寝息をたててしまう。

「しゃあないなあ。本音、食堂に行ったらデザート奢ってやるぞ」

「ほんとう!」

即座に起き上がった。現金だなあ。でも許してしまおう。

入学前にくらべると、俺もずいぶん甘くなった。

「はやく行こう! あ、着替えるからこっち見ちやダメだよ」

本音がタタツと自分のパーティションに駆け戻り間仕切りを引き

出すのを見届けると、俺もさっさと着替えと登校の準備を始めた。

さて今日は例のうさんくさい転校生その1、シャルル・デュノア君の初登校日だ。果たしてどんな野郎が来るのやら？

「ちよつと本音！ 昨日は空気読んで何も聞かずに退散したんだから、今日はデートで何があったか詳しく教えなさいよね！」

「そうよ！ あなたと音羽くんだけでしょ？ この学園でカップル成立させてるの！ 昨日の音羽くんとのデートを何もかも洗いざらい白状なさい!? さあさあ!!」

「彼氏作るのが絶望的といわれたIS学園で、一月足らずの内にラブカップルになるなんて！ 本音……恐ろしい子!!」

本音はさっきまでの眠気が嘘のようにデザートデザートと飛び跳ねるように歩いていたが、食堂へ着いた途端に谷本さん達に引つ張られて、クラスの女子一同が集まる人だかりのテーブルに引きずられていった。あくあ、一緒に朝飯食いたかったのになあ。

「よつ三治！ おはよう、となり良いか？」

食堂ど真ん中のテーブルで質問責めに遭っている本音を遠く眺めて手近な席につくと、朝から元気に爽やかイケメン君が現れた。

……が、一夏が近寄る前に俺の方も凄い勢いで駆け寄ってきた箒たち3人に囲まれてしまった。

「三治ーっ！ 昨日本音と、で、でーとしたというのは本当かつ!」

「本音にアンタから誘ったって聞いたけどマジ!? どんな風に誘ったのよっ!」

「ぜ、是非とも、後学のために詳しい話をお伺いしたいですわ！ それも早急に!!」

俺はこいつらかよ……本当に、もうちよつと本音とまったり過ぎたかかった。

「ほせ鈴トリオか……せめて朝食の後にしてくれ」

俺の茶化した返事にひとり一夏だけが笑った。

「あははは、箒とセシリアと鈴でほせ鈴か、相変わらず三治は面白いな！ よし、おれも負けてられないぞ。えーと……」

一夏がしようもない事で感心し、下らん事に頼りない頭脳をフル回転させ始めた。どうせ一夏のギャグはいつだって寒い。

「誰がほセ鈴トリオだ!？」

「勝手にひとまとめにしないでくれる!？」

「そんなもの結成した憶えは御座いませんわっ!」

即座に三人が俺にツツコミを入れた。

そのトリオの最重要目標はいいテンポだなあと呑気に感想を述べていた。一夏が当事者意識を持つのはいつの日か。

「ほセ鈴は嫌か……じゃあ、てんぷくトリオで」

姦^{かしま}しい三人には悪いが本音と引き離されて俺の機嫌も良くない。

そんな俺にまたも一夏のみ爆笑し、それが彼女らの怒りの矛先を変えさせた。

「一夏。私がそんなにおかしいか……?」

「あたしがこんなに必死なのに……」

「これほど乙女心に無頓着でいらっしやるとは、少々お仕置が必要ですね……」

揃いも揃って暗く沈んだ瞳で一夏を見つめ、三者三様の呪詛の言葉を吐く。漂う不穏な空気もまるで一緒だ。やっぱトリオじゃん。

「あはは……あ、悪い、ついおかしくてさ。悪気はなかつ——お、おい? まだ朝メシの途中——」

3人に引きずられ一夏も一緒に舞台を降りた。今日は一人で朝食だ。さびしいなあ。

あいつらも成長してるとは思うんだけどな、恋愛関係以外は。チラリと一夏をドナドナする3人の方を見やる。やはりいつも通りだった。

進歩がない。なさ過ぎる。下手するとあいつらは卒業まであの調子かもしれない。

日英中の美少女による怨嗟の声と本校唯一の美少年が上げる悲鳴を聞き流し、俺は焼き魚定食をおいしく完食した後、ようやく質問攻めから開放された本音と一緒にいつもの鉄拳制裁轟く食堂を後にした。

「なんで置いて行くんだよお！ あの後千冬姉まで来て大変だったんだぞ!? たまには助けてくれよ!!」

俺と本音がクラスメートらと談笑している所に一夏が現れたのは、もうSHRまで5分もない頃だった。

「そればかりはなあ。まあ一夏かあいつらが精神的に成長するまで我慢だな」

当分変わらんかもしれんがな、という最後の一言は声に出さない。

「いじわる言うなよ！ なんか三治は箒たちとの事だけおれに冷たいぞ!? おかしくないか？ もう少しヒントをくれよ！」

文句を垂れながらどすんと席に着く。またタンコブを頭につくったのだろう。後からてんぷくトリオも頭を押さえつつ教室に入ってきた。

「それじゃ、そろそろ席に戻るね〜」

俺の机に腰掛けていた本音がぴよんと飛び降り、それを切っ掛けに他の女子たちもそれぞれの席に散っていく。

と、皆がむこうを向いたスキに、一瞬で振り返った本音がぎゅっと抱きついた。俺が反応する暇もない。本音の髪から良い香りがし、一瞬首筋にかすかに柔らかく暖かい感触がする……。

「えへへ、あとでね〜」

すぐにすつと離れると余り袖をパタパタ振り、鼓動が早くなった俺と目が点の一夏を残して足早に離れていった……。

が、突然の早業を偶然目にしたのは一夏だけではなかった。誰かなんて言うまでもない。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよー！」

いまだに自分の教室に戻らない鈴がわめいた。

「そ、そもそも何であんたたちはそんなに自然にキ、えくと、は、ハグとかできるのよ!?!」

なにも大声で言わなくてもいいだろ!? せつかく本音が見つからないようその、こ、こつそりしたのに。

「ま、まあ今はいいだろそれは。それより今日は転校生が——」

「そんな事はどうでもいい！」

俺の声をさえぎって箒が怒鳴った。やたら鋭い表情に思わず引いてしまう。

「そうですわ！ 今は遥かに重要な議題が御座います!!」

ライバルの怒号に勢いを得たセシリアの強弁が重なる。こいつも顔が必死だ。

「こんな短期間にそんなに親密になるなんて、一体どんな秘密があるの!?! 隠しないで教えてくれてもいいでしょ！」

鈴はいい加減自分のクラスに帰れ。また織斑先生に怒られても知らんからな。

いつの間にかまた俺が箒たちに囲まれていた。普段に輪をかけた騒ぎっぷりに席に着いた皆の視線が集中する。

「なにとぞ、なにとぞその極意についてご教授くださいませ!!」

「どうすれば私と一夏も、三治と本音のようになれるのだ!?!」

「そうだぞ！ おれもちゃんと三治とハグしたいんだぞ!!」

「ま、まあ落ち着いて——え?」

今なんか混じらなかつた?

「なんでのほほんさんは良くておれはダメなんだよ？ おれたち親友だろ？ ハグくらいしていいよな!?!」

そらきたとばかりにクラス中の女子から黄色い歓声が巻き起こる。

金切り声に鼓膜が破れそうだ!

「……あのなあ。そんなに誰かを抱きしめたけりや、今ここに美人が3人もいるだろ?」

両手で耳を塞ぎ俺を囲んだトライアングルを身振りで示すと、てんぷくトリオも顔を真っ赤にしつつ大きくうなずいて口々に同意の言葉をお口にしました。

しかし彼女らの旗色が悪い。

「言ってる事がおかしいだろ三治！ だいたいおれが箒たちを抱くより、まず三治がおれを抱くべきじゃないか?! おれまだ一度も抱いてもらって無いんだぞ！ あっ、ちようどよかった千冬姉！ 何とか言ってやってくれよ!!」

「でえーっ!？」

思わず振り返ると、そこには居た。全身に矢を受けた武蔵棒弁慶のように立ち尽くす、顔面蒼白の織斑先生が。

とたんに鈴が一夏に声をかける間もなく教室を飛び出していった。「なあ千冬姉！ おれも三治を抱いていいよな？ 三治はのほほんさんとばかりでき、おれは一度も抱いてくれないんだぜ!？」 おれだつて抱いていいだろ?！」

担任は血の気の引いた顔で仁王立ちしたままだ……ん？ まさかこれって……

織斑先生、完全に一夏の言葉の意味取り違えてるだろ!？」 一夏の言う「抱く」がエロい意味に聞こえてるって!!

「あく分かった！ 一夏はハグしたいんだよな！ そうだな!？」 抱くってそういう意味だよな!？」 俺とハグしたいだけなんだよな!？」

慌てて大声で取り繕う。昔っから一夏はこんなだったのか？

そりゃ男子の友達できんわ!!

「そうだよ！ 他の意味なんてないだろ?！」

固唾を呑んで担任に向き直ると、少し間を置いて深い深いため息をつき、明らかに不機嫌な様子で教室に入ってきた。ほんと、一夏との会話は一歩間違えると誤解で社会的に死ぬ!

俺が荒い息を吐いて机にもたれかかると山田先生が入ってきた。さっきまでのやり取りが聞こえなかったのか、担任とは対照的にニコニコしながら教壇に立つ。

「え〜本日は転校生を紹介します！ どうぞ、入ってくださいね」

いよいよ例の転校生のご登場だ。もうそんなんでもいい気分だけだな。

工員としての危険性も気になるが、俺としては女子達がどんな反応をするかも興味があった。今は男子二人でイケメンは一夏ひとり、そこへおそらくは白人であろう男子の転校生がやってくる。まあたぶん俺よりは美形だ。現在一夏に夢中の3人を始め学園中の女性陣がどう出るか？

コレで他のイケメンになびくようなら、一夏への想いもその程度。

あいつも身軽になるってもんだ。まあ、あのトリオは変わらんと思っ
が。

はたして、俺たちの前に現れたのは――。

「シャルル・デュノアです。こちらにボクと同じ境遇の方が居ると聞
いて――」

まさに金髪碧眼の美少年、女子にとっての白馬の王子様願望を实体
化させたような奴だった。

「お、男！ 男子だわ!!」

「美少年！ しかも金髪！ 完璧だわ!!」

「BL！ リアルBLよ！ 織斑くんと白人美少年の夢のリアル薄い
本!!」

「急いでネームを描かなくちゃ！ 今年のビッグサイトは熱くなるわ
よ!!」

またもや凄まじい女子の歓声に耳を塞ぎ顔をしかめた。一部ヤバ
い内容も混じってるし。

しかし、みんな見て分からんのか？

こいつどう見ても女子じゃねえか！

それともアレか？ こいつは性同一性障害で、体は女だけど心は男
だから、男子としての転入なのか？ そんなら最初に俺ら男子だけに
でも言っとくべきだよな？

いずれにせよ、優しげな顔つき、線の細い丸みを帯びた体形、声の
キーが高い、のど仏を隠すようなハイネックの制服……最前席の俺の
目と鼻の先で自己紹介をしたブロンドの貴公子は、どっからどう見
たって胸を平らにした美少女だった。貧乳なだけかもしれないが。

ようやく落ち着いたらしい織斑先生を見ると、若干疲れた顔で「何
も言うな」と小声で呟いた。何も言うなって、どうすんのこいつ？

……マジでどうしたもんかな。

「やったな三治、これで男子も3人だぜ！ 楽しくなるなあ！」

後ろの一夏もご満悦だ。ほんとにあいつが男なら良かったのにな

……てかお前の目も節穴かよ。

「静かに！ 本日はこれよりIS実習となる。全員ISスーツで第2アリーナに移動しろ！」

ようやくメンタルが回復したのか度を越す喧騒にキレたのか、担任の怒号……じゃなくて一喝が教室を静めた。

「みなさんすぐにアリーナに移動を開始して下さい！ あ、デユノアくんは男子ですので、音羽くんと織斑くんが更衣室まで案内してあげてくださいね」

ブリュンヒルデの大声にひるみつつ生徒に指示を与える山田先生も、だんだんこのクラスのありように慣れてきたらしい。以前だったらあたふたしてたと思うし。

「シャルル、三治、早く行こうぜ！」

転校生の挨拶を聞き流しその手を取ると、一夏は俺に一声かけて走り出した。いきなり手を握られ慌てるシャルルにもお構いなしなのがこいつらしい。

「遅れるとブリュンヒルデが激怒するからな、男子はアリーナの更衣室で着替えなきゃいかんから急ぐんだ」

急ぎ説明しながら目的地へ向かう。あちこちのクラスから熱っぽい視線があふれるが、授業中なので流石に追っては来られなかった。

「あれ？ シャルルは着替えないのか？ 急がないとヤバいぞ」

俺が力任せに上半身のISスーツを引きずり込んでいると、素っ裸で着替えようとしている一夏が声を上げた。ちよつとは隠せ。

「うっ、うん！ 着替えるよ！ 着替えるからその……あっち向いて」

案の定だ。シャルルは不自然に顔を赤くして目をそらしがちに所在無げにしている。

「なんでだよ？ 三治はいつも俺の前で着替えるぞ？」

「そりゃ一夏が目の前で着替えろってうるさいからだろ。俺は別に男の裸見ても見られても嬉しくないつつうの」

俺は自称男子から見えないようにロッカーの戸の陰で下を着替え

……あーくそきつい！　こんなん毎度履いてられつかよ！　エガちゃんごつこでもしろつてののか!?

「あはは。つらそうだな三治！　手伝おうか?」

今それ所じやねえつつうか手伝ってほしくねえ。

「俺はいいよ！　それよりシャルルを手伝ってやれ。時間なくなるぞ」

必死でずりあげる俺の死角から息を飲む気配が伝わった。

「ボ、ボクはいいよ！　自分でやるから！　向こう向いてよ!?　お願い!!」

「遠慮するなよ！　数少ない男子同士協力し合わないとな!」

まだ下を履いてない一夏に後ずさるシャルル！　息詰まる攻防!!
俺は着替え終わった。

「キヤツ！　いいってば！　あっち行ってよ!!」

そりやシャルルも引くだろ。今の一夏はエガちゃん越えてイチカ100%だ。

「そんな邪険にしなくてもいいだろ?　同じ男同士じゃないか」

「ううっ……」

転校早々に半泣きだ。すぐばれる嘘をつくからこうなる。まあちよつと意地悪が過ぎたし、二人が遅れて連帯責任だとか担任が言い出しても嫌なので助け舟を出した。

「一夏、今日は転校初日なんだしシャルルも緊張してるんだろ。好きに着替えさせて、一夏も自分が急いだほうがいいぞ。いつも下は引かかるとか言って時間かかるだろ?」

「えっ、下がひつかかる!?!」

「分かったよ、千冬姉に怒られるとマズいしなあ。シャルルに初日からカッコ悪いとこ見せたくねーしな!」

今十分カッコ悪いわ!

俺たちの視線がそれるとようやく金髪美少年(笑)も着替えを始めた様子だった。どうやら遅れずにすみそう——

「今度からはちゃんと裸で3人で着替えようぜ!　約束だぞ?」

「そういうのもういいから早くしろ」

男子100%やるぐらいなら男子2:50のがまだマシだわ。ドーン!!

授業のしよっぱな山田先生は初めて専用機を披露したものの、現れた途端一夏にぶつかるギリギリで緊急停止してヒヤリとさせられた。本当に元代表候補かよと眉をしかめたものの、その後シャルルの解説で始まった模擬戦でセシリアと鈴を同時に相手取る腕前は大したものだった。さすがに織斑先生のクラスで副担任を務めるだけの事はある。

10分足らずで専用機持ち二人がリタイアさせられるまでを観戦した後、専用機持ちが指導役になって1、2組の生徒を訓練機で指導することになった。織斑先生は全体の指揮だが、手が足りないので山田先生も専用機持ちの側に回った。

「一夏とシャルルは希望者が多すぎるし、セシリアと鈴は機嫌悪いから山田先生にお願いするか」

「ん、そうだねくさつきも二人相手に凄かったし」

同意する前に、本音はなぜかチラツと俺の顔をうかがったように見えた。

「当たり前だけど、山田先生結構強いんだなあ」

声が聞こえたのか、ちよつと胸を張って誇らしげな山田先生。たわわが揺れる。股間のラインがモロに出るISスーツ姿の俺には危険である。

俺と本音が列の最後尾に並ぶと、2組の女子達が食いついてきた。

「ねえねえ、二人つて付き合ってるんでしょ!？」

「どうなの!?! どこまで進んだの?！」

キツチリ他のクラスまで伝わってるのか……女子だらけだもんなあ。

質問攻めは俺が訓練機で歩行し始めるまで続いた。

「おつかれさま〜どう? もう単純動作は慣れた〜?！」

本音の声に振り返ると、その頭越しに箒が一夏の白式にお姫様抱っこされて訓練機に乗せられるのが見えた。さらに歯ぎしりするセシ

リアと鈴も。

模擬戦で山田先生に負けた上にこんな見せ付けられちゃあ、あの二人は荒れるなあ。

「あ〜！もしかしておとーさんもお姫様抱っこして欲しいの〜？」
「え！音羽くんもして欲しいんですか!? だ、ダメですよ！そんな不必要に……でっでもどうしてもって言われたら、私ええとその――」

「いりませんって！そんなつもりは無いです！」

俺がピシヤリと言い切ると、本音と山田先生はホツとしたようなガツカリしたような妙な表情をした。

「……どうしてこいつらまで居るのだ？」

陽光が照らすうらかな昼休みの屋上。おかんむりの箒は車座で弁当を囲む俺たちに不満を隠さず訴えた。

「だって、大勢で食べた方がうまいだろ？それにシャルルは転校初日なんだし、仲良くしてやろうぜ！」

「うぬう、それはそうだが……くっ」

歯ぎしりしそうな顔の箒に対し、鈴とセシリアはIS訓練の時とうって変わって余裕の笑顔だ。二人とも手元にはそれぞれ大きな包みとバスケット。どうやら二人してタイミング良く弁当を作ってきたらしい。

一夏に屋上で一緒に飯食おうぜと言われて購買のパン片手に来てみれば、いつものメンバーが揃い踏み。実際は箒が一夏だけ呼んだつもりが、一夏が他を呼び寄せたという所か。女子が一夏と二人きりになるのは、いまだ至難の業だ。

無理もないが、一夏の隣に座るシャルルは居心地悪そうだ。そのさらに隣りにいる俺に囁きかけてきた。

「ねえ、ボクたち来て良かったのかな？」

「いつものことだ。気にし過ぎると男装がばれるぞ」

「そうなんだ、気をつけ……えっ!? 今なんて言ったの？」

俺は知らん顔して焼きそばパンをパクついた。

「このパンおいしいよ！　また買おう」

本音はスライスしたフルーツと生クリームたっぷりの菓子パンを食べてご満悦だ。一夏は筥の弁当と鈴の酢豚をもらうまでは機嫌が良かったが、セシリアのサンドイッチをかじった途端顔色が悪くなった。いつの間にか俺と本音に配られた分は目の前から消え、本音の小さな手が一夏の紙皿に二つのおかわりを重ねている。助かった、要領いいな本音は。

「あ、あはは……どうしようコレ」

一夏が辛い表情を噛み殺して無理やり『セシリアの作った何か』を飲み下すのをチラチラ見ながら、同じものを手にしたシャルルくんは困り果てた顔で俺を見た……。

「三治！　今日は三人で帰ろうぜ」

一夏のターンは放課後も続いた。男子が増えたと喜ぶこやつは、今日こそは女抜きで過ごしたくて俺を入れた3人で行動したがった。残念ながら本音との時間はおあずけである。残念ながら。

「またねくあとでお菓子買ってくから」

「また買いきるなよ」

「お菓子くらいあたしたちが買ってあげるわよ、さあ、キリキリ喋りなさいよ本音！　今日は根掘り葉掘り聞き出すんだから」

俺が離れたとたん、本音の姿がまた女子達に囲まれて見えなくなつた。どんだけ恋バナ聞きたいの君ら？

本音のことだから俺と相部屋の事までは言わないと思うが、何を話しているのかだんだん気になってきた。また変な噂が立たないだろうな？

一夏だけやたら元気な寮への帰り道。今日は色々あったものの、シャルルの奴も大分リラックスしたらしい。俺にはちよつと警戒しているようだが。まあ弱みに突っ込んだし当然か。

「どうだシャルル、学校には慣れてきたか？　分からない事があつたら何でも聞いてくれよな！　あ、でも勉強の事はおれじゃなく三治に

頼むぜ?」

「俺だつてそんなにわかんねえよ」

「あははは。やっぱり二人は仲が良いんだね」

ようやくシャルルが屈託のない笑顔を見せた。まあ俺のせいで疑心暗鬼になりかけたのもあるけど、一夏の周りはアクの強いキャラが集まっている事を理解してくれただろう。

「そりやそうさ、親友だもんな。な、三治!」

「お、そうだな」

「そう言えばずつと気になってたんだけど、なんで三治だけ黒い制服なの? 何か事情があるのかな? なんだか、どこかで見たような気がするんだけど……なんだったつけ」

シャルルの当たり前な疑問に一夏がクツクツと笑い声をこらえる。ひよつとしてシャルルもエヴァ見たとか?……それはないか。

「それは一夏にでも聞いてくれ……」

しかし軽いジャブの直後にシャルルは強烈な右ストレートを俺にブツ込んで来た。

「それよりさ、三治は本音と付き合ってるんだよね?」

急にいい笑顔になったシャルル。

「でえつ!? 今それ聞くか!」

忘れてた! こいつも女子だよ!!

「それに本音はなんで三治のこと『おとくさん』って呼ぶの? 本音のお父さんって訳じゃないよね? ねえねえ?」

「……本音はあだ名を付けるのが好きなんだよ」

ちくしようニコニコしやがって。コイツめ俺をイジれるネタを持ってきた途端に生き生きしてるぞ。

「でも気になるじゃない? ねっ一夏?」

だが話を振った相手がまずかった。このシスコンは俺を姉とくっ付けたがっていたのだ。

「そうなのか!? だから千冬姉とは一緒になれないって言ってたんだな! くそっ! のほほんさんが千冬姉のライバルだったのかよ!!」

一夏の収まっていた発作がぶり返してしまった。

「え？ ど、どういうコト!？」

予想だにしない反応に事情を知らぬデュノアくんは焦った。

「聞いてくれよシャルル! 三治と千冬姉さあ、ぜったいお似合いだ
と思うんだよな! お前もそう思うだろ?」

「ええっ!? そっそうなの?」

訳が分からない様子で俺と一夏をキョロキョロ見る。そもそも一夏は俺と姉のどのへんを見て似合いと思うのか?

「千冬姉って昔っから男っ気なくてさ、このままだと行かず後家になつちやうんじゃないかって、ずっと心配だったんだよ。そこへ三治が現れてさ、千冬姉と正面から渡り合える男なんてこの先ほかに出て来ないだろうって」

「三治はブリュンヒルデ……織斑先生と互角の腕前なの!？」

さらに驚くシャルルに今度は俺があわてた。

「いや違う! 何度か口論になっただけだ! ISはてんでかなわねえって!」

「そ、そうなんだ……でも、あの織斑先生と言い争うなんて、三治も結構気が強いんだね」

もうこの話題終わらないかな。一夏の横顔を見ると、心底がっかりした様子で天を仰いでいた。

「なのに三治はのほほんさんと……あゝあ、三治がもう一人いたらな。なあ、兄とか年上の従兄弟とかいないか?」

「いねーよ、そろそろ諦めろ」

「あははは、一夏は姉想いなんだね。でも、そんなに織斑先生は男の人に縁がないの?」

シャルルの疑問に愚弟はオーバーにため息をついた。

「縁がないなんてもんじゃないぜ? おれが物心ついてから今日まで、男と二人でいる所なんか見たことないんだからな。だいたい学生の頃から彼氏どころか男子の友達全然いないし、男と一緒に居たこと自体いっぺんもないんだぞ! 千冬姉がISに乗るまでは貧乏でバイト掛け持ちしててそれ所じゃなかったのもあるけど、モンド・グロツソで優勝して世界的に人気が出たはずなのに、ファンは女性ばかり

りで男性からファンレターもらったことなんか一回もないし、そもそも男のファンなんていた試しがないな！」

「そうなんだ……」

ポロリと出たブリュンヒルデの実像の一端に若干残念そうな顔のシャルル。女のシャルルにや分からも知れんが、普通に考えて大概の男は世界最強の女なんて嫁にするのは真っ平だろう。夫婦喧嘩で殺されかねない。その世界最強に日々殴られて育った一夏は何とも思わないだろうが。

「まあ、最悪シャルルに頼めばいいさ。同じ男性IS操縦者だし、その上俺と違って専用機持ちだ。条件ピッタリだろ？」

もう面倒くさいからこいつに投げよう。俺と本音の事を言う余裕なくなるだろうし。

「えええーっ!!? ぼっボクが織斑先生と!？」

直後にシャルルが目をむいてマスオさんなセリフを叫んだ。今日は色々シャルルにとって受難の日だ。ほとんど一夏と俺のせいだが。

「シャルルかあ……いまいちピンとこないんだよなあ。こう、千冬姉と向かい合っても気合負けしない感じの男がいんだけどさ」

まったく贅沢を言う奴だよ。まあシャルルは女子だけだな！

「じゃあシャルルが一夏を織斑先生と思って向かい合ってみたら？」

一夏は織斑先生になったつもりでさ」

「ボ、ボクが一夏と!？」

シャルルは今日一日驚き戸惑いっぱなしだな。まあどうせスパイだろうしいいか。このクラスに転入した洗礼みたいなもんだ。

「うくん、じゃちよつとやってみるか。シャルル、ちよつとこつち向いてくれ」

「ほんとにやるの!?! ちよ、ちよつと待って」

本当にやるんだ？ 適当に言っただけなのに。

道端で立ち止まって、一夏とシャルルは向かい合った。

「ほら、いくぞ」

「ううっ、うん……」

一夏はやたら神妙な顔をして見せ、それを見るシャルルは何とか頑

張ってにらみ合おうとする……のだが、横から見てることっちは噴き出しそうだ。なんせ男の一夏が女である姉の真似を、女のシャルルが男子の振りをして必死で向かい合ってるんだからな。

結局1分もしない内にシャルルが顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。

「や、やっぱりもう無理!」

流石に一夏と向かい合うと照れ臭いか。むしろもう一夏に惚れる? だとしたらえらく早いな、一夏の恋愛フェロモン恐るべし。

「うくん、やっぱりダメだな。三治の他に誰かいないもんかなあ」

腕組みして考え込む一夏にいきなりシャルルが食ってかかった。

「ちよつと! ボク、ボクにいきなりこんな事させて駄目だとか、か、勝手すぎるし失礼じゃないか!!」

夕陽に染まっけていても分かるぐらい顔が火照っている。一夏と見つめ合ってすっかりのぼせてしまったか。

「わっ悪かったシャルル! 三治が言うもんだからつい本気になってさ」

「三治も三治だよ! ボクはお、男なんだからね! 男の一夏と向かい合ってもしょ、しょうがないじゃないか!」

赤い顔で言っても説得力ないし。だいぶ一夏を男子として意識してるんじゃないか?

「分かったからもう落ち着け。一夏、本人の問題なんだし織斑先生の好きにさせろよ。だいたい結婚だけが人生じゃなし」

「そんな殺生な!?! 千冬姉に一生独身でいろつて言うのかよ?」

確かにほつときや行かず後家まっしぐらだが、いい加減外野が言ってもしょうがないだろ。

「いいからそういうのはまず本人に聞け。織斑先生がどうしたいかだろ? 一夏が心配すんのはそれからで充分だよ。なあシャルル?」

一夏はまたも顎に手を当ててうーむと唸っている。お前はとうせ悩むなら自分の異性関係で悩め。

「そ、そうだよ。結婚とか、そんなの本人が決める事で、一夏が勝手に決めることじゃないよ……」

一夏の顔をチラチラ見ながら、まだ顔の赤いシャルルはうつむきがちに答えた。

寮の入口で別れ際に、一夏が思い出したように言った。

「そうだ！ まだ少し先だけど、今度大浴場が男子も使えるようになるらしいんだ。3人で一緒に入ろうぜ！ 今から楽しみだな!!」

「そうか、久しぶりにゆつくり湯船につかれるな」

「あ、あはは、よかったねー」

シャルルの言葉に一夏はきよんとした。

「なに言ってるんだシャルル？ お前も一緒に入るだろ？」

「そう、そうだねあははは……はあ」

苦笑から困り顔になったシャルルと、それに気付かぬ一夏に別れを告げ、俺は一人自室へ向かった。

自室に戻って半時間ほど過ぎた頃。俺は今まさに未体験のゾーンに突入していた。

「は〜いおとーさん、あ〜ん」

「あ、あ〜ん」

こっ、これが陰キヤにとつて都市伝説の、あーん!!
直後に口の中に優しい甘さが広がった。

本音の伸ばした手からチョコを口に入れてもらっただけで、こんなに幸せな気分になれるなんて。実に素晴らしいな！ うん!!

俺と本音は捌ききれないお菓子の山を挟んで向かい合っていた。

「ゆっこ達がね〜い〜っぱい買ってくれたから、まだ沢山あるよ〜」

また遠慮なくねだったものだ。ベッド脇に置いてある大きな袋の分も含めると、購買のお菓子スペースが半分なくなりそうな量がある。

「交換条件になに話したんだ？」

チョコクッキーの包みを開けながら水を向けると、本音はえへへ〜と笑った。

「昨日のお出かけのこと〜一緒に遊んだりお昼食べたりのいろいろなのだ〜!」

喋りながらもどんどんチョコの袋から中身が消えてゆく。俺の3倍くらいのスピードだ。太るぞ?」

「それとね〜デュツチーの事も話題になってたよ〜おりむ〜とベストカップルだつて〜!」

もう本音はシャルルにあだ名を付けていた。ネーミングセンスは相変わらずだが。

「そりやまた。どうやってもBLにしたいらしいな」

おとーさんじゃなくてよかつた〜と言いつつ本音はもう新しい包みを開け始める。じきに夕飯だというのに、女子の別腹とはいったい……。

ふと、本音がその手を止めた。

「おとーさん、デュツチーの事なんだけどね〜」

「……本当は女子つて事か?」

俺の静かな答えにも本音は軽くなずいただけだった。

「気付いてた〜? 皆はほとんど分からないみたいだけどね〜」

もしかして、それを調べるためにもクラスの女子達と何度もしゃべってたのか?

本音は「それもあるけどね〜」と軽く流した。わりと抜け目ないな。やはり暗部をサポートする家系だからか。

「みんなシャルルのどこ見てんのかね、今まで男子に会った事ないのかよ?」

「そこはしょうがないんじゃないかな〜。みんな小学生の頃からIS学習とここに入学するための受験勉強で大変だっただろうし、異性と遊ぶひまなんてあんまり無かったと思うよ〜?」

みんなやつぱり苦労してIS学園に入ったんだな、男日照りも覚悟の上で。そんな中で一夏みたいなイケメンが同級生にいれば、そりやあ色めき立つのも無理はないが、シャルルを見ても女子と気付かんのはなあ。宝塚見たらどうなるんだ? それにBLに毒され過ぎだろ。俺も以前は多少なりとも二次元逃避はしまくってたが、ここに入学す

るまでの話だし……今は本音がいるけれど。

「おとーさんはどうするつもり〜?」

上目遣いに見つめられてちよつとドギマギする。

「俺か? う〜ん……どうすると言つてもな。あいつ明らかに潜入工
作員のたぐいだろうし……」

それが分かっていたから会長もあんな思わせぶりな言い方したん
だろう。まあ本当に厄介なのはこの後入ってくるドイツ軍人の方ら
しいし、会長の言い草といい本音の態度といい、シャルルはそこまで
警戒する必要もないのかな?

「本当にどうするべきやら……ま、バレバレの男装にあの調子じゃあ、
まともにスパイ活動出来るかも怪しいけどな。おまけに織斑先生に
も男装バレてるし……」

聞きながら本音はチョコクツキーを口に放り込んだ。もう晩御飯
なんだからやめなさい。

「もう何かやってしまったのなら仕方がないけど、そうでないなら、
できれば仲良くしたいよね〜」

「……まあ、そうだな」

「デュツチーは男子のフリして転入したけど、デュツチー自身は悪
い子じゃないと思うんだよね〜」

「なぜ、そう思うんだ?」

俺の怪訝な声に本音は両手を腰に当て胸を張った。

「えっへん! 暗部の勘なのだ〜!!」

「はいはい。お菓子はその辺にしとけよ、もうじき食堂行くからな」

「え〜? もうちよつとだけいいでしょ〜?」

「いい加減にきなさい!」

「うう〜かんちゃんより厳しいよ〜」

渋る本音を引つ張つて食堂に向かったのはそれから2〜30分し
てからだつた。

しかし、夕食後もてんぷくトリオや更識姉妹らとカフェでわちゃわ
ちや長居したにも関わらず、一夏とシャルルは一向に食堂へ姿を現さ

なかった。

予復習なんぞ忘れて、夕食後も俺と本音はベッドの上でだらだらした時間を続けていた。

「結局おりむーもデュツチーも来なかったね〜」

本音が寝転んだままう〜んと伸びをした。

「何かのトラブルでなければ、いよいよ男装がバレたかな？」

横で俺も本音の髪をもてあそんだ。

「どうだろうね〜」

なんとなく、待つていればなにかが起こるような気がしていた。根拠はない。ただ、いま何をしてても時間の無駄になると思えて仕方なかった。

——それに、こんな二人きりの時間が後どれくらい過ごせるだろう？

「わ〜おめめがぐるぐる〜」

ひよいと俺のメガネを取り上げた本音がかけて見せた。まるで似合わないな。

「どう？ 賢そうに見える〜？」

「いや〜、さっぱりだな」

「ふにい〜お姉ちゃんみたいにならないのか〜」

10分程もそうしていただろうか。ドアに誰かが忍び寄る気配を感じ、そのすぐ後に小さくせわしないノックがなされた。

「三治！ いるか？」

ささやくように言うが早いドアが開けられ、しかし現れた一夏は裸眼の俺から見ても、どこか所在無げな様子だった。こいつがこんな調子なのは見たことが無い。

「急用なんだけどさ……ちよつと来てくれるか？」

ピンと来るものがあつた。やはり……。

「ああ。一夏の部屋だよな？」

「おっ、おう。あ、のほほんさんはいいよ！ 三治だけでいいからさ」「ん〜わかつた〜」

本音のゆるい返事に少しホツとした態度の一夏。その姿が少しぼやけているのを思い出す。

「本音、メガネ」

「ほくいおとくさん」

渡されたメガネを片手に一夏と廊下に出た。

「なんかメガネ無しの三治ってちよつと新鮮だな！ あはは……」

どうにも落ち着きのない不自然な態度。まったく分かりやすい奴だ。

「それで、どうしたんだ？」

「それがさ、えつと……まあ、見てもらったほうが早いと言うか——」

こいつの足取りが重いのは、つまりそういうことなんだろう。

「シャルルが女だったとか？」

一夏が息を呑んだ。

「な、なんで知ってるんだ!？」

「んなもん見たら分かるだろ。最初で気付かんお前がおかしいんだよ」

「マジかよ……」

俺は畳まれたフレームを開いて顔に——あれ？

こつちを見た一夏がギョツとして立ち止まった。

「さ、三治！ まさかシャルルを逮捕するのか!？」

これサングラスじゃねえか！ 本音のやつめ……まったく。

「そういうのじゃねえよ！ ったく、もう面倒くせえしこのまま行くぞ」

俺はオロオロする一夏を従えるようにして一夏たちの部屋へ急いだ。

「あ、団長だ!」

「ホントだ！ ねえねえ誰か逮捕するの？ それとも射殺?」

なんでこんな時に限って他の女子に見つかるのか。

「外交問題に抵触するから言えんな」

ひよつとすると冗談ではすまないかもな。本当にそうだったら……会長と担任に丸投げだ。そもそもが俺の責任範囲外だぜ。

「三治だ、一夏も一緒にいる。入るぞ」

ノックしてドアを開けるなり、夕陽に染まる部屋でたそがれていたシャルルはのけぞった。

「ぎ、三治なの!?! どうしてサングラス!?!」

無駄にインパクトがやばかったらしい。顔を引きつらせたシャルルは一挙に氣勢を削がれた感じだ。もつとも最初から精神的に弱っていただろうが。

「こ、恐いな……あつ!」

予想通り、シャルルの着ているジャージの胸が盛り上がっている。見られたことに気付いたシャルルは慌てて隠そうとして、やめた。もう隠しても無駄なことは自覚しているらしい。

「シャルル、三治ならきつと何とかしてくれるからさ、話してみようぜ!」

後から入ってきた一夏がドアを閉めるなり言った。まだ事情も聞いてないのに、期待しすぎだろ。

「で、でも……」

面倒な前置きはごめんだった。俺はさっさとシャルルと向かい合わせのイスに腰を下ろした。

「まあ、一夏に呼ばれてここまで来たんだ。無理にとは言わんが、取り敢えずどういう事なのか話してもらえないか?」

「う……」

渋るシャルルに一夏が隣に座り、その肩にぼんと手を置いた。イケメンだけだよな、こういうのが許されるの……思わず無駄な嫉妬をしてしまう。

「三治なら大丈夫さ、おれもずいぶん助けられたんだ。きつと力になつてくれるぜ?」

そうしてやっと当人がうなずいた。

「わかった。一夏が言うなら……」

どうやら、知らない内にシャルルと一夏の間にはずいぶん信頼関係が出来ているようだ。やっぱりもうシャルルも落ちたか。撃墜王一夏

め。

「と、とりあえず三治。その、サングラスはやめてくれないか？　なんか威圧感というかプレッシャーが凄いなんだよ！」

「あ……悪い」

メガネがなくても室内での話に支障は無い。とりあえず落ち着くのと、一夏が3人分の緑茶を入れてくれた。

「ボクの本当の本当の名前はね、シャルロット・デュノア。ボク……父の本妻の娘じゃなくて、愛人の娘なんだ」

お茶をすすり少し冷静になったシャルル改めシャルロットは、ぼつぼつと自分の境遇と事情を語りだした。元々母子家庭だったのが、母の死からフランス最大のIS企業社長である父に引き取られたこと。IS適正が高いため専門訓練と教育を受け代表候補生となった事。そして、第三世代機開発の遅れからデュノア社が危機的であり、無謀にも男と偽ってのIS学園編入で一夏ら男性操縦者や白式のデータを奪取するよう命じられたこと……。

「本妻、つまり今ボクの義母にあたる人が厳しくてね。政府にも顔が効くし、父もボクをかばいきれなくなったんだ。ほんとはボクは最悪切り捨ててもいい駒だったのかも知れないけれど……」

「何度聞いてもひでえよ！　酷すぎる！　なあ三治、何とかならないか!？」

気の毒ではある。が、それだけではどうしようもないし、シャルロットはどうするつもりなのか？

それに、ここまでの話だと官民共同で危ない橋を渡ったことになる。これは想像以上に大事だぞ……。

「……シャルロット、それじゃ今度の事は、デュノア社とフランス政府の共謀ってことか？」

「そうなるかな。ボクの転校や来日についての手続きは政府とデュノア社で進めたから」

シャルロットは力なくうなずいた。

「知ってるかもしれないけど、フランスってヨーロッパでも有数の兵

器輸出大国なんだ。それがISの台頭で戦闘機や戦車なんかの高額兵器が軒並み伸び悩んで、兵器産業が行き詰まっちゃってね。失業率も上がって……必要に迫られてEU諸国と競って必死でIS開発生産に血道を上げてきたんだよ。それなのに、ここにきて第三世代機関が暗礁に乗り上げて、とうとうこんな無茶なスパイ工作まで……どうしようもないよね、ボクも父の会社も」

歯ぎしりする一夏と寂しげに笑うシャルロット。感情論でなら当然シャルロットは可哀想だし、一夏の怒りももつともだ。しかし、しでかした事が事だ。よりにもよってブリュンヒルデの弟にして日本にとつて虎の子である一夏の白式に対するスパイ行為。それも性別をごまかしての入学。織斑先生や会長がブチ切れて殴り込まないのが不思議なレベルだ。

そのうえこの問題を追及すればフランス最大のIS企業とフランス政府そのものを敵に回す。表沙汰にして騒ごうものなら最悪シャルロットは切り捨てられ、全て彼女が独断でやった事にされるだろう。日和見な日本政府も内輪もめが普通なIS学園教員も頼りにはならず、シャルロットは一人で罪を背負うことになりかねない。……あ、だから皆あえて何もせず様子を見ているのか？

これももうどうにもならんのじゃないか？ 仮にシャルロットの潜入工作が成功し、無事IS学園を脱出していたとしても、結局は専用機を剥奪され口封じで殺されるのがオチだったろう。

「そうだ！ 二人とも聞いてくれ。学園特記事項に、ええと……これだ！」

俺がシャルロットの話の頭の中でまとめていると、必死で生徒手帳なんぞをめくっていた一夏が叫んだ。

『IS学園特記事項 第21項 本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする』どうだ？ これならシャルロットに誰も手出しできないだろ!! ここにいればいいよ、それから卒業までの3年間になんとかする方法を探し出せばいい！ そうだよな三治？」

一夏は一夏なりに手段を見つけたようだ。しかし……。

「それは……まあ確かに俺も入学前政府の連中に聞かされはしたけどさ」

「どうだと言わんばかりの一夏とすぐるような視線のシャルロットにはちよつと言いいにくいだが、言わない訳にもいかない。」

「その特記事項つてき、不正入学者……というか不正転校生でも認められるのか？ その上犯罪者でも？」

二人は揃ってハトが豆鉄砲食らったような顔をした。

「えっ!? どういうことだ三治？」

一夏はまだしも、シャルロットは分かっているとダメだろ。

「シャルロット、フランスを出国して日本に来る時も、IS学園に編入するときも、男性のシャルル・デュノアの身分で通したんだよな？」

「うん、渡された偽造パスポートとヴィザで——ああっ!!」

「やっと自分の立場に気付いたらしい。俺の質問に何気なく答えていた貴公子改め美少女が途中で固まった。」

「シャルロット、一体どうしたんだ？ 三治、分かるように話してくれよ！」

一夏はまあ、脳筋担当だししゃあないか。

「だからさ、シャルロットは偽造パスポートを使い身分を偽ってフランスを出て日本に来てるだろ？ つまり公文書偽造に不正出国に不正入国、さらに身分詐称だぞ。まあ偽造したのはシャルロットじゃないけど……その上入学書類も一応公文書だから、男子のシャルルと記入したなら公文書不実記載……こんな明らかな犯罪者、それも実在しない人物を名乗って不正に転校した奴に、そんな特記事項は適用されないんじゃないか？ むしろバレた時点で強制退学になりかねんのでは……？」

今度は一夏の顔が見る見る青くなった。額に脂汗が浮かんでいる。「マジかよ!? そんな、それじゃシャルロットは……どうなるんだ？」
「むしろこっちが聞きたいぞ」

俺と一夏から急に視線を向けられたシャルロットはビクツとして身を硬くした。額からダラダラ汗をたらし、口は半開きのまま頬を引

きつらせている。まさに顔面蒼白というやつだ。先に気付けよ！

「八方ふさがりじゃないか！ どうしたらいいんだよ三治?！」

もう完全に二人してお手上げらしい。そりやそうだろう。

「うーん、シャルロット自身がどうしたいかにもよるだろうけど……」

俺が張本人に確認する前に、一夏が慌てて声をあげた。

「そ、そうだ！ シャルロットが女だと気付いているのは俺と三治だけだし、当分隠しておけば——」

「いや……織斑先生も、おそらく会長もシャルロットが女だと気付いてる」

あと本音もな。バレバレじゃねーか。

汗をダラダラ垂らしながら辛うじて一筋の光明を見つけた一夏に、俺の冷徹な一言が突き刺さった。

「そんな?! ウソだろう?！」

「本当だ。会長は微妙だが、織斑先生はまあ確実だな」

俺を連れてきた際の頼もしい態度は消えうせ、呆けた表情でへなへなど一夏は座り込んだ。残酷にも俺は二人に止めを刺してしまったようだ。

「あはは……」

シャルロットが虚ろな笑い声を立てた。本当に逃げ場がないと知ったのが相当こたえたらしい。

「やっぱり、もうどうしようもないよ……ブリュンヒルデからはISで逃げることも出来ない。こっそり学園を出て帰国することも。

……ああ神様」

蚊の鳴くような声で呟いていたが、やがてシャルロットの言葉は俺たちの理解できないフランス語に変わってしまった。やっぱり、スパイの真似事してみてもただの女の子だな。こりや相当追い詰められてるぞ。

「なあー！ シャルロットを助けてやってくれよ!! 三治なら何とかしてくれるだろ!?!」

お前は見込みが無いなら助けるとか言うな!!

もう習慣と化した溜め息をつき、

「とりあえずさ、シャルロットはどうしたい？」

うなだれ日本語すら忘れた転入生に話しかけた。

独り言が止み、ゆつくりとシャルロットは顔を上げた。言うまでもなくその表情はすぐれないままだ。

「ボクが……どうしたいか……？」

とりあえず本人の意志を確認しないと話にならない。それが実現可能かどうかは別として。

「そうだ。もうこの学園を離れてISと縁のない生活を送りたいか、それとも学園に残りたいのか？ あるいは、もう帰国したいか、それともどこか新天地でやり直したいか？ ……なんでもいい、出来るかどうかはともかく、これからどうしたいか、言ってみてくれないか？」

「そうだ！ シャルロット、おれもできるだけ協力するから何でも言ってみてくれよ！」

一夏も加勢したものの、どうにも反応が薄い。そもそもこの件一夏あんまり助けになってないし。

「……」

少しの間何も言葉がなくて少々あせった。

「これからどうする……ボクが、どうしたいのか……」

シャルロットは少しうつむいて考え始めた。

「と、とりあえず今度はコーヒーでもいれるか！」

先に沈黙に耐えられなくなった一夏がキッチンへ足早に去った。俺も逃げたいんだけど？

3人で一夏が運んできたカップを手にしたが、息苦しさから逃れるように一気に口に運んだ一夏以外は口もつけなかった。

「あふいいい！ あちちち!!」

バカ野郎！ 大事なことだ静かにしろ。

しばらくの沈黙の後、おずおずとシャルロットが重い口を開いた。

「ボク……ボクね、ここに、居たいかな……」

「ここ、IS学園にか？」

かすかに頷き、言葉が続ける。

「母が死んでから、母国では居場所なんてなかったんだ。父に引き取

られてからも、父親はほとんど会ってくれないし、義母はボクの事が邪魔で仕方ない様子だった。急に今まで知らない上流階級の世界に放り込まれて、仲良くできる相手も居なかった」

一夏がそつとその肩を抱くようにした。イケメン力高し。

「つらかったんだな、一人ぼっちじゃあ心細くてあたりまえだ」

シャルロットの顔が少し赤くなっている。箒、セシリア、鈴……あゝあ、4人目か。

まあ今はそれ所じゃない。

「専用機まで与えられて、ここに来るのも本当は凄く不安だったんだ。でも、一夏やみんながとても優しくしてくれて……ボク、ここに自分の居場所を見つけたんだ。もし本当にできるならだけど、ここから離れたくないよ……」

そこまで言うとうつぶわいて、力なく一夏に寄り添うようにした。正体がばれ、追い詰められて、本音を言ったところで疲れきってしまったのだろう。

「三治！ どうにかしてやってくれ!! もうおれじゃどうしようもないんだ、頼む!!」

シャルロットを抱き抱えるようにして声を張る一夏と、それを見上げるシャルロット。絵になるけど一夏は役に立ってねえなあ。まあ武闘派兼家事派な脳筋だしな。

……実は、まったく手が無いわけじゃない。だが当然、リスクも代償もついて来る。要はシャルロットがそれを受け入れられるかどうかだ。

「……シャルロット、もしIS学園にこのまま居られるなら、専用機も代表候補生の肩書きも無くしていいか？」

行き場のない少女は俺の問いにふと顔を上げた。

「え？」

「方法はない事もない。でも二度とフランスには帰れなくなるかもしれないし、ヘタすりゃ向こうの国籍も失うだろう。専用機も無くなる

し、候補生でもなくなる。それでもいいか?」

淡々と話すと、その顔つきがだんだんとすがるようなそれに変わった。

「ほ、本当にここに居られるの?」

「三治、いい方法があるのか!」

一夏も食いついてきた。

「多分な。しかしこれまで得てきたものはおそらく全て失うぞ? 何の後ろ盾もなく身体一つで生きていかなきゃならない。それでもこのままここに居たいか?」

彼女は迷いのない顔で頷いた。

「うん! ……ここにいて………ここで過ごしていけるなら、全部いらない! 一夏と……みんなとこの学園で、一人の生徒としていられるんなら、もうあんな国に帰れなくてもいいよ!!」

「そうか……後悔しないな?」

俺はその顔をじつと見た。本当に受け入れられるのなら………まあ、多分大丈夫だろう。

「くどいよ! ……でも本当に何とかなるの?」

一夏が身を乗り出してきた。

「お、おい三治! 本当に何とかする方法があるのか!」

「まあ、な。恐らくいけるだろう。ゴタゴタするし会長と織斑先生は怒るかもしれないが、知らん」

「うええっ? 大丈夫かよ!」

俺のそつけない返事にうろたえる一夏。会長はともかく姉は恐いだろうよ。

「知るか、今の今までほったらかしなのが悪い」

「それで、ボクはどうすればいいの?」

不安顔のシャルロットに俺は真剣な表情で正面から向き直った。

「いいかシャルロット、日本政府に亡命しろ。話は俺がつけてやる」

「………は?」

固まったシャルロットは、何がなんだか分からないという顔だった。

「えーっ！ マジかよ!? ど、どうなるんだシャルロットは!?!」

たぶんコイツはもつと分かってない。

説明が必要だが、その前に説明責任がありそうな関係者と話すべきだよな。

「とりあえず会長呼ぶか、たぶん監視してるんじゃないかと思うし。とつつあーんっ!!」

俺の叫びに応えてドアが勢いよく開かれた。

「他の子がいる前でその呼び方止めてくれる!? ……それはそうと、よく近くにいると分かったわね? 気配でも感じたかしら?」

現れたとつつあんは俺に抗議するとすぐに引き締まった表情になった。

「会長!? なんでここが?」

「あ、あなたは生徒会長!? どうして……まさか、すぐ近くに居たんですか!?! それじゃここでの会話も?」

俺が部屋の中で呼んだだけで現れた会長に、一夏とシャルロットはうろたえた。

「やっぱりいた。電話とかめんどいし、どうせ盗聴してるだろうと思っただけで声張って正解でした」

「なんだかまた私の扱い雑じゃない!? わたし生徒会長! 生徒会長なのよ!?! もう少し敬意を持って接してよねホントに?」

とたんに会長はむくれた。俺の言い草は相変わらず癩かんに障さわるらしい。

「と、盗聴……全部、ばれてたんだ、最初から……」

「三治すげえ! よく分かるなそんなの!?!」

シャルロットは急速に脱力し、一夏はシャルロットの存在も忘れて驚愕の表情で俺を見た。

「まあこの人のキャラ……じゃなくて性格……えーと、まあ役目を考えると。男子生徒が集まるのは気にするだろ?」

「え〜つと、結局どれだ？」

「役目！ 役目だからよ！ 生徒会長のっ!!」

困り顔の一夏に会長が強弁した。

シャルロットは一人取り残されたように呆然と俺たちを見つめていた。

「それで、シャルル君ならぬシャルロットちゃんを亡命させたいって話だけど、本気かしら？」

会長は一夏が入れたコーヒーを軽く一口すすってから切り出した。

俺たちはあれからまたカップを前にテーブルを囲んでいた。落ち着きを取り戻した一夏とシャルロットも、まだ不安が残る表情のままだ。

「当たり前です。学園に任せた所で『政治的に正しい』結果にしかならないだろうし、どうせやるならISがなかなかモノにならない俺の府に対する得点になる形のほうが有り難い。だいたい会ったばかりの相手は無償で助けるなんて普通は裏があると疑われるし、恩を売るというのも何なので」

一夏はまたも啞然としシャルロットは呆れ顔だ。確かに冷たい言い草かもしれないが、俺にしたって勝手に転校してきて一方的にトラブルに巻き込まれて迷惑なのもある。多少きつい言い方になってもしやあない。

「ずけずけ言うのねえ。ちなみに政治的に正しい結果って、どうなると思っただの？」

不満顔は変わらないが、会長の俺を見る目つきは鋭いものに変わった。

「そんなもん穩便に追い出して仏政府かデユノア社に引き取らせるのがオチでしょ。未だにこの国は事なかれ主義だし、厄介な邪魔者の始末は元凶にやらせるでしょう。とどのつまりスパイ工作に失敗したシャルロットは口封じに殺される。むしろ戸籍を抹消されて存在自体無かった事にされるかも知れませんか」

とたんに二人が息を呑む気配がした。

「ヒツ……!!」

「おっおいマジかよ!？」

チビリそうな顔の一夏とシャルロット。会長は俺に非難の目を向けた。

「脅しすぎよ。今そこまで言うことないでしょ？」

「そうかも知れませんが、いい加減自分の立場をハッキリ理解するべきだと思いますよ?。そもそも自分の身の振り方を他人に委ね過ぎです」

シャルロットはしゅんとしてうつむいた。厳しいが正論だと俺は思っている。一夏はアルミホイールを噛んでしまったような表情だ。頼むから今度からは出来る事と出来ない事を考えてから行動してくれ。

やれやれと首を振った会長は再び口を開いた。

「それで、本気で政府が彼女を引き受けれると思う?」

「むしろ喜んで受け入れるでしょ。高いIS適正を持つ者、わけでも専用機を与えられる程の奴はこの国も足りないし、なによりシャルロットはフランス随一のIS企業の最先端のISとその詳細を握っている。ISコアはアラスカ条約にそって返還するとしてもシャルロットの専用機は調べつくすでしょうし、デュノア社の技術情報や開発情報、さらには社内事情も詳しく聞ける。おいしい所だらけですよ。もっとも第三世代機の開発は遅れてて参考にはならないが……いずれにせよ、フランス政府やデュノア社からの引渡し要求に応じてやる義理も無いでしょうし」

会長は腕組みしたまま黙って聞き、俺が話し終わると少ししてから口を開いた。

「それ全部、シャルロットちゃんは受け入れたのかしら?。家族も祖国も全て裏切ることになるわよ?。」

「そのはずですがね」

俺と会長の視線がシャルロットに刺さる。当事者は身を硬くしたが、少し震えながらも強い語気で「必要なら、やります」と答えた。

その顔には強い意志と決意が見て取れた。

しばらくその目を見つめていた会長は、決意が変わらないのを確認するとようやく深く頷いた。

「あなたの決意は分かったわ。更識家当主である私の責任で、内閣府と外務省にシャルロット・デユノア日本亡命の仲介を引き受けます。無論、音羽くんの推薦も添えてね」

それでいいわね？ 会長の言葉に俺たち三人は首を縦に振った。

一瞬かすかに笑みを浮かべた会長はすぐに顔を引き締めると、スマホを取り出し電話をかけた。

「虚ちゃん？ 例のプランはご破算、シャルロット・デユノアは日本亡命の意思を固めたわ。すぐに関係各所と調整に入って頂戴——そんな怒らないでよ、音羽くんが言い出したのよ？ 面白いじゃない、私もこつちの方がいいし……分かったってば！ すぐ戻って私から直接内閣官房と話をするから！」

虚先輩らしき相手との通話を強引に打ち切り、会長は急に笑い出した。

「おめでどうシャルロットちゃん！ 上手く行けば来週中には晴れて日本国籍を取得できるわ。良かったわねえ！ 音羽くんに感謝しなきゃー！」

あつけにとられた俺たち三人を忘れたように、会長は笑いが止まらない様子だった。

おめでどう……おめでどう……って違うか。なんか色々あつてもうわかんねえや。

「な、なあ？ 会長は何がそんなにおかしいんだ？」

「俺も分からん……会長、一体何がそんなに笑えるんです？ 連休でも取れたんですか？」

まだおかしそうに笑う会長は答えた。

「だって、音羽君たちが何もしなければ学園は彼女をスパイ行為をネタに脅して、フランス政府とデユノア社に対する二重スパイに仕立てる予定だったのよ？ 向こうに対しては二重情報を流させてね？」

「ええっ!? 本当ですか？」

「二重スパイって、そんな映画みたいなことあるのかよ!？」

シャルロットと一夏は飛び上がった。今日はこの二人が百面相で本当に忙しい。

しかし、だからこそ織斑先生も気付いていながら黙っていたのか。だがそれなら、会長が俺にそれとなくシャルロットが不審人物であることを示唆したのは何故だ？

「でも私個人はそんなの嫌だった。ただでさえ親の無体な命令で身分をごまかし嘘をついて、織斑君たちに接近して無理なスパイ行為をするよう強要されたのを、さらに脅迫して利用するなんて。シャルロットちゃんがプロだったならともかく、普通の女の子に違法行為を何重にも無理強いするなんてしたくなかったのよ」

「それでは、俺に不審を抱かせるように伝えたのは？」

俺に向き直ると、会長は悪そうな笑みを浮かべた。

「ひよっとすると、何か彼女の助けになるアイディアを出してくれるんじゃないかってね。多少期待はしてたわよ？ でもまさかこんな強引な亡命を押し通そうとするとはね！ いきなり何もかも捨てて日本に亡命しろだなんて。それにこんな提案を受け入れちゃうシャルロットちゃんも相当じゃない？」

会長は目だけを一夏に向け、ついでその視線を亡命希望者に向けた。

「愛の力って偉大よね？ シャルロットちゃん？」

瞬く間にシャルロットの顔が真っ赤になった。

「ちち、違いますっ！ ぼ、ボクはその、一夏とだけじゃなくってみんなと一緒に学園に居られたらなって……その……」

「あら？ 私は別に織斑くんの事なんて言っていないわよく？」

「なっ!! も、もうっ！ 知りませんっ!!」

かわいそうに、会長にいじられてシャルロットは顔を覆って黙り込んだ。

と、会長は今度は俺を見てニヤニヤしだした。うぜえ。

「本音ちゃん心配してたわよお？ シャルロットちゃんのこと円満に解決出来るかどうかって」

「あいつもあいつなりに心配だったんでしよう。俺なんぞに期待され

でも困るんですが」

突き出した人差し指で俺の頬をつつく。

「ほんとは格好付けたいくせに、素直じゃないわねえ」

「うるせえな。それよりさっさと虚先輩に釈明しなくて良いんですか？ 本来の予定を急変更してシャルロット亡命を進めるんでしょ？」

会長は渋い顔ですねた。

「ちえー！ 今回の事は私が功労者なんだから、もうちよつと優しくしてよね？ まあ正確にはこれからだけど。さあ、雑談はここまで！」

シャルロットちゃんも一旦『シャルルくん』に戻ってちよつだい。これから一緒に生徒会室に行つて今後の話を詰めるわよ」

シャルロットが男子の制服を手にシャワールームへ着替えに行くと、急に神妙な面持ちで会長が尋ねた。

「……もし、シャルロットちゃんが織斑くんに危害を加えたり、違法行為を働いていたら、どうするつもりだったの？」

俺は苦笑した。

「何もいません。それこそ会長にお任せしますよ」

「どうして？」

「暗部の仕事なら、ほつといても十分非情な裁きが待っていきそうですし、一夏は何されようと白式の絶対防御がありますからね。そもそもこいつはISだの何だのどうこうしたところで簡単に死ぬタマじゃないんで」

俺は男性唯一の専用機持ちに向けて顎をしゃくった。

「ひでえー！」

ずつと俺たちのやりとりをボンヤリ眺めていた一夏がとうとう不平をもらした。

「そもそもお前はシャルロットが女子と気付かない時点で節穴過ぎるんだよ。ちよつとは人を見る目を養え、いろんな意味で」

「なんだよ！ もうちよつとおれに優しくしてくれたっていいだろ？」

「優しさと甘やかすのは違うだろ」

俺と不満そうな一夏のやりとりを見てクスクス笑う会長は、

「さて、それじゃあそろそろ心配してる。『本人』も呼んであげましようか。いつまでも蚊帳の外じゃ可哀想だしね」

一人ドアに向かうと、少し開けて誰かを手招きする。

と、意図を察する間もなく小さな人影が飛び込んだ。

「も〜！ お嬢様呼ぶの遅ーい!!」

音もなくやってきた本音は俺に飛びついた。

「本音!? 会長と一緒に来てたのか」

「おとーさんデュツチーに敵しすぎ〜！ も〜ハラハラしたよ〜！」

「……やっぱ盗聴はしてたのか」

本音はイタズラがばれた子供ののように舌を出した。

「だって心配だったんだも〜ん」

「え、のほほんさん!? なんているんだ?」

そこへ着替えた男装女子も戻ってきた。

「えっ本音もいるの!? どうして?」

すました調子の会長が口を挟む。

「彼女も生徒会役員だし関係者よ。それにしても、短い間にずいぶんなラブラブっぷりじゃない? どこまで進んだのかお姉さんに言つてごらんさい?」

とつつあんはヒマになるとこれだ。すぐに本音は俺の背後に隠れてしまった。

「そういうのいいから。そもそも今は『シャルル』の亡命申請の手続きでしようが」

「ボクもちよつと気になるなあ。二人はもうキスしたの? 普段二人の時は何してるのかな?」

ブルータスお前もか。

「いいから生徒会室に早よ行け!」

「? なあ三治? 会長とシャルロットは何の話してるんだ?」

お前はもう寝てる!!

「そういえば、音羽くんどうして裸眼だったの?」

結局あの場にいた全員で生徒会室へ向かう途中、今頃になって会長

が疑問を口にした。

「グラサンを嫌がられたんで」

「え？ どういうこと？ それより、鈍感な織斑くんがよくシャルルクんのこと気付いたわね？」

「あんたも酷いな！ まあ確かに疑問だけど、どうなんだ？」

俺達の疑問に、当の一夏ではなくシャルルの方が慌てでした。

「そっそれは……その」

亡命手続きが完了し、彼女が晴れてシャルロットを名乗れるまで、彼女が亡命する事は隠しておかなければならない。露見すればデュノア社やフランス政府の介入を招く恐れがあるからだ。学園内に向こうの関係者がいないとも限らんし、特にデュノア社にしてみりやこの件は致命傷になりかねない。だからシャルロットは今しばらくは男のシャルルで通さねばならない。

そのあたりの事もよく説明し、秘密を守るよう要請するため一夏も一緒に訳だが……。

「ああ、たしかシャルロ——」

「おりむー！」

即座に本音が注意した。

「おっと！ じゃなくてシャルルがシャワーに入った時、ボディソープ切れかけなの思い出して持ってたら——」

「ドスケベ一夏の怪我の功名か」

ぶっちゃけ一夏に限っては不安この上ない。教室でつい『シャルロット』って呼びかねんな。

「……一夏のエッチ」

「お、おれは何もしてないぞ?! 偶然だからな！」

焦る一夏とそっぽを向く男装娘を尻目に俺は会長を薄い目で見た。

「そっいや会長も俺が呼んですぐ来ましたよね？ やっぱあの部屋盗聴器だらけでしょう？」

俺の詰問にいつものムツとした顔で会長はもっともらしい事を言った。

「あのねえ、織斑くんたちをわざわざこの部屋に移したのは、ここが要

注意生徒を入れるための監視装置付きの部屋だからなのよ？ もし彼女が本当にプロのエージェントだったら、誰かが部屋の状況を把握してないと危険でしょ？ 情にほだされた織斑くんが無防備になった所で悪意を見せるかもしれないじゃない？」

私もいろいろ考えなきやいけなくて大変なんだから、少しは劳いなさいよ。会長も俺の目を覗き込むようにして軽く睨む。

「あくあ！ 予定外の展開で仕事が増えちやっただなく！ 誰か手伝ってくれると凄く助かるんだけどなく！」

「素直にお願いしますと言え」

会長は俺の返事にもそ知らぬふりで続けた。

「そうだわ、先に食堂へ寄りましょうか！ シヤルルくんも織斑くんもお腹すいてるでしょ？」

急に言われてシヤルロットはばつが悪そうだった。

「知ってたんですか会長……」

「会長！ シヤルロット——」

「一夏っ！」

今度は俺が声を荒げた。

「……じゃなかったシヤルルはおれが女子だと気付——じゃなくてええと、おれといろいろ話し込んでそれ所じゃなかったんですよ！」
本当に言葉が危なっかしい。もうお前当分シヤルルの話すんなよ！

「さて、二人が腹ごしらえする間に私も仕事に必要な糖分を摂取しなくちゃ！」

あんた自分が甘いもん喰いたかったから言ったんだろ。

「わーい！ おとーさん私たちもケーキとタルトとミルフィーユ食べよう！」

「夕飯の後に喰いすぎだつての。ったく、勝手に遅れて、また虚先輩に怒られますよ？」

俺の苦言にとつつあんはうるさそうな顔をした。

「ちゃんと虚ちゃんも呼ぶわよ！ どうせもうこんな時間だし、官邸その他への連絡は話を詰めた明日で十分だわ」

「いいえ。出来る限り迅速に結果を報告するべき事案です」

思わず振り向くと、本音の姉が無表情で立っていた。

「お、おねくちゃん」

「まったく、こんな事だろうと思いました。デュノアさんと織斑くんは夕食の時間を与えますが、その後すぐに生徒会室にて事情聴取等を行いますからね。本音も音羽くんに手伝いをお願いして。今夜は忙しくなるわよ、徹夜を覚悟しなさい」

「え〜そんなあ〜」

生徒会の実質運営役が厳しい目で言うと、その硬質なデザインのメガネがキラリと光った。

「んもーっ！ こんなに頑張ってるんだから、もっと私に優しくしてよーっ!!」

「うるせえなもう夜だぞ。手伝ってやるから静かにしろよ」

俺たちのやりとりを一夏とシャルルの二人はポカンとして見つめるばかりだった。

「……三治、よく分かんないけど生徒会って大変なんだな？」

「ボクも何と言っていいのかわからないよ」

やいのやいのと廊下で押し問答する会長と虚先輩に大あくびした俺は、さっさと本音と二人を連れて食堂に入った。

この上数日先にはさらに厄介な転校生がやって来るといふ。俺たちに平凡な日々がやってくるのはいつの日か？

我が良き友よ

とうとうこの日がやってきた。

まさか、こんなにも早く本音と結ばれる時がやって来ようとは。さすがに俺もまったく予想できなかった。

式場の新郎控え室にて一人。着慣れない白のタキシードはずいぶんと窮屈で、普段しない手首のロレックスがやたらと浮いている。

本音はまだウエディングドレスやらメイクやらで時間を食い、いつもの外出など比較にならないくらいに長いこと待ちぼうげだ。

することも無いのでスマホでもとポケットに手をやった時だった。誰かの呼び声と共に背後のドアが開き、長いレースを引きずる気配が迫ってきた。

きつ、来た！ もう何度も試着や式のリハーサルで見ていると言うのに、やはり本番でウエディング姿を見るのは緊張する……。

俺は居住まいを正すと、出来る限り落ち着いた風で振り返った。

「本音、遅かつ……どわーっ!!」

そこに居たのは、紛れも無くウエディングドレスに身を包んだ——「待たせたな三治!!」

花嫁姿の一夏！ しかも驚きのぱっちりメイク仕上げ!! これ以上ないくらい衝撃のご対面だよ!!

「デメえ一夏!!? 何やつとんじゃオノレはっ!! 本音はどうしたっ!?!」

だが俺の怒声にもサワヤカ脳足りんは変態衣装で俺の腕を引っ掴むと走り出した。

「ホラ急げよ！ 花婿待たしてんだぞ!?!」

「ハア!? 俺は本音と結婚すんだぞ！ 花婿は俺だろうが!!」

花嫁野郎に引っ張られて走り出すと、突然式場の壁がバタバタと崩れ、開けた視界に小高い丘へと続く道が現れた。

混乱する俺をお構い無しに引っ張る一夏はその丘にある小さなチャペルを指差す。

「ほらー！ もうお待ちかねだぜ!!」

「誰が……ゲツ!!?」

なんとチャペルの玄関には場違いに馬鹿でかいソファがでんと置かれ、どつかと腰を下ろしたタキシード姿の織斑先生が日本酒をラツパ飲みしていた。周りには空き瓶が大量に転がっている。

と、こちらを見るなりその眼をギラリと光らせ俺を睥睨した。

「うわあああ!!?」

俺は訳も分からず逃げ出そうともがく。だが俺の腕をしつかりとつかんだ一夏の手はビクともしない。

「早くしろよ! 着替えるんだよ!!」

いったいどこから出したのか、一夏の片手はもう一着のウエディングドレスを掲げていた。

「なんなんだ!?! 一体こりやなんだ!!」

俺はもう理解が追いつかない!

「早く起きろ! 着替えるよ!!」

一夏が一際大声で叫ぶと同時に足元が崩れ、俺は奈落の底へ落ちていった……。

「早く起きろよ三治! もう着替えて行くぞ?」

「ぶるああつ!?!」

飛び起きた俺の目の前にランニング姿の一夏がいた。キス寸前まで急接近! 慌てて飛び退く。

俺はパジャマ姿で乱れた呼吸が落ち着くまで呆然としていた。

「……夢か」

いつもの寮のベッドの上、今は土曜の早朝。大筋で処遇の決まったシヤルは来週ドイツ人転校生が来る部屋に移り、同時に一夏も俺との部屋割りに戻っていたのだった。

無論本音も簪さんの部屋に戻ってしまった。大量のお菓子と共に……あゝあ。

「まだ寝ぼけてるのか? しつかりしろよ、今日から筋トレとランニング再開だろ?」

一夏はとつくに身支度を整え、あろう事か俺の分のジャージまで用

意している。

「そうだったな……はあ」

分かつちやいるが、今さらおりむーブートキャンプを再開されても、やる気がしない。

「それから今日は午前中から弾のどこに出かけるから、一緒に行こうぜ！ 手ぶらもなんだし何か買っていかないとなあ」

どういう訳だか、一夏は俺を連れて地元に戻りするのを楽しみにしていた。

「今さらだけど、シャルは大丈夫かな？ まだ国の偉い人たちと今後の話とか、いろいろあるんだろ？」

一夏は走りながら、おれと三治も付いて行ければよかったのになと呟いた。

「会長も一緒だし……まあ悪いようにはならないだろ……面倒は多いだろうがな」

俺は息をつく合間に答えた。もう少しペースを落として欲しい。つーか休日まで走らすな。

ちなみに彼女のあだ名であるシャルは一夏の命名による。

『シャルロットもシャルルも“シャル”までは一緒だろ？ じゃあそこで止めれば、もううつかりシャルロットって呼んだりしないじゃないか？』

過日のドタバタの後で一夏がそんなことを言い出し、彼女のニツクネームはシャルと決まった。

当の本人もまんざらではない様子で、

「う、うん！ い、良いんじゃないかな……えへへ」

などと返事していたものの、“一夏が付けてくれたあだ名……ふふ。えへへ”などと小声で洩らしているのが丸聞こえだった。

ちなみに俺はその後、勝手に亡命をそそのかしたとして会長と一緒に虚先輩にお叱りを頂いた。シャルの安全を確保できるかもはつきりさせずに話を進めるのは無責任もいい所だと怒られて、返す言葉もないとはこの事だ。

「三治や会長も頑張ってくれたとは思うけど、やっぱりちよつと心配

なんだよな」

「気持ちには分かるけど、もう本人の意向と待遇はほぼ決定だし、今日は公式発表をどうするかとか書類の記載とか細かい話だから大丈夫だろ。今さらフランスや他の国が介入しても、一度役所が決めた事はなかなか変えられないだろうし」

他に誰もいない早朝の公園のベンチ。バテて休憩がてらの雑談で、空を流れる雲をぼんやり眺めつつ、俺はシャルの亡命が決まっただからの多忙を極めた今週の生徒会を思い出したため息をついた。

あの後も各方面への説得と調整で生徒会は徹夜でバタバタし、一夏以外は翌朝の授業をほとんど欠席して対応に追われることになった。もともと俺は雑用以外にやった事なんて、内閣府へ亡命の件をねじ込むために、シャルを抱き込む際どんなメリット・デメリットがあるかを関係者に吹き込む役目を仰せつかった程度だ。

「背筋が寒くなる話をエリートに吹き込むのに音羽くんは最適任ねえ！」

会長が笑っていたのがほんの少しむかつく。ほんの少しだけ。

ぶつちやけ俺が話した内容は、シャルが帰国したり他国に亡命された場合のデメリットばかりだ。いわく、〃このままシャルを帰国させれば、スパイを招き入れた I S 学園はもとより日本政府もセキュリティはもとより対応が問われる〃。俺と一夏の身の安全の保障はどうなっているのか？ 諸外国や I S 委員会に説明できるのか？〃。〃万が一白式と一夏のデータが洩れれば責任問題どころでなくなる〃

〃シャルを引き込めば I S の内情はもとより、デュノア社と仏政府の I S 最先端技術と機密情報が得られる。今さら仏政府の抗議が恐いのか？〃。〃それより何より、国外 I S 事情に詳しく専用機持ちになる程適正の高い操縦者を捨てるのはかなり惜しいだろう〃等々……。

その甲斐あってか、シャルは政府囑託の I S 操縦者としての処遇が決まり、今日も今後についての詰めの会合に会長と共に赴いている。

実際のところ、会長が一緒なのはシャルの気が変わって専用機で無茶をさせないための抑止力の意味もある。一夏は反発するだろうが、最後まで気が抜けないのはシャルに対しても同じなのだ。

「そんならいいけどさ。ま、三治がそう言うなら大丈夫だろ！」

「まあ日本にはベレンコ中尉という前例があるからな。ずっと昔の事件だけど、当ても大変な緊張状態になったらしいし。最後まで慎重にもなるし時間もかかるだろうさ」

一夏が首をかしげた。

「ベレンコ中尉って誰だ？」

「知らないのも無理はないか、俺も会長に教えてもらったんだ。半世紀ほども前だけど、ソ連、つまり当時のロシアから戦闘機に乗ったパイロットが函館空港に強行着陸した事件があったんだ。函館ミグ25亡命事件っていったかな」

「え!? そんな事件があったのか! どうなったんだベレンコは!?」

驚愕する一夏がいきなり顔を寄せた。だから近いって、息がかかるだろ。

「元々空軍の腐敗や浪費家の妻に嫌気が差していたベレンコは、飛行訓練中に編隊を抜けて函館空港までたどり着き、アメリカに亡命を申請したらしい。自衛隊などの事情聴取後アメリカに亡命したが、なにせ乗ってきたのが当時最新鋭のミグ25戦闘機だ。当然日米防衛関係者に徹底調査されたんだが、ソ連が空爆か空挺作戦でミグを破壊すると言われて北海道の自衛隊が一時臨戦態勢だったらしい。それも本来内閣や政府が命令しなければ出動できないのに、政治家が危機を理解せず出動命令出さないから自己責任で勝手にだぜ? 文民統制無視してつから一部の幹部は腹切る覚悟だったとか。実際ロシアも特殊部隊をへり搭載型潜水艦で送り込む計画だったらしく戦闘一歩手前だったんだとよ」

「マジかよっ!? 戦争になったのか?!」

飛び上がった一夏が俺に掴みかかった。一夏の息で、むせる……。
「落ち着けよ。幸い何もなかったが、多くの教訓を残したそうさ。シャルにしても、もしフランス政府やデユノア社がその気ならISで殴り込むぐらいやりかねんが、流石にそこまでは出来ないだろ。それでもし失敗しようものなら恥の上塗りだし、完全に国際的信用を失いかねない。シャルの亡命だけなら、ISはコア共々返還されるし、調

査されるっただって第三世代機としては微妙なシャルの機体だしな。日本政府も事を荒立てないだろう」

「ひええ……昔も今度もヤバいんだなあ。三治がいて良かったよ」

「俺の力じゃないけどな。実際シャルは亡命できただけ運が良かったんだろう」

事実生徒会には仏大使館からの電話が何度もあった。全て会長が対応したが、交渉はほぼ英語で行われ俺は大部分の内容を推測する他はなかった。……ただ、ひりつくような緊迫感のやりとりは、始終決して友好的とは言えない雰囲気に含まれていたのをはつきりと憶えている。

「さっ、そろそろランニング再開だ！ 筋トレと朝飯喰ったら出かける準備しないと。急ごうぜ！」

「あ、うん」

めんどくさい気持ちで、一夏の後について気乗りしないマラソンを再開した。

「なにい！ あの千冬さんと正面から怒鳴りあったってえ!？」

土産の甘味片手に俺たちが尋ねた一夏の旧友は、素っ頓狂な大声と共にひっくり返りそうになった。

「な？ すごいだろ三治は！ おれの友達の中でも特に自慢の親友だよ」

ドヤ顔の一夏の向かいで倒れそうな同い年の男子、五反田弾は舌を噛みそうなフルネームを持つ赤ロンゲのチャラそうな奴だった。その上一夏同様の陽キャイケメンで、俺とはまるで正反対だ。

そして見た目通り遠慮のない奴でもあった。

「で、どうなんだよ実際？ 女子だらけでモテまくってんだろ!? 隠すなっつて！」

ISのアーマードコアみたいなゲームで対戦中、肘でぐいぐいする弾に一夏は困惑気味だ。俺は素知らぬ顔で土産のシュークリームを口に押し込む。

「べつにそんな感じじゃねーっつて！ だろ三治？ 何とか言っつてやっ

てくれよ！ 弾の奴おれがIS学園に入るのが決まってからこんな話ばっかなんだよな」

即座に弾の視線が俺に突き刺さる。

「俺に振るのかよ。正直に言っちまうぞ？」

どういう意味だよと一夏が眼をむき、弾がおおつと歓声を上げた。

「まあある意味では弾の言う通りだな」

「だよな！ ISロードの写真見たぜ、一緒に美少女と写ってたし!!」

「おいおい三治!」

まあ落ち着けよと一夏を制し、俺は出された麦茶を一口飲んだ。あの画像そんなに出回ってんのかよ……。

「何せ周りは皆女子で、しかもIS学園に入るために男子と付き合う余裕もなく頑張ってきた娘ばかりだからな。それも男子と縁のない事を覚悟の上で入学したらその男子がいるんだから、飛びつくのも無理はないだろ」

「そら見ろ！ オレの言った通りじゃねえか」

弾のこうだと言わんばかりの態度に苦笑する俺と焦る一夏。

「……そ、そりやそうかも知れないけどさ。弾の言うようなハーレムとかじゃないだろ？」

得意気の弾に一夏が苦言を呈した。

「そうだな、実際は女子達も自分の理想や要望を一夏に押し付けるばっかで、大していい思いはしてないぜ」

「でも、付き合いたいとか言ってくる女子とかいるだろ？ なあ？」

「どうなんだって！」

俺の肩を掴んで揺らす。弾の食いつきは凄まじい。もうコイツも入学させてやれよ。

「居ても一夏に近づくのは容易じゃないぞ。いつもてんぷくトリオがうるさいしな」

途端に一夏がクツクツと笑いを噛み殺し、弾はポカンとした。

「なんだよ、そのトリオって？」

「箒、鈴、それにイギリス人留学生のセシリアの三人だよ。何かと一夏に喰らい付いて必死だが一夏の反応はイマイチでな、いつも一夏が三

人を怒らせて終わる。コントみたいなものだ」

俺は一夏のファースト幼馴染と英留学生について説明した。

「鈴もいるのか！ それにファーストの箒？ へえそりや一夏もタイヘンだろうなあ。それから何だ、セシリアっていったか？ 留学生も一夏にゾッコンか！ 美人か？ 美人なんだろう!?!」

俺の肩を両手で滅茶苦茶に揺さぶってくる。本当に弾の食いつきが半端ねえな。

「喜べ、金髪碧眼の巨乳美少女だ。それとツイン幼馴染の3人で毎日一夏に飛びついてるよ。でも一夏は相変わらずなのさ」

分かるだろ？ と呟くと、ようやく弾は大人しくなった。俺から手を離し、あく、うんと意味深な反応をする。

「……鈴たちも大変だな。一夏は女子だらけの空間でもやっぱり変わらねえのかあ……」

しみじみと言った。一夏は弾の言葉の意味が分からず目をぱちくりさせている。

「ああ。毎日“一夏、この野郎!”とか“一夏、バカ野郎!”とか言うようなことばっかだ」

「ビートたけしかよ!?!」

「一夏がらみでアウトレイジ一歩手前はよくあること」

「マジで!?! どんなどこだよI S学園って!?!」

弾の顔から血の気が引いた。

「冗談だよ。それに一夏にバカって言うのは基本的に鈴と箒と織斑先生だしな」

セシリアはそういう罵倒はせず、英国人らしい持って回ったキツイ言い方や皮肉を放つ。シャルはどうだろうな？ まだ一夏の鈍感ぶりに面と向かって怒る所は見えていないが、いずれ反応が見られるだろう。見たくもないが。

ちなみに弾は織斑先生が担任なのにも引いていた。第三者から見てもあの人が教師なのはやっぱり嫌か。

「いい加減あいつらも一夏ももう少し大人になって欲しいとは思うけどな。幸い淑女協定が機能しているようなもので、女同士でドロドロ

した争いになってないのが救いだ」

もつともシャルが加わればどうなるか分からんが。あいつは祖国と家族を捨て、この日本とIS学園で個人的にすぐれる相手は一夏くらしいものだ。多少強引に男女の仲になろうとしても不思議じゃない。どこかあざとさを感じる所もあつたし。

「でもどうせ一夏相手じゃ無駄だろうがな」

「? 何がムダなんだ?」

「独り言だよ」

俺がようやく回ってきたコントローラーを手にすると、機体選択が終わらない内に一夏がくつついてきた。何故お前はそう俺に密着したがる?

「そうだ、三治、弾にこれかけて見せてくれよ」

一夏はいつの間にか俺がほつたらかしていたレイバンのグラサンを持っていた。

「なんだよ一夏、サングラスなんかどーすんだ?」

「いいから見てろつて、ホラ三治動くなよ……な! ソックリだろ?」

一夏が勝手に俺のメガネとサングラスを取り替えてはしゃいだ。

「あ、あれだ! 西部警察か!」

そのときだった。

「お兄、お昼できたよーっ! つて一夏さん!? それと……やつヤクザが家にいるーっ!!」

ドアを蹴り開け入ってきた、だらしない格好の弾によく似た赤毛の少女が絶叫した。

「ほんつとうに済みませんでした!」

弾の家の一階でやっている食堂で、俺は昼食をゴチになりつつ弾の妹——蘭ちゃん——に深々と頭を下げられた。

「謝らなくていいよ、気にしないでいからさ」

若干引きつった表情を戻せないまま、俺は無理して笑顔を見せた。とつくにグラサンはメガネに戻している。

「あれはおれが悪いんだって! 三治だって怒ってないからさ」

一夏もフォローを入れるが、その瞬間だけ彼女が固まるのは、つま

りそういうことなんだろうか。

「ウチの兄がお客がいるって言わないもんですから！　ほんとに失礼しました」

昼飯に出されたこの店イチオシの肉野菜炒め定食は呆れるほどのポリウムで、おまけにデザートフルーツあんみつまで付いた絶対普段は出ないであろう豪華版だった。

「お二人とも好きなお代わりして下さいね！　お兄は半分だから。ほんつとうに何で先に一夏さんいるって言わないのよ！」

「そんなあ殺生だろお……トホホ」

シヨボい盛り付けに肩を落とす弾に、ぷりぷりしながら妹が離れたのを見計らって囁いた。

「心配すんな、俺の分いくらかやるよ。どうせ喰いきれないし」

直後に暗かった弾の顔がパツと明るくなる。一夏同様分かりやすいキャラだ。

「おおサンキュ！　やっぱ一夏の言うとおり三治は話せるぜ」

遠慮なく俺の山盛りを崩して自分の器に移す弾に、俺は一夏に聞こえぬように小声で尋ねた。

「で、やっぱり蘭ちゃんも一夏が好きなのか？」

弾の箸を握る手が止まる。無言で俺のほうを向いた。

「はあ……やっぱ分かるか。あいつの様子を見りやバレバレだよな。鈍感は一夏だけってワケだ」

『悲報・学園外にも一夏ヒロイン候補者あり』俺は眉をしかめた。一夏といると常に片思い少女に注意とは。

弾がヤレヤレと首を振った所へ、蘭ちゃんが戻ってきた。身奇麗というか、ちよつとオシヤレしてみた感じになっている。想い人の前でおめかししたいのは分かるけど、ちよつと露骨……いや、一夏はそんな事気付かんな。

「あのー、一夏さん」

「あれ、蘭ちゃん？　着替えてどうしたの。出かけるのか？」

一夏の感覚なんてこんなもん。女心への理解を期待してはいけない。

「ううう……！」

せつかく勇気を出しての事だろうに、お気の毒。

隠した気持ちが大げさなのは良かったかも知れんが、想いが伝わらないのは不幸か。めんどくさいなあ。

「……そうだ！ 音羽さんってアレですよ？ 一夏さんと一緒に写ってた、二人目の男性IS操縦者の」

急に話を振られて驚く。切り替え早いな。

「そうだよ。クラスも寮も一夏と一緒なんだ」

「そっそうですか！ ……いよっしゃあ！」

小さくガツポーズする蘭ちゃんに一夏が口を挟む。

「蘭ちゃん？ なんの話？」

「な、何でもありません！ はい！」

慌てて一夏に取り繕うと、すぐに俺に向き直った。

「そ、それですね！ その、一夏さんの交友関係とか……ご存知だったり、しません？」

ははあん、一夏の異性関係が聞きたいと。

「一夏と親しい女子が知りたいの？」

囁きかけるとテーブルにドンと両手をつけて俺を凝視した。顔が真っ赤だ。

「あつ、あ、あの!？」

「弾から聞いている」

ギロリとした蘭ちゃんの瞳から眼光がレーザーのように弾へと飛ぶ。

「お兄っ!!」

「ヒイツ!? おっ俺は悪くねえぞ！ オイ三治っ！」

「弾には確認しただけさ。俺から見ても丸分かりだしね」

「さつきから何の話だ？」

いきなり割り込んだ一夏に蘭ちゃんが飛び上がる。

「なっなんでもないですー！」

慌ててごまかした。蘭ちゃんさつきからあっちを向いたりこつち向いたり忙しい。

「一夏はいつも周りに箒、鈴、セシリアと三人も美少女がいるくせに、なんで彼女作らないのかって話だよ」

もう面倒くさいからぶつちやけてやった。いつそこの方が話が早い。

「そうなんですか?!」

「え? いや今んとこおれは、そういうのあんまり興味ないし」

飛びつくように顔を寄せる蘭ちゃんに一夏は引き気味だ。焦りっぱなしの蘭ちゃんの食い入るような表情が酷い。

「鈴さんが一緒……あと箒とセシリアって誰ですか!?!」

「え? クラスの友達だけだ」

「一夏の小学生の頃の幼馴染と、イギリスの代表候補生で専用機持ちの留学生だよ。ISロードの写真の、黒髪ポニテの娘と金髪ロールでロングスカートの娘」

補足してやると、蘭ちゃんはスマホを取り出しシュバババと画面を手繰り、〃この人ですか?〃と確認してきた。うなずくなりうぐぐつと悔しさとも羨ましきともつかぬ呻きをあげてうなだれる。可哀想に、ライバルが多すぎるよな。

「やれやれ、〃千冬姉が結婚しない〃って愚痴垂れてた割りに自分はないな」

俺がぼやきつつ箸を進めると、弾が同調した。

「三治も大変だな。一夏がIS学園行っても変わりないんじや、苦労がしのばれるってもんだぜ」

弾が妹の目を盗んで俺の皿から肉ばかりぶんどっていると、一夏がムツとして言い返した。

「なんだよ、三治はのほほんさんがいるからって!」

「のほほんさん? オイ三治、ひよつとして彼女かあ!?! 紹介しろよ! なあ!?!」

「え、いやまあ」

思わずたじろぐと、俺のポケットから演者のコメカミがキレそうなトランペットの演奏が流れた。

「三治、スマホ鳴ってんぞ」

一夏が振動している俺のポケットを指差した。

「三治の着メロ、アカン警察かよ!？」

「ああ。なんだメールか。……ぶっ!？」

表示すると、『件名:タピオカちやれんじ』で始まるメールは本文に「上手にできました」とだけ書かれ、添付された画像には強調された胸に何かを乗せてピースした本音の上半身が映っていた。

「どした? ……うおっ!? 三治てめえ! こんな巨乳美少女と付き合ってるのか!? 隠すな会わせる紹介しろよお!!」

そのまま揉み合う俺と弾に、一夏が止めに入り蘭ちゃんが弾をドツいて黙らせグダグダになった。

「ほんつとに何度もすみません! うちのバカ兄が——」

半泣きで俺と一夏に謝る蘭ちゃん。弾はかろうじて息がある状態だ。

「でもさ、ちよつとタピオカって飲んでみたいよな! なんか最近はやってるし」

まったく空気を読まない一夏の超然とした態度はやはり大物なのか? いやバカだな。

「タピオカミルクティー飲みたいんですか!? じゃあ私お詫びに買ってきます!」

うなだれた蘭ちゃんが速攻でシャキーンと姿勢を正した。

「じゃあ一夏も一緒に行つてこい。もうお前と弾が揃つてると面倒しかない」

「えっじゃあ三治も一緒に」

「いいから! ちよつとはゆつくりメシ食わせろ!!」

強引に一夏をウキウキの蘭ちゃん共々追い払うと、俺と弾は荒く息を吐いてそれぞれのイスにもたれかかった。

「弾。中学ん時の一夏もこんな調子だったのか?」

「いや、短時間でも女子とどっか行かせられるだけ三治のが数倍マシだわ」

まだ4割がた残った定食を見る。全部喰いきるだけの食欲がなかった。

「このあとアイツらタピオカドリンク買ってくるんだよなあ〜飲む気しねえよー」

それもあつたな。

「おい」

急に声を掛けられて俺と弾が振り向くと、訪問時に挨拶した弾と蘭ちゃんの祖父——巖さんが、厨房からこちらを睨んでいた。たくましい肉体でなんと二つの中華なべを同時に持って調理している。

「メシは静かに喰え、他の客の迷惑だ」

静かな口調だが凄みのある声と表情に弾は縮み上がった。俺も思わずのけぞる。

「ゲツ、じいちゃん……ごめんなさい」

「すみません」

「それとな、蘭を、あの子を泣かしたら承知せんぞ。わかつたな……あと、出されたもんは残さず喰え」

一方的にそれだけ言うと、さっさとあっちを向いて調理に専念した。

「……三治、全部食ったほうがいいぞ。でないと後が恐えからな」

俺は力なく頷くと、残りの食事をやっつけにかかった。

「おとくさん！ おかえり〜!!」

寮の入口に入るなり、勢いよく本音が抱きついてきた。

「おうっ」

本当は嬉しい所なのに、今は胃に優しくくない。

「あれれ、大丈夫〜?」

胸の下から俺の顔を見上げてくる。

「悪い、今ちよつと……腹苦しくて横になりたいんだ」

本音は俺からお土産の菓子を受け取りつつ、片手で俺の背中をさする。

「よっ、のほほんさん。昼ずいぶんと胃袋に詰め込んだから、三治はまだ苦しいみたいだぜ?」

そういう一夏はもうケロツとしていた。こいつは色々とタフ過ぎ

るだろ。織斑の血がなせる業か？

「一夏ーっ！ いったいどこで油を売っていたのだ!？」

「本日はランチをご一緒したいと思っていましたのに!」

「あたしをほったらかして勝手に出かけてんじゃないわよ!」

本音の後からいつものスリーピースが飛び出し一夏の前に揃う。

「や、今日は三治と地元の友達に会いにさ。そうだみんなにもシュークリームとか買って——」

一夏は片手に下げた袋を見せる暇もなく両腕と肩をふん捕まえられた。

「いいから来い！ 今日という今日はハッキリさせてやる!!」

「一夏さん！ 週末のひとときを共に過ごすべき親しい異性は誰だとお考えなのですか!？」

「明日の日曜、いったい誰と一緒に居たいのかキツチリ答えをもらおうわよ!!」

あまりの剣幕に気圧されて後ずさる一夏はしかしそのままカフェの方角へと鉄壁の布陣で連行されていった。

「さっ、三治！ 頼む！ 後生だから助けてくれ!!」

「もう遅いぜ。それに俺も今日はちよつと無理だ……」

そろそろ自分で話をつけるようにしろよと言う俺と、言葉を失い呆然とこちらを見る一夏。

市場へ運ばれる子牛のような目で引っ立てられる一夏を無表情に見つめていると、本音が「わゝシュークリームだゝ」と袋の中身をかき回した。

「しののんたち、朝から一夏はどこいったらつて大騒ぎしてたんだ。一緒に出かけかけたかったのにおりむー居なかったもんねゝ」

織斑先生に怒られて大変だったよ。本音が肩をすくめると小さくたわわが揺れた。……初めて会った時より、少し大きくなつてない？

チーム織斑は鬼気迫る空気を発散しつつ視界から消えてゆき、俺たちも一緒に部屋まで戻った。

「今日はねゝ久しぶりにかんちゃんとお出かけたんだよ。それで

ねそれでね、見つけたお店にすつごくかわいい小物が沢山あって――」
脱いだジャケットを俺がベッドに横になると、本音も向かい合わせに寝そべってお喋りに興じた。

「そういえばあのメール焦ったよ。弾に見られちゃってさ」

あいつが蘭ちゃんに「お前はムリだろ」と煽るもんだからあの後にもエライ騒ぎになり、結局怒った巖さんにおたまを投げつけられてしまった。

「えへへ〜見てくれた〜？ かんちゃんがない間にこっそり自撮りしたんだ〜」

ないしよだよ。本音は胸を寄せるしぐさをして、舌を出した。

こっちはそういう態度がもうやばい。くたくたになつて帰つてきた所にふんわりした調子でさりげなくフォローしてくれて、その上セックスアピールもかなりだからたまらない。

「こっちは大変だったよ。弾の妹がまたあいつに夢中でさ、その上なんと来年IS学園を受験するんだと。下手すりや来年からは下級生からもアプローチがあるぜ」

いい加減一夏にや自己解決力を身に付けさせなきゃいかな。そう考えた時、ふと思いつ出した。

妹か……俺にもいるんだが、ずいぶん遠い存在になつてしまった気がする。そういえば、未だに家族とは連絡が取れていない。みんなどうしているだろうか？

「えいつ。むにゅ〜」

「え？ ちよつちよつとおい!?!」

気がついたら本音が俺の手を自分の胸に押し付けてた！ わわわわわわがやわらかい……。

「おとーさん、わたしの話聞いてなかったでしよ〜？ も〜」
「ご、ごめん」

いつの間にか上の空になっていたらしい。

本音が俺の顔をじつと見る。

「おとーさん、困ってることがあるんだったら相談してね〜。いつで

も聞くよ〜?」

気持ち顔に出ていたのか。本音にはかなわんな。

「本音、ありがとう」

「えへへ〜」

その笑顔が俺には何よりの薬だ。

なんとなしにお互い微笑んでいると、時間が経つのを忘れ――

「三治ーっ！ 助けてくれーっ!!」

ドアをブチ破るようにして一夏が転がり込んできた。

「ええいだらない！ 貴様それでも日本男児か!?!」

「明日はあたしと過ごすって言いなさいよ!!」

「往生際が悪いですわよ一夏さん!!」

二人の空気は見事にぶち壊され、後から現れたトリオの様子がおよその事情を体現していた。

「……あはは〜」

「はは……はあ」

俺と本音の笑顔は苦笑に変わり、助力を請う一夏とてんぷくトリオのドタバタ喜劇が、いやがおうにもここがIS学園という現実を突きつけるのだった。

「お前らしい加減にしないと次から織斑先生に文書で苦情出すぞ」

そして、僕は途方に暮れる

明日、いよいよ問題のドイツ人留学生、ラウラ・ボーデヴィツヒがやって来る。

どうにも転校の事情がはつきりしないが、織斑先生が目的だと思えるのが妥当だろうとは思う。やっとシャルの件が片付きそうだと思うったら、またも厄介の種がやってくるとは。ていうか転校生多すぎだろ、いい加減にしろ。

「いつその他のクラスに行つてくれりやいいのにさ」

何とはなしにつぶやくと、一夏の怒号が飛んだ。

「三治！ 人の話を聞いているのか!？」

くたびれたように息を吐く。こいつ相手には欠かせないおなじみの儀。

「聞いてるよ」

返事するなり一夏はバンと手を突き身を乗り出した。

「まったく！ おれが数日目を放したと思つたらこのていたらしくちよつとたるんでるんじゃないか!？」

今日はやたらとムキになる一夏。

「そんなに怒るほどの事じゃないだろ」

「あのなあ三治！ 言いたかないけどそんな調子でこの先やって行けると思ふのか!？ これからおれがいない時は、全部自力で何とかしなきゃいけないんだぜ!？ もうちよつとしつかりしてくれよ!!」

反論するヒマも与えず、一夏は俺に対する不満を一息にぶちまけた。

そりや言いたいことも分からなくはないけど、そんなに必死にならなくたって……。

鋭い視線でこちらを射抜く同居人から目をそらし、何か言いかけた時におり良くドアがノックされた。一夏も気をとられる。

直後にドアが開き、これまでの失敗の反省も教訓も置き去りにしたトリオが乗り込んできた。が、すぐに俺たちを見て固まる。

「一夏っ！ どうせそろそろ野郎二人で退屈でしょ？ 明日の相談も

あるし……って、アンタら向かい合って何してんのよ?」

「一夏! 日曜に……何をしているのだそんな所で?」

「一夏さん? ……三治さんとお二人でいったい何をなさっているのです?」

今はもう夜。腹具合が落ち着いた夕方にてんぷくトリオと一夏のドタバタを眺めつつ本音と軽い夕食をとり、寮に戻るなり一夏と俺はこの状態だった。

つまり、取り込んだ洗濯物の山を尻目にベッドの上で正座のまま10分以上睨み合っているのだ。

俺のパンツをはきんで。

「聞いてくれよみんな! 三治の奴おれがいない間にパンツのたたみ方一つまともにも出来なくなってるんだぜ!! そんなんでこの先やってけないよな!! 箒たちからも厳しく言ってやってくれよ!」

……言葉を失うとはこの事だ。IS学園の日中英美少女代表は、珍生物の生態観察でもさせられるかのような表情で立ち尽くした。

一夏よ、人類最先端の創造物を学ぶ学園でお前は何を言ってるんだ?
?

まあ、そのトリオだとして夕食時にたかが週末の予定一つ決められなかった連中だが。

「もういいだろう? みんなパンツのたたみ方ぐらいで大騒ぎするお前に呆れてるよ。洗濯物のたたみ方ぐらい、またやり直せば済む事だし、そもそも女子の前で大声でパンツはないだろう」

俺は努めて穏やかな口調と態度で論じたつもりだったが、一夏の口からはとんでもない回答が飛び出した。

「じゃあパンツはもういいよ、今着てるTシャツでいいからこの場でちゃんとたたんで見せろよ。それぐらい出来るよな?」

「ええ? 別に今着てるもの脱がなくなつて」

「いいから脱いでたためよ! ほら早く!」

なんかえらく一夏は意地を張っているな。

「いや、だから」

「三治は口がうまいからって、ごまかそうつたつてそうはいかないぞ

！この場で服たたむくらい、ちゃんと出来なきやおれは納得しないからな!!」

すっかり忘れてたが、一夏は家事と身内の危険だけは絶対妥協しない奴なのだ。でもこれはやり過ぎだろ。

「今着てるものを脱ぐ必要はないだろ?」

「いいから脱げよ!!」

俺のTシャツを引っ張る一夏と止める俺。それを白い目で見守る脱力感あふれる3名。

なんだこれ……ほんともう、なんだこれ……。

「やかましい! もう夜だぞ!! また何を騒いでいる!?!」

とうとう織斑先生が怒鳴り込んできた。もうこれも恒例行事のように感じる。よく見りやドア開けっ放しだ。そりやうるさいよな。……他にも女子が何人か入口からコチラをのぞいている。

「あ、千冬姉! いい所に来た、三治を押さえててくれ! いま脱がすところだから」

「……」

弟の衝撃発言にブリュンヒルデも固まってしまった。コレも二度目だな。

「だから脱がないって!」

「脱げよ! 脱がないと意味ないだろ! ホラ早く!!」

「もうよせ! 織斑先生の前で——」

「脱がないとやれないだろ! 早く脱げよ!!」

いい加減にせんとお前の姉が卒倒するぞと思うが早いか、トリオが悲鳴を上げた。

「ギャー! 千冬さんが倒れたーっ!!」

「織斑先生! しっかりしてください!!」

「OH! Goddess!!」

「……それで、洗濯物の代わりに音羽の着ている物を脱がせて、たたませようとしたと?」

「はい……」

とりあえずブツ倒れた担任を一夏のベッドに寝かせ、気が付いた所で水を飲ませた。どうやら落ち着いたようだったので、かいつまんで何があったかを説明した。

一夏が男の服を脱がせようと必死になっている場に出くわし、二度目のホモ疑惑によるショックで気を失うという酷く不名誉な理由で横になった織斑先生の顔は、何もしてないのに生死の境をさまよう重病人のようだった。

「ほんとうに、それ以外は、何もないのだな？」

さすがのような表情だが、視線が鋭すぎて顔に穴が開きそうだ。

「ありません」

きつぱりとした俺の答えを聞きとどけて一夏の姉は大きくため息をつき、ベッドに沈み込むように脱力した。

さつきまで千冬姉大丈夫か大丈夫かと騒いで止まらなかつた一夏や、てんぷくトリオとその他の女子達もほっとしたように息を吐く。やがて女子は皆それぞれの部屋へと戻っていった。

「いやあ一時はどうなることかと思ったよ！ 千冬姉いきなり倒れるんだもんなあ」

何が原因かも分からんまま呑気に笑う一夏。その背後で幽鬼のようによらりと立ち上がった織斑先生がバカの頭をガツと掴んだ。

「いてっ！ いててて千冬姉!!? 急になにす——」

「うるさい！ 貴様という奴は毎度毎度面倒と心労ばかりかけおつて!! 今日という今日は許さん!!」

「なっなんでだよ？ おれ何かしたか!? 三治！ 何とかしてくれーっ!!」

すっかり回復した姉に頭を引きずられて一夏が去るのをぼんやり見守ると、ひとりベッドに転がった。

「疲れた……」

ふと気配がして入口を見やると、キツネのフードをかぶった本音がひよっこり頭をのぞかせている。

「そっちに行ってもいっいっ？」

「おいで」

手招きすると、すぐに笑顔になったキツネの着ぐるみが飛んできた。

「えへへ〜ぎゅーっ」

隣に寝転ぶなり抱きついてくる。

「大変だったねえ〜おつかれさま〜」

「ありがと。本音のお陰でホツとしたよ」

着ぐるみのもふもふの上からも本音の柔らかい感触と体温が伝わる。その頭をなでると胸のつかえが取れたように落ち着き、今日一日の疲れもあつてそのまま眠ってしまった。

明けて日曜の朝。あのまま朝まで眠ってしまい、気がつくとも本音はいなくなっていた。俺が寝ている間に部屋に戻ったらしい。ポケツトからはみ出したメモ用紙に、キツネの絵と“おやすみ〜”という丸文字が書かれていた。それを丁寧に畳んで机の引き出しに仕舞うと、いつ戻ったのか寝不足で目に隈ができた一夏がクレームをつけてきた。

「なあ、のほほんさんばかりじゃなくて おれだつてもつと三治とくつついたっていいだろ?」

「お前あれだけ織斑先生が怒つたのに全然分かってねーな」

一夏はいつものハトが豆鉄砲食らった顔をした。明け方近くまで姉のお叱りを頂戴していたらしいが、部屋に戻つての第一声がこれだ。怒られた理由すら解かつたらん。こいつには大事なことは何でも露骨に言うべきだろうか。

「そもそもなんか三治はおれと微妙に距離が遠くないか? のほほんさんは彼女だから近いのは分かるけど、おれとは若干遠くなるっていうかさ」

本音とまどろんだ余韻も消えて、問題児を冷めた目で見返す。

「その前に何で織斑先生に怒られたか考えろよ」

当人は肩をすくめてみせた。微妙にムカつく。

「千冬姉も少し騒いだからいひでひどいよなあ、おれは単に洗濯物のたたみ方が悪いって言つただけだろ? 三治だつて言つてくれれば

いいのにさ」

どうせそんなくらいの理解だと思ったよ。

「そんなくらいの事であるの鬼教師が気絶する訳ねえだろ！」

「怒らなくなつていいじゃないか。千冬姉もここんどこ忙しいみたいだったし、過労がたたつたんだよ、きつと」

そりやシャル亡命にからむゴタゴタで忙しかっただろうけどさ……。

「あのな、いい加減自分の無神経さを自覚しねえとその内地獄を見るぞ……いやもう見てるのか」

「ええ？　なんだ脅かすなよハハハ」

おりやもう知らん。

今日は一夏が徹夜明けなのでおりむーブーツキャンプはお休みである。いち家族に乾杯もない。

久方ぶりの、何の予定もない休日だ。ゆっくりするか……本音は今どうしてるかな。

「おれはひと眠りするよ……ふああ眠くてたまんねえ」

何にも解決せんまま一夏はさつさと眠ってしまった。ブリュンヒルデが失神するほどのショックと怒涛の説教はなんだったのか。

「きつと時間が解決してくれる……わけねえな」

さつさと着替えて歯を磨くと、振り返りもせず部屋を出た。スマホで本音に電話する。もう8時だ。食堂で落ち合おうと話して切ると、残念なルームメイトの事は頭から消えて足取りも軽くなった。

しかし食堂の手前で面倒臭いのに捕まってしまう。

「いたいたー！　ねー織斑くんも呼んでインタビューさせてよ!!　来週発行の『新聞部のバズっていいとも増刊号』に二人の記事をどうしても載せたいの！　好きなもの奢るからさ!!　……で、織斑くんはどこ？」

右手にタブレット首からカメラをぶら下げ、ダツシユで駆け寄ってきたのは誰であろう新聞部副部長の黛先輩だった。ぶっちゃけ面倒臭いが、なんせ俺のISがらみの調査もしてくれる人なので、いくら面倒でも無碍には出来ない。

「あいつは昼まで寝てます。取材したかったら、本人に聞いときますから昼か夕方にして下さい」

「ええ、そんなあー！　せつかく二人の夜の生活について濃厚なインタビューをしたかったのに!!　ね、お昼になったら織斑くん食堂に連れてきてよ!!」

言葉を選べや！　てか妙な妄想をするな!!　……なんか昨晚の事思い出してきた。

周りの生徒らがこちらを不審げな目つきで見始め、俺は慌てて必ず昼頃には連れてくるからとどうにかしつこい記者を追っ払おうとした。

「絶対だからね？　お昼になったら必ず食堂に連れてきてよ!?　あゝこれで三人目の金髪美少年もいれば最高なのに！　じゃあ待つてるから!!」

気の毒だがシャルは女子だ。今んとこ男子で通してるが。

さんざん念押しして、人騒がせな先輩は去っていった。

「どうせなら一夏の方に食いつきやいいものを」

口元を引きつらせて呟くと、食堂の入口に本音と簪さんの姿を見つけた。

「二人ともおはよう」

声を掛けたが――

「おはよくおとーさん！　よく眠れた〜?」

「おはよう。本音から聞いたわ。昨日は大変だったわね」

「お早う御座います」

「おはよっ。なにになに〜?　昨日は何があつたのかな？　お姉さんに話して御覧なさ〜い」

俺の声に振り向いたのは4人だった。

「アハハハ！　織斑先生も大変ねえ!!　音羽くんも本音ちゃんがいるのに二股なんてお姉さん感心しないなあ」

「うるせえな。織斑先生に聞かれればいいのに」

昨晚の騒ぎを話しながら摂る朝食は賑やかなものだったが、ひときりわ会長がウザうるさかった。今度本音がパフェを頼んだ時、刺さって

いるポツキーを会長のウィークポイントにジャストミートしてやろう。

「お嬢様、それより話す事があるのでは？」

俺がモーニングセットのトーストをかじると、虚先輩が会長に水を向けた。

「そうね、丁度いいからまとめて話しちやおうかしら」

会長はナプキンで口元を丁寧に拭い、居住まいを正して俺に向き直った。今まで気にしなかったが、その所作には出自からの育ちの良さが見て取れる。

そして会長がこうする時は、決まって重要な話がある。

「まずシャルちゃんの件ね。彼女が助かる切っ掛けを作ってくれて、本当に有難う。生徒を守る立場としても、一人の人間としても貴方にお礼を言わせてもらうわ。本人も感謝していたわよ？ 失った物もあるけど、いろんなわだかまりやしがらみから開放されたって」

会長の話によると、すったもんだの挙句シャルは日本国籍を与えられ、政府囑託のIS操縦者になることが正式に決定となったらしい。専用機はシャルの手を離れ、官民共同で調査されるがコアは外交ルートを通じて仏大使館に即時返還される。本人にはそのポテンシャルと成長を見込んで、来週返還する専用機とほぼ同質の性能を持つラファール改造の専用機を貸与するそうだ。完成を急ぐため複数企業で突貫作業を進め、本人も今日の午後まで細部の調整に出向いているという。

「もうフランス政府もデユノア社もシャルちゃんには介入出来ないわ。音羽くんにも面倒はないから安心してちょうだい」

「そうですか……ようやく終わったんですね」

「よかったあ……おとーさんえらい！ ごくろうさま」

本音が垂れ袖をフリフリして喜んだ。簪さんは今回蚊帳の外だったのでキョトンとしている。

「簪ちゃんにもいずれ説明するわ。あくでもホンツト今回は疲れたわあ〜」

愚痴をこぼしつつも会長は上機嫌だった。虚先輩の顔もかすかに

笑みが浮かんでいる。

「音羽くん。今回は本当にご苦労様でした。一人の生徒が救われた事は私も立場と関わりなく嬉しいです」

「いやあ、なんか照れますね」

普段無駄口を叩かない虚先輩にまでこう言われると照れ臭い。

「それでえ、もう一つだあいじな話があるんだけどお？ その前に音羽くん、最近またISの訓練サボってなあい？」

「え？ ……あっ」

そういやここんどこあれこれ慌しくて、平日の放課後も休日も訓練機に乗ってないな。でもなあ……。

「サボるっていうか面倒が多すぎてそれ所じや無いんですけど。それに少しは息抜きしたいし、一夏の奴もあんまり無下にはできないので……まあ一旦は落ち着きました」

俺の弁解にも会長の表情は厳しい。

「駄目よこのままじゃ。今後を考えても、そろそろ本格的な実機訓練しなきゃ。そうだわ！ これからは私が時間を割いて——」

「そこまです。実務の進行と相談しながらでなければ予定に組み込めません。そもそも音羽くんには最近色々と助力願いましたから、訓練できないのは当たり前です」

即座に隙の無いツッコミが会長を襲う！

「くっ、仕方ないわね。今週は色々手伝ってもらったし疲れもあるでしょうけど、月曜日からは頑張らなきゃダメよ？ ……はあもうちよつとだったのになー」

じくつと会長の目を見るとすぐに視線をそらされた。

「それはともかく！ そのISについて音羽くんに重大な知らせがあるの」

これ以上何かあるのか？

「音羽くんに専用機——は流石にムリでも、本人の能力に合った専用IS武器の開発ならどうかと働きかけたんだけど、防衛省もIS関連各社も手一杯だね。でも政府関係者の多くは、音羽くんを戦力化できる可能性を残したいって事で、予算だけはどうか回してもらえこ

とになったのよ」

マジか!? わざわざIS適正の低い俺一人のためにそこまで根回ししてもらえるとはい。こればかりは会長に感謝しなけりや……だが。

「本当ですか? しかし予算はあっても人手が無いんじゃない?」

「慌てないの。いるじゃない立派な専門家が」

喜んでいいのか微妙な気持ちの俺にいたずらっぽい目で会長は見返す。

「専門家って……あつ! まさか」

「そつ、薫子よ。感謝しなさいよーあの娘も音羽くんのデータ解析だけでも忙しいのに、快く引き受けてくれたんだから! 武器の適正を探るためにも、しっかりIS訓練してデータを集めなきゃね! まあ薫子自身、男性操縦者専用のIS武器を開発したとなれば就職なり進学なりで箔がつくのもあるけど」

「だからさつき来てたのか……」

うわ〜こりやますます薫先輩に足向けて寝られんな。会長の言うことが本当なら大変なお世話になつてる訳だし。俺あの人苦手なんだけど……参ったなこりや。

「すごい! 良かったねえおとーさん!」

「良かったわね。わたしも音羽くんとISについて心配だったから、ちよつと安心したわ」

俺は二人に礼を言うのと、頭を下げて会長に謝意を伝えた。

「色々気を遣って頂いて、ありがとうございます。出来るだけ時間を作ってIS訓練も精進します。あとで会うと思うので、その時に薫先輩にもお礼を言っておきます」

いろいろムカつくこともあるが、なんのかんの言っつてずいぶんこの人には助けられている。

「うむ、感謝なさい! ところで後で会うってなに? またインタビューでもあるのかしら?」

ちよつと調子こいてる会長に、先ほど薫先輩に会ったことを告げた。

「えーなに面白そう! 音羽くんと織斑くん二人揃つてると漫才コン

「ビミたいなんだもん!! 私も見に行こうかな?」

「勝手なことを言いつつ、さりげなく虚先輩の反応をうかがう会長。駄目です。この後も諸々の作業を電子化する要望をまとめなくてはなりません。いい加減霞ヶ関かんりょうがらみの悪習を正さねば我々の後進が潰れます」

「ううっ! 簪ちゃんのため、簪ちゃんのためよ! 頑張れ私!!」

半泣きで自分にエールを送るシスコン生徒会長。インタビュー来れなくて良かった。

それはさておき、ようやく日本の役所特有の膨大な書類を無くす改革をうちの生徒会でも始めるらしい。あの時代遅れの書類や伝票、日本の省庁がらみだったのか、まったく官僚というやつは。だいたい21世紀にもなつて世界最先端のはずのIS学園で紙の書類にハンコとか、いい加減バカらしいもんな。

「頑張ってください。電子化できりや作業量もだいぶ減るでしょうし、休みも増えますよ」

「そうなんだけど、システムを構築してもまず膨大な紙の書類をスキャンしてデータバンクに入れなきゃいけないのよ」

言いながら俺の顔をじーっと見る。

「会長いま俺にIS訓練を頑張れって言ったところですよ?」

「むう、そうだ! 私が指導してトレーニングすれば短期間で上達するわよね? そのあと浮いた時間を音羽くんが私の作業を手伝って

――

「お嬢様!」

虚先輩の合いの手が厳しい。この人は一夏で言うところの俺のポジションか。そう考えると複雑な気持ちだ。

「もーっ! いい考えだと思うのに。音羽くんも一人でやるよりお姉さんの方が楽しいでしょ?」

「それは本音にやらせます。お嬢様はどうぞ生徒会長の職務に専念なさってください」

むくれてデザートをほおぼる会長。

本音がすつと体を寄せてきた。

「おとーさん頑張ろうね〜。ふぁいと〜！」

「おう」

その様子をニコニコしながら見ている簪さんに気付き、照れくさくなくなった。少し視線をそらす。

「あつ」

今日は驚く事ばかりだ、ほとんど悪い意味で。

「どうしたの〜？」

本音が首をかしげ、俺と同じ方向に視線を向けた。

「あくしののん達だ〜。何か用事があるみたいだけど〜？」

目の据わったてんぷくトリオがこちらにゆつくりと足を運んできた。

「朝食が済んだら少し顔を貸せ」

「逃がさないわよ、今度こそ徹底的に吐かせてやるんだから」

「お二人にはじっくりお話を伺いたいですわ、この後、絶対にお付き合います」

珍しく本音が引きつった表情を見せた。

「あ、あはは〜。わたしたち人気者だね〜」

「無理にポジティブな言い方しなくていいぞ……」

ありがたくない理由で人気だよな、俺たち。

「ですから！ わたくしと一夏さんがお二人の様になるには、何が必要なかと伺っているのです!!」

「昨日のバカ騒ぎは勘弁してあげるから、パパツと吐いちゃいなさいよ!!」

「どんな秘密、いや違いがあると言うのだ!? その所をはっきりするまで帰さんぞ!!」

圧倒されて言葉もない本音。奢りのケーキやパフェも手をつける暇がない。

口を挟む余裕もあたえず言いたい放題吐き散らかした三名がぜいぜい息を切らし、周囲の耳目を集めてカフェ全体が静まり返ったところで、ようやく俺は口を開いた。

「余裕が無さ過ぎだ。三人とも心にまるでゆとりが無い。今一番何が必要かと言われたらまずはそれだ」

俺は息をついてカップのコーヒーを口に含んだ。もう冷めかけている。

こいつらトリオは今日という日を一夏と過ごせない苛立ちと、俺にばかり構いちつとも恋人気分を味わわせてくれない一夏への怒りをまとめてブチまけた格好だ。お陰でテーブルについたとたん一方的に怒鳴られて、注文の品に手も付けられず5分近くが過ぎてしまった。

何か言おうとする三人を片手で制し、言葉が続ける。

「言いたい事は分かる。あいつは唐変木で女心に無理解だし、箒たちを異性として意識せずにただの友達扱いばかり。これじゃちつとも年頃の男女らしい付き合いには発展しない。だから特別な何かが必要だつて言いたいんだろ?」

三者三様に叱られた子供のような反応を見せる。思い通りに行かなくて先走るばかりだが、それでちつとも上手く行つてないのを指摘されたら、そりや面白くないだろう。

「でもな、多分そんなものは無いぞ。俺と本音にしたって、そんなに特別なことで親しくなつて行つたわけじゃない。普段の友達付き合いから、少しずつ親密になつて行つたんだから」

またカップを口に運ぶと、幾分おとなしい調子で三人が反応した。

「そうは言うがな……」

「それじゃあ、具体的にどうすればいいのよ?」

「実際ふつうに一緒にいても進展がありませんわ」

それに噛んで含める様に答える。

「まず一夏の身になつて、何を喜ぶか、何が嬉しいかを考える事だよ。そこから一緒に楽しむ事とか、一緒に過ごす時間を少しずつ増やしていったらどうだ? 自分が一夏とどうしたいとか、どうなりたいとかはその後からだ。なあ?」

ちらりと隣を見ると、ここぞとばかりにケーキを頬張っていた。やれやれ。

「これ美味しい！ はいおとーさん、あ〜ん」

「あ〜ん……ん、本当に美味しいなこれ」

本音のおすそ分けをもぐもぐやっている、弱気になっていたトリオが急に復活した。

「そ、それよ！ それ!! どうしたら自然にできるのよ!?!」

「本音さん！ 是非私にもご教授を!!」

「私にも秘訣を教えろ本音!!」

俺が止める間もなく本音を取り囲む。慌てて立ち上がるが――

「もうお前では埒らちが明かん！」

「本音に直接聞くからアンタは黙ってて!!」

「本音さんにハッキリ教えて頂きます!!」

取り付く島も無い。そこへ俺の困りようを見てとった本音が口を挟んだ。

「大丈夫だよ〜しばらくしののん達とお話してるから、おとーさんはゆっくりしててね〜」

「はあ……何かあつたら言えよ?」

どうにもならないので本音を信じ、てんぷくトリオのにらみ顔に追い立てられて離れた席に退散した。

「お困りのようね!」

入れ直したコーヒーと共に座ると、虚先輩と共に去ったはずのサボり魔がいた。

「あんた何やってんですか。また虚先輩に怒られますよ?」

「虚ちゃんにはちゃあんと午後までお休みをもらってるわよ。それより本音ちゃんがあの三人と何喋ってるか、気にならない?」

呆れた人だな。そりや気にはなるが、生徒の会話を盗聴でもする気か?」

「会長権限のうちよ? 何か不審な企みがないか管理するのも役目だもの」

いつもの悪戯っぽい笑みを浮かべた会長はやっぱり会長だった。

普段から持っているのか、妙にメカニカルな扇子をパタンと開くと『本心暴露』と書いてある。

「それじゃ早速やりましょうか。ほら、もつと顔を近づけて」

「え？　ちよ、ちよつと」

いつの間にか耳元だけISを一部展開していた会長は、ヘッドフォンのようなそれに俺の耳を近づけた。髪から少しいい匂いがしてドキリとする。

驚いた。集音マイクの原理なのか、ほとんどそばで立ち聞きしているかのようにハッキリ本音たちの会話が聞き取れる。

「試しに調整してみたんだけど、結構鮮明に音声だけ拾えるわね。流石ハイパーセンサーだわ」

会長がさらに少しボリュームを上げると、4人のかشましい様子が耳元に広がった。

“それで、どつちから告白したのよ？”

ぎくつとした。俺まだちゃんと本音に好きって言ってないぞ……。

“あくそれはまだかな？”

“そつそれはどういう事ですか？”

“とくに告白とかなくてくなんとなくいつも一緒にいる内に、一緒にいるのがいいなあっていうか、一緒にじゃないと寂しいなあって”

“そうなる前に何かあっただろう！　何か、なかったのか？”

“そもそも、行動を共にする切っ掛けは何でしたの？”

“んゝ入学初日にねゝ、初めておとーさんを見たとき、私の幼馴染に似てるなゝって思ったんだゝ。かんちゃんっていうんだけど、引つ込み思案で自分から友達を作るのが得意じゃないのゝ。それでゝこのままだと一人ぼつちになつちやうんじゃないかって、心配で声を掛けたのが最初かなゝ”

「へゝそんな事があつたんだ？　本音ちゃんたらやるじゃない」

……そうか、あの時は確か一夏が筈と出て行って、休み時間に孤立してしまつたんだ。

そんな時に、本音が話し掛けてくれたんだっけ。

あのとき、本音が声を掛けてくれなかったら、俺はどうしていたのだろう。

“なによ、三治のやつだらしないわねー！　自分から本音を口説い

たみたいな顔して!”

うるせえな鈴のやつ。でもよく考えたら鈴は一夏に遠まわしだが告ったことあるんだよな。相手が相手だけに失敗してるが。

“それに、織斑先生と何回も衝突したりね。セツシーともケンカしてたし、心配でほつとけないな。つて思ったんだ。”

……いろいろと耳が痛い話だ。

“あの時は本当に恐ろしかったですわ! まさか言葉だけであそこまで追い詰められるとは。三治さんを完全に見くびっておりました。”

“それで、そこからどうやって親しくなったんだ?”

“それこそが本題よ! 本音はやく!!”

「あつ! ホラいい所始まるわよ!」

「結局あんたがいろいろ聞きたいだけかよ」

しかしそんな事まで喋るのかよ? 俺と本音の事は別にいいだろ

!!

“んくとね、さつき言ったかんちゃんのことなんだ。”

「え? 簪ちゃんが何でそこで出てくるのよ?」

「声大きいですよ」

“かんちゃんはずっとした行き違いで、おじよ、お姉さんと仲がこじれちゃってただけど、おとーさんが間に入って解決してくれたんだ。それからちよつといいなくなつて思つて。だんだん友達からもっと大事な人になつていつて。”

会長はちよつとしんみりした調子で黙り込んでしまった。

しかし……そうだったのかあ。知らなかったな。

“なるほど、あいつはああ見えて人の心の機微や胸の内を読み取るのが上手いからな。”

“確かに、心理戦といい交渉力といい侮れない方ですものね。”

“ふくん三治も意外とやるじゃない! まあ一夏ほどじゃないけど”

手の平を返す鈴。

“ところでね、みんなはおとーさんの事どう思ってるの?”

「えっ」

何でそんな事聞くんだよ!?

「あらく本音ちゃんたら周りの女の子の評価も気になるんだ〜?」
急に元気になり肩でぐりぐりしてくる会長。

「俺の方はそんな事気にして……」

いやまあ気になるかと言われればまあ……。

「だって〜みんながおとーさんをどんな風に見てるか気になつたし〜」

「どうと言われても、そうだな……交渉や助言に長けているとは思
うが」

「ま〜口は上手いわよね! 悪いやつじゃないけど。それにアイ
ツあたしが一夏の事、その、アレなの初対面で見抜いたし、油断なら
ない奴だわ!」

「甘く見ると危険ですわね。鈴さんは御存知無いでしょうが、彼を
怒らせると大変な事になりかねません」

「む〜おとーさんいいとこいっぱいあるのに、みんな怖いことばつ
かり〜」

本音がむくれているのが見えるようだ。ニヤつく会長が肘でつつ
いてくる。

「そう怒るな。私から見ても三治は知恵者で、人心を理解し思いや
る言動が出来る男だ。私たちも何度も助けられている。ISこそま
だ未熟かも知れんが、クラスに無くてはならぬ存在だ」

「そうね〜多少おせっかいなところもあるけど、あの千冬さんとサシ
で口論できる度胸は誉めてやってもいいわ。クラス対抗戦の時にセ
シリアをよこしたアイデアには、びっくりって言うか呆れたけどね。
それよりISの訓練しつかりやるよう言つときなさいよ本音!」

「頭脳と胆力は時として驚くべきものがありますし、今では非常に
信頼できる友人の一人ですわ」

「えへへ〜おとーさんはすごいのだ〜!」

「ふふっ」

本音の声に思わず笑みがこぼれた。しかしあいつら俺をそういう

風に見てたのか……鈴の奴まだアリーナで空中衝突したこと根に持ってるな。

「なーによ喜んじやって。生意気ね」

「別にいいじやないですか」

“それじゃあみんなはおりむーのどんところが好きになったの
〜?”

おっ、本音のやつ切り込んだな。

「あっ！ また面白くなってきたわ」

“そっそれは……”

“いえその今は別にその件に関しては特に言及すべき必要性を感じないと申しますか”

“あつあたしたちの事はいいのよっ！ それより一夏とどうすれば——”

おっおっうろたえちゃって。

“おれがどうしたって?”

思わず本音たちがいる遠くのテーブルを見やる。部屋で寝ていたはずの一夏がそこにいた。

「あら本人が来ちゃったわね」

“なななんで一夏がここにいるのよ?!”

“いいかげん腹が減ったんで食堂に来たら、みんないるからさ。何してんのかと思って”

“何でもないっ！ さっさと食事をしてこい!”

“乙女の秘密ですわ！ 聞くのは無粋ですよっ!?”

“なんだよ、教えてくれたっていいだろ?”

ハチャメチャでお開きだな。何か俺だけ恥ずかしい事聞かれまくって終わったような気がするが。

「あくあいい所で邪魔が入っちゃった。ま、この辺にして生徒会室に戻りますか。じゃあ私は行くから、明日からはしっかりね」

「はいよ虚先輩によろしく……サボらんように」

「うるさいわね、真面目にやるわよ」

俺の額を扇子でつんと突き、さっきまでのお調子者の態度を消し颯

爽と食堂から去っていった。今しがた他人の会話を盗み聞きしてたとは思えんな。

一夏とてんぷくトリオのゴタゴタが始まると同時に本音が抜け出し、俺の座るテーブルを見つけた。こちらにやって来る手にはちやつかりケーキやパフエがある。

「おまたせ〜。一緒に食べよう」

「お疲れ様。昼までのんびりしようや」

こっそり会話を盗聴していた罪悪感がチクリと胸を刺す。今さらだけど盗み聞きは良くないよな。

「どうしたの？」

「いや、なんでもないよ。会長とちよつとな」

「ふくん。そうだ、インタビューって何お話するの〜？」

「俺と一夏の事だつてさ。どうせ期待してるのはおバカで不毛な事だろ。また織斑先生に発禁にされるのにな」

他愛も無いおしゃべりに花を咲かせていると、顔が真っ赤でコメカミを引きつらせたトリオに追い立てられた一夏がダツシュで逃げてきた。

「一夏あー！」

「今度という今度は！」

「その身に直接女心というものを刻んで差し上げます！」

追う者と追われる者を交互に見やる。どっちが、じゃなく両方とも問題だ。やり方変えてもまったく話にならないな。

「さつ三治！」

「その先はいい、どうせもう来る頃だと思つたぜ」

もう大体タイミングも分かつてきた。

続いて怒鳴り込んでくるトリオを強い語気で食い止める。

「そこまでだ！ 織斑先生に拳骨もらいたきや別だがな」

ぐつと歯を食いしばり立ち止まる美少女3名。確かに向かい合うと恐いな。一夏が逃げ出すのも分かるけどさ。

「三人とも、一夏とこのやりとりを卒業まで繰り返す気か？ お互いの意識を変えなきゃ最後までこのままだぞ。またアDBイスなり何

なり時間作るから、今回はこの辺にしたらどうだ?」

「またお話ししようよ」

ぐぬぬ状態のてんぷくトリオも本音のゆるい言葉に毒気を抜かれ、それぞれ一夏に不満の言葉を投げて散って行った。

「た、助かったあ。三治とのほほんさんありがとう。今度なんか礼するよ」

気が抜けてイスにへたり込む色男。

「それじゃあ昼からちよつと付き合え」

「なんだよ? 買い物か?」

お前は付き合えと言ったら買い物なのか。

「インタビュ―だよ新聞部のな。またあるんだと」

そこへ本音が意外な申し出をした。

「おとーさん私も同席したいな」

「ええ? まあいいけど……」

「えへへくやったあ」

嬉しそうな本音。あの先輩の事だから、確実に本音との関係について突っ込まれまくるんだろうなあ。ちよつと憂鬱だ……まあ本音が喜ぶなら、まあ、うん。正直複雑だけど。

「そういやさつき箒たちはのほほんさんと何を話してたんだ?」

「お前が彼女作らないのかって話だよ。いいから早く朝飯済ませろ、昼になるぞ」

コーヒーの残りをすする……また冷めちまった。

一夏が腹ごしらえする間、美味しかったスイーツを生徒会室と簪さんに差し入れに行ってきた。また食堂へ取って返すと、その途上で意外な人から声を掛けられた。

「音羽くんちよつと良かった! 伝えたい事があつたんです」

廊下の向こうから、山田先生が子供のような小走りでこちらに駆け寄ってきた。大きな胸が揺れてたゆんたゆんだ。以前だったら転んでいたかも知れないけれど、今はそんな危うい様子も見られなかった。

「今週ずっと生徒会のお手伝いであんまり授業に出られなかったでしょ

う？ 織斑先生と話し合つて、ISの授業だけですが音羽くんは補習をしてあげることになったんです。明日月曜日から金曜日まで、放課後1時間が補習になりますから、教室に残ってくださいね？」

一緒に頑張りましょう！ につこり笑う山田先生の顔を俺は何となく見つめた。そういやこの人はシャルの件を知らされてないのかな。

「な、なんですか？ 先生の顔をじっと見つめて……恥ずかしいです」「おとーさんどうしたの〜？」

本当に顔が赤くなっている。ちよつと意地悪だったかな。

「いや、入学初日に比べると、だいぶ頼りになる先生になったって」とたんに目を丸くし、直後に顔をほころばせて大声を上げた。

「そうですか!? もう〜そんなお世辞言つたって何にも奢りませんかからね〜？ うふふ……アレ？ それじゃ音羽くんが入学したころの私はあんまり——」

「お世辞じゃないですよ。今は織斑先生より頼りにしたいぐらいです。いろいろ気遣つて下さつて有難う御座います」

軽く頭を下げる。

やはり俺はいろんな人に支えられてるなあ。

「いいんですよ！ なにしろ私は頼りになる先生ですからね！ うふふつ、織斑先生より頼りになる先生だなんて。もうっ音羽くん口が上手いんですから！」

ひどく嬉しそうに俺の肩をばんばん叩く。この人やっぱチョロいな、よそで変な男に騙されたりしてなきやいいけど。

「むう〜」

なぜか面白くなさそうな本音。

「それじゃあ明日からの補習、忘れないでくださいね！ うふふふ」
緩んだ顔のまま上機嫌で山田先生は去っていった。

まあそれはそれとして。

「はあ……明日から一週間補習かあ」

シャルのためだったとは言え、正直つらい。もともとIS知識ゼロからのスタートだから尚更必要なんだけど。

「おとーさん元気出して！ 私も手伝うよ〜」

「ありがとな……あれ？ じゃあIS訓練は……多少カットせざるを得ないか」

人の事より、まず自分の事をしつかりしないと話にならない。しかし放っておけないトラブルがあればやこれやと重なって、結局自分のことが一番後回し……。

「つ、つらいぞ……」

「あははく少しずつ頑張ればいいと思うよ〜」

俺、ISでまともに模擬戦出来るようになるまで後どのくらいかかるんだ……？

遠い夜明け

黛先輩の取材はのっけから酷いものだった。

「それじゃあ早速、織斑くんと音羽くんの愛の性生活について教えて頂戴!!」

俺、一夏、本音の三人と向かい合って座るなり、黛先輩は大声で言い放った。

言い方あ!!

俺の右に座る本音がわずかに顔を引きつらせる。言うまでもなくそんなもん始めっから無い。

「三治? 先輩が言ってるのって何のことだ?」

左にいる一夏が首をかしげた。分かって良いんだよ。

「気にすんな。あくその、取材の前にちよつと。生徒会長から黛先輩に俺のIS専用武器製作にご協力頂けると伺いました。感謝します」
頭を下げる。こんな調子の先輩でも礼を欠かすわけには行かないのがつらい所だ。

「マジか!? やったな三治!」

「サンキュ。でもまずまともに模擬戦出来るようになってからだけだな」

が、直後の先輩の返事に俺のみならず一夏と本音も絶句した。

「あくいーのいーの。あれ元々ウチの科で開発してたやつ流用だから! どうせ音羽くんってまだ接近戦とか苦手なんですよ? だったら今整備科で作ってる飛び道具、多目的滑腔砲でいいじゃない?」

「……はあ?」

思わずソファからずり落ちかけた。俺の専用武器ってただのあり合わせかよ!?

「そんなガツカリしないでよ! 新技術や工法をふんだんに使った研究品レベルのゼータクな造りなんだから! たっちゃんくれる追加予算で、研究途中で止まってた誘導砲弾とか瞬時自動追尾照準とかも出来るし、余所じやまず見かけないもんだから格好つくでしょ?」

実体弾とか時代遅れとか言いつつまだ結構使われてるし、弾速もア

リーナみたいな距離ならミサイルより早いわよ。弾種によって色々できるしねー。あとは戦い方しだいじゃない？」

「そ、そうですか……」

素直に喜んでいいのか分からん。でもまあ、それこそ剣とか接近戦武器だったら使いこなせるはずも無いし、これでいいのか……？

一夏は訳が分からずポカンとしている。

「三治、結局いいもん作ってもらえるって事でいいのか？」

「まあ、考えようによっては、たぶん……」

「それよりホラ！ 二人の愛の性活っ!! 大事なところでしょっ!!」

男子同士のやりとりにゴシップ記者が切り込んできた。意地でもホモネタが欲しいのか？ また織斑先生に潰されるのに。

「はあ……そんな無いですけど」

「ない!? ちょっとそんな訳ないでしょ？ 女子だらけのIS学園で

男二人きりで同じ部屋よ!? 何も起きないはずが無いわ!!」

「俺らホモじゃないんで」

「織斑くんはどうなのっ!？」

俺を押しつけ一夏に食い入るゴシップ記者。ドン引きの一夏。

「え、あの何か起きないかって言うത്？」

「そりやもちろん二人の事よ！ 音羽くんと毎日二人きりでナニしてるでしょ!? 每晚ベッドで、こうアレよ!!」

「ベッドでって、ベッドメイクぐらいは三治も自分でやるし、でも寝る前は騒いでたまに千冬姉に叱られる事もありますけど」

トンチンカンな答えが記者の琴線に微妙にヒットした。

「それよ！ 騒ぐって具体的にどんな!? 二人で抱き合ったりキスしたりとかそういうのは!!？」

「抱き合ったりキスって……そりや三治が千冬姉とそうなるならまあ大歓迎ですけど、三治はのほほんさんがいるから」

「だいかんゲイ!? っていうか今の千冬姉って織斑先生のこと？ 音羽くんとどうい関係なのよ!？」

その話やめろって言ったのに！ またシバかれても知らんからな。

俺の気も知らずに笑顔で話すノータリンイケメンに黛先輩は砂被

りで食い入るように聞いている。

「ああ、学校じゃ織斑先生と呼べって言われるけど、おれついつい千冬姉って呼んじゃって……三治には千冬姉とくっ付いてくれたらなあと思ってたんですけど、のほほんさんと付き合ってるみたいで——」
いきなり先輩はテーブルをバンと叩いて叫んだ。

「これはスクープだわ！ 音羽くんを巡って織斑くんと織斑先生、それに本音ちゃんの四角関係ね!!」

突拍子も無いゴシップ醸成に俺たち三人の時が止まった。この人面白おかしけりや何でもいいのか!? 気付けば周囲のテーブルにいる全員が一斉にこちらを向いて静まり返っている。

「何言ってるんですか!! そんなデタラメ乗せたら今度こそ織斑先生に廃刊にされますよ!」

俺の言葉に耳も貸さず、黛先輩は夢中になってタブレットに記事を書き込んでいる。

「ありやりや……」

「えっ? 三治、先輩が言ってるのってどういうことだ?」

お前ちよつと黙ってる! ぼへつとした一夏と頭を抱える本音を脇に黛先輩の脳内ワイドショーを止めようと必死になっていると、横合いからさらに別の声がした。

「あれ? 一夏たちここで何してるの?」

思わず振り向く。政府提供の新専用機の調整に出向していたシャルが戻ってきていた。

「あ、シャルじゃないか。どうしたんだこんな所で?」

「それはこっちのセリフかな。学園に戻ったら食堂から大声がするんで見に来たら……さつきから何を騒いでるの?」

「もしかしてキミ、シャルルくん!」

ずっとタブレットにかじりついていた先輩がいきなり立ち上がった。思わずのけぞる。

「え? あのどちら様ですか? 一夏この人は?」

「ナイスタイミングだわ! シャルルくんよね!? イヤッホウ! わが校の二大美少年が揃い踏みね!! こんなチャンス早々無いわ、なに

かグツとくるような……そうだ!!」

「またも大声を上げ、1分ばかり腕組みをして考えていたかと思うと、いきなり一夏の腕を取って立たせた。」

「ちよつと織斑くん、シャルルくんと向かい合ってみて!!」

「えっなんですか?」

「ほらシャルルくんも! 互いにもつと見詰め合って!! ホラ早くつてばー!」

「ええっ!? アレまたやるの?」

とまどいつつも引き合わされ、言われるがままに向かい合う一夏とシャル。なんかどつかで見た光景だな。

……あ、俺がやらせたんだっけ? しかしまさかここで再び目にするとは、腐女子恐るべし。

「と、尊い! 尊いわ!! まさにキリトとユージオって感じ!! 最っ高! まさにSAOアリシゼーションの再現よっ!」

一人大騒ぎしながら夢中でシャッターを切りまくる黛先輩に、レンズの向こうで呆然と突っ立っている一夏とシャル。それを遠巻きに見る俺と本音。

「ねえ一夏、これってなんの写真なの? なんだか、ちよつと照れちゃう……かな」

「さあ? どうなんだろ。三治、これって何かいい写真になるのか?」

少し顔を赤くするシャルにとぼけた顔の一夏。まあ二人とも意味分からんだろうな。

「とりあえず新聞部の増刊号だかに載るんだよ」

「しっ新聞部?」

俺の興味無さげな返事にシャルだけが過剰反応する。

その間にも戸惑う二人にゴシップ記者は容赦なく注文を飛ばす。

「二人共もつと見つめ合って! そうだわ! 織斑くんシャルルくん右手で顎クイして! はやく! こうするの!!」

見る間に一夏はシャルルの顎を右手で軽く上げ、キスシーンのような演出をやらされていた。

「うううっ、完璧よっ! もう言葉が見つからないわ!! ……は、鼻血

出そう」

もはや黛先輩は頭のフットーした腐女子でしかない。

「一夏、これ……なんだか、その、恥ずかしいよ」

「なんだろうなコレ？ このポーズどんな意味があるんだ？」

「あははく何だかほんとに少女マンガみたいだね」

「それより先輩がやばい状態だろ。どうすんだよコレ？」

二人の美少年？ にあちらこちらからシャッターを切りまくる新聞部副部長。さつきからよだれを垂らしつつウへへとしか言わない。

その上周囲がどんどん姦しくなっていく。

「ねえねえアレ、ちよっと凄くない？」

「すつごい！ リアルにBLじゃない!? ウチらも撮っちゃおう？」

さつきからこちらを興味津々で眺めていた食堂中の女子達が大んだん近づいてきた。徐々に包囲の輪を締め、手に手にスマホを取り出す。

「おとーさん」

本音が俺の袖を引っ張った。

「ああ、もう俺らには用が無いみたいだな」

長居は無用だ。俺と本音はそつと立ち上がると、シャッター音が鳴り響く記者会見場と化した食堂を誰にも注意を向けられる事なく離れていった。

「な、なにをやってるんですかあ!？」

廊下に出ると、食堂の方から山田先生の悲鳴のような声がしたが、聞こえないフリをした。

そのまま簪さんと本音の部屋に行き、夕方までアニメを見たりスイーツを食べたりしてのんびりと過ごす、夕食の前にいったん寮に戻って来た。

夕陽に照らされたオレンジ色の部屋。一夏がベッドに沈み込んでいた。

肩をすくめる。流石に今回は俺が悪かったかな、しかしまさかあそこまでの騒ぎになるとは思わなかった。後でシャル共々謝っておく

か。

「ようやく戻ったか」

ふいに肩を掴まれギョツとして振り返ると、昨日一夏を引きずって消えた幽鬼が夕陽に浮かび上がった。右手に何か持っている。

「少し付き合え」

あんぐりと口を開けたまま返事も出来ず、俺は言葉を失ったまま生徒指導室まで連れてこられた。

「私はな、今日は非番だ。当然だろう日曜なんだからな。お前らも休日だ、羽目を外したいのは分かる。しかし……しかしだ」

あろうことか片手にぶら下げてきたビニール袋からはロング缶が現れ、当人はためらいも無く開けると死んだ目つきでそれをあおった。

「私も教師だ。しかしその前にあれの、一夏の姉だ。思えばあれにも苦勞をさせてきた。いい姉ではなかったかも知れん」

一息で飲み干すとさっさと次を開ける。俺は今にも他の教員がやってくるのではないかと不安になった。

「お前もそうだ。これまでISなどまるで縁のない人生を送ってきて、急にIS学園に入学させられたのだ。不安も不満もあろう、いやあつて当然だ。しかし……」

見る間に空き缶が増えてゆく。俺は口を挟むのとはばかられ、きまり悪い態度で固まっていた。

「しかし……なにも、なにもアレはないだろう！ 私がどれだけ昨晚の騒ぎで衝撃を受けたか、お前なら分かっているはずだろうが!？」

拳一つで長机がひっくり返りそうなほど揺れた。

「あつ……あく食堂での騒ぎですか」

「他に何かある?」

ぎよろりとした鬼の目に身がすくむ。よく見ると織斑先生は昨夜一夏を引きずって消えた時から髪も化粧も服もそのまんまだ。

「いえ何も」

即答した。どうやら食堂での撮影会が山田先生から伝わり、昨晚の俺を脱がせようとした件の直後というのもあつて相当堪えたらしい。

「あれは本人たちもその、どういう意図でああなったか分からないまま、ま、ま、先輩が興奮して突っ走ってしまったといえますか……」

「それはもう聞いている。聞いてはいるがな、教師として問題を処理は出来ても、一人の弟を持つ姉としての気持ちはそれとはまったく別だっ!!」

次の一撃はついに長机が倒れてしまった。10本近い空き缶が散乱する。黛先輩も怒られたのだろうか。そりゃ怒られただろう。俺の専用武器完成前に死んでなきやいいが。

「何もIS操縦者として大成しろだとか、そんな事は言わん! せめて、せめて普通に、健全に一夏のやつが育ってくればそれで何も文句は無い!!」

「……はあ」

言葉もないが、相槌でも打たねば精神的にもたない。

「お前だつてそうだ! 音羽、これでも私はお前の事を評価しているつもりなんだ。デュノアの件で骨を折ったことも含めてだ。お前の行動で少なくとも一人の生徒の人生が救われた……それはいい」

とりあえず机を起こし、空缶を片付けた。

なんでこんな事せにやならんのだとは思うが、あの状況をほつとしたのは俺だし、多少は責任も感じる。大したこっちゃないが、これが原因で学園中で一夏がホモとして定着したらさすがに姉としても嫌だろう。俺も相方にされそうだし。

「何も同性愛が悪いとは言わん……しかしあいつには普通に結婚して、普通の家庭を築いて欲しい……音羽、私はな、ただ心の平穏が欲しいだけなのだ。分かるか? 分かるだろう?」

がっしりと両手で肩をつかまれ、ガクガク揺さぶられた。

「わ、わかります」

眼前にアルコールで真っ赤のブリュンヒルデの顔が迫る。こ、怖い……あと酒臭え。

「頼むから、頼むからあいつを……一夏をだな、普通の、健全な、年相応の男子でいさせてやってくれ!!」

ぐわんぐわんと揺れる視界で一夏の姉は泣いていた……かもしれ

ない。

その後、どうにか大人しくなった担任をなだめすかして飲酒の痕跡を片付け、生徒指導室を後にした。

とつくに時間は夜の8時を回っており、着信のあつた本音にスマホで連絡して一人で夕食を摂ると、ほうほうの体で寮に戻った。

夕方に見た時より散らかった部屋では、一夏がさつきとはさかさまに、ぶっ倒れるようにして寝転がっていた。どうやらてんぷくトリオが来たらしい。

「お前も大変だな」

一夏の腹が返事をする。晩飯がまだのようだった。

無論、それから2日と経たぬうちに今回の取材をパーにされた黛先輩が、ワンモアチャンスを求めて俺と一夏に泣きついてくるのであった。